
魔王陛下は 45° (ななめよんじゅうごど)

早瀬黒絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王陛下は 4.5。（ななめよんじゅうごど）

【Nコード】

N1147T

【作者名】

早瀬黒絵

【あらすじ】

別世界で魔王の婚約者として暮らし始めたわりに穏やかな生活をしていると思う。残虐非道と謳われる魔王だけど、あたしの前では我が儘で寂しがりな子供みたいな人。婚約者を溺愛するギャップありな魔王陛下と、そんな魔王が可愛く見えて甘やかしてしまう「あたし」のお話。（この小説は自サイトでも公開しております。）

魔王とあたし

生まれた時から、あたしの心臓の上には痣があった。

赤ん坊の頃はほとんど目立たないくらい小さかったのに、成長するにつれて痣も段々と大きく広がっていつて、今では刺青のようにハッキリとしたものになってしまっている。

まるでコウモリが翼を広げたような、そんなカタチ。

こんな痣もあるのかと鏡を見ながら感心していたあの頃の自分を叱責してやりたい気分だ。

溜め息を吐くと隣に座っていた黒髪の男が顔を上げる。

「如何した…？」

やや掠れ気味の低い美声がゆったりとした口調で問いかけてくる。

見上げればあたしより一回りも大きな超絶美形が本を片手にジツとコチラを見ていて、少し筋張った大きな手があたしの髪を梳いた。雑誌のモデルやテレビに出ているアイドルなんて道端の石ころに思えてしまつくらい完璧過ぎる顔立ちと体格。

十八の誕生日に突然現れたこの男はあたしの‘夫’となる、‘婚約者’らしい。

残念ながら婚約した覚えなど毛先程もないのだけれど、何でかこの男は母のお腹の中にいたあたしと知らぬ間に契約を交わしていたとか何とか。

元いた世界からあつという間に別世界へ連れて行かれ、大きなこの城で暮らし始めて一ヶ月。

家族が心配するのではと思ったが、不思議なことに元の世界には‘あたし’がちゃんと存在していて、何時もと変わらぬ日常を過ごしている。

アチラの‘あたし’はコチラのあたしの分身だそう。よく分からん。

最初は帰りたいと騒いでいたけれどこの男の意志は固く、決して不自由はさせないからと言った言葉通りまるでお姫様のような暮らしが待っていた。

…まあ、お姫様は柄じゃないので派手なドレスなんかは断ったが。

とりあえず美形だけど悪役顔の男は魔王でもある。

「どうした？じゃない。アンタ仕事くらいキッチンとやんなさいよ？」

「リア…名前、」

「…ラオ、仕事くらいやりなさい。」

アンタ、と言う呼び方は嫌だったらしい。少しだけ眉を顰めて訂正を促すラオに仕方なく言い直せば、無表情気味だった顔に微笑が浮かぶ。

リアはあたしの本名ではない。

ただ彼が他者にあたしの名を知られたくないという、無駄に深い嫉妬によってそう呼ばれているだけだ。

ちなみにリアというのは、私の花嫁、という意味だと知ったのはつい最近のこと。

何度言っても絶対首を縦に振らない彼に折れて、結局、そのままになっってしまった。

仕事を促しながら執務机を指で示せば困った顔をする穏やかそうな青年と、一センチほどの書類の束があつて、ラオは嫌だと頭を振る。

頑張れば一時間ほどで終わらせられる量なのにあたしから離れるか

らやりたくない駄々をこねる魔王陛下の実年齢は二百五十余り。いい歳した大人が恥ずかしくないのかと溜め息も吐きたくなるだろう。

「ちゃんと待っててあげるから。仕事くらいしなさいよ。」

「……嫌だ。」

「はあ……。なら今日から午後のお茶会はナシね。」

「!」

お茶会はなし、と言うと素早い動きであたしを見やった。

鋭い瞳が動揺しているのはすぐ分かる。

「あたし、キチンと仕事できない人って嫌いなんだよねえ。」

「っ、す、する……!」

「ん？なに？」

「これからはキチンと仕事はする、だから……っ、」

今にも泣き出しちゃいそうな子犬の目で訴えてくる。

悪役顔なのに可愛く見えるのは気のせいにしておきたい。

不安そうに口を真一文字に結んであたしの返答を待つラオに、仕方ないなあと笑いかけてやった。

「じゃあ待っててあげるから、さっさと終わらせてお茶会しようか？」

あたしの言葉にパツと表情を明るくして何度も頷く。そうしてちよつとだけ慌てた様子で執務机に座って書類と向き合い出す彼に、傍に控えていた青年が苦笑した。

「流石ですね。」

「全く、この一ヶ月で扱いに慣れちゃったわ。」

「ふふっ、申し訳ありません。王は貴女が絡むと如何にも意固地になっちゃってしまわれて…。」

元々何かに執着することが無かっただけに反動が強かったのかもと言類にサインしていくラオを二人で見た。

普段のラオはあたしと一緒にいるラオとは正反対なのだ。

何百種も存在する魔の頂点に立つ男、魔王。時には冷酷非道な行いもするし、無慈悲になることもあるが、それは王であるが故の行爲であり、魔族特有の残虐性からも多少は影響を受けているのかもしれない。

しかし、こうして一緒にいる時のラオは甘えたで寂しがり、時々我が儘を言っではあたしや周囲を困らせ、でもあたしに嫌われるのを何より怖がる大きくて小さな子供だ。

「ねえ、料理長に伝言を頼んでもいい？」

「勿論。何なりと。」

一生懸命仕事をこなす‘婚約者’を眺めながら小さく笑う。

「明日のおやつはプリンにしてあげてって、言っておいて。」

魔王の好物と化している甘味の名前に、青年は必ず伝えておきますと笑みを零して頷いた。

お茶会は女の戦場（1）

部屋中をパタパタと侍女が忙しなく動く。

その手には美しいジュエリーの数々と、髪留めと、つい先程まであ
たしが着ていたシンプルなマーメイドドレスが抱えられている。

そうして化粧台の前に座って鏡越しに侍女の仕事ぶりを眺めている
のは見知らぬ美女。もとい侍女の手によって驚くほどのビフォーア
フターを遂げたあたし。

鮮やかな紅色のマーメイドドレスには控えめだがキラキラと輝くス
パンコールや、一体いくらするんだと思ってしまう宝石が飾りつけ
られている。

普段は下ろしてある髪も纏めてサイドでアップにされ、ドレスと同
色の薔薇の髪留めで留められていた。

あまりメイクをしないあたしだったけれど侍女さんにガッツリして
もらい、もう誰コイツってくらい変わってる。

仕度の間中、侍女は興奮した様子で張り切っていたけれど、慣れな

「あたしはもうグツタリな気持ち。」

片付けに勤しむ侍女を見ていればコンコンと扉が控えめに叩かれる。どうぞと入室を促せば、入ってきたのはラオだった。

「終わった、か…」

扉を開けた格好で静止してしまったラオの顔は赤い。

顔に似合わず素直な反応を示す魔王に苦笑しつつ手招けば、いそいそと歩み寄ってきた。

10

「…美しい。」

「侍女さんがお化粧上手だったからね。」

「否、^いリアは元々美しい。だが今は何時も以上に美し過ぎて…人前に出したくない。」

サラリとアップにしてあった髪の一房に触れて、それに口付けてくるラオに一瞬クラッとしてしまう。

ダメダメ、絆されちゃー！！

小さく頭を振ると不思議そうに紅い目が瞬く。

「…この無自覚タラシめ。」

「？」

こてんと小首を傾げたって可愛くないんだからね。

立ち上がるとラオは通せんぼするように、あたしの前に立ちただかった。

もうすぐ貴族同士のお茶会が始まってしまつ。あまり遅く行つては印象が悪くなつてしまつではないか。

なのにラオはあたしを行かせたくないのか大きな体をフル活用して妨害している。

「ラ・オ。」

「…行くな。」

「無理言わないで。あたしが行かなきゃ困るのはラオよ?」

理解しているからかムスツとした表情で見下ろしてくる。

図体は大きいのにどうしてこう思考は子供っぽいんだか。

「帰ってきたら一緒にいてあげるから、ね?」

「……………迎え。」

「迎え?」

頷いたラオは「半刻経ったら、迎えに行く。」と呟いた。

何とか折れてくれたみたいだが一時間とは短いんじゃないかと顔を上げれば、紅い瞳とバツチリ視線が絡み合う。

「どうやらお迎えは本気らしい。」

強い光を帯びた瞳に心の中だけで溜め息を零す。

迎えを了承すればあっさり道を譲るラオに「行ってくるね」と挨拶を言つと、嬉しそうに「絶対、行く。」と返してくる。

侍女を一人引き連れて、あたしは城の中庭にある美しい庭園へと向かった。

男と女は色々違う。

性格とかもそうだけれど、男同士と女同士というものは本当に正反対だ。

「リールア様、ようこそお越し下さいました。」

ニッコリ笑顔での挨拶。でも何となく背後に黒い何かが見える気がする。

「御機嫌よう。今日はお招き頂きありがとうございます。」

あたしもニッコリ営業スマイルを顔に張り付けつつ、淑女の礼をとって、侍女が引いてくれた椅子に腰掛けた。

三人ほどいる貴族の娘や奥方たちは皆穏やかな笑みを浮かべている。

この笑みに騙されたらお仕舞いだ。

あたしもティーカップに口を付け、一口飲んで喉を潤す。

「陛下の御加減はいかがでして？」

「お陰様で何事もなく、毎日執務に精を出しておられます。」

「まあ、流石陛下。」

「でもそれではリールア様はお寂しくいらっしやるのでは？」

リールアというのはあたしの別名、‘王の花嫁’、という意味だ。

この名であたしを呼ぶ時の貴族の娘や奥方は、何時も少し刺々しい言い方をする。

誰もが魔王陛下の妃になりたいと望んでいるのに、自分よりも美しさに劣る娘が選ばれればそりゃ嫌な顔するのも道理だわ。

だけどいちいち話すたびに刺々しく声をかけられるとイラっとしちゃうのよね。

そこで怒ったらあたしの負けなんだけど。

「そんなことありませんわ。陛下ったら、執務が終えられると（抱き付いてきて）朝まで離してくださいさらないんですの。」

「そ、そう。」

頬を赤らめて相槌を打つ貴族の娘にしてやったりと内心ガツツポーズ。

あたしは少し内容を端折って言っただけで、相手があらぬ想像をして勘違いしているだけだもの。

うふふふ、おほほ、なんて笑いながらクッキーを一枚つまむ。

穏やかな雰囲気なのにあたしたちの間は激しいブリザードの嵐だ。

お茶会は女の戦場(2)

あたしがクッキーを食べ終えるのを見計らったように貴族の奥方が口を開く。

「リールア様と陛下は仲がよろしいのね。」

羨ましい限りですわ。ピリピリとした空気を気付かないフリして笑う。

確かに顔良し、スタイル良し、地位も名声もある男を放っておくほど女という生き物は愚かではない。

あたしにとってはそれほど重視していないそれらだけど、彼女たちのような美女はイイ男を捕まることが自身のステータスにもなるのだ。

ハッキリ言つと理解できない。

何とも思つてなくてもイイ男だったら彼女たちは拳こそつて競い、男を落とそうとする。

気持ちなんて二の次らしい。

そういうのってあたしは好きじゃないし、好きでもない男と寝れるほど器用でもないし。

ああ、でも、今はラオの婚約者だから誰かと付き合ったりしたら危険だな。主に相手の男が。

自分がない間に別の男とあたしと一緒にいると彼はすごく怒る。

それこそ相手の男がビビって気絶するくらい強烈な怒り様だ。

…嫉妬深過ぎてコッチが呆れてしまう。

だけどその後反省した顔で見つめられると強く言えないんだから、やっぱりあたしはあのギャップがあり過ぎる魔王陛下にちよつと絆されちゃってるのかもしれない。

「ああ、私も陛下わたくしと一夜を共にしてみたいわ。」

「あの素晴らしい体躯に抱き締められてみたいものね。」

「リールア様からお願いして頂けないかしらあ？」

…アホか。何が悲しくて婚約者に浮気を持ちかけなきゃならんのだ。

何よりそんなコトあのラオに言ってみなさいよ。

あの人絶対泣くわ。それはもうこの世の終わりみたいな顔して、抱きつかれるコツチの身にもなってみろって感じね。

冗談で「浮気してもいいわよ、あたしもするから。」と言った時の嘆きようは凄まじかったなあ。

あんな大きな男に大泣きされて大変だったんだから。

頬に手を当ててあたしの様子を窺っている三人にニコリと笑う。

「私が陛下に進言するなんておこがましいわ。皆様はとても御美しいんですから御自分で陛下に申し出てみてはいかがでしょう?」

「そうね、そうしてみましよう。」

「それにしてもしルーア様は本当に陛下に愛されていらっしやいますのね。」

「どうすればその様に愛されるのか知りたいものですわあ。」

知るか。

むしろあたしの方が聞きたいくらいよ。絶世の美女たちをフッてま

で、平凡なあたしを理由なんて本人に聞いてよ。

さあとはぐらかせば、貴族の娘がうっそりと笑う。とつても厭な笑み。

「もしやリールア様は夜が御達者なのでは？」

「ああ、そうでしたの？それは知りませんでしたわ。」

「それでは陛下が手離さないはずですわね。」

聞いておいてコツチの話を聞かず勝手に想像を膨らませて自己完結させる三人に一瞬だけ口元が引きつってしまふ。

こらこら、何だってそんな方向へ話が進むのよ。

「いえ、そんなことはありませんわ。」

「ご謙遜なさらずともよろしいのですよ？」

「謙遜ではありません。」

「でもあの陛下ですもの。夜は大変でしょう？」

二百五十余り生きているラオ。彼だって男だから色々な女の人と夜を共にしたことがあるらしい。

あたしと契約するまではかなり浮名を立たせていたとか。

本人から申し訳なさそうにその事実を告白されたけれど、まあ男だからそれはそれで仕方ないんじゃないのと分かってる。

現在は全くそういうコトはしていないと本人も彼の側近も言っているし。

散々言われて苛立たないわけない。

それはもう最高にいい笑顔を浮べて、意趣返しに言ってやった。

「ええ、それはもう…片時も離してくださりませんし、他の方というだけで陛下はお怒りになられて。朝も夜も体が休まりませんわ。」

あんたたちなんてラオの視界にも入ってないと暗に言えばブリザードが激しさを増す。

全くなんでお茶会というのに和気藹々と出来ないんだか。

これならラオとお茶会している方が何百倍もマシ。

さて、どう反撃されるか様子を窺っていると不意に三人の顔色が変わる。

後ろに背負っていた黒い雰囲気とブリザードが消えて、恋する乙女のように少しだけ目元を赤く染めてあたしの背後に熱視線を向けていた。

…あれ、もうそんな時間経ったっけ？

振り返れば案の定全身真っ黒の魔王がコチラに歩いてくるところだった。

奥方や貴族のお嬢様はあたしの存在なんか忘れて今か今かとラオが到着するのを待つ。

ああ、なんか面白くない。

ラオから視線を外してティーカップを傾けた。

ふわりと逞しい腕が首に回され、南国系の少し甘さを含んだ香りに包まれる。

「迎えに来た。」

甘えるような低い声が聞こえてきて肩口に顔が埋められる。

ティーカップをテーブルに戻し、横を見れば紅い瞳があたしを見つめていた。

「ちょっと早いわ。」

「そんな事は無い。時間通りだ。」

「そう?」

「ああ…、早く戻ろう。」

美女三人の熱視線をモノともせずにあたしに甘えてくる。

そのせいであたしには鋭い視線が向けられているんだけど。視線で人を殺せるとしたら、あたしは確実に死んでいるだろう。

促されるままに立ち上がって淑女の礼をとる。

「申し訳ありません、迎えが来てしまったので今日はこれでお暇させていただきます。」

「え、ええ。とても楽しかったわ。」

「私も皆様とお話が出来て楽しい時間を過ごせました。そうだが、よろしければ先程のお話を陛下にはいかががでしょうか？」

さっきの話と聞いて、ラオが何の事だとあたしと三人を見比べた。

‘自分と浮気して欲しい’なんて婚約者の目の前では断られるに決まってるし、そんなことを魔王に面と向かって口に出るほど彼女たちの地位は高くもない。

「いいえ、またの機会にさせていただきますわ。」

「そうですか？では失礼させていただきますね。」

「…リア、」

「分かってるよ。帰ったら一緒にお茶でも飲もう？」

「ああ。」

嬉しそうな表情を浮べる魔王を半ば茫然と見つめる三人にニッコリ笑顔を向けて、あたしは歩き出す。

ラオが腕を出してきたのでスルリとそれに自分の腕を絡めた。

普段はあまりしないのだけれど、今は彼女たちへの牽制と仕返しを込めて腕を取ればより一層嬉しそうにあたしの頭に口付けてくるラオ。

「…上機嫌だな。」

「ふふ、ラオのお陰よ。高慢ちきにはいい薬だわ！」

「？」

訳が分からないと小首を傾げるも「今日の分の執務は終わらせたぞ」と若干得意げに言う魔王に、自然と笑みが浮かぶ。

仕返し上等、喧嘩は高値買取、最後に勝つのはこのあたし。

魔王と婚約者の一日(1)

遠くから鳥の声が聞こえて来る。

チチチチ…と可愛らしい鳴き声に重たい瞼をこじ開けると、柔らかな朝日がカーテンの隙間を縫ってシーツを輝かせていた。

しかし窓の外に見える空はまだ薄明るく夜明けを迎えたばかりの色。起きるには随分と早過ぎる時間帯だろう。

ぼんやりと窓を眺めていれば背後の存在がモソリと動いた。

腰に回されていた腕に力がこもり、肩口をサラリとした感触が触れる。

「…もう、起きる…のか…？」

ももとのんびりとした口調だけれど、眠気のせいか殊更ゆったりとしている声が耳元で囁く。

起床を確認する言葉とは裏腹にガツチリ引き寄せる腕から力が抜ける様子はない。

「起きないわ…早過ぎるもの…。」

「……そうか…。」

満足そうに低く笑い、後ろからギュッと抱き付いてくるラオに苦笑した。

小さな弟ができたようですいつい甘やかしてしまう。良くないと分かかっていても子供みたいに真っ直ぐに向き合ってくるから無碍にも出来ない。

そっと繋いで来た手に少しだけ力を入れて握り返せば、大きな手がしっかりと握り返してくる。

背中越しに感じる温かさに目を閉じれば柔らかな微睡みに包まれていった。

布が擦れ合うような音にふっと意識が浮上した。

背中に感じていた体温がなくなっており、顔を上げると少し離れた窓辺で外を眺めているラオがいる。

気持ち細められている瞳は鋭く凜とした雰囲気を纏わせていた。

そういう姿を見ると彼は本当に上に立つ者なのだと思えて思う。

ジッと見つめていると視線に気付いたラオが振り返って瞳を和ませ、音もなく近寄ってくる。と静かにベッドに腰掛ける。

「お早う。」

「おはよう。もう起きる？」

「ああ。」

髪が乱れていたのか頭に触れてくる。大きな手は少し冷たくなっている、彼がかなり前に起きていたのだと分かった。

あたしもベッドから起き上がって身支度を整えるために隣室へ向かう。

そこには既に侍女が数人待機していてあたしが何時起きても良いように準備を整えているのだ。

「おはよう。」

「お早う御座います。今日も良い天気ですよ。」

仲の良い侍女がニコニコ顔でそう言う。顔を洗って、肌のケアをして、髪を梳かされ、ドレスに着替え、そうして軽く化粧をされる。

手馴れた様子であつと言う間に終わった。毎日見ても流石だと思う。

「そういえば、魔界に天気の良い日なんてないのかしら？」

あたしがコチラに来てから一日だって嵐や雨が降っているところを見たことがない。

雨が降らなくて大丈夫なのかとか、そもそも天気事態悪くならないのかとか、くだらないかもしれないけれども色々気になる。

あたしの言葉に侍女はクスクスと母親のような穏やかな笑い声をあげた。

「魔界の天気は陛下のご気分によって変化します。リールア様が城に訪れて陛下のご機嫌がよろしいでしょう。」

「へえ…。」

「私もこんなに長期間お天気の良い魔界は生まれて初めてです。」

ラオのご機嫌で天気が変わるなんて大変ね。

気恥ずかしさを隠すように「そんなものなのね。」と言えば侍女は頷いて「リールア様は陛下の唯一ですから。」と自慢げに言う。

最後に髪を仕上げてラオの部屋に戻ると朝食の並べられたテーブルの傍に彼は佇んでいた。

彼も着替えを済ませて何時も通りの黒を基調とした重そうな服を着ている。

促すように引かれた椅子に座る。向かいに彼も座って朝食に手を伸ばした。

「ラオ、今日の執務は？」

「…何時も通り、書類整理。それと会食が…」

「会食？」

誰と会食するのか聞いても眉をハの字に下げて口をもごもごさせる。

「どうやら言いたくないらしい。」

でもそこで諦めてあげるほど、あたしは優しくはないの。

「あたしに言えないような相手なんだ？」

ちよつと意地悪な言い方をすれば目に見えてギョツとした顔をする

ラオ。慌てた様子で違つと首を横にブンブン振る。

そうしてどこかバツが悪そうに視線を泳がせながら会食相手を薄情した。

「インキュバスの長と、会食する…。」

なるほど、インキュバスか。それじゃあ確かにあたしに教えたくない訳だ。

他者の精気を糧にするインキュバスにとって人間は餌、そのあたしが傍にいてはラオも気が気でないだろう。

会わせたくないならキッチンと言えればいいものを…。

「なら仕方ないわね。あたしは書庫で本でも読んで待つてるわ。」

「…すまない…。」

「良いのよ。あたしも餌食になるのは嫌だしね。」

「っ、そんな事は絶対にさせない…！」

唸るようにそう呟いてナイフを握り締める魔王に笑ってしまった。

本当に彼はあたしのこととなると子供みたいになってしまおう。

朝食を食べ終えて部屋にまだいたいと渋るラオの背を押しながら執務室へ向かう。途中で擦れ違う城の使用人たちから挨拶をされたり、ラオの側近と偶然鉢合わせたりしながら目的地に着いた。

魔王と婚約者の一日(2)

それでもまだ少しムスっとしているラオに彼の側近は困ったような笑みを浮かべている。

「仕事するんでしょ？」

「…まだ、早い。」

確かに普段より少しだけ早い。だからまだ仕事をしなくても良いんだと言外に言うラオは本当に子供だ。

無理矢理椅子に座らせれば嫌そうな顔で書類の束を睨みつける。

「早く終われば、その分一緒にのんびり出来るのになあ。」

チラリと見ると真面目な顔で「やる。」と羽ペンに手を伸ばす魔王。
うん、素直でよろしい。

大きな背中から離れようとしてピヨコンと跳ねた黒髪が視界に映った。

…あ、寝癖。

艶やかな黒髪の一部に寝癖が残っている。

それは丁度頭の真後ろで、どうやら彼は気が付かなかったらしい。

かなり跳ねてしまっているソレは手櫛で直るか分からなかったが、一応そつと撫でるように押さえてみた。

離すと先程よりは良くなったけれどやはりまだ跳ねてしまっている。

見た目よりもちよつと固い髪を何度も撫で付けていると喜色の滲んだ低い声が「もっと、」と強請ってきた。

どうやら魔王陛下はなでなでが気に入ったらしい。

「なでなでされるの好きなんだ？」

「ああ、気持ちいい。」

「寝ちやダメよ？」

「……善処する。」

サラサラと書類にサインする音を聞きながら目の前の頭に優しく触れる。

なでこ、なでこ。

傍らで書類を持つ側近が苦笑する。顔は見えないが魔王はご機嫌なようだ。

少し尖がっている耳に触れると一瞬ピクリと肩を動かしたが嫌がる様子もなく、されるがまま、ラオは書類に視線を落としている。

人間の丸い耳と違って尖っている耳は外見だけでなく性能も人間のものよりも良いらしい。

幾つもつけられたピアスはどれもキラキラと輝いており、一つ一つに複雑な模様のようなものが描かれていた。

よく見ようと顔を近づけて触れていると側近が小さく咳払いをする。

顔を上げたら少しだけ赤い顔をして困ったようにあたしを見ていた。

触るのはちょっとマズかったかしら？

ヒョイとラオの顔を見ると目元が赤く染まっている。気付けば手も止まってしまっていた。

「ごめん、もしかして魔族って耳触るのマズい？」

「あ…否…、」

あーとか、うーとか煮え切らない呻きを上げるラオ。

ハッキリ言ってもらわなければ困る。魔族の常識と人間の常識は結構違うので、あたしが何とはなしにしたことが魔族のタブーだったら大変なのだ。

名前を呼んで促すと目元を赤く染めたまま眉をへによりと下げて見上げてくる。

「リールア様、あまり陛下を苛めて差し上げないで下さい。」

助け舟を出したのは側近だった。

「そんなこと言われても、あたしには何が良くて何が悪いのか分からないもの。キチンと言ってもらわなきゃ困るわ。」

未だ赤い顔で見上げてくる魔王はちょっと泣きそう。

側近はあたしとラオの顔を見比べてから苦笑した。

「我々魔人にとって五感に関係する部位、鼻や耳などはとても発達しています。神経も敏感で、ある意味急所とも言われ、そこに触れる事は一種の求愛行動なんですよ。」

「え、求愛？」

「正確に言えば女性が男性を誘う際に用いられる誘惑行為にも近いですが。魔人はその行為にとっても弱いのでお気を付け下さい。」

「…そんなにコレって貴方たちには刺激的なの？」

「はい。リールア様があまり熱心に耳を触るので流石の陛下も動揺してしまわれたのです。」

そんな動物的な言い方をされても……というかコレって求愛行動になるんだ？

オオオ口と視線を泳がす魔王はなんだか可愛く見えてしまう。好きな相手が行動の意味を理解していなくても、誘惑されれば動揺してしまうのは当たり前。

むしろラオの理性の強さに感謝しつつ、ちょっとだけ可哀想なことをしてしまった気がして罪悪感が生まれた。

「ごめんごめん。ビックリさせちゃったわね。」

「……別に、良い。」

「そう？良かった、次から気を付けるわ。」

ポンポンと頭を撫でると小さく首が振られる。

「気を付けなくて良い。…リアが触れてくれると、死にそうなくらい、嬉しい。」

「…あ、あんたねえ…！」

「？」

ほんつとにこの天然無自覚タラシ男め。一体これでどれだけの女をタラシ込んできたんだか。

側近は側近でクスクスと可笑しそうに笑っているだけ。

「ラオ、そういうことは他の人がいる所であんまり口に出さないで。」

「？ 駄目なのか？」

「ダメ。あたしが恥かしくて死にそう。」

「それは困る…！リアが死んだら、俺も生きて行けない…。」

ぶはっと側近が噴出した。ああ、恥かしい。きっとあたしの顔はトマトもビツクリなくらい真っ赤だ。

臆面もなくこういうことを言うから時々困る。彼が子供じゃないんだって再認識してしまうから。

それでも彼は彼なりに気を付けているとか、これでも自分の気持ちをセーブしてくれていることは理解している。

‘結婚は好きな人と’なんて乙女みたいなことを言ったあたしの言葉を受け止め、歩み寄ってくれているのだ。

そうして自分を好きになつてもらえるようラオは日々努力しているらしい。それがこの真っ直ぐな言葉や行動として現れているんだ。

こんだけ好き好きオーラを出されては無視することも出来ないし、ラオが本気だと知っただけに簡単に断ることも出来ない。

この生活を満更でもないと思うあたしがいるから余計に厄介だ。

「そんなにタラシ込みたいなら、あたし好みになることね。」

なんてつつけんどんな言葉を投げかけても、真剣な顔で「善処する。」と頷くんだから全くもって彼には太刀打ち出来そうもない。

漸く落ち着いたのか書類に向き直るラオの頭を撫でながら、空いた片手でパタパタと熱くなった頬に手で風を送る。

とりあえず側近の愉しそうな視線に気付かないフリをして窓の外へと視線を投げかけることにした。

魔王と婚約者の一日(3)

一時間半ほどかけて執務を終わらせたラオは相変らずの無表情で、けれど嬉しそうな雰囲気を漂わせてあたしと手を繋いでいる。

頑張って仕事を終わらせた魔王は側近から「会食までのご自由に御過ごし下さい。」と笑顔で許可を貰い、せつかの良い天気だから中庭の庭園を散歩しようと誘ってきた。

特にこれと言った用事もなかったので了承したら、仲良くお手繋ぎ状態というわけ。

通り過ぎる使用人たちの「御散歩ですか」という問いに何度も深く頷くラオ。皆、穏やかな笑みを浮べて今朝何の花が咲いたとか、歩くなら庭園のどこが見頃だとか色々と言進言していく。

それを真面目な顔でふんふん聞いているこの魔王は変なところで素直だと思う。

「花は好きか？」

こてんと首を傾げて見下ろしてくるラオに軽く頷いた。

花は良い。綺麗だし、季節によって様々な種類があって飽きが来ない。

見ているだけで穏やかな気持ちになれる。

アニマルセラピーならぬフラワーセラピーだ。

「ええ、とつても。綺麗な花って見るだけで嫌な気持ちにならないもの。」

「そうか。」

「ラオは花なんて興味ない？」

「否、植物は好きだ。」

嘘ではないらしい。

何となく全体から楽しそうなオーラが出ているラオに促されるまま庭園へと足を踏み入れる。

植物独特の香りがふわりと体を包み込んだ。

合間を縫つように届く花の甘い香りは程好く、爽やかな気持ちになる。

繋いでいた手を一度離してラオの腕にあたしは自分の腕を絡め、隣に立つ。

チラリとコチラを見てから少し口角を上げた魔王はゆったりとした歩調で美しく整えられた花壇の花々を眺めていく。

綺麗な薔薇のアーチは庭師が毎日欠かさず手を入れているのだと教えてくれた。

「すごく綺麗ね。こんな素敵なお庭園、元の世界にはなかったもの。」

素直に称賛すると後で庭師たちに伝えておこうと満足げにラオは笑った。

丁度時期的に今は淡い色合いの花が多いらしく、庭園に咲き乱れている花卉はどれも柔らかかに個々を主張している。

これはどんな花、あれはどんな花と一つ一つ丁寧に教えてくれるラオと共に庭園を回っていく。危険だから触つてはいけないものなんかもキチンと教えてくれるので、しっかり頭の中に叩き込みながら相槌を打った。

広く迷路のような庭園を一時間ほどかけて歩いたけれど、恐らく三分の一も見切れていないだろう。

本当はもっと見て回りたかったけれど過保護なラオが「今日は日差しが強い。残りはまた今度に、」と言うので仕方なく諦めた。

確かに彼の言う通り日差しが強く、城の中に戻ると少しクラリとする。思っていたよりも体は熱を溜め込んでしまっていたようで、ラオの私室に戻ると温めの水を手渡された。

冷たい水が欲しいと言ったが冷たすぎるのは体に良くないと即座に却下される。

額に触れてきたラオの手は意外にも冷たかった。

「ラオ、あなたそんな真つ黒なのに暑くなかったの？」

首元までキツチリ留められた服に、足首近くまである重く長いローブのようなマント。見ているコツチが暑くて堪らない。

しかし本人は涼しい顔で「特には。」と言うのだから問題はないらしい。

「魔族は強い。多少気温が変化しても支障はない。」

「羨ましい限りね。あたしみたいに人間は暑過ぎても寒過ぎてもダメなのに。」

「…辛いかな？」

「平気よ。少し暑いくらいだし、ここは涼しいから問題ないわ。」

心配そうに覗き込んでくるラオの額を軽く撫でる。すると猫みたいに気持ち良さそうに紅い瞳を細めて、あたしの手で頭を寄せてきた。

あたしより何百年も生きているクセに頭を撫でられるのが好きな魔王に笑みが零れる。

クスクス笑っていると、彼も嬉しそうに口元を緩めた。

暑いからと珍しくアイスティーをラオが淹れ、水のコップと交換された。キラキラと光を反射させる硝子コップは表面がデコボコとじていて、持ちやすい造りになっている。

一口飲むとサツパリとした味が口の中に広がった。

後からほんのりとした甘みが香ってくる。

「美味しい。」

褒めるとホツとした表情であたしの隣に座った。

まるで壊れ物を扱うように優しく手を握られ、ジツと見つめてくる。

魔族と人間の体は耐久性においても全く異なる。もし本気でラオがあたしを抱き締めたりなんてしたら、あたしは全身複雑骨折になってしまうだろうし、下手したら死ぬ。

そのせいかラオは何時も細心の注意をしながらあたしに触れる。

たまに、そこまで気を遣わなくても思うくらい優しく触れてくる魔王は、あたしだけしか知らない魔王で、それにちょっとだけ優越感を覚えるたりもした。

力で捻じ伏せることも出来ただろうに、彼は常にあたしと真摯に向き合ってくれる。

そういうトコロは素晴らしいし素敵な人だなとは思っただけけど…、

「…もつと、」

「はいはい。」

あたしの手を掴んで自分の頭に乗せる魔王は、どちらかと言うと小

さな弟みたいに見えてしまって、可愛いとは思つがその気持ちが恋愛感情に変わるかと聞かれたら困ってしまう。

ちよつと固い髪を指先で梳きながら大きな頭を撫でれば、うっとりとした様子でラオは目を閉じた。

魔王と婚約者の一日(4)

それからずっと望まれるまま頭を撫でていると控えめに部屋の扉がノックされた。

ラオが軽く手を振れば扉が開き、彼の側近が目礼して入ってくる。

「申し訳ありませんが、そろそろ会食の御時間です。」

その言葉に面倒臭そうな顔をした魔王、側近にチラリと目配せをされて苦笑した。

「ほら、行ってきなさいよ。」

「だが……。」

「大丈夫。昼食食べたら書庫にいるし、もし何かあったらすぐ呼ぶから。」

渋るラオを諭せばちよつと不満そうに眉を寄せられたが、会食を欠席することも出来ないと分かっているからか「絶対呼べ。」と念押ししてから立ち上がった。

少し未練タラタラな様子の魔王をしっかりと見送って漸く息を吐く。

「お疲れ様でした。」侍女がニコリと笑いながら隣室から入ってくる。

「少し御時間は早いですが昼食にされますか？」

「そうね…そうしようかしら。」

「では直ぐに支度致します。」

急がなくて良いと言えば、侍女は小さく笑って部屋を出て行った。

少ししてカートを押しながら戻ってくるとテーブルの上に料理を並べていく。何時もはテキパキとしていたが、あたしの言葉通りゆったりと準備を進める。

穏やかな日差しが差し込む窓を眺めている内に支度が整ったよう
声をかけられた。

座り直してテーブルを見やれば野菜中心の見目美しい食事が並んで
いて、一度手を合わせてから手を付ける。

そんなに多くない量なのであつという間に終わってしまったけれど、
お腹はとても満足していて、侍女が淹れてくれた食後の紅茶を飲む。

「ありがとう、とても美味しかったわ。」

「料理長に伝えておきます。とても喜ばれますよ。」

「夕食も楽しみにしてるって伝えておいてね。」

「ふふっ、あまり褒め過ぎると夕食が凄い事になってしまわれます
よっ。」

気の良い料理長の顔を思い浮かべ、侍女と二人で噴出した。

前にも一度料理を褒めた時には余程嬉しかったのか、驚くほど大量
の料理が夕食に出され、ラオが呆れてていたくらいだ。

あの時は本当に驚いた。

食べ切れなくて、侍女やラオの側近まで巻き込んで何とか消費でき

たけれど、またあつたら堪らない。

料理長自身に悪気がないので怒るわけにもいかなかったが、ラオが困った顔で料理長に注意していたのも印象的だった。

「さて、あたしは書庫にでも行つてくるわ。」

「誰か傍に置かれますか？」

「止めておく。どっかの嫉妬深い魔王に睨まれたら、相手が可哀想なもの。」

書庫に行くまでには人気の多い場所を通るし、書庫にも司書や書を整理する人が何人かいる。

侍女ならまだしも護衛を付けるとなるとラオは嫌そうに顔を歪めてしまう。仕方がないと分かってはいても、気持ちをそこまで抑えられないようだ。

片づけを侍女に頼んで書庫へと向かう。

途中何人もの使用人たちと会い、その誰もが一人で歩くあたしを見ては「どちらに行かれますか」、「ご一緒しましょうか」と声をかけてきて断るのが大変だった。

何時もラオが傍にいるのに今日はあたしが一人だったのを見て気に

なるのかもしれない。

書庫に行くだけだから必要ないと言えば全員が「そうですか」と物言いたげな顔で離れたけれど、あたしが廊下の角を曲がるまで背中へ視線が向けられていた。

ラオに限らずこの城の使用人は皆、心配性な気がする。

書庫の少し重たい扉を押し開ければ古くなった書を修復していた司書が顔を上げ、あたしを見ると穏やかに目を和ませた。

「こんにちは。」

「こんにちは。今日は陛下がいらっしやらないのですね。」

ほっほっ、と朗らかに笑う初老の司書にあたしも苦笑する。

「ラオは会食中ですよ。」

「おやおや、そうでしたか。陛下は常にリールア様と共にいられたので、貴女御一人ではどうにも違和感がありましたなあ。」

「あたし一人ではそんなに変ですか？」

「ええ。リール様御一人では何分心許無く思えます。」

なるほど、だから皆あたしに声をかけてきたのか。

書庫に着くまでの出来事を話すと司書は殊更可笑しそうに笑って何度も頷いた。

「皆同じだったのでしょうか。」

「みたいですね。」

「羨ましいものです。さて、今日は陛下がいらっしやるまで此方に？」

「はい、すみませんがお邪魔させてもらえますか？」

「邪魔だなどと、とんでもない。お好きなだけごゆっくりなさってください。」

お言葉に甘えて本の海へとあたしは足を踏み入れた。

頭上までそびえ立つ本棚にはギッシリ本が並べられ、文庫本のように薄いものから辞典並の厚さのものまで様々なジャンルの本がある。

そこから気になる本を数冊抜き取り、窓辺に置かれた小さな椅子に腰掛けた。

こまめに掃除されているのか埃っぽさの感じられないそこはとても居心地が良く、持ってきた本をテーブルに置き、一番上にあった一冊目を手に取る。

古いのだろう。少しボロくなった表紙を開くと手垢の染み付いたページがあった。新しい本も綺麗なのだが、こんな風に何度も読まれて古くなった本もそれはそれで味が出ていて好きだ。

この国の歴史について書かれた本は蔦が絡み合ったような文字で書かれている。

不思議なことにその文字を見ると頭の中で勝手に日本語に置き換わってないようが読み取れるのだ。活字を読む楽しさは少々半減してしまうけれど、内容を理解しやすくなって以前よりも格段に読書時間が増えてしまった。

何かの装飾にも見える文字をひたすら目で追っていく。

と、不意に本棚の向こう側から何か落ちるような、倒れるような音が聞こえた気がした。

「？」

耳を澄ましてみたが特に何も聞こえなかったので空耳かとも思う。
しかし一度気になってしまつと、なかなか読書に集中できなくなっ
てしまう。

読みかけの本に栞を挟んで立ち上がった。

魔王と婚約者の一日(5)

ヒヨイと本棚から顔を出して見ると、つい先程まで忙しそうに書庫の整理をしていた人々がいなくなっていた。

だが足元には今しがたまで片付けられるはずだった本が数冊散らばっている。

拾い上げてみれば本のページは無惨にも折れてしまっていて、破けなかったのが不思議なくらいだった。

本を大切にしている彼らがこんなことをするだろうか？

嫌な予感がして咄嗟に一步横にズレた瞬間、何かが後ろから通り過ぎて行った。

それなりのスピードで横を駆け抜けたソレは向かいの本棚にぶつかる直前でピタリと止まる。そこで漸く、ソレが人の形をしていることに気付く。

「…誰よ、アンタ。」

タキシードによく似た服を纏った男が一人、嫌な笑みを浮かべてあたしを見つめている。

人間からすればかなりの美形だけれど残念なことに毎日悪人面の超絶美形を見ているせいか、まあ整ってはいるなと思う程度だ。

男はあたしの体を頭の天辺から爪先まで舐めるように見てから、ペロリと舌舐めずりをする。いくら美形とは言えお世辞にも格好良いとは言えないわね。

「こんな所に人間がいるなんてなあ…？」

「質問に答えなさいよ。」

「しかも気が強いときた！」

全く会話が噛み合わない。何コイツ。

苛立つあたしとは逆に男は上機嫌で近付いて来る。

頭の片隅で警報が鳴り響いて、早くラオを呼べと叫んでいる。けれど今は大事な会食中の魔王を邪魔するのには躊躇いもあった。

ふと男から香った甘い匂いにハツとする。

それは以前にも嗅いだことのある独特な強い香りだった。

「アンタ、インキュバスね？」

「良く分かったな。」

「前に会ったインキュバスも、同じ匂いをさせてたもの。」

そうか、インキュバスか。

男が「同じ匂い…？」とやや驚いた表情であたしを見る。

まさか会食相手の部下に襲われるとは思いもしなかった。というより、部下の教育くらいしっかりして欲しい。

とりあえず男がインキュバスならば何の問題もないと深呼吸を一つ。

「待つ、！」

「ラオーーーーッッッ！……！」

男の制止の声を遮るように名を叫ぶと、その響きが消え入らない内に慣れた温度が全身を包み込む。

顔を上げた先にはラオの顔があつて、男から隠すようにあたしをマントで覆っていた。

「動くな。一步でもその場を離れてみる、八つ裂きにしてやる。」

獣の唸りにも似た獰猛さを隠しもせず男を睨み付ける姿は魔王と呼ばれるに相応しい姿だった。

けれどすぐにあたしを見下ろしてきた紅い瞳には不安と心配の色がありありと浮かんでいて、男へ向けているものとは反対の手で頬や肩に触れてくる。

「無事か?」「何もされていないか?」と顔を覗き込んで来る魔王に大丈夫だと笑いかければホツとした表情で髪にキスをされた。

だがすぐに顔を上げると凍て付いた瞳で硬直してしまっていた男を射抜く。

男がビクリと体を震わせるのと同時に、その背後にあった空間がグニヤリと歪んで、また別の人物が姿を現した。

「全く、恥晒しもいいところだよお前は。」

軽い口調で震える男を罵倒したその人物は、今日の会食でラオと共に食事をしていたはずのインキュバスの長で、長く伸ばされた爪を男の首筋に突きつけたままアハハと笑みを浮べている。

顔は笑っているのに長から感じられる空気は冷たい。

「リールア様、ご機嫌斜めだね。」

「これで機嫌が悪くならない人がいたら会ってみたいわ。」

「ありやりや。本当にごめんね？まさかコイツがこんなことすると
思わなかったし。」

己の一族の長と魔王に挟まれて顔面蒼白になっている男は哀れな気もするが、あたしも流石に襲われたくはなかったのだから仕方ない。

ラオは酷く不愉快そうに口を開いた。

「如何いふ躰をしている。」

「申し訳ありません。コレもリールア様が人間である事は知っていたので、手出しはしないだろうと思っていたんですけどね。」

「ほう？では俺の婚約者と理解していたにも関わらず、手を出したという事が。」

二人分の殺気に男が情けない悲鳴を上げて腰を抜かしてしまった。

長はニコニコと笑っているものの、その瞳は冷たく男を見下ろしている。

ラオに至っては今にも男を殺してしまい兼ねない様子だ。

マントを引つ張ればすぐに瞳を和ませてあたしを見る。

「ラオ、ダメよ。」

「…何故？危うく襲われる所だったのに、」

「彼に狙われたのはあたしなんだから、彼の罰をあたしが決めたくて可笑しくないでしょ？」

「だが…っ」

「ラオが心配してくれたことは分かってるわ。すぐに来てくれてありがとうね。」

そつと頭を撫でてやると口を嚙んだが、やはり少しだけ不満そうに眉を寄せている。

ラオからしてみれば内心怒りが爆発しているんだろう。あたしだって、もしも大事な人が襲われかけたら犯人をぶん殴ってやるだろうし。

でもラオは力が強過ぎて手加減なんてしない。

多少危機感を感じたものの触れられてもいないのに、男に死なれては後味が悪過ぎる。

長を見れば男を足蹴にしてコチヲを見つめていた。

「その男はアンタに任せるわ。」

「オレで良いの？」

「ええ。ただし殺すのだけは勘弁してあげてね。」

「…優しいねえ、リールア様は。」

「あたしのせいで死なれたら後味が悪いだけよ。」

長は自分と同じくらいの男を軽々と担ぎ上げると、「王、会食の続きはまた今度にしましょーねえ。」と笑って手を振りながら歪んだ空間の中へと消えて行った。

後に残されたラオはすっかり元通りになった空間を睨み付けたまま唇を噛み締めている。

それを止めさせるために唇に触れると、思った通り目元赤くさせてオロオロとし出した魔王にホッと肩から力が抜け落ちた。

「あーラオ、司書のおじいさんは？本の整理をしてた人たちも、無事？」

「ああ、皆気絶しているだけだ。すぐに目覚める。」

「そう、良かったわ。」

鼻の良い魔族のことだから、あのインキュバスも人間のあたしの匂いを嗅ぎつけて書庫へ来たに違いない。

あたしのせいで怪我なんてされた日には申し訳なくて合わせる顔もないと思っていただけに、本当に良かったと胸を撫で下ろす。

が、ラオは無然とした表情で「良くない。」と言った。

ギョツと抱き付いてくる大きな体は小さく震えていて、肩口に顔を埋めてきたラオはもう一度「良くない、」と呟く。

「呼べと言った。けれど、リアに呼ばれた時は血の気が引いた。……急いで時空移動テレポーションしたら、インキュバスの気配がして、」

「……だからあんなに早かったのね。」

「抱き締めた時、少し震えていた。リアに恐ろしい思いをさせたアレを本当は、殺してしまいたかった。」

……気付かれていたらしい。

どんなに強がっていても、やはりあたしは女で、しかもただの人間で、魔族に本気で襲いかかれたら抵抗し様がない。

元いた世界でも変質者にだって会ったことがなかったから、実は結構怖かった。

でも意地っ張りなあたしは弱い姿を見せたくなくて、無理に何時も通りに振舞っていたが、ラオにはお見通しだったようだ。

「言ったでしょ、殺しはダメ。……でも、ありがと。ホントはちょっと怖かったかも。ラオが来てくれたから直ぐに怖くなかったけど、何だか改めてあたしってただの人間なんだって再認識しちゃったわ。」

「リア…、」

大きな手の平に引かれ、ラオへもたれ掛かるような体勢になる。

一瞬ふわりとした浮遊感が襲ってきたかと思えば見慣れた魔王の私室にいて、ベッドの上に二人仲良く座っていた。

細身ながらも実は筋肉質な胸板に頭が引き寄せられる。頬に温かな体温と規則正しく脈打つ鼓動が聞こえてきた。

「泣きたい時は泣いても良い。誰も責めたりしない。」

低い声が頭上から優しい響きを持って降って来る。

ラオはあたしの頭を撫でては、時折髪を指先で梳っては宥めるように背中を擦ってきた。促されるように吐き出した息はか細く震えていて、思っていたよりもインキュバスに恐怖を感じていたことを今更ながらに自覚する。

きつと今あたしはすごく情けない顔をしているだろう。

見られたくなくてラオの胸に顔を寄せると抱き締める腕に力がこもった。

「…落ち着くまで、こうしてて。」

「言われなくても、望む限り、幾らでも傍にいる。」

全てのものから守るように包み込まれた腕の中で、あたしはほんの少しだけ声を上げて泣いた。

この世界に来てから初めての涙だった。

魔王と婚約者の一日(6)

サラサラと、洋紙と羽ペンが擦れ合う微かな音にふっと目が覚める。柔らかなシーツの感触をぼんやり確かめながら、眠ってしまったまでのことを思い出して居た堪れない気持ちになった。

断続的に続く音の方向へ顔を向ければラオがベッドに腰掛けたままテーブルの上で書類にサインをしている最中だった。羽ペンを持っていない方の手はあたしの手と繋がれている。

驚いて手を動かすと気付いたらしいラオが振り返った。

「リア…どこか具合が悪い所はないか？」

顔を覗き込まれそうになって慌てて紅い瞳を空いている方の手で覆う。

化粧をしていると言うのに思いつ切り泣いてしまった今のあたしの顔は、きつと見るに耐えない様だ。

「ないわ。でも、お風呂に入りたいかも。」

「そうか。」

チリンとラオがベルを鳴らせば侍女が音もなく入室して、あたしに薄い布を被せると魔王へ恭しく一礼し、そつと背中を押されながらラオの私室を出る。

人気のない道を選んだのか浴室までの道のりで誰かと擦れ違ふことはなかった。

ドレスを脱ぐ手伝いをしてもらい、浴室へ足を踏み入れるほんわりとした湯気に全身を包まれる。侍女に促されるまま座ると良い香りのする石鹸が泡立てられ、柔らかなスポンジみたいなもので丁寧に体を洗われていく。

最初はとても恥かしかつたけれど断つた時に泣きそうな顔で侍女に懇願されてしまったので、今では諦めている。

それに彼女はその道の専門と言うだけあって素晴らしいほど上手に体や髪を洗ってくれる。マッサージの要領なのか気持ち良くて寝こけてしまいそうになったことも何度があった。

「ごめんね、折角綺麗にお化粧してくれたのに。」

「いいえ、気になさらないで下さい。リール様がご無事で安心致しました。インキュバスに襲われたと聞き及んだ時は、それはもう心臓が止まる思いでしたもの。」

「…ありがとう。」

ニッコリ笑う侍女は本当に素敵な人だ。

あたしよりも少し年上で、落ち着いた雰囲気と穏やかな表情が大人の魅力を引き立てる女性。小豆色のメイド服もよく似合っている。

全身を綺麗に洗われ、ゆったりと湯船に浸かる。

大浴場みたいなものもあるけれど、あたしは基本的にバスタブタイプの方を使っている。

温かいお湯にリラックスしている間も侍女はあたしの髪を乾かしたり、髪に良いとされる花の油を塗ったりと忙しい。湯船に浮かぶ椿のように赤い花を指先で弄んでいると侍女がおやつという表情をした。

「あら、」

「？　どうかしたの？」

「いえ、何でもありません。陛下も隅に置けませんね。」

クスクスと笑う侍女に首を傾げると、小さな手鏡を手渡された。

背後にあった鏡と合わせて見てみればうなじより少し下の方に赤い虫刺されのようなものがポツリとある。勿論それを虫刺されだと勘違いするほどあたしは純情な乙女ではない。

何時の間にキスマークなんてつけたのアイツ！

人の寝込みを襲ったのかと憤慨するも、侍女はまあまあとあたしを諫めようとす。

「陛下も殿方ですもの、好いた女性が傍に居れば抑えが効かなくなる事もありますよ。ずっと我慢していらっしやるのですから、これくらい大目に見て差し上げては頂けませんか？」

その言葉は尤もだった。

ラオはあたしを好きだと言う。四六時中好きな相手と共にいるのに触れられないというのは男にとってツライものかもしれない。

「でもねえ…、」

「今回の件で陛下も焦っておられるのですよ。自分の物だという印が欲しかったのかもしれない。」

「まだあたしはラオの物じゃないんだけどね。」

あたしの言葉に侍女は柔らかに笑いながら湯船から出るよう促した。

バスタブから出るとすぐさま肌触りの良いタオルで全身を包まれ、拭かれ、シンプルながらも控えめなレースが美しいネグリジエを着させられる。勿論透けてない生地のだ。

乾燥しないようにとハーブを使ったオイルでボディケアを受け、サツパリとした気持ちになって、また薄い布を羽織りながら私室へと戻る。

部屋の前まで来ると侍女はサツとあたしから布を取って「叱らないであげて下さいね。」と小さく笑って離れて行った。

…仕方ない、今回は侍女に免じて見逃してやるとしよう。

軽く息を吐いてから扉を開けたが部屋には誰もいない。

おそらく彼も入浴に出かけたのだろう。

綺麗に整えられたベッドにダイブしてみれば気持ち良いくらいにポーンと体が跳ね返って、スプリングの良さを示す。

寝転がっていると扉が開く音がして見慣れた影は滑るように入り込んできた。

昼間とは違い薄手のズボンにワイシャツっぽいものを羽織っているだけのラフな格好でラオがベッドに腰掛け、ベッドに少しだけ散っていたあたしの髪を整えるように梳く。

「夕食は、如何する？」

そう問われてそういえば食べていない事に気が付いた。

けれどあまりお腹も空いていなかったのだから「いらないわ。」と言いつつ、ラオは食べたのか聞くと「減っていないからいらない。」なんてどうやらあたしと同じだったらしい。

起き上がってラオの肩にかけてあったタオルを取る。

まだ水気がだいぶ残っている黒髪を優しく拭いてやると静かに目を閉じた。

人間と違い風邪なんてそうそう引かないだとか言ってはいるものの、濡れた髪を放置するのは髪にも体にも良くない。

しっかりと拭いて乾かしてやった髪は綺麗なストレートで艶やかに光を反射させる。

こっくりこっくり、船を漕ぐ魔王に苦笑した。

「寝よつか。明日も早いでしょ？」

「…ん、」

緩慢な動作でベッドに潜り込んだラオが毛布の端を広げてコチラを見る。

何時も通りそこへ入れば大きな腕が腰へと回され、キュツと軽い力を込めて引き寄せられた。

「おやすみ。」

「…御休み、」

少ししてから聞こえてきた規則正しい寝息を子守唄代わりに、あたしも目を閉じて、背後の温もりに体を預けて眠りに落ちた。

後先考えないのは止めましょう(1)

この世界に来てから更に三ヶ月ほど経ったある日、ふとしたきっかけで魔族にも学校があるのだと言うことをあたしは知った。

以前は学校なんか嫌いだったけれど今では懐かしい。

気になってしまうのも仕方がないと思う。

「ね、ラオ、お願い。」

せっかくだから見学しに行きたいと婚約者の魔王へお願いしてみる。上目遣いをお願いされるとラオは断れないと気付いたのはついこの間だ。

案の定困ったような表情をしたものの護衛を付けるならと折れてくれた。

数日後、お願いした通り魔族の学校、それも人間で言うなら小学生くらいの子供たちが通っている学校を訪問することになった。

城から出たことのなかったあたしにとっては始めてのお出掛け。

ラオは心配なようで、何時もの侍女と数人の護衛（全員女の人だ）を付けて、それでももし危険だと感じたらすぐに逃げるか自分を呼べと言うのだから過保護だと思う。

まあこの間のインキュバス事件があったから余計に神経を尖らせているのかもしれない。

出掛ける直前に渡された紅い石のシンプルなネックレスは、今あたしの胸元を飾っている。

私服代わりのドレスや生活費必需品なども買ってもらってはいたけれど、手渡して直接何かを買ったのはこれが初めてだ。

「此れを…俺だと思って、大切にしてくれ。」

恥かしいのは視線を伏せながらモゴモゴと小さな声でそう言った魔王を思い出すと笑ってしまう。

もつとは気障な言葉は平然と言うクセに、ちょっとしたことになる。そんなラオに弱いというか甘やかしてしまうあたしもダ

メなのね。

ふふ、と笑っていれば侍女に「どうかされましたか？」と問いかけられた。

「ううん、これをくれた時のラオを思い出しちゃって。」

「とても照れていらっしやいましたね。」

「普段は剛速球なのに、妙な所で変化球なのよね。」

「誰しも大切な方に贈り物をする際は緊張しますから。リールア様に気に入っていただけるか陛下も不安だったのでしょう。」

そんなものかしら？と首を傾げれば、そのようなものです。と侍女は笑う。

意外なことにあの魔王はセンスが良い。彼があたしに与えてくれたドレスや小物などはほとんど趣味が良くてあたしが気に入る物ばかりだった。

馬車に揺られながら胸元のネックレスを指先で弄っていると揺れが収まり、やがて馬車は停まった。

侍女は先に外へ出て、周囲を確認するとあたしを促す。

ドレスの裾に気を付けながら馬車から降りればレンガ造りの大きな建物が目の前に広がっていた。学校の先生らしき人が待っていて、あたしにゆっくりと歩み寄ってくる。

初老の女性だった。ひつつめ髪に厚めの眼鏡をかけてはいるけれど、キツイ雰囲気は欠片もない。下がった目尻とえくぼが愛嬌のあるその人は淑女の礼を取る。

あたしも同様に礼を取れば殊更女性はニッコリ笑った。

「お初にお目にかかります、リールア様。私はこの教育学校の理事わたくしをしております。」

「初めまして。我が俣を聞いてくださって感謝します。」

「いえ、リールア様のご訪問してくださると聞いて生徒もとても楽しみにしておりますの。私もお会い出来て光栄だわ。」

本当に嬉しそうに言われて、少し照れてしまった。

立ち話もなんだからと校内に招き入れられ、理事長室で学校の歴史を大まかに聞く。どうやらこの学校はラオも幼い頃に通っていた場所らしい。

だから余計に融通が利いたのかもしれないが。

もう一千年以上も存続しているこの学校では毎年様々な種の魔族が入学し、魔力の扱い方から国の成り立ち、魔族の各種族の勉強などを主に行っているようだ。

この学校を卒業すると更に上の学校があり、大抵はこの二つを卒業するらしい。王族や貴族になると今度は礼儀作法などを主とした厳しい学校をもう一つ通らなければならぬとか。いわゆるあたしたちで言う高校だろう。

学校の話聞いてある程度のことを理解した後、漸く見学が始まった。

理事に案内してもらいながら授業中の教室を一つ一つ見回っていく。

まだ五歳前後の子供たちがいる教室では魔力を出す練習をしていて、それぞれの種族特有の力を個々に分かれて訓練している。

教室の至るところで水が湧き上がったたり、小さな火花が爆ぜたりと子どもらしい騒がしい風景だった。

理事は苦笑していたけれど子どもは元気過ぎるくらいが丁度良いとあたしが言えば「元気過ぎて毎年窓ガラスを何枚も新調するんですよ。」と肩を竦められ、それは確かにやんちゃ過ぎるなと顔を見合わせて笑ってしまった。

七、八歳くらいの子供たちになると魔力の制御が主となる。

自分の種族についての勉強を重ね、各種族の特徴を生かした魔力の使い方をマスターするまで何度も何度も繰り返すという根気のいる授業だ。

その時だけは種族ごとに分かれて授業が行われ、休み時間になると互いの魔力を競い合う子どもたちのしゃぐ声が廊下においても聞こえて来る。

基本的には三、四年で完璧に魔力を扱えるようになるらしい。

ついでに言うなら、この時に各個人の魔力の量も明確に分かるようだ。魔力の多い子と少ない子の違いは力として差が出る。魔力が多ければ使う力も大きくなるが、少ない子はなかなか力を使い切れないのだとか。

魔力の少ない子や種族は装飾品や体に魔力を増幅させる独特な模様を刺青する。

そうして全体的に力が同じくらいになるよう調節するのも学校側の役割なのだ。理事は誇らしげに言った。

後先考えないのは止めましょう(2)

十歳になると世界や国の成り立ちについてを学び出す。

この頃は勉強が主になって、その合間に戦いの基礎を学ぶ。

あたしもこの世界や国の成り立ちを本で読んだけれど、なかなか難しく、子どもたちも苦戦しているようで何度も先生に質問を繰り返していた。

先生自身も嫌がる事なく子どもたちが納得するまで根気強く付き合っている。

そういう努力があるからこそ子どもたちの学力は伸びるのだろう。

「ねーねー、リアル様って魔王様の、こんやくしゃ、なんでしょ？」

傍にいた女の子があたしのドレスの裾を引いて見上げてきた。

理事が注意しようとしたけれど「良いの。」と止め、女の子と視線を合わせるように屈み込む。女の子はとても可愛い顔立ちをしていて、耳があるはずの場所には猫科の動物のものらしい耳がヒョコリと生えている。

「ええ、そうよ。」

頷くと、脇から男の子が来て「こんやくしゃ」って何？」と小首を傾げた。

「将来、‘けっこん’する約束をした人どうしのことよ。」

「じゃありールア様は魔王様と‘けっこん’するんだ！」

女の子の言葉に男の子は凄く凄いと輝く瞳であたしを見る。

…覚えのない内にされた約束だけだね。

うんともいいえとも言えなくて笑って誤魔化したけれど、女の子は真っ直ぐな瞳で聞いてきた。

「どうしてまだ『けっこう』してないの？」

不思議そうな表情に苦笑する。

確かにラオは美形だし、性格も悪くないし、お金持ちだし、それこそ悪い所を上げる方が大変なくらい完璧な人だ。

「そうね。でも結婚ってうんと大事なことから、簡単に決めちゃいけないのよ。」

「リールア様は魔王様のこと好きじゃないの？」

「うーん、好きだけど、結婚するための好きかどうかはまだ分からないわ。」

あたしの言葉に大きな目を更に大きくさせて驚く女の子。目が零れ落ちてしまいそうだ。

けれどすぐに「魔王様はリールア様のことだいすきなんだから、結婚してあげないと魔王様がかawaiiそう。」と反論されてしまう。どうやらあたしに対するラオの態度は城下の学校にまで広がってしまっているらしい。

「リールア様は、ぜったい魔王様とけっこんしなくちゃダメなの。」

「どうして?」

「貴族の子っていやな子がおおいもん。貴族の子が王妃様になるのはいや。」

チラリと理事を見ると困ったように眉を下げていた。

どうやら一般の魔族と貴族との間には何か溝があるみたいだ。

女の子は友達らしき別の子どもに呼ばれると、あたしに手を振って走り去ってしまう。

立ち上がったあたしに理事は何とも言い様のない顔で目を伏せ、声を落として言った。

「私たちがただの魔族と貴族とでは法も立場も異なります。どれ程力が強くとも生まれによって全てが決まってしまうです。」

「つまり貴女方は貴族に逆らえない、ということですね?」

「ええ。あんな小さなうちから貴族と平民は分けられるせいかな、平

民の子を苛める貴族の子も多くて…。」

なるほど、それであの女の子は貴族を嫌がっていたのね。

地位だけで差別が生まれているのは良くない。今はまだそれほど目立ってはいないけれど、いずれ時が経てばそれも崩れてしまうだろう。

平民の中にもしも力の強い者が生まれてしまえば反乱する者が現れる。それは国にとって最もよろしくない事態だ。

…何とかしないといけないわね。

ちょっとした羽伸ばしのつもりが政治に繋がってしまい溜め息が漏れる。

いくら魔王の婚約者とは言え、所詮他人であるあたしが口出しできるものかしら？王妃であればそれなりに権限はあるだろうけれど、そのためだけに結婚しようと思うほど正義感が強いわけではない。

何とかしたいと思う気持ちと放置してしまいたい気持ちの板ばさみ状態だ。

「暗いお話は止めにしましょう。折角ご見学なさっているのですから、今この時を楽しんでくださいませ。」

「…そうですね。」

暗い雰囲気を振り払うように理事が笑う。

「次は十二歳、この学校の最高学年の教室を見ましようか。」

「はい。お願いします。」

歩き出した理事とあたしに、侍女と数人の護衛がついて来る。

最高学年は丸々一つの校舎を使っているのか渡り廊下を抜けて別棟に移ると、そこかしこから騒ぎ声や何かが爆発するような音が響く。下の学年よりもずっと騒々しい様子に笑ってしまった。

一つの教室から煙がもくもくと上がると何人かの生徒がワツと飛び出してくる。

「だから違っつて言っただろ?!」

「煩いなあ!お前だって試してみろつて言ったじゃんか!」

「ってかどーすんだよ?実験やり直しじゃん!」

広がった煙の中から言い合いをする少年たちの声と人影が現れる。

それぞれ独特な姿をした三人の少年は、目の前に立っていた理事を見て悲鳴に近い声を上げた。

「っっげっ、理事長先生?!?!」

「げっ、じゃありません！何をしていますのですか、貴方達は!?!」

腰に手を当てて憤慨する理事の前で三人の少年は互いの顔をチラチラと見ながら、どうする?どうするかとヒソヒソ話し合っている。

理事の様子を見ていたが、どうやら彼らは授業を抜け出してこっそり別教室に隠れて何やらやっていたらしい。

先程の言葉からすると何か実験をしていたが失敗してしまったのだろっ。

げんなりした顔で理事からお説教を受ける三人に思わず笑ってしまった。

そこで漸くあたしの存在に気が付いた彼らはキョトンとした表情で理事の向こう側から顔を覗かせ、驚きと多くの好奇心を滲ませた瞳

であたしを見つめた。

「もしかしてリール様?!」

「うっわー、俺初めて見た!」

パツと表情を明るくして寄って来た三人に理事が溜め息を零す。

そんな彼らが城で留守番している魔王と重なり、ああやっぱリラオ
ってば子どもと同じじゃない。なんて笑ってしまった。

後先考えないのは止めましょう(3)

本物だ、何だと騒ぐ少年たちと視線を合わせるために屈む。

「こんにちは。」

「「「こんにちはー!」「「「

元気な返事は廊下によく響いた。

理事に怒られていたことも忘れてあたしをキラキラした瞳で見る彼らは、矢継ぎ早に質問を投げかけてくる。

「リールア様って魔王陛下の婚約者なんだろう?」

「やっぱり陛下ってすげえ強いのか?」

「どんな人？どんな魔力使ってたっ？」

ラオを思い出しながら、一つ一つにキチンと答えていく。

大人と違って子どもははぐらかされるのが嫌いだから、曖昧な返答をしても納得してくれないもの。

「ええ、婚約者よ。でも結婚はまだしないわ。」

「何で？」

「あたしはまだ魔王様のことを全部知ったわけじゃないもの。お互いを知って、好きになって、初めて結婚を考えるのよ。」

ふーんと分かったような分かっていないような返事が返される。

「けど、とても良い人だね。優しくて、心が広くて、ちょっと頼りないけれど誠実よ。人間のあたしに歩み寄ってくれるなんて普通はないでしょ？」

三人は不思議そうな顔をした。自分たちの知ってる魔王と違う、なんて呟きが聞こえてきて笑ってしまう。

魔王という立場上、非人道的なこともするし、時には鬼にならないければならないこともある。だが、それだけが彼の本質とは限らないのだ。

あたしに甘えてくるラオもまた、彼自身の本質であるはず。

「表と裏が同じとは限らないものよ。」

「難しいなあ。」

「そうね、でも何時かきつと分かる時が来るわ。」

そうなのかと三人が顔を見合わせる。

さて、この話はこの辺で留めておくとして…だ。

「それより貴方たちはどうしてここにいたのかしら？授業はなかったの？」

「そ、それは……」

「俺たちやってみたいことがあったんだ！」

「でも先生たちは許可なんてくれないだろうから、」

「それで授業にも出ないで隠れてやってたのね？」

「「「……………」」」

悪いことをした自覚はあるようで、小さな肩がしょんぼりと落ちて
いる。

授業をサボっただけならば何てことはない。けれど教師に黙って何
かの実験をしていたことは見過ごせなかった。

あたしも高校に入りたての頃に授業を無断欠席して外に遊びに出て
しまったことがある。あの時は担任だけでなく親にまでこっぴどく
叱られたものだ。

「迷惑をかけることと、心配をかけることは違うわ。」

ゲームセンターから帰ってきたあたしに親は凄い剣幕で怒鳴った。

「どこに行ってたんだー!!」

その時は学校を休んだことを怒られているのだと思っただが、後にしてみれば両親はともあたしを心配していたのだと気が付いた。

学校に行つたはずの娘が来ていないと連絡を受け、何か事件に巻き込まれたんじゃないか、事故にでも遇つたんじゃないかと近場の病院にわざわざ電話をして確かめたりもしたらしい。

携帯を家に置き忘れていたため連絡すらつかない状況に両親は警察に行こうとすら思ったとか。

「教室をめちゃくちゃにしてしまったのは、確かに学校に迷惑をかけてしまったのかもしれない。けどね、それ以上に貴方たちは先生に心配をかけさせてしまったのよ？もしも貴方たちが怪我をしたら親も哀しむけど、先生もとっても哀しい気持ちになるわ。そうして貴方たちのことで先生は責められてしまふかもしれない。…そういうことを考えた事、ある？」

「…ない。」

「でしょ？それにね、授業は出なくても良い勉強ばかりをやつてる訳じゃないの。皆が知っていて当たり前のことをやっているのよ。周りが知っていることを知らないなんて恥かしいわ。」

だから授業も大事。出ないとダメなのよ、と言えば三人は小さな声で「…ごめんなさい」と呟く。

本当に悪いと思っているようだ。

あまり言い過ぎても可哀想だからと理事に笑いかける。

「反省しているようなので、少しだけ罰を軽くしてあげてもらえませんか？」

「……そうですね。今後きちんと授業に出ると言つのなら今日は反省文だけでよしとしましょう。」

「「「ごめんなさいっ」「」」

もう絶対しないと頷く彼らに理事は仕方ないなあという表情で柔らかく笑った。

そうして他の先生と三人で教室を片付けるように言って、あたしに振り返る。とても穏やかな笑みでありがとつございますと御礼を言われてしまい慌てて手を振った。

あたしは何もしてないし、ちょっとお説教しただけだから。

自分のしたことが悪いことだと認めることができた三人が偉いのだ。

「これでは見学どころではないですね。部屋に戻りましょう。」

「…そうですね。」

廊下にまではみ出した煤と机や椅子を一瞥して、元来た道を辿る。騒動を聞きつけた他の生徒たちに手を振られたり、話しかけられたりしながらゆっくりと理事長室へあたしは戻った。

紅茶を飲みながら迎えの馬車が来るまでの短い間に理事とお茶をする。

歳のいった女性ならではの包容力と穏やかさを持つ彼女はとても素敵な人で、あたしも歳をとったらこんな人になりたい。

「今日はありがとうございました。」

とても楽しかったです。あたしの言葉にカップを持ち上げていた理事はニコツと笑った。

「それは何よりです。途中想定外のこともありましたが…」

「あれは確かに想定できませんね。」

「元気が良過ぎてのんびりしてられませんわ。」

言葉とは裏腹に幸せそうに笑う理事は、きっとこの学校が好きなのだろう。子どもたちに振り回されながらも彼らが成長していくのが嬉しくて堪らないと表情は語っていた。

今日会ったあの三人が、女の子が、どんな大人になるのかと思うとウキウキとした気持ちになる。

彼らは明日も明後日も休むことなく成長していくのだ。

「……リール様、迎えが到着致しました。」

侍女の言葉に頷いて立ち上がった。

「また来ても良いですか？」

「ええ、何時でもいらしてください。次に御会いできることを心待ちにしております。」

互いに淑女の礼を取って、あたしは部屋を出た。

学校の正面に止められていた馬車へと乗り込めば、ゆっくりと動き出す。

見上げた学校の窓からは手を降る沢山の子どもたちが見え、あたしも小さな小窓から手を振り返していると、すぐに侍女によって窓は閉められてしまったけれどほっこりとした気持ちが胸の中に広がっていた。

後先考えないのは止めましょう(4)

突然ガタン…ッ！と馬車が揺れた。

続いてガタガタと山道を走っているような断続的な揺れに、驚きながらも椅子にしがみ付く。

侍女はサツと立ち上がって御者を確認すると一瞬驚いた様子で目を見開いた。

「どうしたの？」

「何でもありません。道が悪いだけのようです。」

それにしただって酷過ぎる。

腰掛けている部分が柔らかな素材で出来ているとは言え、こつも揺すれてはのんびりなどしてられない。

早く通り過ぎてくれないかしら。なんて思っても揺れはなかなか収まらない。

不貞腐れてしまうそうになったあたしに「後もう少しですから。」と侍女が苦笑した。

やがて馬車の速度が落ち、ゆっくりと走行を停止させ、御者が下りる音がする。侍女が出るのかと思いきや、何故かそつと背を押された。

「どうぞ楽しんで来てくださいませ。」

訳知り顔でそう言う侍女に首を傾げていれば馬車の入り口が開けられ、温かな日差しが差し込んでくる。

ふわりと香る爽やかな深緑の香りにつられるように馬車から降りようとすれば目の前に大きな手が差し伸べられた。

見覚えのあるそれに顔を上げると、見慣れた人物が立っているではないか。

「ラオ?!」

何時もの黒い服ではなく、御者が着ているような紺色の地味な服装で佇んでいた。

振り返ると侍女が乗った馬車が別の御者と共に帰って行くところである。

当の魔王は悪戯が大成功した子どもみたいにしてやったりな表情で笑っていて、嬉しげにあたしを見つめていた。

おそらく一度城に戻った際に入れ替わったのだろう。地味な服にも関わらずラオが着ていると上等なもののように見えてしまい、とても御者の服とは思えない。

「こら、仕事はどうしたの？」

「全部終わらせて来た。リアと出掛けたくて、ついて来てしまった。」

「だからって御者に成り済まさなくたって…」

「そうしないと城から出られない。」

…つまり、無断外出したのね？

流石にマズいと思っっているのか視線を泳がせる魔王に溜め息が零れた。今頃執務室で怒り狂っている彼の側近を想像すると同情を禁じ得ない。

フットワークが軽いと言うべきなのか、行動派と言うべきなのか。

あたしと出掛けたいから乗せてくれと御者に頼んでいる姿が容易に想像できてしまう。

「帰ったら怒られるわよ？」

「…我慢する。」

「全く。次からはキチンと言ってから出てきなさいね？」

コクコクと頷いてから魔王が腕を出してくる。それに自分の腕を絡めればゆっくり歩き出した。

背の高い木々が立ち並ぶ森の中にラオが足を踏み入れると不思議なことに草木がソロソロと後退していく。絡み合った蔦も、正面を遮る枝も、ラオが近付くと頭を垂れるようにスルリと道を開けた。

魔王というのは魔族だけではなく植物にまで影響を及ぼすのかしら？

道を開けた植物を見つめっていると恥かしそうに葉をクルンと丸めて別の草の陰に隠れてしまう。

何だかその動きが可愛かった。

そんな風に森の奥へ奥へと進んでいくと、不意に視界が開け、明るい空の青と濃い緑が広がり、小さくも美しい湖畔があった。

まるで絵画を切り取ったかのような素敵な風景に言葉も出ない。

半ば茫然と眺めていたあたしに痺れを切らしたのか、ぶわっと浮遊感がしたかと思うとラオに横抱きにされていた。

「っ、ラオ、下ろしなさい！」

「何故？」

「なぜって、恥かしいじゃない!!！」

「誰も見てないから問題ない。」

そっとう問題じゃないのと言っても聞き入ってもらえず、ラオはサクサクと歩いてしまう。

どこへ行くのかとっていると驚くことに湖の水面へと足をつけた。ありえないがラオの足は地面と同様にしっかり水面を踏み締めていて、その度に足元から小さな波紋が広がっていく。

湖に中央まで来ると漸く下ろされた。

が、足元が水なのだ。ラオならともかく人間の自分は沈むのではないかと不安になったけれど、パンプスが踏んだのは硬く滑らかで硝子のような床だった。

カツンとヒールが触れると小さな波紋が浮かび上がって消える。

足を踏み出しても沈むことなく水面はあたしを受け止めた。

それが嬉しくてラオから離れてクルリと回る。あたしの歩いたところを波紋がポツリポツリと広がっては消えて追いかけて来ては、空を緩やかに歪めていった。

「…気に入ったか？」

静かな声に振り返ると微笑を浮かべたラオがそっと歩み寄って来た。

大きな手があたしの手と繋がれる。

視線が絡み合った瞳は何故か潤んで見えた。

「ええ、とっても。こんな素敵な体験生まれて初めてだわ…！」

「そうか。」

足元を見れば少し下を綺麗な鱗の魚が泳いで行く。キラキラと輝く水面に負けず劣らずのその魚は数匹で楽しげに水の中を泳ぎ回っていた。

鏡のように景色を映し出す湖をジッと見つめていると繋がれた手に力がこもった。

見上げれば紅い瞳が真っ直ぐにあたしを見つめ、筋張った指が撫でるように頬を滑る。

「俺は、頼り無いのかも…。」

少しだけ眉を寄せ、苦しげに伏せられた睫毛は切なく影を落とす。

何かに怯えているかのように薄い唇が僅かに震え、一度息を詰め、しかしすぐに意を決した様子で開かれた。

「何時も、迷惑をかけてしまう。解ってはいるのに抑え切れず、我が儘ばかり言っ…こんな俺は格好悪いと思っ…だが、リアの事となると、如何しても自分を上手く制御出来ない。」

「……うん。」

そんなこと知ってたわ、ずっと前から。

我が儘を言う度に向けられた不安に揺れる瞳も、伸ばしてくる大きいのに頼りない手も、とつくに気付いていた。

「リアが望む様な男に成りたいと思っているのに、如何にも出来なくて……本当はリアに振り向いて貰えるまで我慢するつもりだった。…でも、無理だ。毎日共にいて、傍にいて、苦しいのに嬉しくて…」

伏せられていた瞳がまた、あたしを見下ろした。

後先考えないのは止めましょう(5)

「愛してる…っ！誰よりも、何よりも、愛してる…！」

くしゃりとラオの顔が歪む。

紅い瞳から幾筋も雫が伝い落ちて、足元の湖へと消えていく。

繋がれた手からあたしの体へ彼の震えが伝わってきた。

「愛されなくても良い！それでも構わないからっ…離れて行くな…
！！傍に居てくれ…っ！！」

ラオの感情に反応したのか水面が揺れ、木々の葉を風が揺らし、植物が鳴りを潜める。

空いた片手で顔を隠しながらもその口から溢れる言葉は止まらない。

「見捨てないでくれっ…美緒^{みお}…!!」

ドキリと心臓が脈を打つ。

初めて呼ばれた名前に可笑しくらい心がざわめいた。

お前のいない世界なんて何の意味もないんだと、悲痛な叫びに胸が痛くて堪らない。

はぐらかして、ずっと先延ばしにした事がラオをこんなにも苦しめてしまっていたなんて…。

あまり表情に変化が見られなかったために気付けなかった。…なんてただの言い訳だろう。

子どもみただからと思っていたあたしが馬鹿だった。

この人は何時だって本気で、あたしを真っ直ぐに見つめてくれていたではないか。

目の前にいるのはこの世界の魔王であり、一国の主であり、あたしの婚約者である一人の男。

これほどまでに自分を愛してくれた人がいただろうか？

そう思うと胸の中に痛みにも似た熱い感情が込み上げてきた。

それは恋と言うには深く、苦しい思い。目を閉じれば瞼の裏に浮かび上がってきたのは元の世界にいる家族や友人の顔で、全員が笑ってあたしを見つめている。

…ごめんなさい、お母さん。お父さん。…みんな。

ゆっくり顔を上げるとあたしと同じ黒髪の魔王が肩を震わせて泣いていた。

…この人を置いて行くことなんて、出来ないわ。

繋いでいた手を解けばビクリと大きな体が震える。

俯いたまま動かないラオを、両腕を目いっぱい広げて抱き締めた。耳元でビクリとしゃくり声が聞こえた気がする。

「…ごめんなさい、ラオ。ずっと待っていてくれたのに、こんなにツラくなるまで耐えていてくれたのに、気付けなくて…ごめんね。」

大きな背を宥めるように擦ってやると、戸惑うようにあたしの背にも腕が回ってきた。

もう何時から好きだったかなんて分からないけれど、今この胸の中にある感情は本物で、自覚してしまえば堰を切ったように言葉が溢

れてくる。

「好きだよ…ラオ。」

「！」

勢いよく上げられた顔は涙に濡れ、紅い瞳が驚きの色を宿してあたりを見る。

鋭い目元に残る涙を優しく指先で拭くと薄い唇が戦慄わなないた。

「本当、に…？」

「うん。」

頭を引き寄せれば迷子の子どもみたいな表情であたしを見つめてくる。

「愛されなくて良いなんて言わないで。もっと、我が儘になっても良いの。迷惑かけたって構わないわ。頼りなかったら叱ってあげる。」

「コツンと額同士を合わせれば目の前の瞳からまた涙が零れた。

…大きいのに泣き虫ね。

そんな所も愛おしいと思え、自然と笑みが浮かぶ。

「これからもずっと、……一緒にいよう？」

返事の代わりに返ってきたのは触れるだけの優しいキスだった。

唇が離れると、目元を赤らめた瞳が眩しそうにあたしを見つめ、存在を確かめるように強く抱き締められる。

背に添えていた手に力を込めてあたしも抱き締め返す。

今この瞬間で時が止まってしまえばいい。

そうすればずっと、あたしたちの気持ちは変わらずにいられるのに。熱く切ない気持ちが伝わるようにラオの体をより一層強く抱き締めた。

ガタガタと揺れる馬車の中、ラオの膝の間に座り、抱き締められていた。

迎えに来た侍女と御者は外に乗っていてあたしたちは二人っきり。

ラオは少しも離したくないといった風に抱き付いたまま、オマケに侍女は何でかあたしとラオを見て「おめでとございます。」と満面の笑みで祝福の言葉を送ってきた。

どうして分かったのかしら？

チラリと見上げれば喜色を浮べた紅い瞳と目が合って細められる。

「…如何した？」

低く掠れた、以前よりも随分甘さを含んだ声が不思議そうに問うてくる。

「何でもない。…帰ったら、怒られちゃうわね。」

「でも、リア…美緒も一緒…だろう?」

一人は嫌だが、美緒がいるなら我慢する。なんて可愛いことを言う魔王の額を軽く叩いた。

ペチリと音がしたのに叩かれたラオは心底嬉しくて堪らないと言いたげな様子で肩に顔を寄せてくる。

「仕方ないわ。あたしも一緒に怒られてあげる。」

「…美緒が謝れば、きっとアレも許す。」

「もしかして怒られることは計算済みだったの?」

喉の奥でクツクツと笑う魔王に呆れてしまった。

あの温厚そうな側近が苦勞するのも頷ける。

「怒られるのは今回だけ。次からは無断外出なんてダメよ？ラオは魔王なんだから無責任なことはしちゃダメだわ。」

もう一度額を叩いて、それから優しく撫でて諭せばしっかりと頷きが返って来て、絶対に無断で出かけないと言った。

手を握られ小指同士を絡めると「約束、」なんて笑う。

やっぱりこの魔王にあたしは勝てないらしい。

懐かしい指切りげんまんを歌いながら、あたしたちは城への帰り道をゆっくと辿っていった。

俺の全てを捧げる代わりに、美緒の全てが欲しい。

……本当に全部くれるなら、あげても良いわ。

.....愛してる、リア.....俺だけの花嫁.....。

何事も二人いっしょに。

城に着くと、案の定入り口に佇む彼の側近がいた。

顔に張り付けられた笑みとは裏腹に纏う雰囲気はオドロオドロしい。

馬車から降りて来たあたしたちを見て少しだけ目を見開き、けれどすぐにまた笑顔を浮べて口を開く。

117

「王、どちらへお出掛けに？」

「…湖。」

側近の怒りのオーラにたじろぎながらも答えるラオ。

休憩なんてさせてもらえるはずもなく、執務室に連行されたかと思えば執務机に座らせられて懇々と諭し出す側近は余程頭にキていた

のだろう。

ちよつとでも身じろぐだけで「聞いていますか？」と叱責されている姿はあまりにも可哀想過ぎた。

肩を落として頂垂れるラオを後ろから抱き締めてやれば甘えるように擦り寄ってくる。

「ごめんなさい。今回はあたしも悪かったのよ。」

「リールア様も、ですか…？」

不思議そうに目を瞬かせる側近に強く頷いた。

あたしの曖昧な態度は魔王を苦しませ、普段ならばしない行動を取らせてしまった。

追い詰めてしまっていた原因があたしであるならばラオが怒られるのは間違っていると思う。

「まあ色々あってラオを追い詰めちゃったみたいなのよ。多分、今回はそれが原因だと思う。…もう起きないし、ラオもしないって約束してるわ。」

「……仕方ないですね。」

「ありがとう。」

ふっと息を吐き出した側近に苦笑と感謝の意を示した。

許してもらえたことにホッとしたらしく、ラオもやつと肩から力を抜いて側近を見上げている。

やらなかった分だと書類を執務机に置くと「これが終われば今日の執務はもうありません。」と穏やかな笑みを浮べて側近は出て行った。

さっそく羽ペンを持って書類と向き合う様子を後ろからぼんやりと眺めていれば、「出来る限り、早く済ませる。」なんて真面目な顔で言って文字を目で追っていく。

黒髪を優しく撫でつつ肩から腕を回して抱き締めた。

「…夜、星を見よう。今夜はきつと、よく見える。」

サインする手は止まらないが、そう言った声は優しげで。「楽しみだね、」と返すと大きな体が音もなく揺れて笑う。

何枚も、何枚も、書類が片付けられていった。

ラオ自身も楽しみにしているらしく黙々と執務をこなし、二時間ほどかけて漸く終わらせることが出来た。その頃には日も落ちて外はだいぶ暗くなっていたがラオは疲れた様子も見せずに立ち上がる。

手を引かれて少し早めの夕食に向かえば廊下で擦れ違つ人々から祝福の言葉を投げかけられた。

夕食も何時もより豪華で、なんでこんなにと首を傾げていたあたしに侍女が笑顔で話しかけてきた。

「お祝いですよ。リールア様と陛下の。」

婚約者ではあるけれど恋人になつただけでこれだけ祝われては、結婚したときはどうなってしまうのだろうか？

ラオを見上げてでも目元を和ませているだけで浮かれる使用人たちを注意する様子はない。

食べ切れないほどの夕食を終えて私室に戻る。

「…ちよつと食べ過ぎたかも。」

「凄かったな。」

軽くお腹に手を当てていると笑いを含んだ声で茶化される。

そう思うなら注意しなさいよとボヤクも、使用人たちの思いを無下にするのかと聞かれてしまえば返す言葉もない。

…あたしが太つたらどうするのかしら？

ふうと溜め息を零せばやっぱり楽しげに笑って抱き締められる。

マントの中に包まれ、促されるままにテラスに出た。少し肌寒い空気が頬を撫でていったけれどキュツと抱き込まれてしまえば温かな体温で寒さなど消えてしまう。

元いた世界と違って空気に汚れのないこの世界の夜空はどこまでも澄んでいた。

見上げた空には見たこともないほど輝く星たちが集まり、散らばり、時には流れる川のように夜空を横断している。

「…綺麗。」

赤と青の月が優しく照らす世界は昼間とは打って変わって静寂の海

に沈み、時折遠くから響くフクロウの鳴き声が時の経過を報せた。

届いてしまいそうなほど間近に迫る星に手を伸ばす。

するとラオはあたしの手に自身の手を重ねて同様に空へと手を伸ばし、開いていた手の平を包み込んだ。

「…欲しいか。」

望むなら取って来るぞと冗談なのか本気なのかよく分からないことを平然と言うのだからどうしようもない。

「止めておく。」

「…良いのか？」

「手に入らないからこそ綺麗なのよ。」

見上げた先にある星空はどこまでも広がっていた。

そんなものなのかと魔王は小首を傾げながらも、やや不満そうに眉を寄せる。

「折角、何か与えられると思ったのに。」

「くら…あたしを物で釣る気だったの？」

視線を逸らすラオがあんまりにも素直ですぐに噴出してしまった。

今まで彼の傍にいた女性や貴族たちはそうだったのかもしれない。でも、あたしは高価な物も地位も興味ないし、欲しいとも思わないわ。

もごもごと言いつてをる魔王の手を握り締める。

この先、何年、何十年と共に過ごすのだからそんな気を使わなくていい。

「今、欲しいものはないわ。」

「…欲が無いな。」

「自分の手で持てるだけあれば十分よ。」

あたしはラオと違って小さいから、沢山は持てないもの。

魔王は小さく笑うと頬にキスをしてきた。

「…俺も、胆に命じておこつ。」

今あるものを大切にして。

大切にしたい物は腕の中に抱えて、

あなたと一緒に過ごして生きたいから。

勇者様は勘違い野郎

まだ空も白み始めたばかりの朝も早い時刻。

突然聞こえて来た轟音にあたしだけでなくラオも飛び起きた。

「な、なに?!」

やや遠くから聞こえて来たそれは階下からで、少しずつだが確実に近付いている。

訳が分からずベッドの上に座り込んでいると何時の間に着替えたのか、普段と変わらぬ真っ黒な姿をしたラオがあたしの頭に触れた。

「行つて来る。」

「ええ、気をつけて。怪我しないようにね?」

「…分かってる。」

額に触れるだけのキスを落とすとマントを翻して部屋を出て行った。

それから聞こえて来る爆発音やら人の騒ぎ声に不安が過ぎよってしまっ
まう。

魔王と呼ばれるほどに強いと分かってはいても、こつも連続的に争
う音がしては気が気ではない。

眠ることもできず、起き上がってテラスへと続く窓を開ければ一層
音が鮮明に聞こえ、テラスから下を覗き込めば丁度城の壁が壊れる
ところだった。

…見なきゃ良かった。

軽い頭痛に襲われて額に手を当てていると部屋の扉が開く音がする。

「ラオ?」

もう戻って来たのかと部屋へ視線を戻したが返事はない。

それに足元からは未だ断続的に爆発音などが響いていて、争いが終わったようには思えなかった。

カツカツと近付いて来る足音に魔王ではないと確信する。彼は足音を立てずに歩くのでこんな風に分かるわけがない。

重たいカーテンを引き上げて現れたのは端整な顔立ちの少年だった。歳はあたしと同じか少し上くらい。綺麗な金髪に青の瞳がよく映える。

それなりに鍛えられた体はスラリとしていて動きやすそうな独特な服を着て、片手に剣を携えたまま同様にあたしを驚いた表情で見つめてきた。

「誰？」

そう聞けばハッと我に返った様子で少年はテラスへ現れた。

「僕は魔王を倒すためにこの城に来ました。」

「勇者…ってこと？」

「はい、そうなります!」

強く頷く勇者を再度見直した。確かに言われてみれば勇者っぽい姿をしている。

でも魔王だからって何も倒さなくたっていいんじゃない?

ラオは別に何か人間に対して悪事を働いている様子もないし、それらしい話を聞いたこともない。

「驚きました。まさか貴女のような姫が囚われていたなんて…」

「…は?」

‘姫’という単語に目を瞬かせてしまう。

ちよっと待って、何をどうしたらあたしがお姫様になっちゃおう?

反論しようと思ったけれど既に遅く、勇者は拳を握り締めてあたしを見つめてきた。

「このような所に幽閉されてさぞ恐ろしかったでしょう!」

「え、別に。」

「いえ、何もおっしゃらないで下さい！分かっていきます、あの非道な魔王に脅されているのでしょうか？」

「脅されてないわよ。話聞いてる？」

「どうやら勇者の中でのあたしは、魔王に攫われ幽閉されている姫君、という設定らしい。」

「こんな平凡女をどう見たらお姫様と勘違いするんだか。」

「何を言っても話が噛み合わない人物に余計頭が痛くなった。」

「…勇者がここにいること、ラオは気付いてるのかしら？」

「自分の国について熱く語る勇者の話聞き流しながら階下へ耳を傾ければ未だ音は続いていて、止む気配はない。」

「足止めでもされてたりして…。早く来てくれないかと溜め息が漏れそうになるのと同時に勇者に突然腕を取られた。」

「今度は何だと顔を上げると勇者が輝く瞳で言う。」

「さあ、魔王城を出しましょう！僕の国にいらして下さい！」

冗談じゃない！

そもそも幽閉なんてされない。攫われたのではと聞かれたら、最初は攫われたけれど今では自分で選んでここにいるのだから、もうあれは時効だ。

「イヤよ！」

「魔王は僕たちが必ず倒しますのでご心配は無用です！」

「なお悪いじゃない！勘違いしないで、あたしは魔王の婚約者なのよ！」

「え、」

グイグイと引っ張っていた力が弱まる。

見れば勇者が目を見開いて固まっていた。

「こ、婚約者…？」

「そうよ？それに恋人同士でもあるの。どこかのお姫様でもないし、幽閉されてもいないわ。」

「でも、貴女は人間でしょう…？」

魔王の恋人が人間じゃいけない、なんて法律ないでしょ？

文句は魔王に言いなさいよ。そもそも母親のお腹の中にいたあたしと婚約したのはラオなんだから。

「だから？」

「人と魔族が婚姻するなんて無理ですよ。」

「誰が決めたの？そもそも何でダメなのかしら。異種族だから？」

「っ、魔族となんて絶対後悔します！」

…あー、もう。うるさいわね。

これじゃあどんなに話し合っても平行線じゃない。

いい加減苛立ったあたしは最終手段に出た。

「ラオ！勇者はここよー！！」

「！？」

あたしの行動に驚いた様子の勇者だったけれど、すぐに視界は黒で埋め尽くされた。

勇者様は魔王の悩み所

ふわりと鼻をかすめた匂いは少し甘みを含んだエキゾチックな香りの花から作られた魔王お気に入りのお水のもの。

キュッと抱き込まれて朝の冴えた空気で冷えてしまった体に温もりが心地良い。

マント越しに勇者の声が聞こえたけれどラオはあたしを見つめていた。

「無事か？」

「とりあえずはね。危うく城から連れ出されるところだったけど。」

「…何？」

あたしの言葉に眉を寄せ、それからあたしの腕を見たラオは殊更剣呑な光を瞳に宿す。

視線を辿れば勇者に掴まれた部分が赤くなってしまっていた。

どんだけ強く掴んだのよ、あいつ。

呆れるあたしとは裏腹に怒りを湛えたラオが勇者を睨み付ける。

「貴様…っ、よくもリアを…」

「か弱い姫を無理矢理攫って幽閉させている魔王のお前に言えた義理か！」

「…結局勘違いしたままなのね。」

姫？訳が分からないと言いたげな顔をしたラオに、勘違いしてるのよと言えば何やら納得した表情で頷かれた。

そんなあたしたちを余所に勇者は無駄に正義感を燃やしていく。

「人間に害を成す魔族を野放しにしておく訳にはいかない！お前を倒せば魔族も大人しくなるだろう！！」

勘違いの激しい勇者に興が削がれたのか怒りを引っ込めたラオは、

面倒臭いと言わんばかりの声音で「俺は何もしていない。」と言う。
インキュバスのように人間を襲う魔族はいるが基本的にこの魔王は各魔族に対して口を挟むことも、何かを命令することも皆無に等しいので人間に危害を加えることなどない。

害を与えるのもほんの一握りの魔族だけだろう。

朝も早い時間帯から叩き起こされ良くなかったラオの機嫌が急降下していくのが分かる。

あたしも起こされたあげく勇者の阿呆な勘違いに付き合わされて結構腹が立っているのだ。

「ラオ。」

「何だ？」

「あれ、捨てちゃって。」

あれ、と勇者を指差せばラオは深く頷いて勇者へ手の平を向けた。

勇者がパツと剣を向けて戦う体勢をしたけれど、ラオがスツと手を横へ向けた瞬間その姿は消えてしまう。

同時に足元から聞こえていた騒音も止んだ。

「勇者も、その仲間も煩くて敵わないな。」

「どこにやったの?」

「国元に帰してやった。」

それは良い。当分来る事もないだろう。

城の修繕にどれだけ掛かると思っているんだと珍しく文句を言うラオを見上げれば、和やかな瞳と視線がかち合った。

けれどすぐに「寝直そう。」とベッドで誘われ、優しく毛布をかけられてしまう。

階下からはまだ忙しそうに人々が動き回る音がした。それに良いのかと聞くと今は眠いから起きたらやると瞼を閉じたまま返される。

相当眠かったのかすぐに規則正しい寝息が聞こえてきて、笑ってしまった。

…皺になっても知らないわよ。

服も着込んだままスヤスヤと眠るラオに寄り添ってあたしも瞼を閉じた。

日がたいぶ昇ってからあたしは起床した。

起きた時には既に隣に魔王の姿はなく、着替えと食事を済ませて階下へ下りたあたしの目の前に広がったのはまさに惨状だった。

城の壁に開いたいくつもの穴、全壊してしまっている部屋の数々、壊れた調度品、焼け焦げた絨毯など。それはもう様々なものが使い物にならなくなってしまっているではないか。

せつせと片付けをする使用人たちの中にラオと側近の姿があった。

二人は壊れた場所を何やら調べているようで、側近が何かを言うことや疲れた表情でラオが手を額に当てる。

早朝に来られた挙げ句、これだけ盛大に暴れられれば溜め息だって出るだろう。

あたしに気付いた使用人たちがラオのいるところまで歩きやすいように散らばっていた諸々の残骸を退かしてくれた。

それに礼を言いながら歩み寄れば気付いたラオが振り返って抱き付いてくる。

「おはよう。すごい惨状ね、これ。」

「…ああ、良い迷惑だ。」

側近が苦笑して教えてくれた。

壊された調度品だけでも数千万近い被害があり、怪我をした使用人や兵士、燃やされた絵や絨毯などを合わせると億は軽く超えるのだとか。

城自体はラオの魔力ですぐに修復出来ても物までは無理らしい。

…元の世界で裁判やったら確実に勇者から弁償金を搾り取れるわね。残念なことにこの世界に裁判という制度はないので、弁償金を請求することも出来ないようだ。

「仕返しに勇者とその仲間の家とか叩き潰すってどう?」

それは良い考えだと頷くラオに「冗談にならないので止めて下さい。」と側近は口元を引きつらせた。

魔王が本気でやれば普通の家なんて原型どころか灰すら残らなくなりそうなので、確かに冗談にしてはリアル過ぎてダメかもしれない。ある程度散らばっていた残骸が片付けられ、危ないからと側近と共に後ろへ下がる。

壊れた部屋にラオが手を翳せばぶわりと強い風が吹き、ガラガラと音を立てながら崩れた壁に残骸が戻っていく。まるでビデオを逆再生させたような光景に見入ってしまった。

全てが戻るとサツと色が代わり、ひび割れが消えていった。

それはほんの少しの間が出来事で元通りに戻った部屋の壁を確かめるように触ってからラオは「問題ない。」と言って振り返る。側近はお疲れ様でしたと恭しく頭を下げた。

「…ビックリしたわ。」

素直にそう告げると魔王は口角を上げて笑う。

「城に限ってしか出来ないがな。」

疲れたと呟いて傍にあった赤い革張りのソファーに腰掛けた。

かなりの広範囲を修復したのだから結構力を使ったのだろう。

本当に疲れた様子で椅子に体を預けるラオの頭を褒めるように撫で

てやね、気持ち良さをそこに目が細められ、気付けばラオは眠ってしまっていた。

魔王様は乙女男子？

「……何故ですか?!」

穏やかな午後の昼下がり、心底驚愕した側近の声が城中に響き渡った。

近くを通りかかった使用人たちが何人か目をパチクリさせてコチラを見たけれど、あたしとラオの姿を確認するとまたかと言う風に微笑んで自身の持ち場へと戻っていく。

そんな使用人たちを見送ってから正面へ顔を戻せば、まだシヨックから立ち直れてない様子の側近と、優雅に紅茶を楽しむ魔王の姿がある。

「漸く御二人の想いが通じたのですから、婚姻の儀を執り行っても何の支障も無いではありませんか！それを何故先延ばしにするので

す?!」

テーブルを叩く勢いでラオに詰め寄る側近は訳が分からないと言う表情で必死に説得しようとしていた。

事の発端は数十分ほど前に遡る。

あたしとラオが晴れて恋人同士になってから一週間が経ち、側近も使用人たちも今すぐにだって結婚出来ますな状態でスタンバって魔王の言葉を待っていた。

だけどラオの口から出てきた言葉は「婚姻はまだしない。」だったものだから婚姻の儀に最も力を注いでいた側近にとっては思いもしないものだったようだ。

納得いかない側近と、一度言ったら梃子でも動かない魔王という組み合わせの二人は、まるで母子がする親子喧嘩な雰囲気を漂わせている。

例えるなら頑なに勉強を拒む子どもと、どうして勉強をしないのと怒るお母さんな図。

想像したら笑いが込み上げて来て小さく噴出してしまった。

それを目敏く見た側近の矛先があたしにも向く。

「リールア様も何か言っただけで差し上げて下さい！」

憤慨する側近に「そうね、ごめんごめん。」と目尻に溜まりかけていた涙を軽く拭いた。

さっきからずっとあたしの腰を抱いて紅茶に舌鼓を打っている魔王を見上げれば、声をかけなくとも紅い瞳が自然と向き、手にしていたカップがテーブルへと戻される。

黙ってあたしの言葉を待っている姿は某駅前の忠犬像を彷彿とさせた。

「ねえ、どうして先延ばしにしたの？」

別にあたし自身も今すぐ結婚したい！って言う程、結婚願望は強くない。

とは言っても結婚したくないのかと聞かれれば答えはノー。

ラオがしたい時にすれば良いと思うし、そもそも婚約してしまっている時点で既に最終地点は決定してしまっているんだから、そこまですぐ早いか遅いかくらいの違いしかないわね。

しかし側近を宥めるにはキチンとした理由が必要なので、とりあえ

ず本人に直接聞いてみる。

「リアとは今すぐにも婚姻したいが、」

その…と言葉を詰まらせ、紅い瞳は躊躇いの色を映して宙を彷徨う。大きな手に自分の手を乗せて「大丈夫、怒らないわ。」と促してやれば、少し目元を赤く染めてポツリと呟いた。

「…もう少し、恋人で居たい。」

照れた様子で乙女な発言を投下する魔王にクラリと眩暈がしてしま
う。

どうしてこの人はこんなに可愛いことを言うのかしら？なんて溜め息を吐くと、側近のものと同時だった。若干側近の方が深く重い溜め息ではあったけれど。

叱られるのを覚悟しているのかしょんぼりとした頭には犬耳がついていても可笑しくなさそうだ。

さてどうしようかと側近を見やれば呆れたような、けれど全部許し

てしまったような、不思議な笑みを浮かべている。

「仕方ないですね。皆にそう伝えておきましょう。」

「…すまない。」

眉を八の字に下げてちょっと申し訳なさそうにしているラオに、側近は小さく首を振った。

「謝らないで下さい。私たちが必要以上に急いってしまっただけです。」

御二人の問題ですから、我々が口を挟むのは過ぎた事でした。

柔らかな微笑を浮かべた側近はでも、と言葉を続ける。

「何時でも行える様取り計らっておりますので、何なりとお申し付け下さい。」

「…ああ。」

ちよつとだけ楽しげな雰囲気の側近に魔王もフツと口角を上げて、「その時は頼んだ。」と言った。

そうして去って行く側近の背を見送ればキュツと抱き付いてくる。

甘えたな黒い頭を撫でると嬉しそうに紅い瞳が細められ、目元にほんのり朱が走り、お返しとばかりに抱き締める力が強くなった。

「我が儘っ子ね。」額同士を合わせて意地悪なことを言っても、この魔王は重ねた手の指を絡め合わせてくる。

「俺の『妻』という響きも良い…だが、今の方がリアとの繋がりが一つ多い。」

「繋がり？」

「『婚約者』と『恋人』。」

結婚して『妻』になる方が繋がりは深くなるだろうに、大切な秘密の話をするように声を潜めて真面目な顔で言うものだから笑ってしまった。

「あはは、そんなことまで気にしてたのね？」

「…俺には大事な事だ。」

笑い過ぎたせいかわいそうにだけ憮然とて言うラオに謝りつつ額に軽く唇を寄せた。

それだけで機嫌を直してしまつんだから単純と言つのか、素直と言つのか。

空いている方の手でカップを傾けていれば目の前にクッキーが差し出され、大きな手に持たれたクッキーを齧る。かなり甘かったけれど、甘党な魔王には丁度良いのだろう。

一枚食べ終わるとまた別のクッキーを食べさせようとしてくるラオ。それを食べるあたし。…ちょっと餌付けされてる気分になるわ。

なのに悪い気分にならないのは、やっぱりラオだからかもしれない。あれが食べたいこれが食べたいと言えば取り、紅茶がなくなるとすぐに継ぎ足してくれる甲斐甲斐しい魔王なんてそういなさそうだと思うながら、のんびりと午後のお茶をあたしは楽しむことにした。

好奇心も程ほどに(1)

まだ肌寒い澄んだ空気が漂う城の中は、既に動き回る使用人たちの足音がそこかしこから聞こえて来る。

いつもより随分早く起きてしまいやる事もなかったあたしは久しぶりに書庫へ向かった。

あの事件以来だった。本当はもっと早くに行きたかったのだけれど、なかなかラオが離してくれなかったので遅くなってしまったのだ。

今頃執務室で書類と睨めっこしているであろう魔王を想像すると口元に笑みが浮かぶ。

なんだかんだ言いつつ、彼のことを怒ったり悪く言えない辺りは惚れた弱みなのかもしれない。それすら仕方ないかなんて思ってしまうんだから、あたしもどうしようもないわね。

重厚な扉をそつと押すと蝶番が微かな悲鳴を上げながら扉は開く。

脇にあったカウンターで本の整理をしていた司書のおじいさんが顔

を上げ、あたしを見ると好々爺のような笑みでお早う御座いますと声をかけてきた。

「お早うございます。この間は大丈夫でしたか？」

ラオは気絶しているだけだと言っていたけれど、とても気になっていたのだ。

おじいさんは軽く首を振る。

「ええ、いきなりの事で驚きはしましたが、何ともありませんでした。リールア様も無事なご様子で一安心です。」

「すみません。本当はもっと早くに来たかったですけど…、」

「御気になさらずとも宜しいですよ。」

色々ありましたからね、と意味深な言葉に少しだけ頬が熱くなった。勇者が飛び込んで来たり、ラオが我が儘を言ったり…恋人同士になつたり。

この世界に来てからは毎日がてんやわんやな状態で一日がとても短く感じられる。楽しくて充実した日々ほど過ぎるのは早い。

「はい、本当に。」と返せば楽しげにおじいさんも笑った。

あの時書庫に居合わせてしまった人たちとも話したけれど、皆何ともない様子だったことにホッと胸を撫で下ろしてから、あたしは定位置と化した窓際のテーブルに腰掛ける。

どうやら片付けないでくれていたらしく、この間持って来ておいた本が綺麗な状態のまま置かれていた。

それに心の中で感謝の言葉を投げ、どんな本を持って来ていたのか本の表紙を見てみると、結構ジャンルもバラバラで偶に変な本も混じっている。

勿論面白そうなのだけどころなものよく見つけたなと思ってその時の自分に笑ってしまう。

パラパラと何気なく本のページを捲っていると、ふと目を引く一節が書かれていた。

おまえを探し出す。おれの名をよぶのは、おまえだけ。

小さな男の子とあたしくらいの少女が互いに額を寄せ合う姿が描かれている。文章はその二人を包み込むように円状に記されていた。

他の文とは違い、子どもが書いたような、お世辞にも上手いとは言

い難い字。

所々滲んだそれを確かめるように指でなぞる。

と、文字が微かに震え、ペリペリと洋紙から剥がれ出てくるではないか。ありえない光景に声も出せずに目を見開いていたあたしの周りをバラバラに砕けた文字が縦横無尽に飛び交う。

これは異常事態だとラオの名を呼ぼうとした瞬間、目も開けていられないくらい眩い光に襲われてあたしは固く瞼を閉じた。

それでも射し込んできた光が漸く収まった頃に目を開けて、あたしは茫然としてしまった。

「ここ、書庫よね…？」

先程までの明るく心地良い書庫とは似ても似つかない部屋が広がっていた。

薄暗く、換気を怠っているのか淀んだ空気と掃除されていないのがすぐに分かる埃っぽさに口元を手で隠す。古い本独特のカビ臭さも混じっている。

振り返るといつも使っていたテーブルセットもなく、固く閉ざされた窓と雨戸のようなものが外と書庫を完全に隔ててしまっているようだ。

窓の鍵を開けて、雨戸を外すといつもの空が広がっている。

ふわりと入り込んで来た風に埃が舞った。そこであたしが立っていた場所にあの本が落ちていることに気付く。

…何なのこの本。

パラパラとページを確認してみたが何故か先程見かけた文章も絵も無くなってしまっている。

一体何が起きているのか訳が分からず、途方に暮れてしまう。

尋常ではない埃の量からして少なく見積もっても数年は使われていないように思えた。あんな綺麗にしてあった部屋が一瞬で埃まみれになるなんてどう考えてもオカシイ。

どうしようと考えていた視界の端に小さな足が飛び込んで来た。大人にしては随分と小さい。

足を辿るように顔を上げた先には男の子が一人、佇んでいた。

「あ、」

本の絵に描かれていた子どもとソックリの男の子はあたしを見て眉を顰める。

その表情に見覚えがある気がして首を傾げてしまった。男の子は床に座ったままのあたしを見下ろして疑心に満ちた眼差しを向けて来る。

「だれだ。」

よく通るアルトの声でそう聞かれ、おやと思う。ラオの婚約者であるあたしを知らない者なんて城にいるはずがない。

そもそもこんな子ども今まで一度も見かけたことがなかった。

マジマジと見ればやや嫌そうに目を眇めたものの、しっかりと睨み返してくる。

背中まである黒髪に紅い瞳、ちょっと悪そうな顔だけとても整っていて美しい。けれど同時に身近にいる人物と子どもの顔がダブって見えた。

好奇心も程ほどに(2)

「もしかして、ラオ…?」

思わずそう問い返してみれば心底驚いた様子で紅い目が見開かれる。

「なぜ、おれのあいしょうを知っている?」

誰にも教えたことはないのに。そう半ば茫然と呟かれた言葉に今度はあたしが目を丸くした。

え、愛称って仲の良い相手の呼び名みたいなものじゃない。そもそも愛称って本人が教えるもんだったかしら。

今度は逆にラオ似の男の子にマジマジと見つめられて少々居心地が

悪い。

「ほんとうに、おまえは何ものだ？」

「あたし？あたしは美緒って言うわ。あなたは？」

立ち上がってドレスに付いた埃を払う。ラオ似の男の子は腰よりも少し上くらいの大きさで、あたしを見上げてきた。

「おれは魔王の息子、ラディオスだ。」

訂正。ラオ似ではなく、どうやら本物らしい。

確かにラオそっくりだし面影も色濃く残っている。

けれど子どものラオがいると言うことは、あたしは過去に来てしまっているということでもあるのだから一概には喜べない状況だ。

ちびラオ（そう呼ぶことにしよう）は好奇心と警戒を滲ませた紅い瞳で問いかけてくる。

「おまえは一体どこからきた？」

今も昔も変わらないのだろう。真つ直ぐなこの瞳に、あたしは弱い。

信用してもらえるかどうかわからなかったけれど、ちびラオに全てのことを話すことにした。

ラオがまだ母のお腹の中にいたあたしと契約を交わしたこと。

十八の誕生日に突然現れ、連れ去られたこと。

あたしとラオが婚約者であること。

彼が無事魔王に就任していること。

ついこの間、漸く恋人同士になったこと。

本に書かれていた文に触れたらここに来てしまっていたこと。

それら全てを順を追って説明していくうちに、ちびラオの表情は見る見るうちに不機嫌になっていった。

突然現れた不審な女に、未来の婚約者兼恋人ですなどと、言われて簡単に納得出来る訳がないことはわかっていたので、あまり嫌な気持ちはない。

少し寂しいとは思うものの仕方がないことだ。

「…しんじられん。」

全てを話し終えると同時に感嘆とも取れる溜め息を零しながら、ちびラオはそう呟いた。

けれどすぐに「だがうそとも思えないが、」と付け足してくる。

「おれのあいしょうを知っていた。すじも通っている、おかしなぶぶんもない。」

「じゃあ信じてもらえるかしら？」

「…しんようするには少ししょうそが足りない。」

保留にしておく。と言ったわりには強い瞳で見つめてくる紅に笑ってしまった。

どうやら子どもの頃のラオはぶつきらぼうだったらしい。

とりあえず何時までも埃の中にいるのは嫌だとちびラオに手を引かれて廊下へ出ると、ちびラオと同じ歳くらいの男の子が扉脇に立つ

ていた。

ちびラオとあたしの繋がれた手を酷くビツクリした顔で見つめる男の子にも見覚えがある。

現魔王のちよつと苦労的な側近だ。彼この頃には既にラオの傍に仕えていたのか。

「その人間はどなたですか？」

敬語なのも変わらない。困惑した様子のちび側近にちびラオは「みらいから来た、おれのはなよめだそうだ。」と色々端折って言うものだから、ちび側近は更に困惑の色を濃くしてしまう。

「ちちうえに話してくる。」

「わたしも一緒にしてよろしいでしょうか？」

「すきにしろ。」

主従関係が成立しているちびラオとちび側近の様子を見ながら、小さな手に引かれて長い廊下を歩く。

擦れ違う使用人たちもちび側近同様に驚いた顔であたしたちを見た。その中には時々、見覚えがあるような顔がチラホラといた。

広い城の中を歩いて、あたしたちが到着したのは美しい彫刻が施された荘厳な扉の前。重厚なその扉の左右には警備の男が二人いる。

「ちちつえに目通りにきた。」

ちびラオがそれだけ言うと男たちは重い扉をゆっくりと両側に開け放つ。

入り口から続くピロートの絨毯を踏み締めながら入ると背後で鈍い音を立てて扉が閉まった。

歩き出すちびラオに腕を引かれたまま歩くけれど、進むにつれてこの部屋が何なのか検討がつく。

王へ謁見するための場所だ。

数段上上がった階段の最上で豪華な装飾の椅子に深く腰掛けている初老の男がいる。

見覚えのある漆黒の服に身を包んでいる彼はおそらく現在の魔王であり、ちびラオの父。黒い髪に紅い瞳が遠くからでもしっかりと確認できた。

段の数歩前でちびラオが立ち止まる。

「お前が謁見の間に来るとは、珍しいな。」

落ち付いたテノールの声が頭上から響く。

ちび側近は片膝を床に付けて顔を俯かせている。

父親の言葉にちびラオは相変らずの無表情で「ちちつえに話が」と真っ直ぐに顔を上げて言葉を紡いでいた。

「この人間が、とつぜんしょこに現れました。」

「ほう?」

愉しげな響きを持った声と共に視線があたしへと向けられる。

「話によると、みらいのおれの恋人でありこんやくしゃらしい。」

「それが事実なら喜ばしい事だ。が、お前は其れが事実だと思っ
か？」

「…おれのあいしyouを知っていました。」

「何？」

それは真かとラオの父親に問われて、はいとあたしは頷く。

ラオという呼び名は大人の彼に教えてもらったことを告げると、父
親は顎に手を当てて考える仕草をした。

その姿を見て、ラオの考える時のクセは父親譲りだったのだと知る。

「あの、愛称がどうかしたんですか？」

気になっていたことを聞くと目を瞬かれた。

しかしすぐに何かに納得したように父親は何度か頷く。

「そうか、人間が使う愛称とは意味が異なるのだったな。愛称とは
婚姻した者、もしくは婚約した者同士でしか呼び合えぬ名なのだ。」

大切な名である故、婚姻するか婚約するまでは両親と本人しか知り得ぬ名でもある。」

つまり、あたしがラオの婚約者である証拠にも成り得る訳だ。

ちびラオの父親はあたしを愉快そうに見つめ、ちびラオへ視線を向ける。

「良かったではないか。お前が将来嫁を娶る事が出来るなら魔界も安泰だ。」

「……ちちうえ、」

からかう父親を冷めた声音で呼ぶちびラオ。

父親は軽く謝罪して、婚約者は婚約者の傍に在るべきだとあたしが戻るまではちびラオと一緒にいることになった。

本人はちょっと不満そうだったけれど、あたしとしてはホッとしている。

やっぱり知っている人物が傍に在る方が安心なのだ。

謁見の間を出ると、ちび側近と別れ、ちびラオはまたあたしの手を

引いて歩き出した。

好奇心も程ほどに(3)

あたしが導かれた場所はラオの私室。つまりちびラオの部屋だった。

大人のラオの部屋と比べるとかなり物が少ないその部屋は生活感がほとんどない。

大きなベッドに座れば、隣にチヨコンと座ってくる。可愛い。

「どれくらいお世話になるか分からないけど、よろしくね。」

繋いだ手に少し力を込めるとちびラオが見上げて来た。

「ほんとうに、おれのこんやくしゃなのか…?」

「本当よ。でも最初は一方的だったけどね。」

「ははのはらの中で、だったか。」

「そう。何時の間にしたのかしら。そこまでは聞いてなかったわ。」

今となつてはそうしてくれたからこそ、出会い、恋人同士になれたのだから結果オーライだけれど。

「すき、なのか…?」

「うん?」

ポツリと聞こえた言葉に首を傾げる。

ちびラオは紅い瞳に様々な感情を緋い交ぜにしてもう一度言った。

「おまえは、みらいのおれがすきなのか?」

微かな不安を滲ませた表情は大人のラオがよくする表情と瓜二つだった。

子どもではあるけれど、あたしの知っているラオと何も変わらない

気がする。

そつと額を合わせてやれば小さな体が少しだけ強張ったけれど、逃げることはなかった。

「好きよ。」

あたしの言葉に肩がピクリと震える。

「大人のラオはね、あたしの前では我が儘も言うし甘えただし、寂しがりだし、すごく嫉妬深くて、すごく子どもっぽいわ。」

「…だめなやつ。」

未来の自分を思いつ切り卑下するちびラオに苦笑してしまう。

魔を統べる王としては確かにそれではダメかもしれない。

でも、そんな魔王がいたって良いとあたしは思う。

「大丈夫、魔王としての威厳はともあるわ。ただあたしの前だとダメみたい。」

「そんな男が好きなのか？」

「ええ。我が儘で、甘えたで、寂しがりで、嫉妬深くて、子どもみたいな人だけど……あたしを心から愛してくれて、大切にしてくれる大人のあなたを好きになっちゃったの。」

訳が分からないと眉を顰めるちびラオ。

確かにまだ子どもの彼には分からないかもしれない。

決して完璧でなければいけない必要なんてないの。

「甘えたって良いの。我が儘言っても良いのよ。あたしはそんな風に素の自分を曝してくれるラオだから好きになっただなもの。」

「……そうか。」

見るとちびラオが赤い顔で視線を彷徨わせていた。

大人のラオも普段は恥かしい台詞を普通に言うクセに、あたしがこんな風に言っていると顔を赤くして視線を彷徨わせたり、オロオロとした

りするっけ。

黒髪を優しく撫でればちびラオは気持ち良さそうに目を閉じる。

「…何となく、みらいのおれがおまえを好きになったりゆうがわかる気がする。」

「そう？それとお前じゃなくて美緒よ？」

「美緒…。」

「はい、よく出来ました。」

よしよしとしつかり頭を撫でる。「あたしの名前を知ってるのはラオだけなのよ。だから忘れないでね。」そう言つと驚いた様子で「そうなのか？」と視線を上げた。

「大人のラオは嫉妬深くてね、他の人には名前を教えるなつて。」

思い出し笑いをしてしまう。

ちびラオは「おれだけが知ってるのか。」と口の中で呟いた。

「忘れないでね。」

優しくちびラオの額にキスをする。

するとあたしの横に置いてあつた本が強い光を発して、バラバラと勢いよくページが捲れていく。

…もしかして、帰れるの？

本に手を伸ばそうとしたけれど、小さな手が力強く掴んで止められた。

驚いて見やれば無表情ながらも縋るような紅い瞳を視線が絡み合う。

「かえるのか？」

帰るな。そう言われている気がした。

「…探して。」

「？」

ちびラオと真っ直ぐに視線を合わせる。

大人のラオと何も変わらない美しい紅い瞳にはあたしが映って見えた。

「また会えるように。あたしが好きなラオに会えるように…探し出して。」

「…見つからなかったら…？」

不安そうに聞いて来るちびラオに笑ってしまう。

そんなこと、ありえないのに。

「大丈夫、絶対あなたはあたしを見つけ出せるわ。あたしはラオの婚約者だもの。」

出来る限りの笑顔を浮べてあたしは本を掴んだ。

眩い光が溢れて、世界が真っ白になる。それでも不安はない。

すぐに力強い温もりに引き寄せられて、抵抗することなく身を預けた。

やがて光が止む。

閉じていた目を開ければ大人のラオが目の前に座っていて、紅い瞳があたしを見つめている。

「……ラオ。」

手を伸ばして頬に触れると嬉しそうに紅い瞳を細めて、あたしの手を自分のそれで包み込んだ。

今なら全て分かる。

ラオが何故母のお腹の中のアたしと契約したのか。

どうしてあたしだったのか。

「…探したぞ。」

「うん。」

触れた唇はとても熱く、見つめる瞳は喜色でいっぱいだった。

あたしの言葉を信じてくれていたのね。

ずっとずっと、探して、見つけ出してくれた。

「見つけてくれて、ありがとう。…ラオ。」

愛してるわ。どちらからともなく重ねたキスに、愛の言葉は溶けて消えた。

微かな恋の行方 (side:L)

執務室で書類にサインをしていたラオは、ふと城の中から愛する恋人の気配が消えたことに顔を上げた。

常ならば大慌てで探し出すところなのだが今回は違う。

消える直前に感じた自身の力に口角を僅かに上げて笑った。

「行かれたようですね。」

傍で佇んでいた側近も楽しそうな声でそう呟く。

何百年も前の事だと言うのに、記憶の蓋を開ければ昨日の事のようにあの日の出来事が鮮やかに思い起こされる。

読書をしようと書庫に入り込んだ俺の目の前に突然現れた美緒。

彼女が口にした話は勿論信じられない内容ではあった。

けれど愛称を知っており、俺のことをよく知っていた彼女に心惹かれたのも事実で、まだ幼かった俺は未来の俺を羨ましく思ったこともあった。

…探して。

その言葉通り彼女が消えてしまった後、俺は魔界だけでなく人間界にまで足を伸ばして搜索した。

残された本に彼女の話通り自分と彼女の絵を描いて、過去に訪れるよう魔力を移した文を書き、書庫へ戻したのも俺。

時には折れそうになりながらも美緒が残した言葉に背を押されながら搜索すこと百数十年余り。

漸く彼女を腹に宿した母親を見つけた時のあの喜びは今でも忘れられない。

母親が眠っている間にまだ生まれてもない彼女と契約を交わし、彼女が十八になるまで魔界で待ち、そうしてやっと迎えに行く事ができた。

何百年も生きて来たと言うのに彼女を待つ十八年間は酷く長く感じられた。

この手に抱き締めた時、何も変わらない彼女を見て全て本当のこと

だったのだと泣きそうになったのを、きつと美緒は知らないだろう。

「たった数時間しかあの時は御会い出来ませんでしたね。」

「ああ。…随分と探し回った。」

傍らで美緒を探し続けるラオを見ていた側近からすれば、喜びも入らな

最後の書類にサインを済ませると執務机から立ち上がる。

深く礼を取る側近を一瞥し、執務室を後にする。

書庫へ続く廊下では数人の使用人たちが微笑を浮かべて礼を取り、俺が見えなくなるまで頭を垂れていた。

書庫の重厚な扉を押し広げると司書がのんびりと顔を上げて俺を見た。

「リールア様なら先程行かれました。」

ああ、懐かしいですねと微笑む司書も、百数十年前に美緒を見かけ

た使用人の一人である。

今ではだいたい老けてしまったこの初老の男にも昔は随分手伝ってくれたものだった。

書庫の奥にある窓へ行けば小さなテーブルセットが置いてある。それは彼女がこの書庫に来た際にここで本を読むように俺が置くよう指示したものだ。

あの日出会ったのもこの場所で、本も目に付くよう近くの棚の丁度彼女の目線の辺りに仕舞っておいた。

確かこの辺りだったなと棚へ視線を向ければ、やはりそこには本一冊分の空きがある。

……次は謁見の間か。

書庫を出て、あの日歩いた道順を辿って行く。

今ではビロードの絨毯が敷かれている廊下も当時は何もなく、冷たい場所だった。

そこを彼女の手を引きながら側近と共に父がいる謁見の間まで歩き、父に目通りをさせた。

謁見の間にはあの頃と変わらず男が二人で入り口を警備している。

俺を見るとすぐに扉が開けられ、ゆっくりと謁見の間に立ち入った。

もう父は王の座を退いてしまっただけで玉座を見上げれば、

あの頃と変わらぬ父の姿が在る様に思え、紅い瞳が自然と細められる。

「…父上にも、迷惑をかけたな。」

何十人も見合いを勧められ、その度に喧嘩をしたりもした。それでも俺が美緒を諦めずにいたせいも、最後の方では共に探してくれた父。

あまり父親らしいことをされた記憶はなかったが、自身が尊敬し、目標としていた偉大な王。

彼に言われたことならば何でもしたけれど美緒のことだけは唯一譲れなかった。

思い出してみるとそれは唯一の親子らしい出来事だっただろう。

「…次は部屋か。」

ふっと詰めていた息を吐き出して顔を上げた先には、もう父の影はなくなっていた。

謁見の間から私室に向かうまでの道は、とても長く感じられる。

早く戻って来い。早く、早く…。

今日、漸く幼い頃に出会った美緒に会えるのだ。

私室の扉を開けるとベッドの上にポツリを本が置かれている。あの本だ。

ベッドに腰掛け、本のページを捲ると、一ページだけ真っ白になっていた。

大人の自分が好きだと言った美緒。

あんな真っ直ぐに好意を向けられたことは初めてだった。

地位や権力などに飢える者たちとは違う、優しさと慈愛を込めた黒い瞳。そんな瞳を向けられる未来の俺が妬ましく、そんな風に見つめられたいと思うようになり。

余計にこの手の中に欲しい気持ちが強まった。

そつと本に触れると光が溢れ出し、それはやがて人の形を模る。白く柔らかな光の粒子中から求めた姿がふわりと現れる。

押し上げられた瞼の奥にある黒い瞳と視線が絡み合った。

「…………ラオ。」

名が呼ばれ、細い手が頬に触れてくる。

やや黄色味を帯びた独特のその手を自身の手で包み込めば、手の平から全身に温もりが広がった気がした。

艶やかな黒い瞳は僅かに潤んでいるようにも見える。喜びが色濃く宿る瞳に映るのは大人の俺。

ずっと探していた美緒が、あの時自分を好きだと言ってくれた彼女が今、目の前にいる。

「…探したぞ。」

永い永い時間の中。名だけを頼りに、探し続けた。

「うん。」

触れられる距離に、いる。

喜びのままにキスを送れば、花が綻ぶような柔らかい微笑で受け止めてくれる美緒。

「見つけてくれて、ありがとう。…ラオ。」

愛してるわ。最愛の人から告げられた言葉が意味を成す前にその唇を塞いでしまい、彼女の愛の言葉を俺はそつと飲み込んだ。

何事にも障害は付き物です(1)

柔らかな日差しが降り注ぐ正午前、あたしは中庭にある庭園を侍女と一緒にのんびりと散策していた。

この間ラオと歩いた時に見て回れなかった場所を一つ一つ見る。

侍女も花に詳しいのかあたしが聞くと大抵教えてくれて、侍女でも分からない花になると傍にいた庭師が自慢げに教えてくれた。

様々な花が咲き乱れる庭園内にはいくつか休憩出来る小さなドーム型の建物がある。

そこに座ってあたしは歩き回って火照った体を風に涼ませていた。

「あの花、いつも咲いてるわね。」

ドームの空いた部分から見える広い花壇一面に咲いている淡いピンク色の花を見ながら、ポツリと呟いたあたしに侍女がどの花かと横から顔を覗かせる。

あれ、と指差せばああと何か納得した表情をして、

「あの花はエルディア・リーと言います。」

「エルディア・リー？」

「はい。王が婚姻される時だけに使われる特別な花です。ですが年中咲いている訳ではなく王が婚姻出来る御歳であり、尚且つ婚約をしなければ決して咲かぬ花なのです。」

「それじゃあ今までの魔王もみんな花嫁と婚約してから結婚したの？」

「勿論です。」

力強く頷いた侍女、不思議な花だなあとエルディア・リーを眺めてみる。

淡いピンクの花弁は桜によく似ていて少しだけ懐かしい気持ちになった。

部屋に飾ったらきつととても綺麗だろう。

「…欲しいなあ。」

何気なく零れた言葉にガチャンと陶器か何かが壊れる音が響く。

驚いて侍女を見ると、あたしより数倍驚いた表情で顔をリンゴみたいに真っ赤にして見つめ返される。「あ、また何かやっちゃったかも。」と内心で頭を掻いた。

とりあえず大丈夫かと聞けば我に返った侍女はすぐに平気ですなんて言いながら割れてしまったティーカップを一瞬で片付ける。

平気と言うわりにはかなり動揺して見えたのだけれど。

ジッと侍女の様子を観察していると新しいカップに紅茶を淹れた彼女が「座つても宜しいでしょうか？」と唐突に聞いてきた。

なかなか彼女とお茶をすることがなかったので、あたしは二つ返事で頷き、どうぞと手で示す。

侍女はあたしの正面に座ってから周囲を見回して真剣な表情で自身の唇の前で人差し指を立てた。

いわゆる「内緒」のポーズだった。

「リールア様、決して王の前でそのような事は口になされませんよ。」

「やっぱり大切な花だから取ったり切ったりしちゃいけないかしら？」

「いいえ、そう言う訳ではございませんが…。」

侍女が苦笑しながらクツキーを勧めてきた。

それをありがたく貰って食べる。

「先程話しました通り、あの花は王の婚姻の際に使われるものでございます。互いの全てを相手へ捧げるといふ意味で指輪と共に交換される花なのです。花を交換することは、身も心も相手の物になるということであり、相手の全てが自分の物になります。」

「うん。」

「あの花が欲しいと口にする事は、言うなれば王の全てが欲しいとおっしゃっているようなものなのですよ。」

「…は？」

え、何それ。冗談かと侍女の顔を見ると、至極真面目な表情であったしを見ている。

つまりあの可愛い花欲しいとさっき言ったあたしの言葉は、ラオの全部が欲しいなあ〜という意味になってしまつらしい。

…は、恥かしい…っ！！

それでさっきカップ落としたのね？！

いきなり魔王様の全部が欲しいなあなんてカミングアウトしたらそりゃビックリするだろう。

危ない危ない。まさかそういう意味だったとは…迂闊にあれ欲しいなんて言わないようにしないと。

頬に熱が集まっているのが分かる。少しでも熱を下げれと手で風を送ってみた。

「でも、ラオなら喜ぶんじゃないかしら？」

恋人気分を味わいたい！と駄々を捏ねたラオの顔がパツと明るくなる様子が想像できる。

けれど侍女は慌てた様子で首を振った。

「リールア様、王も殿方なのですよ？好いた女性に求められて平然としていられると御思いですか？」

「え？いやあ、ラオはそういう事あんまり興味なさそうだし……」

「甘いですわ！」

キツと見据えられて肩が無意識に跳ねてしまった。

どうやら侍女の琴線に触れてしまったらしい。

殿方の何たるかを語り始めた侍女がやや凄んでいるのか迫力があって口を挟む隙すらない。

さて困ったと長くなりそうな話をどうやって止めるか考えていたとき、それは突然現れた。

「ご機嫌いかがでしょうか、リールア様。」

女性独特の艶のある声を通る。

その方向へ顔を向けるとナイスバディな貴族の女性が立っていた。歳はおそらくあたしよりも二つか三つくらい上だと思う。

胸元がガツリ開いた深紅のドレスなんか着ちゃってるその女性は確かにとても美しい。

例えるならばルビーみたいだ。でもハッキリ言って少し毒々しいというか、女の色気を出し過ぎていて逆にキツく見える。

何時の間に立ち上がったのか、侍女は厳しい顔付きであたしを隠すようにテーブルの前に出た。

「今日御訪問されるといふ話は聞いておりませんが、先触れはお出しいただきましたでしょうか？」

先触れというのは「今日そちらへ伺います」と電話で伝えるのと同じこと。相手へ何時頃行くのかを手紙などで前以って知らせることである。

女性はファアの付いた大きな扇子で口元を隠しながら笑った。

「あら、忘れておりましたわ。何せ以前は出さずとも良かったものだから…ねえ？」

ニツコリと、けれどどこか厭味を含んだ笑いのまま彼女は傍にいた自身の侍女に話を振る。

侍女もにこやかに「ええ、慣れない事ですから仕方がありませんわ。」「などと言うのだから、余計にあたしの侍女は腹を立てているようだった。

何事にも障害は付き物です(2)

「以前は以前でしょう？御自分の立場を自覚なされた方がよろしいかと。」

おお、怖っ。普段おっとりしている侍女の口から出る刺々しい言葉に少しだけ驚いた。

身分に厳しいと言うわりに魔族はみんな胆が据わってるといっか、度胸があるわね。

「侍女の癖に私わたくしに説教するつもり？」

「いいえ、滅相もございません。ただ一般論を述べているだけですわ。」

今にも火花が散りそうな二人。…このままじゃ火花どころじゃ済まなくなりそうね。

座っていた椅子から立ち上がって侍女の前へ出る。

ドレスの裾をつまんで、淑女の礼を一つ。

「侍女が失礼を致しました。初めまして、私は訳あって名を名乗ることは出来ませんが、貴女の名をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

彼女は一瞬驚いた顔をしたけれどすぐにドレスの裾をつまんで、美しく、艶やかに淑女の礼を返した。

本来、先に礼を取るのは身分の低い者だ。

魔王の花嫁であるあたしが先に頭を下げなければいけない人物はラオ唯一人。

けれどこういう場合では遜へりくだって先に頭を下げおけば、幾分か相手の気も治まるものだ。

「こちらこそ失礼を致しましたわ。名をオリヴィア＝シエリル＝マクファールンと申します、どうぞ良しなに。」

どうやら彼女は三大貴族の一つ、マクファーレン家のご息女らしい。三大貴族の中でも最も権力のあるのはマクファーレン家だ。

なるほど、道理で先触れを出さないなんて失礼極まりないことも大目に見てもらえる訳だわ。

立ち話では疲れるだろうと椅子を勧め、侍女に新しくお茶を出すよう頼む。

顔には出ていなかったがとても嫌そうな雰囲気を漂わせて、渋々ながらに支度をし出す侍女を見て笑いを堪えるのが大変だった。

…そんなにこの人が嫌いなのかしら？

シェエリル嬢の侍女も手伝っていたけれど鬱陶しそうにしていたし、侍女同士でも仲がよろしくないらしい。

新しく淹れ直された紅茶に口をつける。少し入っている砂糖の甘みは丁度良い。侍女はあたしの好みを覚えていてくれて、その通りに淹れてくれるので文句なしに何時も美味しいのだ。

「ところで、本日はどのような御用件でこちらへ？」

優雅に紅茶の香りを楽しんでいたシェエリル嬢に声をかければ、口紅の引かれた紅い唇が弧を描く。

日本人がよくする愛想笑いは対人関係を円滑にし、相手と友好的にしたいと思う気持ちの表れである。けれど貴族たちが貼り付ける笑いというものには嘲りや厭味が混じっているか、何か意味深なものばかり。

日本人の愛想笑いが外国人にとって不気味に見えるように、彼女のその笑みもあたしからすれば不気味というか、少し気味が悪い。

お世辞にも好きとは言えない笑い方だ。

艶やかな唇が何か言おうと開かれる。が、それと同時に聞き慣れた低い声が彼女の言葉を遮った。

「リア。」

たった一言。なのに過分な甘さと柔らかさを持った響きであたしの耳にそれは馴染む。

顔を向ければ執務を終えたのだろうラオが嬉しそうな雰囲気を漂わせてドームの入り口に佇んでいた。

こちらに来ようと魔王が一步踏み出すと、シエリル嬢がパツと立ち上がる。そうして、あるうことかラオへ勢いよく抱き付いたのだ。

「ラディオス様…！」

ちよつと、何してんのよアンタ。

予想外の出来事だったのだろう。ラオも反応し切れなかったのか避けることすらしない。

侍女は完全に怒り心頭といった体で「何と無礼な…！今すぐ離れなさい！！」と彼女へ怒鳴りつけていた。

シェリル嬢の侍女は自分のことのように自慢げにあたしを見る。魔王に抱き付いたままの本人も勝ち誇ったような挑発的な瞳で見てくる。…喧嘩売ってんの？

苛立ちにヒクリと口元が引きつってしまったのが分かる。

それが見えたのかは知らないけれど、ラオはシェリル嬢の肩を掴むと思いつ切り自分から彼女の体を引き剥がした。ベリツと効果音がしそうなくらいの勢いで、だ。

「何故お前が此処に居る？」

疑問と困惑を緋い交ぜにした言葉にシェリル嬢は長い睫毛を伏せて

悲しそうに俯く。

「申し訳ございません…でも私、どうしてもラディオス様に御会いしたかったんですの。」

そつと上目使いに彼女は魔王を見上げた。どうすれば男が自分に落ちるのか熟知している女の動きだ。

だが流石ラオ、慣れているのか、それとも本当に何とも思っていないのかピクリとも表情に変化は現れない。

もしもこれで戸惑う素振りを見せていたら一発殴っていたかも。

「そついう事を聞いているのでは無い。」

ラオの言葉に自分の策が失敗に終わったのだと気付いたのだろう。

シエリル嬢はそれでも潤んだ瞳で縋るようにラオを見つめた。

「私は貴方様の許婚でしょうか？未来の夫の傍に居たいと思うのは当

然ではありませんか。」

「は、?!」

待て待て待て、何それ。どういふこと？

まさかと恋人へ視線を向けると、本人は小さく溜め息を吐いた。

「それは父が勝手に決めた事だ。俺は一度たりとも了承した覚えなど無い。」

ああ、そういう事ね。ホツと胸を撫で下ろしたのも束の間、シエリル嬢の爆弾発言は止まらない。

「ではあの時、私を受け入れてくださったのは嘘だったのですか…？」

ホロホロと涙を零しながら泣き伏せてしまった彼女の言葉に今度こそあたしの顔から笑みが消えた。

とっても上手い演技だけれど、それよりももっと重要なことがある。
受け入れたって何のことかしら？

ジトツとラオを見つめると慌てた様子であたしの所へやって来て、
違うんだと触れてこようとすする。その手を普段よりも強い力でガッ
チリ掴んだせいか驚いたように魔王は目を少し見開いた。

「どづいづことなのか、キツチリ説明してくれるわよね？」

「リ、リア……、」

「するわよね？」

ニッコリ笑いながら一つ一つ区切って言う。

あたしの急降下する機嫌に気付いたのか、恋人はコクコクと何度も
首を縦に振って頷いた。

何事にも障害は付き物です(3)

あたしの目が据わっているせいなのか、ラオは完全に萎縮してしまっていた。

確かに恋人が以前は浮名を立たせていたことは知っている。けれどその中に許婚が混じっていたとなると、話は変わってくるのだ。

「で、どういう訳なの？」

隣に来たがっていた魔王を無理矢理あたしとシェリル嬢の間に座らせ、にっこり笑顔で聞く。

ラオはあーとかうーとか意味を成さない声を少し発した後、頂垂れて薄情した。

「…臥所を共にしたのは事実だ…。」

彼の言葉にシエリル嬢がほら見ろと言わんばかりの笑みであたしを見てくる。

…止めてくれないかしら、それ。すっごく腹立つのよね。

少々ウザったくなってきた笑みに気付かない振りをしつつ「へえ」と相槌を打った。思ったより平坦だったその声にラオがパツと見上げてきた。

「だ、だがそれは了承した訳ではなく、その…！」

「ごによごによ」と言い難そうに尻すぼみになった言葉に侍女の言葉を思い出す。

…王も殿方なのですよ？

そう、ラオだって男なんだもの他の人と寝ることくらいあったって可笑しくない。

それくらいあたしだって分かってるわ。

でも許婚とも寝たつてというのが引つかかるといっつか、癩に障るといっつか……あれ？

ふと自分の思いに疑問が湧いた。え、これってあれよね。俗に言う嫉妬ってやつ？

…そうか、あたし嫉妬してるのか。

心のモヤモヤの原因が分かって少しだけ軽くなった気がした。

「王とて男性ですよ？愛する人の欲も受け止めることも出来ないなんて…。」

アンタに言われたくないわよ。苛立ちながらも我慢してニッコリ笑う。

「御心配ありがとうございます。ですが、私はすぐに体を許してしまえる程軽い女ではございませんので、お互いをキチンと知り合ってからと思っておりますの。」

今度はあたしとシェリル嬢の間に火花が散る。

許婚が何よ。あたしはラオと契約もして、婚約もした恋人なの。ア
ンタが出る幕なんてないわ！

ブリザードが吹き荒れる中、ラオがあたしたちの間に割って入った。

「リア、落ち着け。…シエリルも今日は帰れ。」

「嫌ですわ！」

しかし魔王をハッキリと断るシエリル嬢。

「私、今日から此処に住まわせていただきます！」

「…は、?!」

驚くあたしとラオを余所に彼女の勢いは止まらない。

「もう必要な物は持って来てありますもの。今更戻るなんて出来ま
せんわ。」したり顔でそんなことを言う。

行動派と褒めるべきなのか、自分勝手と罵倒するべきか。

あまりの自己中心的な行動にあたしは怒りを通り越して呆れてしまった。

…何だつて魔族は我を通そうとするのかしら？

「…分かりました、お好きにして下さい。」

シエリル嬢の侍女が嫌な笑みを浮べた。

「けれど、許婚である間だけとしましょう。」

「私はずっとラディオス様の許婚ですわ。」

「私とラオが結婚したら？許婚など何の意味もありませんもの…ねえ？」

侍女に聞くと、満面の笑みで「はい。」と頷く。

取り残されたラオが酷く困った様子であたしとシエリル嬢に挟まれていた。

「良い？」と聞けば、俺は構わないと許可が出て、シエリル嬢が城

に住むこととなった。

わざとらしいまでの無邪気な笑顔で嬉しそうに恋人に抱き付くライバルをどうやって叩きのめそうか。

額に手を当てたあたしの口から、重い溜め息が零れ落ちた。

シェリル嬢が城に住み付くことになってから数日が経っても、朝から使用人は慌ただしく駆け回っていた。

せっかく客間に案内したのに狭いと文句を言ってラオの私室に一番近い空き部屋に住むことになり、食事においてももつと豪華なものにするだの、魔王の執務室はどこだの煩いの何の。

暇さえあれば魔王の傍に居ようという魂胆が見え見えで嫌になる。

夜も寝る頃になってシェリル嬢はラオの寝室に訪れたのだ。

あたしが居るのを見ると、許婚の自分を差し置いてと文句を言っていたけれど、逆を言えば許婚の分際で態度がデカ過ぎる。

使用人の足音に目を開ければ眠たそうな紅い瞳が見つめていることに気が付いた。

「…起きる？」

ちょっと早いけどと思いつながら聞くと「嫌だ。」なんてハツキリ拒絶するラオ。

相当起きたくないらしい。あたしの体をギュッと抱き締めて今日は一日このままでいたいと呟いた。

昨日昼前にシエリル嬢が訪れ、それからずっと彼女はラオにべったり。

あたしは彼女と一緒にいたくないから別の場所に行く。

そうするとあたしとなかなか会えなくてラオは寂しい。

たった数日だったけれど、この甘えたな魔王にはかなり堪えたようだ。窓の外では薄雲に覆われた空が広がっている。

命令したらどうかと言ったけれど、一度抱いた身としてはいらなくなったから捨てるという行為は後ろめたいみたいだ。

同じ女であるあたしからしても、それは流石にはいけないと思う。

そのせいかなかなか良い案が浮かばず、彼女が押しかけて来てからもうすぐ一週間くらいになるだろう。

本当に何とかしなければラオもそうだけれど、あたし自身の精神衛生上よろしくない。

イライラするし、心の中がモヤツとしたままだし、何時までも負けっぱなしなんて性に合わない。

どんな方法を使えば諦めるだろうか。そう考えていると寝室の扉が無遠慮にノックされた。

何事にも障害は付き物です(4)

ラオを見やれば心底嫌そうな顔をしている。執務をする時よりもずっと嫌そうな表情だ。

「 …… シェリル、」

扉を開けたラオの前には既に化粧もドレスもバツチリ決めたシェリル嬢がニツコリ笑顔で「お早う御座います、ラディオス様」と甘い声で挨拶をする。

魔王は小さく溜め息を零し、支度が済んでいないからと彼女を追い返した。

とりあえずあたしも隣の部屋へ戻って支度を済ませ、改めてラオの私室に行くと既にシェリル嬢が恋人の隣席を確保している。

そうして現れたあたしに「あら、お早うございます。」なんて平然と言う。どんだけ神経ズ太いのよ。

仕方なくラオの正面に座る。

すると彼女は並べられた料理を示しながら、あれは私が選んだものだとか、あれはとても美味しいものだとか、よくそんなに口が回るなど思うくらいペラペラと話し出す。

食事中に会話するのを好まないあたしとしては、ぶっちゃけウザい。果てしなく五月蠅い。

「食事中ですので少し静かにしていただけませんかしら？」

そう注意しても彼女は「申し訳ありません、リールア様もラディオス様とお話しされますか？」なんて上から目線で返事を返す。形だけの謝罪の言葉に誠意なんてものは爪の先ほども感じられなかった。

食欲が失せてしまい、早々に席を立つ。

酷く愉しげな、馬鹿にするような笑みが視界の端に一瞬だけ映り、キリリと胸に痛みが走る。

ラオが何か言っていたけれど、聞く余裕などない。あたしは私室から出ると目的のなく走り出していた。

途中、何人かの使用人と擦れ違い、声をかけられた気がしたが覚えていない。

辿り着いた場所は城の最上階にある広々とした部屋だった。

大きな天窓から光が差し込めばとても明るく素敵だろうその部屋も、薄曇り空のせいかな全体的どんよりと沈んでしまっているように見える。

部屋の中央に置かれた大きな鏡だけが微かな光を反射させて輝いていた。

「…うぁー…何よあれ。何よもう。ホントありえない、何なの一体。」

ズルズルと大きな扉に寄りかかって座り込む。ドレスが皺になるとか、汚れるとか気にしてなんかいられない。

気分は最悪、機嫌は急降下の一途を辿る。

頭の中がぐちゃぐちゃになっているし、胸は痛いし、ここまで来ると嫌になってしまふ。

他の女の人に触らないで、なんて乙女過ぎて口にするのも恥かしい。思っていたよりもあたしって嫉妬深かったようだ。他人ひとのこと言えないわね。

落ち着きたい。とにかくこの心を落ち着かせたい。

魔王に釣り合うような落ち着いた女性でいたいと思う反面、あんな風に甘えたり我が儘言ったりしたいと思う自分もいる。

好きな人と同じ場所に立ちたいから。頼りたいから。

頑張つて背伸びしているのにシエリル嬢が来てからは何だか全部上手くない。

例えばちよつとどこ、。ラオもシエリル嬢もいない場所に行つて自分の気持ちとか、シエリル嬢のこととか、色々落ち着いて考えるためにも今の気持ちを何とか吹き飛ばしてしまいたい。

はあ…。二人の姿を思い出したらまた溜め息が漏れてしまった。

「…気分転換したいなあ。」

どうせ誰も聞いていないだろうと呟いた言葉は無意味に部屋に消えていく。

そう、思っていた。

「なら行けば良かるっ?」

「！」

頭上から降ってきた低い声にビクリと肩が跳ねてしまう。

パツと顔を上げた先に立つ人物を見て、驚きのあまり言葉が出てこなかった。

何で、どうして。

パクパクと口を開けるあたしを愉しそうに見下ろしながら「金魚のようだな。」なんて失礼なことをのたまう中年の男性。

「だ、だって、どうしてここに…?!」

不敵な笑みを口元に浮べて佇んでいたのは、数週間前に過去で僅かな間だけ会った男。背中までの黒髪に紅い瞳、ラオとよく似た悪人面の人物はラオの父親である前魔王だった。

前魔王は動きやすく、あまり値の張らなさそうな服装だ。いくら王位を退いたとは言え質素過ぎる気がする。

「風の便りで息子がお前を連れて来たと知ってな。様子を見に来たんだが…、」

顎に手を当ててチラリと見下ろされ、咄嗟にあたしは視線を逸らしてしまった。

さっきの呟きを聞かれたのだろう。

何も言われなかったがラオと同じ紅い瞳に、上手く行っていないみたいだな、と責められている気がして、涙が滲みそうになる。

泣きたいけれど、泣きたくない。

泣いてしまったら本当にあたしが負けてしまう。思い込みかもしれないけれど泣いてはいけなないと心のどこかが強く言う。

溢れそうになった涙を拭おうとした。が、突然腕を掴まれたせいでそれは叶わず、あたしの瞳からポロリと零れかけた雫は前魔王の筋張った長い指に掬われて頬へ伝うことはなかった。

オマケにその指を躊躇いもなく舐めたのだ。

驚きやら羞恥やらであたしの涙は一瞬で引っ込んでしまう。

「な、な、な…っ?!」

「真っ赤だぞ。」

「誰のせいですか、誰の！」

扉がなかったらきつと後退っていただろう。

気障過ぎる。ラオがたまに気障なのは父親に似たのかと頭の片隅で思いつつ、熱くなってしまった頬を冷やそうと手で仰ぐ。

けれど掴まれた腕をグイと強く引かれ、足が自然と立ち上がり、前へ倒れ込む。勢いのあまり前へ転びそうになったけれど、ふわりと前魔王に抱え込まれて難を逃れた。

何事にも障害は付き物です(5)

「…軽いな。」

耳元で囁かれる声に心臓が騒がしく鳴る。

ラオに似た顔で、似た声で話されると違うと分かっただけはいても顔に熱が集まってしまふ。

「べ、別に、普通ですよ。」

「そうか？しっかり食わんと成長出来ぬぞ。」

「余計なお世話って言葉、知ってます？」

「ククツ、冗談だ。」

大人の余裕感漂うダンディーな前魔王が艶やかに喉の奥で笑う。

恋人も歳を取ったらこんな風になるのかとぼんやり見上げていれば、不敵な笑みが苦笑へと変わる。

筋張った、少し皺のある大きな手があたしの頭に触れた。

その撫で方は小さな子どもにするようなもので、数回あたしの頭を撫でてから離れていった。

「久しいな。」

「そうですか？あたしからすれば会ったのは数週間前になりますけど…。」

「そうか。あの後すぐにいなくなってしまったからな、もう少し居てくれねばつまらぬではないか。」

冗談なのかよく分からないことを言う前魔王に笑ってしまふ。

シエリル嬢が来てから、あまり笑うことがなかったため、久しぶりに心から笑えた気がした。

それでも笑いが収まってしまえば胸の内に残ったのは何とも形容し難い寂しさとも虚無感とも言えないもので。

すぐにニッコリ笑って「無理言わないでくださいよ。」前魔王を見上げたら、何やら考えるように顎へ手を添えて見つめられた。

「…気分転換がしたいと言っていたな？」

「え？」

唐突な問いに目を瞬かせるあたしに構わず、大きな手があたしの手を掴む。

状況を理解する間もなく走り出した前魔王につられて足が勝手に走り出す。向かう先にあるのは大きな鏡。

ぶつかりそうになり、ギョツと瞼を閉じた。

しかし予想していた衝撃は来なく、開いた目の前にはシンプルな木製のベッドとテーブルセットが置かれた質素な部屋が広がっている。

城の豪華な装飾も、調度品も、天窓も、鏡もなくなっていた。

訳が分からず横に立つ前魔王を見上げれば悪戯が成功した子どもみたいな表情であたしを見下ろしていた。

「余の旅に付き合え。」

「え、旅…って、へ？あ、あの、ここどこなんですか？」

「大陸を二つ程渡った先にある国だ。」

「大陸?!」

地理はあまり得意ではないけれど、大陸二つが近くないことくらいは分かる。

テレポーション
瞬間移動とはまた違う力なのだろう。

ラオが心配するから戻さなければと進言してみても、前魔王は気にした様子もなく、

「そんなもの、勝手にさせておけば良い。」

あっけらかんにそう言った。清々しいくらいマイペースだ。

あたしを見下ろしていた前魔王はそのドレスだと目立つなと呟いて、あたしのドレスに触れる。すると一瞬でドレスはシンプルなワンピースに早変わりして、ヒールの低かったパンプスは底のしっかりした革製のブーツになっていた。

山吹色のワンピースは袖や襟、裾部分は珊瑚色で、花柄の可愛らしい刺繍が施されている。やや丈の短い上着は真っ白い何かの動物の毛で出来ていて、後ろにしっかりフードがあった。

ブーツは淡い茶色。傍にあった鏡を覗くとごく普通の女の子が立っていた。

ジツと鏡を見つめてしまっていたらしい。小さく笑う前魔王に声をかけられて漸くあたしは我に返る。

「気に入ったようだな。」

「え、あ、はい。ありがとうございます、すごく可愛いです。」

「それは何よりだ。」

振り返るとベッドに腰掛けてあたしを見ていただろう紅い瞳と視線が合った。

ツキリと胸が痛んだけれど、気付かない振りをして感謝の言葉を述べれば前魔王はテーブル脇にあった椅子に座るよう手で示す。

促された通り椅子に座ったあたしにさて、と地図を差し出してきた。いくつかの大陸が書かれたそれは随分と大きく、長い指が指差した

場所はその中でも一番大きい大陸だった。

「此処が城のある大陸だ。… 現在地は此処だ。」

スツと指が動いて次に示したのは本当に大陸を二つ飛んだ先にある少し小さな国。

「… 本当に遠いですね。」

「これくらい離れておかねば直ぐに見つかってしまっからな。」

見つかってはつまらん。逃げられるだけ逃げてみよっぞ。

悪びれもなくそう言い放つ前魔王にあたしはポカンとしてしまう。

それでも、心のどこかで今の状況を楽しんでいる自分もいるわけで、城のことを考えつつもつついっい領いてしまった。

「あの、名前を聞いても良いですか？」

まさか前魔王様と呼ぶわけにもいかないだろう。

彼は口元をつり上げてあたしを見下ろす。

「そうだな…セス、とでも呼べ。」

「セスさんですね。」

「ああ。お前も名を偽っておこう。」

セスさんは暫し考える素振りを見せた後に、「これからはラナと名乗れ。」そう言った。

ラナ。偽名がただけで不思議と心が弾む。何度か口の中で名前を呼んで、名前の由来はなんですかと聞けばセスさんは酷く愉快そうに喉の奥で笑って、

「『迷子』という意味だ。」

まさに今のあたしの状況にピッタリの言葉を言う。

もしかしなくとも、あたしの気持ちはお見通しってやつかしら？流石長生きしているだけあるな、なんて思ったりしたのは秘密だ。

かくして図らずも義父となるかもしれないセスさんの旅に随行することとなってしまった。

父と息子の鬼じっこ(1)

「ラディオス様、これは私が料理長に言って作らせた最高級のデザートです。」

甘い笑みを浮かべて体を寄せてくるシェリルにラオはウンザリしていた。

今すぐにも離れたいのに強く掴まれた腕はビクともしない。

鼻につく香水の匂いは嗅覚が麻痺してしまうのではないかと思うほどキツく、料理の匂いなど分からない程甘ったるい。

…美緒はこんな匂いはしない。

あまり濃く化粧をせず、香水もつけない美緒は微かな化粧の匂いと整髪に使う花の油の控えめな甘さが丁度良いのだ。

他の男はこの匂いを好むかもしれないが、ラオにとってはあまり嗅

ぎたくない部類に入る。特に五感が発達しているため嫌でも強烈な匂いは感情を刺激した。

こんなもので釣られるのはドワーフぐらいではないか？

年中鉱山を発掘したり、大地の下に住む年老いた姿の小人たちを思い起こしながら、シエリルの腕から自身の腕を抜く。

「離れる。」

「そんな…御口に合われませんでしたか？」

「違う。」

何時までもこんなキツイ匂いの傍にいたくないのだ。

昔の自分を叱咤したい気持ちでいっぱいになりながら、ラオはシエリルを引き離そうとその細い肩に触れる。

が、そこでピタリと動くのを止めた。

懐かしい気配が城の最上階に現れたのだ。

どうして今頃と思う反面、嫌なタイミングだと眉を顰める。

自分とよく似た気配のすぐ傍に愛しい恋人の気配があることに気が

付いた。…美緒。名が音として零れ落ちる前に二人の気配がパツと掻き消えた。

「！」

「きゃっ！」

驚きに立ち上がると脇にいたシェリルが小さく悲鳴を上げた。

けれどラオはそれどころではなかった。

…ない。城のどこを探っても恋人の気配が欠片も感じられない。だが、すぐに合点が行く。

愉快的事を好むあの父親の仕業だ。

例え父と言えども別の男と美緒が共にいる。そう考えただけで胸がざわつき、どうしようもなく嫌だと思う。

「…ラディオス、様…？」

ラオの全身から発せられる魔力の波に恐れを抱いたのか、若干震え

を帯びた声が名を呼んだ。

見下ろした先には椅子から落ちて床に座り込むシェリルがいる。

違う。俺が呼んで欲しいのはその名ではなく、お前でもない。

伸ばされた細い腕をラオは冷たく振り払った。

驚愕、困惑、恐怖。それら負の感情を宿して見上げてくる瞳を見た途端、何もかもが冷めたような気がした。

何故親が決めただけの許婚を抱いてしまったのだろう。たとしてももう今は美緒がいる。この形だけの許婚なぞ何の意味もない。

父が一言許婚は無かった事にするとさえそれだけで解決する話ではないか。

それなのに何故自分はこの女に情を与え、城に住む事まで許可してしまったのだ？見下ろしてみても座り込むシェリルに対する感情は湧いてこない。

あるとするならば、何故この女を傍に置いていたんだ、という自身自身への疑問くらいだ。

…美緒と一緒にいる内に気が緩んだか？

「下がれ。」

「え…、？」

「聞こえなかったか？下がれと言ったんだ。何度も言わせるな。それとも、今すぐ此処でその手足を手折って欲しいのか。」

スツと冷たく瞳を細めて見やればシェリルは慌てて立ち上がり、淑女の礼をして私室を出て行こうとする。

魔力に当てられたのだろう。その体は小刻みに震え、足取りも覚束無い。

…そうだ。許婚という言葉で縛られた関係の者など俺には不要な物おんなだった。

必要な者は恋人であり婚約者である美緒だけ。それ以外の女など取るに足らぬ存在ではないか。

彼女の存在と比べるべくもない。

シェリルと入れ違いで部屋に入って来た側近にラオは目を眇める。

普段の温厚そうな微笑とは違い、どこか軽薄さを含んだ笑みを口元に貼り付けた側近が残されていた食事を侍女に片付けさせた。

「俺は如何かしていたようだ。…キア。」

キアと呼ばれた側近は殊更笑みを深くして魔王の前へ片膝をつく。

婚約者リールアと共にいるラオも魔王ではあるが、今日の前にいるのは数百数千の魔族の王、最強にして冷酷非道と謳われる氷の魔王だった。

「ええ。 … お帰りなさいませ、陛下。」

「ああ。 … あの女を屋敷へ追い返せ。俺の許可が無い限り城の敷地内へは一步も入れるな。」

今、シエリルが纏わり付いて来ても自分は躊躇いもせず先程の言葉通り細い手足を手折れるのだ。

三大貴族の中でも最も有力であるマクファーレン家の娘を手にかけたとあれば、少々厄介な事になる。有力とは言え一貴族に過ぎないが、その傘下を考えると出来る限り危害を加えるべきではない。

「御意。」

立ち上がって歩き出せば側近は扉を開けた。

向かうのは謁見の間。

軽く翻った服から香った甘ったるい匂いが酷く苛立たせ、マントや上着を脱いで通りかかった使用人に捨てるよう言う。

安くない服だが、洗っても着る気にはならず、一秒たりとも傍に置いておきたくない。

ピロートの絨毯が美しい謁見の間、己の居るべき玉座に座り目の前の空間に手を翳せば世界の地図が現れた。

「…リア。」

名を呼べば一つの大陸が拡大され、更にその端にある小さな小さな国が画面いっぱいに広がる。

それ以上は無理なようだったがラオにとってはそれだけで十分だった。

父と息子の鬼じっく(2)

紅い瞳を片目を閉じると瞼の裏に小さな国の景色が広がっている。

数多くの街や人々の間を、魔眼が高速で擦り抜けていく。街の中、森の中…国の半分ほどを見て回った頃、漸く目的の人物を見つけ出した。

魔眼に映るのは山吹色のワンピースを着た恋人の姿。

ドレスではなく普通の人間や魔族の娘が着るような服で、街の露店を見て回っている。動きやすいからなのか足取りも軽やかに次から次へと店を冷やかしていた。

楽しいな笑顔を浮べて彼女が振り返った先には、前魔王の父が相変らず不敵な笑みを浮べてゆったりとついて来る。

…見るな。触るな。傍に寄るな。

そこは俺の場所だと美緒の隣に立つ父に殺気立つ。

向こうもとっくに見られていることに気付いているのだろう。魔眼

越しに視線が絡み合った父親の口元が愉快そうに弧を描く。

その笑みを目にした瞬間、ブワリと一瞬にして地図が炎で包まれ、瞬く間に灰へと還った。

父親の意図を正しく読み取ったラオは、心底不愉快そうに眉を顰めて吐き出すように呟く。

「鬼事おにじでもするつもりか。」

両目を閉じれば駆けて行く父親と、腕を引かれて小さくなっていく恋人の背中が見え、余計にラオの機嫌は落下する。

あの人は他人を怒らせる事に関しては右に出る者がいないくらい、性根が腐っている。

相手にしたくない人物ではあるがこうなってしまうては仕方が無い。

「…良いだろう。精々逃げ回れ。」

父親への苛立ちと、嫉妬。そうして先程見えた美緒の笑顔に苦虫を噛み潰したような顔で灰になった地図を消し去った。

シエリルが城に来てから美緒はあまり笑わなくなった。

笑ってはいるが以前のようには心から浮べていた笑みではなく、その場を取り繕うかのような無理な笑みはラオの胸を酷く締め付け、思い浮べるだけで痛みを覚える。

そんな顔をするなど言いたいのには、そうさせている原因が自分だと理解しているからこそ痛みを堪えた笑みに何も言えなかった。

自分が不甲斐無ければかりに最愛の恋人を傷付けてしまったのだ。

傷付けたくないと思っていたのに。

私室から飛び出して行った美緒は泣きそうな顔をしていたというのに、すぐに追いかけて行って抱き締めてやれなかった自分の手を見つめる。

今更だと言われるかもしれないが、シエリルを抱いた手で美緒を抱きたくなかった。汚してしまいそうで怖い。そんな思いが頭の中を過ぎり咄嗟に追いかけることを躊躇ってしまった。

もし自分がハッキリとシエリルとの関係を絶つていけば。追いかけて抱き締めていけば、恋人が城から離れることもなかっただろう。

彼女が思っている程、魔界は安全な場所ではない。

今まで何とも無かったのは此処が魔王の城であったからであり、自分の眼の届く範囲だったから無事でいられたのだ。

王と言えど大陸を幾つも隔てた土地まで力を向けることは出来ない事はないがとても難しい。

少しでも気を抜けば無力な人間など魔族の餌食となる。此処は弱肉強食の世界なのだ。

とは言え父が傍にいる間は命の危機に瀕することは決してない。ラオからすれば全く面白い話ではないが前魔王と言っただけあって退位した後でも父の強さは健在している。

それを知っているからこそ何とも言えない苛立ちが募るのも事実だ。勝算は低い。魔王という地位にいるが、それは父が王位を退いたからに過ぎず、あの男は未だ魔王として君臨するに足りる強さと力を持っている。

彼の半分程も生きていない自分が敵つかさえも分からない。

人間に比べれば随分と永い時を生きて来た癖に、何故自分はこんなにも馬鹿なのだろうと握り締めた手から血が滴り落ちる。

「
…陛下、」

側近の声に手の平から力を抜く。やや鋭い爪でついた傷は深かったが痛みを感じることはない。

歩み寄って来ようとした側近を軽く手で制した。

「…大事無い。」

一度握ってしまえば傷も流れ出ていた血も綺麗に消えてしまう。

外見の傷なんぞは見た目の割りに痛みは少なく、放っておいても何時かは治ってしまうものだ。しかし心は違う。どれ程時が経とうとも消えず、やがて傷は徐々に広がり、より深くなる。

心の傷は治すのではない。

取り除くものなのだ。

不安も然り。自分のせいで不安を感じさせてしまったであろう恋人の顔を思い浮べた。

濃く漂う独特の鉄臭さを纏う手に唇を寄せ、ラオは側近に命令する。

「触れを出せ。 …父上とリアの映像はあるな？」

「はい、御座います。」

「殺す事は許さん。傷一つ付けずに連れて来た者には報奨をやる。」

「宜しいので？」

そんな大事にしてみました。そう言外に聞いてくる側近にラオは笑った。

この遊戯を始めたのは父だ、恐らく触れを出す事くらい予想しているだろう。

だが父は一つ勘違いをしている。

俺は確かに美緒に執着し、恋し、愛を抱いている。けれどその程度がどれ程なのかあの男は真に理解していない。

子どもからお気に入りの玩具を取り上げたくらいにしか感じていないのだろうな。

そうでなければ城から連れ出したりなどしないはずだ。

「急ぎの書類及び執務を今日中に終わらせるぞ。」

「まさか、陛下直々に行かれるのですか？」

触れを出すのだから城で待てば良いのにと側近は内心で首を傾げる。
ラオは玉座の肘置きを愛しそうな瞳で見つめて撫でた。

「恋人を迎えに行くのもまた、恋人の勤めだろう？」

それに、どうせ他の者では捕まえるどころか触れる事すら適わぬ。

何せ相手は千年近くこの魔界を纏め上げ、その頂点に君臨してきた
前魔王である父なのだから。

もし敵うとするならばその息子である自分が正真正銘の勇者くらい
なものだ。

どうせあの父の事だ、今回も何時もと変わらず全力で逃げている事
だろう。

普通に追いかけて捕まえようとは考えない方が良い。

美しい曲線を描く玉座の肘置きに力を込めれば、バキリという悲鳴
と共に細やかな彫刻が彫られた金の装飾が粉々に砕け散った。

それを大事と言っんです(1)

チチチ…と窓の外にとまった小鳥が可愛らしい鳴き声を奏でる早朝。とてもスッキリした気持ちで目を覚ましたあたしは顔を洗う。

何時もならば侍女がいるので、自分で髪を梳かすのも服を着替えるのも久しぶりだった。

昨日と似たようなワンピースを着て備え付けの姿見で全身を確認し、おかしい所がないか確認をする。

…化粧しないのも久しぶりだわ。

濃くはないが何時も薄っすら化粧をしていたのですっぴんは本当に久しぶりで、鏡に映る普段よりも幼い顔立ちをぼんやり眺めていれば部屋の扉がノックされる。

鏡から顔を離し、扉を開けると目の前にはセスさんが立っていた。

「支度は出来たか。」

濃い藍色の服に身を包んだ彼はそう聞いてくる。

とりあえず領けば宿を出る旨を告げられた。だがセスさんの両手に荷物らしきものは一つも見当たらない。

荷物はないのかと問うと仕舞ってあると返され、小首を傾げてしまふ。仕舞うって一体どこに入れてあるのかしら？

つつい背の高いスラリとした体を見つめてしまい愉しげに笑われてしまった。

「此処には無い。」

「ここには、？」

「気になるのは分かるが…其れはまたの機会にして、朝食を摂りに行く。」

はいと返事をする代わりに小さく腹の虫が悲鳴を上げる。

思えば昨日はほとんど食事らしい食事を摂っていなかった。そのせいか、背中とお腹がくっついてしまいそんな感覚がする腹部を手で

押さえた。

恥かしいことにセスさんにはすっかり聞こえていたらしい。

口元を手で隠して笑うと、早く行った方が良さそうだななんて部屋を出るよう促されてしまった。

部屋の鍵を受付にいた人へ返したセスさんに連れられて通りに出れば一気に人込みに包まれ、驚く間もなく流されそうになり、グイと腕を横から引かれて難を逃れる。

顔を上げた先には呆れた表情で「お前は迷子になるのが好きなのか？」と言われた。

そんな人いるわけじゃない。

文句を言う前にセスさんはあたしの腕を引いて歩き出す。強引なように見えるが、歩調はあたしの速さに合わせてゆったりとしている辺りがすごく紳士的だ。

暫く歩いているとこじんまりとした店の入り口を開ける。

「いざいざいー」

恰幅の良いおばさんが元気な声と共に笑顔で迎え入れてくれた。

適当なテーブルに座ると水が出され、二人分のメニューを差し出される。

「ありがとうございます。」

「あら、どう致しまして。礼儀正しい子ねえ。」

ニコニコと人好きのする笑みでおばさんがあたしの頭を撫でた。もう十八だというのに子ども扱いされてしまい、何とも言えない気持ちになる。

化粧をしていないあたしは日本人特有の童顔さのせいか実年齢よりも下に見られているらしい。

隣で小さく肩を震わせている前魔王を肘で軽く小突きつつ、メニューを開く。

あまり見慣れない名前の料理の横には分かりやすく写真が載っている。

どれもこれも城で食べていたものと違って、とても家庭的で、美味しそうだ。

どうぞと言う風にセスさんに手で示されたので遠慮なくあたしは料理に手を付ける。

「美味しい！」

思わず零れたあたしの言葉におばさんが嬉しそうに笑った。

セスさんは笑っていたけれど、本当に文句なしに美味しいのだから仕方ないわ。

のんびりと、とても綺麗に食事をするセスさんの横にグラスが置かれた。中には綺麗な琥珀色の飲み物が入っていて、彼はその香りを楽しむように鼻の前で一度揺らしてから一口飲む。

無駄に優雅な動きはラオによく似ている。

…今頃どうしてるかしら…？

少しだけ感じた寂しさに同じくらいの苛立ちが募る。

良いのよ、別に。あんな綺麗な許婚がいるんだもの、あたしが少しくらいいなくなたって問題ないでしょ。

「それって何ですか？」

気分を紛らわそうとセスさんが手にしているグラスを示せば、あっけらかんとした様子で酒だと言う。

こんな真昼間、というか朝から飲むの？

まじまじと見つめていれば琥珀色の液体を少し掲げて飲むか？なんて聞いてくる。

「いえ、あたしは遠慮します。」

「ククツ…そう尖るな。食事は人生の中でも数少ない楽しみの一つ、その時くらい酒を飲んだって良いではないか。」

「…その自論だと毎食飲むように聞こえるんですが。」

「飲んでるぞ。」

「ちょっとは自重しないんですか、あなたは。」

愉快そうに笑っていたセスさんが懐かしそうに目を細めた。

それからまたグラスに口をつけて酒を流し込むと、あたしを見つめた。

「妻もよく酒ばかり飲む私にばやいていたな。」

「それは言いますよ。普通。」

「あれも何分気の強い女だった。お前の方がまだ淑やかではあるが。」

「どうやらセスさんの奥さんは随分気の強い人だったらしい。」

「ラオのお母さんでもあるその人の話を聞きたかったけれど、酒を全部仰ったセスさんは立ち上がる。」

「食事を終えていたあたしも釣られて立ち上がれば彼は懐から数枚の硬貨をおばさんに差し出す、おばさんは硬貨を受け取るとニッコリ笑ってまた来なよ！とあたしたちを店から送り出してくれた。」

「目的地が決まっているのか迷いなく歩くセスさんの背をあたしも追いかける。」

「ふと、道の端にやけに人だかりが出来ていることに気が付いた。」

「気になって横を通り過ぎながら覗き見てみると高級そうな洋紙を持った男の人が声も高らかに書かれている内容を呼んでいるところだった。」

「この二名を捕らえよとの御通達！傷一つなく捕らえ、城まで連れ

て来た者には報奨として望む物を一つ与えよとの御言葉、見覚えのある者、腕に自信のある者は我々の元まで来られたし!!」

もう一人いた男が何か丸いものを手元で弄り、映像を宙に映し出した。

そこに映っていたのはドレス姿のあたしとやや軽装のセスさん。

驚いて立ち止まりそうになったけれど、前を歩いていたセスさんが腕を掴んだためそのまま通り過ぎてしまった。

「ちょ、え、何ですか今の?!」

「息子が触れを出したのだ。何、案ずるな。此れくらい予想していた事だ。」

「予想って…これ全国に出回ってるんじゃないんですか?!」

「そうだな。そうでなければ触れの意味がない。」

「……もしかして、これを狙ってたんですか…?」

上機嫌な声にまさかとセスさんを見上げれば、楽しくて仕方ないと言いたげな表情で口元をニヤリと引き上げた。

「当たり前だ。お互い全力を出した方が面白くなるだろう？」

それを大事と言っんです(2)

あの御触れがあつたせいなのか、セスさんは一旦路地裏に入るとあ
たしの髪と目の色を魔力で変えた。

髪は金に、瞳は青色に。彼は髪も瞳も灰色にしたようだ。

何というか、髪や瞳の色が変わつただけで全然違つように見えるの
だから、不思議よね。

堂々と街中を歩いているのに誰も気付かない。

そのままセスさんは近くにあつた店に向かった。店の看板にはよく
分からない生き物の絵が描かれていたけれど、あまり上手ではなく
て何が描かれているのかサツパリ分からない。

これ、自分で書いたのかしら？

そんなどうでも良いことを考えながら後に続くと動物独特の匂いが
広がった。

店内にはいくつも檻があつて、その中にはやっぱり見たこともない

生き物が沢山いる。そんなものが所狭しと置かれた中をセスさんは悠々と歩く。

長身の彼で見えないけれど、「いらっしやい」と少し皺枯れた男の人の声が響く。

横から顔を覗かせると杖をついたおじいさんがいた。

背筋の真っ直ぐなおじいさんは声よりもずっと若く見える。

「ウエルデを一頭買いたいんだが。」

セスさんの言葉に分厚い紙の束を巻くってから、おじいさんが一言「いるよ。」という。

いくらかと聞けば指を四本上げた。

それだけで分かったらしいセスさんは、また懐から、先程とは違う色の金貨を四枚置いた。

おじいさんはそれを受け取ると奥へとゆっくりした足取りで消えていく。

恐らくあれがここのお金なのだろう。あたしは一度も使ったことがないけれど、旅をする以上は覚えなまいけないと思う。

今度教えてもらわないと思っていれば戻って来たおじいさんの手には三十センチ四方くらいの檻があつて、鍵を開けられると中からホワイトタイガーにソックリな生き物が出てきた。

ただしその背中には真つ白な翼が生えている。

可愛いけれど不思議なその生き物はセスさんに抱きかかえられ、今度はあたしへ手渡された。

大きさは普通の猫くらい。柔らかな毛を撫でると気持ち良さそうにゴロゴロと喉を鳴らす生き物を抱えて、店を出る。

「この子なんですか？」

町の外へ外へと向かうセスさんに聞くと、移動手段だと言う。

こんな小さな子が役に立つのかしら？

見下ろすと腕の中で静かにあたしを見上げてきた。何か名前をつけてあげた方がいいわよね。

白いから白、では安直過ぎる。けれど白という意味を持った名前にしたい。

スタスタ歩くセスさんの背中を追いかけながらあたしは頭の中から必死に白にまつわる単語を探し出していた。

漸く町の郊外へ抜けた頃、あたしの頭の中に良い単語が浮かび上がった。

「ベルーガ！」

「……何だ？」

思い出せたのが嬉しくて、言葉に出すとセスさんが振り向く。

あたしが抱えている白い子の新しい名前です、白という意味なんですけど、響きが素敵ですよ。

そう言えば、いつものニヤリとした笑みではなく、親が子どもの成長を見守るような穏やかな笑みが返って来た。

「そうだな。良い名だ。」

くしゃりとあたしの頭を撫で、それから腕の中にいたベルーガをセスさんは地面へ抱き下ろす。

そうして何かを小さく呟くと猫くらいだったベルーガの体が一瞬で

巨大になる。全長二、三メートルくらいは絶対にある大きさだ。

驚く間もなく腕を引かれてベルーガの背に乗せられ、あたしの後ろへ支えるようにセスさんが飛び乗れば、ベルーガが地面を蹴る。

ばさりと左右の翼が羽ばたいて空へと駆け上がった。

高く、高く、どこまでも上まで行ってしまっんじゃないかと思うほど上空まで来るとベルーガは上がるのを止めて水平に走り出す。

翼を動かしながらも、宙を滑る様に走るベルーガの背は不思議なことに無風だった。

「すっぴい……」

足元に広がる緑と、頭上に広がる青。

大地と空の美しいコントラストと壮大な景色にあたしは口を開けて見惚れることしかできなかった。

都会暮らしだったあたしからすれば、こんなに緑のある場所なんてそうそうお目にかかれない。だけど目の前に広がる光景はどこまでも果てしなく広がっていて、途中にある小さな村や家々はとても可愛らしい。

この世界をラオは治めている。こんなに広大な世界の王が、あたし

の婚約者。

まるでおとぎ噺の中に迷い込んでしまったみたいだわ。

眼下に広がる景色を眺めていたあたしにセスさんが穏やかな声で聞いてくる。

「空は初めてか？」

「ええ。そもそも城からだってほとんど出たことがありませんから。見る者全部が目新しいです。」

街を行く人々も、賑わいを見せる露店も、空を翔る楽しさも…本当は全て、ラオと一緒に感じたかった。

何時も一緒にいると約束したのに見渡す限りどこにも魔王の姿はない。

セスさんには悪いけれど、やっぱりあたしが一番一緒にいたいと思うのはラオだから。

後ろにいる彼はとても楽しそうだけど、もしもラオが迎えに来てくれたなら、あたしはラオの元に戻ると思う。

「…セスさん。」

「何だ？」

「あたしってやっぱりラオの婚約者で、恋人で…契約者なんですわね。」

傍にいないことがこんなに不安を感じるなんて。

逃げてみよう。あたしも全力で。

逃げて、逃げて…そうしてラオが全力であたしを捕まえてくれたなら、その時は本当に、あたしはラオのものになるわ。

「…今更気付いたか。」

あたしの言葉にセスさんが呆れた声でそう言った。

まるで何もかもお見通しだったような様子にやっぱり、となんて笑ってしまっ。

あたしよりも、ラオよりも、ずっと長い時を生きているセスさんだもの。あたしの思いなんて全部分かったのね。

それがちよつと悔しかったから「でも逃げるのは全力でやりますよ。」と言つたあたしに、彼は初めて大きく口を開けて笑つた。

鬼ごっこは命がけ?!

「 …… セスさん！なんなんですか、これは！！！」

武器や法具を片手に後ろから追いかけてくる大群は留まることを知らずに雪崩のように離れない。

あたしとベルーガを肩に担いだまま物凄い速さで疾走するセスさんは、息一つ乱れた様子もなく返事を返して来た。

「 だから言っただろう。全力で逃げると。」

「 でもこんなの聞いてません！」

「 一々そこまで言わなければならんのか？」

「 当たり前ですよ！！心の準備つてものがあるんです！！！」

それこそ土埃が舞い上がりそうな勢いで追いかけてくる人々の目は異様にキラついている。

ラオの出した御触れには、‘無傷で’ という条件が付いていると思っただけど、どう見ても無傷で捕らえる気なんてなさそうだ。

やっぱり髪と瞳の色を変えたくらいでは全員の間を誤魔化すことは不可能だったらしい。

…それにしても流石前魔王だわ。

かれこれ二十分近く逃げ回っているのに全くもって疲れておらず、逆に「最近の魔族は体力がないな。」と少しだけ不満げに呟いているセスさんには悪いけれど、あなたに勝てる人なんてそうそういないと思う。

そう考えていれば肯定するかのようにはブルーガがぺろりとあたしの頬を舐めた。

綺麗な琥珀色の瞳があたしをジッと見つめてくる。

何でもないわと頭を撫でてやれば気持ち良さそうに目が細められ、頭をこすり付けてきた。

ああ、すごく癒される。

可愛いブルーガに緩く微笑むのも束の間、セスさんは普段と変わら

ぬ口調で予告した。

「飛ぶぞ。」

「えっつ、きゃあああああっつ?!?!」

何が、とか何処から、とか主語を聞く前にジェットコースター並の浮遊感が全身を包み込み、あたしは情けないけれど思い切りセスさんにしがみ付きながら叫んでしまっ。

だって崖よ?何十メートルもある断崖絶壁の上から、何の躊躇いもなく飛び降りたのよ?

驚かないわけないじゃない!!

煩いなとぼやきつつ、ストーンと地面に降り立ったセスさんはあたしを下ろした。

見上げればずっと遠くの崖の上から大勢の顔が覗き込んでくる。

「此れだけ離れていれば追い付けんだろう。」

走っていた間に付いたズボンの汚れを払って、セスさんは座り込むあたしを不思議そうに見下ろした。

「何をしている？早く立て。」

「立てるものなら立ちたいです！」

突然の紐なしバンジーを強行されたせいであたしの腰は完全に抜けてしまっていた。

それに気付いたのかセスさんは可笑しそうに笑う。睨むと軽く謝罪の言葉を述べてあたしを背負い、歩き出す。

これなら城にいた方がマシだったわね。

城から逃げ出して一週間近く経つけれど、日に日に追っ手の数が増えるばかり。

出来る限り同じ場所に滞在しないよう気を付けているのに、報奨欲しさにあたしたちを追いかける人たちはどこにでも出没する。

時には食事をしていたお店のウェイトレスだったり、時には宿屋の店主だったり、道端で通りすがった人だったり…それももう様々な職業の人々が参加してしまっていた。

疑心暗鬼になってしまいそうで嫌だわ。

この間なんて食事に睡眠薬が盛られていたのよ？

セスさんが気付いて止めてくれなかったら、今頃あたしはラオのところね。

高い木々が生い茂る森の中を、あたしを背負ったセスさんはサクサクと進む。いつかの時ラオがそうだったように、セスさんが歩くと進行方向にある草木が自然と道を譲るのだ。

セスさんの足元にはベルーガが音もなく付いて来ている。

…そういえば、お父さんに小さい頃、こうしてよくおぶってもらったな…。

結構厳しい人で大きくなるにつれてほとんど会話は減ってしまったけれど、子どもの頃は我が侘を沢山聞いてもらっていた気がする。

そつと目の前の背中に頭を寄せれば「眠いのか？」なんてお父さんとは全然似ても似つかない声が優しい響きを持って聞いてきた。

本当は違ってたけれど、小さく頷いたあたしに森はまだまだ長いから寝ても良いと穏やかに言う。

…お父さん。

温かな背中に父の面影を重ねながら目を閉じ、心地よい微睡みに身を任せてしまうことにした。

パチパチと小さく何か爆ぜる音にふつと目が覚める。

ぼんやりとした視界に白が映り込んできた。

「…ベルーガ…」

金の瞳を瞬かせてあたしの顔を覗き込んでくる可愛らしいその名を呼ぶと、白と黒の美しい毛並みをスリと寄せてくる。

柔らかな背を撫でながら起き上がれば薪を見つめていたセスさんが顔を上げてあたしを見た。

「起きたか。随分良く眠っていたぞ。」

笑いの含んだ言葉通り、周囲は既に暗く、遠くではフクロウのような鳴き声が静かに響いている。

人が生み出す音が何一つとして存在しない森の中は静寂が満ちていて、木々の隙間から覗く赤と青の月明かりが優しく森へ降り注いで

いた。

「…すみません。」

「まあ良い。今日は何かと慌ただしかったからな、疲れたのだろう。」

あたしは包まれていた毛布の中から出て、それを綺麗に折りたたんでからセスさんに渡す。すると持っていた布団を地面へスルリと落としてしまった。

正確には地面へ落ちる前に宙で消えてしまったのだけれど。

セスさんは旅に必要な荷物を空間の隙間に勝手に入れているらしい。欲しいものを欲しいときに出せて便利だと言っていた。

何度見てもあたしには手品のようで見慣れない。

毛布が消えてしまった場所を少し眺めた後、セスさんの横に座る。

薪には少し強めの火が燃えており、その上にある小ぶりな鍋がふつふつと小さく煮えていた。

時間の感覚がよく分からないけれど眠ってしまっただけから、かなり時間が経ってしまったみたい。

「今日は野宿ですか？」

「ああ。…嫌か？」

「いいえ。あたし結構こういうの好きですよ。」

バリバリのアウトドア、とまでは行かないけれど、キャンプとかバーベキューとかは元いた世界で何度もやっていた。

だから野宿というのもあまり抵抗はない。

さすがにテントはないので天気心配とか、日本とは違うので猛獣とかの心配はあるが。

ポイと傍にあった太めの木の枝を薪にくべるとセスさんは穏やかにそうかと笑う。

彼もこういう雰囲気が好きなのか特に何も言わずに火の調節をしていた。

火の爆ぜる音、微風に木々の葉がさざめく音、鳥の鳴き声、遠くの虫の声。静かな森の音に耳を澄ませて聞き入っているとセスさんが不意に空を見上げる。

つられて見上げた先には綺麗な星空が広がっていた。

繋がる痣

昼間の騒々しさなどなかったかのように、ゆっくりとした時間が流れて行く。

少し涼しいそよ風が頬を撫でて行くのがとても心地よい。

目を閉じて森の空気を感じていたらセスさんに名前を呼ばれる。振り向くと食事の乗ったトレーみたいなものが目の前に差し出されていた。

「食べたら眠れ。明日は街まで一気に進む。」

「あ、はい。」

受け取って見るとフランスパンに似たものと、鍋で作っていたスープ、乾燥させたお肉など意外にもバランスのよい食事だった。

スープはかぼちゃっぽい味がしてまったり濃厚な香りで体も心も癒される。

はふはふと食べているあたしを余所にセスさんは手早く食事を済ませて焚き火の傍で横になってしまっていた。

食べ終わった頃には既に規則正しい寝息まで聞こえてくる。

…お年寄りは寝るのが早いって言うけど本当ね。

食べ終わった食器を焚き火の傍に置いてあたしも横になった。

とは言え簡単に眠れるわけでもないし、さっきまで寝ていたせいか目は思いつきり覚めてしまっている。

ぼんやりと空を見上げていけば思い出されるのはラオと想いが通じた日の夜、一緒に部屋のテラスから夜空を眺めたこと。あの時は欲しいものなんてないって言ったけれど、今なら欲しいものがある。

ラオの心が欲しい。

どんなに言葉や行動で表されても結局は不安になってしまっ。

あたしってラオのこときちんと信じ切れてなかったのね。

自分から一緒にいるって言ったクセに…。

離れれば離れるほど傍にいたい気持ちは膨らむ一方で、傍にいたくないなんて一瞬でも考えてしまった自分を怒鳴りつけてやりたい気

持ちになった。

横に置かれていた毛布を体に巻きつけ、目を閉じる。

瞼の裏には泣きそうな顔で見つめてくる紅い瞳がちらついて離れない。

…ごめんね、ラオ。

それでも素直に帰れない天邪鬼な自分が嫌になる。考えることを放棄して毛布にくるまってしまえば何時の間にかあたしは眠りに落ちていた。

「…全く、どちらも世話が焼ける。」

むくりと起き上がったセスさんが柔らかな微笑を浮かべていたなんて、あたしは知るはずもない。

森の中を半日以上歩き、ようやく街に着いた頃には日もだいぶ西へと傾いていた。

宿をとったあたしたちは夜の街へとくり出すことになった。：正確に言うと部屋に閉じこもっていても暇だから遊びに行くぞとセスさんに引きずり出されたのだけれど。

夜の街はこの世界も元の世界もあまり変わらない。

綺麗な女性が道端で通りかかる男性に声をかけたり、しな垂れかか
ったりしてあの手この手で客を取るうとするのだ。

特に美形なセスさんなんか引く手数多な引つ張りだこ状態だったり
する。彼自身も満更ではなさそうな顔をするのが何だかすごく嫌な
気分。

それを一步後ろから眺めているあたしってなんか惨め。

「…そっか。」

セスさんと女の人たちが、ラオとシェリル嬢に重なって見えるから
だ。

父親だけあってとっても似てるから余計にそう思えてしまうのか
もしれない。

嫌だなあなんて距離を開けようとすればセスさんは目敏く気付いて
あたしの名前を呼ぶ。

「ラナ、何をしている?」

「いーえー、別に。何でもありませんよ。」

周りの美女の視線が痛い。綺麗に着飾った彼女たちからすれば、どう見ても普通の街娘にしか見えないこのあたしがセスさんに気を向けられていることが気に食わないみたいね。

でもそれはあたしが悪いわけじゃないのに。

すごく損した気分になりながらも立ち止まって待つセスさんに歩み寄れば「離れるな。」と言っただから本当にちよっとうんざりしてしまう。

その後セスさんは一番綺麗な女性を連れ宿へ戻った。

あたしは食事をしたけれど、彼らは食事もそこに部屋へ行ってしまった。

何も分からないほど純粹でも子どもでもないから、この後彼らが何をするかなんて簡単に想像できてしまって部屋に戻るのが嫌になる。

けれど一人へ下手にウロつけるわけもなく結局あたしは部屋に戻るようになった。

幸いなことに部屋の壁が厚かったようで隣室の音も声も聞こえて来ないことにホッとしつつ、ベッドへ寝転がる。

シャワーを浴びなきゃとか、着替えなきゃとか頭では分かっているのに動く気力は残っていない。

… なんだか最近、あたしってばネガティブ過ぎる気がするわ。

変に苛立ったり怒ったり。ちょっとしたことでも必要以上に神経を尖らせてしまっている。

思い返してみると何てことない出来事でもその時は心底腹立たしい気持ちなのだ。

考えてみても何故そんな風になるのか検討がつかなくて、堂々巡りになる一方の思考を霧散させるべくあたしは勢いよくベッドから起き上がった。

「お風呂でも入ってこよう。」

そうすれば今のこのモヤモヤした気持ちも多少はスッキリするだろう。

部屋にしっかりと鍵をかけ、あたしは浴室に向かった。

着ていたワンピースや下着を脱いで浴室に入るとやや狭いけれど小綺麗な造りになっており、必要最低限のものしかないからか殺風景ながらも落ち着いていた雰囲気だ。

コックを捻れば温かなお湯が降り注ぐ。森の中を歩いていたからか、お湯が肌に触れると一瞬深い木と土の香りが鼻を掠めていく。

備え付けの柔らかいスポンジで石鹸を泡立てて体を擦っていくと森の香りは消えて少し甘みを含んだ花の香りが浴室内に広がった。

ふと目の前にある鏡に映った泡だらけの自分を見てハッと息を飲んではまった。

…痣が濃くなってる…？

ラオの契約者の証であり、婚約者の印である翼を広げたコウモリみたいなその痣が以前見た時よりも色を増している気がした。

侍女が入浴を手伝ってくれていたからあまり見る機会もなかったけれど、濃くなった痣は存在を主張するかのようにあたしの胸元にいる。

そっと触れると痣の部分は温かった。

あたしの体温よりも若干高めで、そういえばラオも体温が高かったなあなんて思い出すだけで不思議と心が穏やかな気持ちになった。

いつも、いつでも、ずっと傍に居る。

この痣がある限り何時でもラオと一緒にいるような気がした。

例え今は傍にいらなくても、お互いに触れ合える距離にいらなくても、心は常に共に在れたらいい。

「…大好きだよ、ラオ。」

可笑しいわね。こんなに離れているのに、会えない日々が一日一日と増えていく度にあなたへの想いも雪のように降り積もっていく。

ただこの気持ちは溶け消えることはなくて。

積もり積もって厚く、深くなっていく想いはあたしを不安にもさせる。

あたしが本当に傍にいて欲しいって思えるのはラオだけなのに。

彼もそう思ってくれていたら嬉しい。

熱いシャワーの雨を浴びながら、あたしはちょっとだけ泣いてしまった。

繋がる痣 (s i d e : L

赤と青の月が照らす大地を一つの影が駆け抜けていた。

それは残像すら残すこともなく、一陣の風だけを後に残していく。

深紅の瞳で深い木々の先を見据えたまま普段とは違う軽装を身に纏わせたラオは、音もなく森林の中を走っていた。

残っていた執務を宣言通り一日でこなし、旅の支度を整えた彼は休む暇すら惜しいという風に城を飛び出した。

それから数日が経ったけれど一行に父親と愛する恋人に追いつく様子はない。

相手も全力で逃げているのだから当たり前なのだけれど、ラオにとつては全く以って面白くない。

触れを出したが予想通りほとんどの者が触れるどころか満足に追いつくことも出来ずに二人を取り逃がしていると聞き、呆れ半分喜び半分の気持ちだった。

多勢でもお前達は敵わないのか。

よくぞその数から逃げ切った。

一刻でも早く美緒をこの手に抱き締めたいという欲望と、自分以外の者が美緒を捕まえることなど下せんという相反する思いが胸の中で蠢く。

双月が西へだいぶ傾いた頃、漸くラオの足が止まった。

やや開けた湖は近くに生き物の気配もない。

…今夜は此処で休むか。

あまり食欲も湧かなかったラオはせめて水浴びだけでもしておこうと、己の着ていた軽装を脱ぎ捨てた。

地面へ放られた服は地に付く直前に風に攫われて近場の枝にふわりと引っかかる。

それすら気にした様子もなくラオは湖に足を踏み入れた。

ややヒンヤリとした水に知らず詰めていた息を吐き出す。

月明かりに照らされた少し浅黒い体は必要な筋肉のみが付き、引き締まった姿は細身ながらも美しい造形美を生み出している。

全身に薄っすらと広がっている傷の数々は、彼がこれまでに戦い、己を鍛え上げてきた証だろう。

少々乱暴な動作で水を被れば魔力によって銀色へ変えている髪が濡れて重みを増した。

彼の苛立ちや葛藤などを現すかのように水が飛沫を上げたけれど、それすらも鬱陶しいとラオは傍に寄っていた目には見えぬ水の精を手の一振りで追い返す。

だが酷く乱暴な動きとは裏腹に、己の胸元に触れた手は優しさに溢れていた。

筋張った指先がなぞるのは不可思議に絡み合い、連なった蔦の刺青。何かの文字にも絵にも見えるそれはラオにしか解読することが出来ぬ美緒との契約の印である。

美緒の名と契約時に交わした約束が描かれているのだ。

契約を交わした者同士の間には何かしらの印が現れる。

美緒の場合は魔王の紋章が刻まれたが、ラオの場合は美緒の名と契約内容が刻まれた。

体のどの部位に刻まれるかは契約の重要性によって異なる。

胸元：つまり心臓部に描かれているこの契約はラオにとって命を懸けた契約の証でもあった。

勿論この事実を知るのはラオ唯一人だ。父親も、側近も、美緒ですら知らないだろう。

心臓部に契約印があるということはラオはもうこれ以上の契約を結

ぶことは出来ないということの意味している。ラオはこの契約によって寿命が尽きるまで縛られるのだ。

それを彼が後悔したことは一度もない。

むしろ、その契約印こそラオにとっては重要なものである。

それがある限り美緒はラオだけの契約者で、ラオは美緒だけの契約魔でいられる。

もしも美緒が他の魔と契約を交わそうとしてもラオよりも劣っている場合、契約は不可となるからだ。

触れた刺青はラオの体温よりも若干低く、けれど慣れた心地良い温度に小さく息を吐き出す。

契約印は契約者と繋がっている。

この印は美緒の胸元にある契約印と常に通じているのだ。

例え傍に居らずとも、常に共に在る。

特にラオが美緒と交わした契約は数ある中でも最も互いの繋がりが強く、最も縁の切れない契約だった。

もしも美緒が死んだとしても交わした契約は永遠にラオに残り、ラオが死んだとしても美緒の体に契約は刻みついたままとなる…決して消滅することのない契約なのだ。

互いは死んだとしても、何時でも傍に在る。

「…俺の心はお前の物だ、美緒。」

だからお前の心も俺に欲しい。

契約の印を残そうとも、もっとと願ってしまっ浅はかな己にラオは乾いた笑みを浮べた。

頭を冷やすように全身を湖へ沈ませてしまえば無音の世界が広がる。

水面を照らす月明かりの美しさに、「ああ、美緒にも見せてやりたい」などと思うのだから己はもう彼女なしではいられないのだから。

彼女は人間で、己は魔王。

本来ならば相容れない存在だがそんなものどうでも良い。

彼女が傍にいるならば世界などいらぬ。

ただ、美緒、という存在を愛している。

恋と呼ぶには醜く、愛と呼ぶには深過ぎる此の想いを治める術をラオは一つしか知らない。

愛する恋人を己の腕の中に閉じ込める。

それだけで全身を巢食う醜悪な感情は形を潜めるのだ。

…会いたい。会って、あの細い体を抱き締めたい。

己の心臓を隠すように刻み込まれた印を撫で、触れた指先に淡く口付けを落としながら、同じ空の下にいる愛しい恋人の姿を瞼に思い描き、震える唇から熱い吐息を吐き出した。

君の名を呼ぶ 勾引編(1)

翌朝、心行くまでぐっすり眠ったあたしが着替えて宿の階下に下りると既にセスさんが食堂の席についていた。

どうやら食事は先に済ませてしまったらしい。

その横には昨夜お持ち帰りされた美女が我が物顔で座ってる。

別にあたしには関係ないから構わないのだけれど、コツチを見て勝ち誇ったような笑みを浮べるのだけはちょっと気に入らない。

セスさんはあたしの恋人でも、ましてやあたしの物でもなんだからいちいち突っかかって来ないで欲しいわ。

「おはようございます。」

美女とは反対の席につけば酒を楽しんでいたセスさんは上機嫌そんな声音で挨拶を返してきた。

彼女はあたしが嫌いなのか完全に無視を決め込んでいる。

傍を通りかかる食堂の人にオススメ料理を注文し、一生懸命セスさんに話しかけたり体を寄せたりする美女を観察してみた。

細い体に女性特有の丸みを帯びた綺麗なラインは服の上からでもハッキリ分かるくらい豊満で、平凡なあたしとは比べるべくもない。

…ラオってあたしのどこがイイのかしら？

貴族の美しい美女たちを蔑ろにするほどあたしに魅力なんてないと思う。

でも選んでくれたのはラオだから結構嬉しかったりする。…恥かしいから本人には絶対に言えないけれど。

あたしが入る隙間なんてないくらいに必死な様子の美女に笑ってしまった。

女の人って、何ごとにも一生懸命よね。

笑ったあたしを勘違いしたのがジロリと睨んでくるものだから、余計に笑いが治まらなくなる。

…可愛いなあ。

目の前の美女がセスさんに恋心を抱いているかはハッキリと分から

ないけど、必死な姿はとっても可愛い。

昨夜は嫌だなと思っていたクセに今日のあたしの心はかなり寛大なようだ。

気紛れ過ぎる自分の心にある意味感心しつつ、運ばれてきた料理に手を付け出せばセスさんは漸くあたしを見やった。

「其れが済んだら出立するぞ。」

「もうですか？」

チラリと美女を見れば長い睫毛を伏せて悲しそうに視線を落としている。

たった一晩しか共にいられないのは、きつと、とても苦しい。

だが、だからと言ってあたしが何か出来るわけでもない。出発を先延ばしにしたとしても、いつかは別れてしまうのなら、早い方が傷も浅くなると思う。

「…分かりました。」

美女には悪いがあたしにも訳がある。

魔王から逃げなければいけないのだ。

ふっと頭の中に逃げる自分と追いかけるラオの図が浮かび、城にいる頃とそんなに変わらないなと気付くと同時に心が温かくなる。

…早く見つけてくれないかしら？

どんな表情で、どんな風に見つけてくれるのか。

城から逃げたことを怒るのか、シエリル嬢とのことを謝ってくれるのか、心配したと泣いてくれるのか。

逃げながら待つというのも案外楽しいものかもしれない。

手早く朝食を済ませたあたしが声をかければセスさんは残っていた酒を全部飲み干して席を立った。

先に店の出入り口に向かう視界の端で、美女とセスさんが何やら話しているのが見えた。美女が泣きそうな顔で縋り付いていたけれどセスさんは何かを手渡すと首を振って美女の肩を軽く引き離す。

余程ショックだったのか泣きながら美女はあたしの横を駆け抜けて店を出て行ってしまふ。

「女泣かせ。」

ゆったりとした歩調で歩み寄って来たセスさんにそう言えば、「人聞きの悪い事を言うな。」と苦笑された。

本人も多少は自覚しているのか少しバツが悪そうだった。

それ以上は何も言わずに宿を後にし活気のある街の大通りに出た頃、漸くセスさんが口を開く。

「女とは不思議な生き物だ。 ……一夜共にするだけで情が湧いてしまう。」

見上げた先には困惑とも不安とも取れる表情で頭を掻くセスさんがいる。

「女性は何ごとにも一生懸命なんですよ、きっと。」

「ああ…そうだな。だからこそ女は愛らしい。」

「だからって摘み食いはかりしてるとそのうち背後から刺されますよ。」

「…恐ろしい事を言うな。」

「ならば少しは自重してみたらどうですか。」

茶化し半分、本気半分でそう返したあたしの頭を彼はやや乱暴な動作で撫でていった。

それから何時ものニヤリとした笑みで「女が余を放って置かんのだ。」「なんて言うものだから、その背中を思いつきり叩いてやった。」

あたし程度の力じゃ痛くないのか愉しげに喉の奥で笑う。

生きている限り、もしかすると人は誰でも迷って、悩んで、苦しむのかもしれない。

…あたしもセスさんも皆生きているんだ。

ちよつとだけ遠くにあつたセスさんの存在が近付いた気がした。

だからなのか、気の緩んでいたあたしは咄嗟に対処し切れなかった。

「！」

グイと横にあつた細い路地から突然伸びてきた太い腕に引きずり込

まれ、声を上げる間もなく薄暗い道へ体が傾ぐ。

…セスさん!!

伸ばした片手がその背に届くか否かというところで腹部に重い衝撃が走る。

気絶してはダメだと頭のどこかで警鐘が打ち鳴らされているのに、あたしの意識はあっさり闇へと落ちていく。

「　　ラナ?…ラナ!」

とても遠くでセスさんの焦った呼び声が聞こえた気がした。

君の名を呼ぶ 勾引編(2)

突然掻き消えた気配にしまったとセオフィラス　彼女に教えた名
は友人が口にする愛称だ　　は目を見開いた。

しかし振り返った時には既に遅く、息子の婚約者であり恋人でもある少女の姿は影も形も見出せない。

偽名を呼ぼうとも返事は全く返って来ず、通り過ぎる人々が彼へ胡乱な瞳を向けるばかり。

ほんの少しの気の緩みが招いた最悪の状況に頭を抱えなくなった。

何千年も生きたこの世界の理は嫌と言う程身に染み付いていたはずだった。

どんな下級な魔族でも、魔力があるだけまだマシだが、彼女は本当に無力でか弱い人の子。精神も体も柔い少女は手加減を間違えただけで大怪我を負うだろう。

そんな事になれば息子がどれ程怒り狂うか想像が付かない。

セオフィラスは周囲の屋台の店主に声をかけ、息子の恋人の特徴を告げて聞き回ったが誰一人として見た者はいなかった。

…一度体勢を立て直さねばならんか。

引き払ってしまった宿に戻り、改めて部屋を取ったセオフィラスは備え付けの鏡の前に立つ。

磨かれた鏡に左手を沿えて滑らすように真横へ撫で上げれば、景色を写っていた表面が黒一色に塗り潰され、すぐに今いる部屋とは別の景色がその向こう側に広がった。

「誰か居ないか。」

289

静かにかけて問いに鏡の向こうから「居ります…何方どなたへ御用事であらせられますか？」繋ぎ係の凜とした声が返ってくる。

「キアランを出せ。」

「畏まりました。少々お待ち下さい。」

言葉と共に鏡の向こうが一瞬歪んだかと思えばスツと音も無く目的の人物が姿を現した。

やや垂れ目がちなアメジストの瞳に肩口から緩く編まれた青色の髪を脇から流し、キツチリと服を着込んだ青年は鏡の向こう側に立つセオフィラスを見て一度だけ大きく目を見開く。

「大元王、だいげんおう…」

「久しいな。」

「ええ、御久し振りに御座います。積もる話もありましょうが、リールア様はどちらに？」

己の主君の父親であるにも関わらず、それよりも主君の婚約者の居所を聞いてくる青年にセオフィラスは苦笑する。

「居ない。」

「は、？」

「忌々（ゆゆ）しき事態だが、何者かに勾引かどわかされてしまった。」

「っ、何ですって?! 貴方と言う御方はそんな所で何を暢気にして

いるのです?!」

勾引かしという言葉聞いた瞬間、烈火の如く怒りを露わにし出した青年に流石の前魔王も驚きに思わず身を引きかけてしまった。

鏡の向こうではアメジストの瞳がそれこそ射殺さんばかりに己を睨んでいる。

今回は自分の気の緩みが招いた失態である故に言い逃れるつもりは微塵も無い。

「息子はもう出てしまったか？」

「ええ、とつくに城を飛び出されて行かれましたとも。地位を譲ったとは言えども貴方は魔を統べていた御方、一人の人間も護れないとは如何いう事なのかご説明頂けますね？」

「そういきり立つな。余とて想定外の事態だ。」

共に街中を歩いていたが、突然傍にあった彼女の気配が掻き消えた旨を青年へと告げた。

人間が気配を消すなどと言うことは魔術師でもない限りは出来ない。

気配がなくなるといふことはその者が死ぬか、第三者の手によって故意に消される場合のみ。もしも後者であったとしてもそれは気配を出している者が気を失わねば起きぬことである。

つまりはどちらに転んでもラナの身が危険に晒されてしまっていると言ふことに変わりはない。

青年は数秒目を閉じた後に鋭い視線でセオフィラスを射抜いた。

「王へお伝え致しました。遅くとも日が暮れるまでには其方へ到着されるようです。」

「すまん。」

「いいえ、私は王の為に動いているだけです。：リールア様にもしもの事がありましたら、その際は御覚悟された方が宜しいかと。例え大元王であろうとも容赦致しませんよ。」

ピリピリと伝わってくる殺気に目を伏せる。

「判っておる。」

「では私の方でもリールア様の気配を探っておきます。王と合流されました後に再度御呼び下さい。」

「ああ。」

挨拶も無しにパツと切られた交信に今度こそセオフィラスは深い溜め息を零した。

己の予定では更に大陸を越えて大都市を五つ程過ぎた辺りで息子が追いつくだろうと算段を立てていたが、まさか少女だけを連れ去られるとは思っていなかったのだ。

触れでは少女と己二人、と明記してあったのだからそう思うのも当たり前だろう。

報奨欲しさからなのか、それとも少女を利用する目的なのか。

既に己を顔を映し出す鏡をジツと見据えていたセオフィラスは不愉快そうに目を細める。

ピシリと小さな音が聞こえ、壁にかけられていた鏡が粉々になって床へと降り注いだ。

…何にせよ、余も甘く見られたものだ。

前王とは言えども長く生きてきた魔族であれば己の顔も気配も知っている。

手を出そうだななどと思う者などいない。いるとすれば息子に王位が

移ってから生まれた青二才たちだ。

予定を狂わされ、オマケに少女も連れ去られ、セオフィラスの機嫌も一気に急降下していく。

息子が到着するまでに多少なりとも情報を得よう。

宿から大通りへ出れば空は何時の間にか暗雲が立ち込め、地面を雨が濡らしていた。

どう見ても魔王である息子の機嫌の悪さが伺い知れ、此れは本当に覚悟しなければ不味いなと宿の店主から傘を借りる。

向かったのは色鮮やかな建物がひしめき合う花街だった。

まだ日も高いと言うのに道を歩いているだけで傍に歩み寄ってくる女たちを軽くあしらいながら、今朝まで臥所を共にしていた女を捜す。

美しい女というのは大抵色々な客から大量の情報を得ているものだ。

大勢の女に囲まれながら周囲を見回していたセオフィラスによく通る女の声がかけられた。

「貴方、まだ街から出ていなかったのね。」

君の名を呼ぶ 勾引編(3)

半日も経たぬ前に別れた声の主にセオフィラスは振り返った。

美しく着飾った何人もの女たちの中でも、その主だけは別格の如き美貌を持っている。

差された傘の下から覗く艶やかな顔立ちにふっと息を吐く。

296

「ああ、少々厄介な事態に陥ってしまっただな。」

「そう。……さっきまで一緒に居たあの子はどうしたのかしら？」

艶のある瞳がセオフィラスの周囲を一周眺めて問う。

まさにその事で話があったのだと告げた彼に彼女は思い切り眉を顰めた。

ありありと伺える不機嫌な色に苦笑しつつ、傍にいた女たちを散らし、彼女へ歩み寄る。

「実は連れが勾引かされてしまつてな。此の辺りでそういった事を生業にしている者がいないか聞きたかつたのだ。」

「何で私があの子のために？」

「そう言つてくれるな。あれは息子の大切な花嫁なんだ。」

「…恋人じゃなかつたの？」

驚いた表情で見つめてくる彼女に、そんな風に見えたか？と聞けば「だってとても甘やかしていたじゃない。」と軽く肩を竦めて返されたセオフィラスは小さく笑つた。

実質息子と結婚してしまえば義理の娘となるのだから甘やかしたつて構わないだろう。

ただそんな自覚がなかつただけに甘やかしていると指摘されたことにはセオフィラスは内心やや驚きを感じていた。

「訳あつて息子が追いつくまで旅をしていたんだが、な…。」

「その子が攫われちゃって探すために情報を教えろ、って言いたい
のね？」

「ああ。話が早くて助かる。」

女は厄介な事に自分も関わってしまったと声をかけたことをやや後悔したが、だからと言って放っておけるほど冷徹な心も持ち合わせてはいない。

仕方なく肩にかかっていた髪を軽く払いながら彼女はセオフィラスを見た。

「分かったわ。協力してあげる。」

「恩に着る … エミリア。」

彼女 エミリアを自身が泊まっている宿へと誘いながら、空を見上げれば先ほどよりも雨は激しさを増し、遠くでは雷光が光って見えた。

息子の怒りが強くなっていることに苦笑してしまう。

美しく着飾ったエミリアと共に宿へ戻れば久しく感じていなかった
気配が階上から滲み出ていることに気が付き、もう着いていたのか

と思ひ、成る程道理で天氣がより酷くなつた訳かと納得した。

もう息子は着いていたらしい。

訳を知らないエミリアは不思議そうにセオフィラスの顔を見た。

「どうかしたの？」

「いや、如何やら息子はもう着いたようだ。」

泊まっている部屋の扉を押し開ければ、部屋の真ん中に佇む影が一つ。

自分とよく似た、けれど違う顔立ちの息子が軽装に身を包んで自分を睨み付けてきた。

何も言葉は発さないが全身から溢れている怒気は隠しようもなく、自分の遺伝子を受け継いだ紅い瞳を見つめ返す。

背後にいたエミリアは突然全身を襲つた怒気と計り知れない魔力の膨大さに腰が抜けてしまったのか、扉に縋り付いて何とか立っていた。

「……………漸く来たか。」

唸るような声が部屋に響く。

「すまない。」

「其れはどちらに対する謝罪だ？」

「勿論両方だ。」

「…もしリアに何かあったら、其の時は其の首無いと思え。」

親子と言つにはあまりにも殺伐とした空気の中、エミリアは震える体を支えながら目を瞬かせた。

目の前にいる存在の大きさに圧倒されていたのだ。

普段ならばまだしも感情が高ぶって魔力の制御を怠っているラオから漏れるのは今までに感じたこともない程の魔力の量。

それは魔王の器でなければ在りえない量だった。

灰色の男と紅色の男を見比べて、ハッと息を呑む。

何故今まで気が付かなかったのだろうか？

灰色の男の顔は幾度か見覚えがあるではないか。

式典、行事、王族の婚姻など、様々な場面で一度は目にする存在。

…前魔王陛下だった。

エミリアはすぐさま扉から離れると纏れそうになる足を叱咤しながら二人の足元に跪き、頭を垂れる。

「申し訳ございません、魔王陛下…大元王。知らぬとは言え無礼を御赦し下さいませ。」

王の前では跪くのが基本である。

彼女は知らなかったとは言えど礼を欠いた事には代わりはない。

額を地面に擦り付ける勢いで謝罪するエミリアにセオフィラスは苦笑して手を差し伸べた。

「余は隠居した故、今はただの旅人だ。息子とて今は王位を着ておらん。そう畏まる事は無い。」

「…温情、心より感謝致します。」

促されるままに立ち上がったエミリアは改めて現魔王へ淑女の礼を取る。

「エミリアと申します。この街の娼館で働くしがない娼婦にございます。」

「何故此处に居る。」

「私めのような者は体を売る事を生業と致します。ですがそれだけではございません。訪れた客より数々の情報を聞き出し、それを売る事もしているのです。」

「彼女は此の街一番と謳われている。情報が最も集まるのも彼女の下だと思って協力を頼んだのだ。」

そうか。そう返事をしたわりに不満そうな魔王をエミリアはチラリと見やった。

セオフィラスの言葉が本当ならば昨夜と今朝に少し見かけた、あの少女がこの魔王の花嫁になるのだ。

あんな極普通の人間がとも思ったが、それは自分が口を出す事ではない。

自分も浅はかとは言え勘違いをして少女に対して酷い態度を取ってしまったっていた罪悪感もあり、協力することを承諾したのだ。

目の前で少女がいなくなった時の事を事細かに話している二人の男を見ながらエミリアは不覚にも少女を羨ましいと思う。

力も無い弱い人間の少女はこの世界の頂点に立つ男と結婚し、恐らく幸せに暮らすのだ。

娼婦に堕ちた自分とは大違いである。

それでも何故か少女を妬ましく思う気持ちはほとんどない。

あるのは最後に見た少女の驚いた顔と、楽しげに笑う無邪気な笑みだった。

(…いやね、情でも移ったのかしら?)

軽く首を振って考えを散らせたエミリアは今度こそ二人の会話に参加すべく、俯いていた顔を上げた。

君の名を呼ぶ 勾引編(4)

、
？

…、

「…？」

人の話し声にふと目が覚める。

薄暗い中にぼんやりと剥き出しになった石の床が淡い暖色の光を鈍く反射させていた。

…床？

パツと飛び起きたけれど地面に手が付けられなくて前方に倒れ込んでしまう。

冷たい石の床は硬くて、オマケに土足だからかザラリとした感触
である。せつかくセスさんにもらった服もきつと汚れてしまってい
るだろう。

何で手が思うように動かないのかは一目瞭然だった。

親指くらいある太い縄でガッチリ縛り上げられていた。

驚きに縄を見つめたあたしに男の声が降りかかる。

「よお、目が覚めたか？」

顔を上げた先には蝋燭の明かりに照らされた男が愉しそうに金の瞳
を細めて座っていた。

かなり色黒の肌には朱色の髪、ややタレてはいるものの軽薄そうな顔
立ちの男はドツカリと椅子に腰掛け、両足を組んで机に乗せている。

その後ろには数人の男がいたけれど蝋燭の頼りない光では顔まで見
えない。

そこで漸く目覚める前のことをあたしは思い出した。

セスさんと歩いていたら突然脇道に引きずり込まれて気絶したんだ
った…。

起き上がり、目の前にいる男を睨み付けてみても目を細めて笑うだけ。

「オマエ、触れで手配されてた女だろ？王に追いかけられるなんて一体何やらかしたんだ？」

机からグラスを手に取って飲み出す男の問いにあたしは首を振る。

「何もしてないわ。あたしは魔王の婚約者であり、契約者よ。ちょっと事情があつて無断で城を出てたの。」

「…婚約者だあ？」

男はジロジロとあたしの頭の先から足のつま先まで眺め、鼻で笑った。

「嘘言っちゃいけないな。オマエみたいな普通の女を王が相手するとは思えねえ。」

悪かったわね、顔も体型も平凡で。

イラツとしたけれどココで下手に噛み付いて男の機嫌を損ねる訳にもいかない。

もし触れを見てあたしを突き出すつもりで捕まえたんだっいたら既に終えて、男は報奨を得ているはずだ。

だが男はあたしを手元に置いている。もしかしたら売るつもりなのかもしれない。

…ご飯にされちゃうことはないと思うけれど。

魔族の中には人間を食料にする種もいると本で読んだことがあった。

「契約の印もあるわ。」

縛られた両手で何とか服の胸元を開けて痣を見せる。

なのに男は興味なさげに視線を寄越し、あっさり逸らしてしまう。

「そんなもん刺青すりゃいくらでも騙れんぜ。」

「…そうかもしれないわね。でもこれが偽物だって言い切れる証拠でもあるのかしら？」

「何？」

ピクリと男の眉が動く。

言い返されると思わなかったのか見つめてくる瞳は鋭い。

グツと上から押し潰されるような感覚が全身を襲うけれど、あたしは口を開いた。

「あたしが本当に魔王のものだったら？ 売るなり殺すなりして、もしこれが本物だった場合…アンタはどうなるかしらね？」

「……………」

「赦してもらえるかしら？」

本気でキレたラオを見たことはまだない。でも側近からの話だが以前貴族の女の人がり寄り寄って来たときに、警告もなしにその人の手を首をヘシ折ったことがあったと聞いた。

元々は冷酷非道と謳われるくらいなんだからキレたらどうなること

やら。

少し触れられただけでソレなのだから婚約者であり契約者であり、恋人であるあたしが売られたとか、死んだなんて聞けば腕の一本二本じゃ済まないだろう。

男は少しの間沈黙した後、チツ…と小さく舌打ちをした。

「賢い女だぜ。…確かにそれが偽物だって証拠を俺は持ってねえ。」

もちろん、あたしも本物だと言える証拠は持っていない。

つまり真偽は分からないのだ。

普通の人々や貴族ならまだしも魔王の伴侶かもしれない可能性を持つあたしを、この状態でどうこうするには真実だった場合のリスクが高すぎて男の分が悪いはず。

男は机から足を下ろして立ち上がり、あたしの目の前まで来て顎をグイと掴み上げた。品定めするように左右に動かされ、男が後ろにいた男たちに言う。

「王の婚約者を調べて来い。」

命令に野太い声がいくつか返事をして部屋を出て行く。

顎から手を離れた男は座り込んでいたあたしをいきなり担ぎ上げる。

「なっ、ちよ、何すんのよ?!」

いわゆる俵担ぎをされて暴れると投げ落とすぞと脅され、動けなくなつた。

あたしに見えるのは男の足と下の方にある石の床。地面やフローリングならまだしもゴツゴツした石の上に落とされるなんて堪ったもんじゃない。

硬直したあたしを笑いながら男は歩き出す。

部屋を出て、同様に暗い廊下にしてはやや狭い通路をスタスタと歩く。

…うっ、肩がお腹に食い込んで痛い。

揺れるたびに鈍く痛むのでパシパシと男の背を軽く叩いた。

「肩が食い込んで痛いわ！」

「あ？…ああ、」

気付いたのが男がヒョイとあたしを抱え直す。すると腹部に当たっていた肩が上手い具合にズレて痛くなくなる。

人攫いのクセに妙に優しいじゃない。

運ばれるまま移動した先にあったのは通路よりも暗い部屋だった。

狭い。それに蝋燭が一本しかなく酷く暗い。窓もない部屋は空気が濁り、じつとりと湿気ている。

簡素なベッドにポイと投げ出され、起き上がる前に男が馬乗りになつてきた。

これはヤバイ。感じた危機感に足へ力を入れようとしたけれど男はベッド脇にあった重たそうな手枷をあたしの両腕に嵌める。

互いが鎖で繋がっているため肩より両手の間は開かない。

次に履いていた靴を脱がされ、右足にも枷が嵌められた。

そうして懐から取り出したナイフであたしの両手首を縛る縄をザックリ切り落とす。

「オマエの言葉が嘘か本当か分かるまで、大人しくしてるんだな。」

あたしの上から退いた男はそう言う。

「本当だったらどうするつもり？」

「そうだな、王の契約者として売るのも良いな。高値で取引できる。」

「…嘘だったら？」

「俺を騙そうとした罰に抱き潰してから変態貴族に売り付けてやるよ。」

何それ。どっちも売り飛ばされるんじゃない、あたし。

ジITTERと睨むけれど男はあっけらかんとした表情で、俺あ嫌がる顔を見るのが好きなんだ。なんてどうでもいい情報を言いながらうっそりと笑った。

ラオが冷酷非道なら、コイツは外道だわ。

厚い木の扉から男が出て行くとすぐにガチャリと鍵がかかるような

音がする。続いて扉にある格子が嵌め込まれた小さな小窓から「外に出すんじゃないぞ。」という声が聞こえてきた。

君の名を呼ぶ 勾引編(5)

シンと静まり返った部屋の中、ベッドから起き上がって足枷の鎖を
目で辿ると無駄に大きな鉄球がくっついていてる。

試しに足で動かしてみたらかなり重い。少なくとも十キロはあるだ
ろう。

これでは動くのも一苦労じゃないの。

嫌になってベッドへ寝転んでしまえばお世辞にも良いとは言えない
布のゴワゴワした感触が頬に触れる。

…セスさん、どうしてるかな。

突然いなくなつて起こっているだろうか？それとも探してくれてる
のだろうか？

どちらにせよ申し訳ない気持ち胸の中に広がった。

気をつけるように再三注意されていたのに何でこうも簡単に捕まっ
てしまったんだか…自分の無防備さを今更になって痛感する。

……ラオ、どこまで追いついたのかしら…。

こんなことになってるなんて知らないかも。呆れるか、怒るか、心配してくれるか。

ラオが助けに来てくれたら嬉しい。

でも、あたしは何時来るか分からない助けを待っているだけのお姫様なんかじゃないから。

どこかで上手く逃げ出せるチャンスを見つけないきゃ。

ベッドのシーツに顔を押し付けながら考えてみる。

あたしは今どこにいるのかしら？

じめじめしているから湿気が多い場所なのは確かだ。

男とのやり取りなど部屋へ来るまでの出来事を思い起こしてみれば、妙な暗さが頭に引っかかる。目を覚ました部屋も、通路も、この部屋も、窓が一つもない。

ワザと付けないのか、何か事情があって付けられないのか。

…もしかして地下なんじゃ…？

地下は暗いし、涼しいし、湿気も多量にある。窓が無いのも地下だから付けられないのだ。

そう考えればこの場所の欠点の多さも頷ける。

地下は生活し難いけれど見つかる確立も低くなるし、堅気ではなさそうな男を見る限り、後ろめたいこともしているだろう。

入り口さえ分からなければ地下ほど安全な場所はない。

だとすれば逃げるときは上に向かって行けばいい。

次はこの手枷と足枷をどうするか、である。

ジツと手枷を眺めていると扉から鍵の開く音がしてガタイの良い男が入ってきた。その手には盆らしきものといくつかの器とカップが置かれている。

「食事だ。」

テーブル脇の小さな棚の上に置かれた。

起き上がって見れば男は少し離れた壁に寄りかかって腕を組んでいる。

「ちつちつと食え。」

盆の中を覗き込んでみると丸いパン一つ、何かの焼き肉とサラダ、スープ、カップには水が入っていた。

とりあえず食事の挨拶をしてから無難にパンに手をつけてみるが別段おかしい味はしない。

良かった。カビたものとか押し付けられなくて。

あたしはこれと言って食事につるさい訳ではないから出されたものを黙って消費していく。男も無言であたしが食事するのを眺めている。

「ごちそう様でした。」

両手を合わせて始めと同じように頭を下げると男が不思議そうに見てきた。

けど何かを言うこともなくお盆を持って無言で部屋を出て行く。ガチャリと鍵をかけることも忘れずに。

ああ、そつだ。まずは鍵を開ける方法も考えなきゃいけないじゃない。

思ったより山積みな問題に自然と溜め息が零れ落ちた。

誰かが頭を撫でている。

でもそれはあたしの好きな人じゃないことだけは分かった。

ラオは本当に優しく、それでいて愛おしむように髪を梳き、名残惜しそつにまた撫でる。

けれど今頭に触れている手は髪感触を楽しむように髪を梳いて、硬い指が耳の形を丸くなぞっていく。

分かってはいるけれど目を開ければやっぱりラオじゃなく、あたしを誘拐したヤツらの親玉がニヤニヤとした笑みを浮かべながらベッドの縁に座っていた。

よく寝れるなど皮肉を投げかけられる。

「…離して。」

ほんのちよつとの落胆と苛立ち、触れられたくないという気持ち全部詰め込んだ言葉に男は指へあたしの髪を絡ませ、弄ぶ。

「嫌だと言われるとやりたくなるもんだよなあ？」

「性格悪いわね。根性ねじ曲がってるんじゃない？」

「アツハツハ！俺にそんな口利くのはオマエくらいなもんだぜ！」

大口を開けて笑った後、グイと髪を引っ張られてあたしは男に無理やり顔を寄せられた。

眼前にある金の瞳は愉しそうな色を宿してはいるものの、ほんの少しだが獰猛な光が見え隠れする。

引き摺りあげられた頭が痛い。

顔を歪めるあたしを金の瞳に映しながら男は低い声で言う。

「一秒でも長く綺麗な体でいたいんなら、俺を不愉快にさせないことだ。」

その細い体を傷物にしたくはねえだろ？

ゾツとするような声に不覚にも体が震えてしまった。

それに目敏く気付いた男は喉の奥で笑ってあたしの髪を手放す。重
力に従ってベッドへ沈んだ頭に男の嫌な笑い声が残る。

男は何時の間にか部屋から姿を消していた。

けれど起き上がる気力はあたしに残っていない。

生まれて初めて本当の身の危険というものを感じたせい、体の震
えはなかなか治まらない。

自分の体を抱き締めると指先が氷のように冷たくなっている。

城がどれだけ安全な場所だったのか、セスさんがどれだけ守ってい
てくれたのか今になって実感した。

彼らはこの恐怖から常にあたしを遠ざけていてくれたんだ。

零れそうになった涙を唇を噛み締めて押し留め、一層強く体を掻き
抱く。

触れた痣の温かさがゆっくりと全身に広がって少しずつ震えが消え
る。

詰めてしまっていた息を吐き出せばどっと体がダルくなり、ぐった

りとベッドに横になった。

目を閉じるだけであの逞しい腕に抱き締められていた感觸を思い出せるのに、欲しいそれはどこにもなくて、寂しさが胸を覆い隠してしまいうそになる。

「…会いたいよ、ラオ。」

そうして強く強く抱き締めて欲しい。

叶わない願いに吐き出した息だけが細く震えていた。

君の名を呼ぶ 勾引編(6)

もう一度目を覚ますと部屋の壁にかけられた一本の蝋燭がもうすぐ消えそうになっていた。

この世界に来て、ラオと過ごすようになってからは彼の生活リズムが体に染み付いてしまっている。

だとすれば恐らく今は夜が明けたばかりだろう。

起き上がって適当に手櫛で髪を整えていれば扉が開き、また昨日と同じ男が同じお盆を持って来て棚の上に置く。

内容も昨日と寸分変わらず同じだが食べさせてもらっているだけで十分なので文句はない。

あたしが食事をしている間、男は壁にかけてあった蝋燭を取り、新しい長い蝋燭に火を移すと古い蝋燭の火を消して小さな箱に仕舞った。

見ている間に手が止まってしまっていたらしく男は昨日と全く同じ調子で同じ言葉を口にする。

「さつさと食べ。」

「はいはい。」

残っていた食事を早めに胃に詰め込むとやっぱり食器を持って部屋から出て行く。

彼はあたしの食事係なのかもしれない。

いっぱい、とは言い難いけれど、そこそこにお腹にものが入ったあたしはベッドへ寝転んだ。

ええい牛になるんならなつてしまえ。

そうすれば手枷も足枷も外れるしあの扉も突き破れる気がする。なんてくだらない妄想をしつつ、暗くて見えない天井にジッと目を凝らしてみた。

どれだけ眺めていたかは分からないが扉の開く音に顔を向けるとアイツがいた。

「いい子にしてるみてえだなあ？聞き分けの良いやつは嫌いじゃねえ。」

アンタに好かれたって嬉しくもないわよ。

ベッドの縁に座るソイツを睨み上げてやればニヤリとした笑みが返される。

この男といると気が張るといつか、体が緊張で若干強張る気がする。

コイツといえるくらいなら食事を運んでくる男と一緒にいた方が数倍マシだ。

口には絶対出さないけどあたしは多分コイツが嫌い。

あたしの考えてることなんて知らないだろう、指に髪を絡めてまた弄り出す男に苛々する。

「ヒマなの？昨日と言い今日と言い。」

「へえ…こんな場所で時間の感覚がまだ残ってんのか。」

「体に生活規則が染み付いちゃってるのよ。それで何となく分かるだけ。」

ソイツの視線が顔から体に動くのが分かった。

しげしげと見つめられて流石のあたしも気恥ずかしさに男の手から離れようとした。けれど男はナイフを取り出すといきなりあたしの着ていた服を切り裂き、破く。

「何すんのよ!!」

慌てて毛布に包まると男が笑う。

「隠す程でもないだろ？」

「うるさい!!」

「ああ、でも王が気に入るくらいだから実は良い体してんのか？」

「っ、わっ?!」

グイッと腕を引かれてベッドに倒れ込むあたしの上に男が素早く覆い被さった。

何とか隠そうと抵抗したけれど力なんて始めから敵うはずもなく、毛布はあっさり取られてしまう。

頭上で手枷を押さえ付けられてこれ以上拒むこともできない。

ビリリという音と共にヒンヤリとした空気が肌を撫でる感覚にぶるりと体が震える。

綺麗なワンピースは見るも無惨な布キレと化し、下着しか着けていない体が男の目に曝された。

暴れても男はビクともしないし不愉快そうに目を細められると自然に体が硬直してしまう。

見られている。ラオ以外の男に素肌を見られた。

悔しくて悔しくて睨み付けても男は気にもしない。

それどころか体のラインをなぞるようにスルリと肌へ触れてくるのだから、もうあたしの怒りはボルテージギリギリである。

「触らないで！」

足をバタバタさせるとグツと首を鷲掴みにされた。力がこもって息がしづらくなる。

「体型は普通だけど触り心地は良いな。吸い付くみてえだ。」

笑いを含んだ声で顔を近づけてきた男にあたしは渾身の力を込めて頭を上げた。

つまり頭突きを食らわしてやったのだ。

かなり鈍い音がして一瞬視界がチカチカしたけれど、男の拘束が緩んだ隙に体の下から何とか這い出す事ができ、毛布で体を隠す。

あたしはどつちかと言えば石頭だからまだマシ。

でも男は相当痛かったのか額を押さえて少し呻いている。

…ざまあみろ。

ベッドから降りて壁の隅に逃げた頃、ようやく男が顔を上げた。

額は少し赤くなっているもののタンコブはできていない。

「デメエ…、」

鋭く視線を向けてくる金の瞳に一瞬硬直しながらあたしも言い返す。

「まだあたしのこと調べ終わってないんじゃない？それなのに手を出すなんてどうかしてるわ。」

「黙ってりゃバレねえさ。」

何てヤツだ。ありえないくらい最低。

男は数回額に触れると痛そうに眉を顰めながら「クッソ、どんだけ石頭なんだよ。痛ってえ。」と吐き捨てる。ベッドから立ち上がった。

来るかと構えたが予想とは裏腹にベッドへ何か投げ捨てる。無言で部屋を出て行ってしまふ。

戻ってくるんじゃないかと暫く扉を睨んでみたけれど一向に扉は開かない。

機嫌が悪くなって出て行ってしまったみたいだ。

してやったりと思いつつも男が本気で怒らなかったことに安堵する。

まだ少し恐怖でドキドキする胸を押さえながらベッドへ近寄ると服のようなものが散らばっていた。

持ち上げてみれば服は両肩が切れて細い紐がいくつもついている。これなら手枷で袖を通せないなんてことはない。

もう一枚はヒラヒラとした長い布。左右両端に紐っぽいのがやつぱりある。

…これってスカート？

とりあえず腰に何回も巻きつけて紐を縛ってみると意外と綺麗なスカートになった。

服も一度被ってから、切れた肩部分の紐を結んでいけばキチンと着れた。しかも肩の部分だけそうなので結構可愛い。

どちらも真っ白な布でつくられているせいかあたしの体は暗い部屋の中でもかなり目立つ気がする。

服はありがたいけど渡し方とか、それまでの過程がありえない。

出て行った男の顔を思い出すだけでも腹立たしいし、恐怖が蘇ってくる。

…あー、やだやだ、あんなヤツのなんてこれ以上思い出したくない。

起きてからあまり時間は経っていない気はしたけれど、あたしは毛布に包まってベッドで眠ることにした。

君の名を呼ぶ 勾引編(7)

早く寝たせいなのか、あたしは変な時間に目を覚ました気がする。

扉の外の様子に聞き耳を立てていると足音が聞こえ、扉の前にいた見張りが何かを話していた。

「そついや、今月の集会って何時やるんだ？」

「確か三日後の夜だったぞ。」

「集会の時は見回りもしなくて良いから楽なんだよなあ。」

楽しげな会話の内容にこれだ！と思う。

三日後の夜、集会、見回りが減る。

上手くこの部屋から逃げ出せれば何とかなるかもしれない。

ベッドに横になったままあしはほくそ笑み、目を閉じた。

宿のベッドに腰掛けながらラオは宙に浮く円形の中を見ていた。

そこには調べた書類を読み上げていくキアランの姿ある。

「其方の街ですと裏を牛耳っている者は一人です。それなりに力があるようで人身売買から裏市場に出回るもの全てが必ず一度その者の元を集められるそうです。街の兵にリールア様が引き渡された様子もないことから十中八九そこにおられると思います。」

また面倒な者に連れて行かれたものだとセオフィラスは内心溜め息を吐きそうになった。

どんな街でも裏家業と言うものはあり、それがあからこそ表も繁栄している。

下手に裏を潰せば表にまで影響を及ぼす場合もありえるため簡単には手を出せない。

だからこそ人身売買や非正規品が裏で取引され、余計に裏の威力が持ち上がる。

全く嫌なくらい裏にとっては都合の良い循環だろう。

丁度タイミングよく戻ってきたエミリアがラオとセオフィラスを見る。

「どうやらリールア様は影の住処ハイドレクにいらっしゃるようです。今日、私の知り合いの所へ来た客がリールア様とよく似た方を捕まえたと自慢していたそうですわ。」

「影の住処？」

「はい、この街の裏を牛耳る男の壻ねぐらです。∴それからもしも助けに向かうのでしたら三日後の夜になさった方がよろしいかと。」

「何故だ？それでは彼女が危険だろう？」

「いいえ、三日後の夜開かれる集会は裏市場に出す物の話し合いの場です。それまでは商品となるものに傷を付ける事は絶対にございませぬ。その日だけは影の住処の警備は手薄になり、品物を求める人々がこっそりと集うのです。」

つまりその中に変装して紛れ込めばいい。

ある程度潜入できてしまえば、後は敵を薙ぎ払うなり、叩き伏せるなりして探し出すだけだ。

ラオは考えるような仕草をしてからこの案を承知した。

本当は今すぐにでも助けに行きたいだろうに耐え忍ぶ息子の姿を見て、セオフィラスは胸が痛くなる。

これほど大切に思っているとは知らなかった。

安易な思いで彼女を旅に連れ出すべきではなかったのかもしれない。話が済むと己の部屋へ引っ込んでしまっ息子の背中が、セオフィラスには酷く寂しげに見えた。

「…本当に愛していらっしゃるんですね。」

ポツリと呟かれたエミリアの言葉に顔を戻せば複雑な顔があった。

「お前はリールアが嫌いか？」

「最初は…嫌いでしたわ。貴方の傍に居て、何時も守られていて、子どもみたいな笑みを浮かべるんですもの。私自身との境遇の違いを見せ付けられたようで苛立ちました。」

「そうか。」

「ですが、今は違います。本当にお助けしたいと思っております。」

強い口調にセオフィラスは少し目を丸くする。

てつきり嫌いです。で終わるとばかり思っていたので鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしてしまった。

エミリアはそつと胸に手を置く。

「リールア様は私に笑いかけてくださいました。娼婦という穢れ堕ちた私を蔑むことも、嫉妬することもなく、ただ笑いかけてくれたのです。その笑顔がずつと頭を離れません。…出来ることならばもつとリールア様とお話させていたきたいと思っております。」

穏やかな表情で紡がれた言葉にセオフィラスは笑った。

力のない、か弱い人の子であるにも関わらず彼女は多くの者を惹き付ける何かを持っている。

それが吉と出るか凶と出るかは定かではないけれども、持って生まれた一種の才でもあるのだろう。

「本人に言ってやってやれ。…きっと喜ぶだろう。」

あのコロコロと表情を変える少女はきつと嬉しそうに笑う。

そうしてエミリアを傍に置く事を許すはずだ。

帰って行くエミリアを見送り、セオフィラスは空を見上げる。どんよりと重たく広がった雲が空を覆い隠していた。

三日後の夜、この雲が完全に晴れれば良いと思う。

怪我一つしていない彼女と息子が互いに互いを抱き締めあう姿が目を閉じれば瞼の裏に浮かぶ。

そのためにも己ももっと情報を集めなければと硬貨の詰まった袋を手にも、夜の街へと歩き出した

君の名を呼ぶ 脱出編(8)

集会という情報を得てから、あたしは薄暗い部屋の中でかなり良い子にしていたと思う。

食事をして、ぼんやりして、鉄球でちよつと運動して、寝て、時々女の人がお風呂に連れて行ってくれて。

とりあえず暴れず騒がず刃向かわずを貫き通していたからか、親玉であるあの男が随分とご機嫌な様子だったことは言うまでもない。

まあ、それでもあの時の頭突きが相当効いたのか変なことをされることはなかったし。

ビンタじゃなかったただけありがたいと思つて欲しい。あの整った顔に赤い手形を残したらきつと心の底からスッキリする気がするけど、今そんなことしたらどうなるか分かったもんじゃない。

相変わらず両手首を繋ぐ枷と右足に繋がれた鉄球は邪魔なことこの上ないが、外す方法が見つからない状況で文句を言つても仕方ないというものだ。

… 枷が肌と擦れてピリリと痛むのは我慢しよう。

重たい鉄球は足で引きずるのはかなりキツイけれど手で持っている分にはそれ程でもない。

十キロの米袋よりはズツシリと重いが毎日持って下ろしての動きを繰り返していたら重さにも慣れたし、ちよっとたるみを気にしていた二の腕の脂肪も減った気がする。

嬉しい誤算というか、こんな状況で喜ぶべきじゃないのは分かっただけだけど少し感激してしまった。

もともと食事も質素だったからか一週間も経っていないのにあたしの体は目に見えて脂肪が減った。二の腕に始まりお腹周りとは太腿とか、細くなっただけであって自分で分かる程度には痩せた。

でも胸が減ってないか心配でもある。

ただでさえ大きい方ではないのに、これで減ってたら逃げ出した後にあの男をぶん殴ってやろう。

そうでもしなきゃあたしの気が治まらない。

ベッドの上で拳を固めてアイツを殴る決意をしていた時、廊下から足音が聞こえて来た。視線を向けると見張りの男と見回りの男が互いに合言葉を言う。

「闇に揺らめく焔の王。」

「見通す黄金に我は跪く。」

合っていたのだらう。男たちはふっと目元を和ませて互いの肩を歩
く叩き合った。

「もうすぐ集会の準備が始まる、見回りが減る分しっかり見張つと
けよ。」

「んな事くらい分かってるっての。にしても俺も集会见たかったな
あ。」

「ははっ、今回は諦める。丁度見張り番と重なっちまったんだ、次
回見りゃいいじゃないか。」

準備をするということは集会が開かれる時間は近いはず。

それが何時、どのタイミングで行われるかは分からないけど今日開
かれる確証が得られただけでも良しとしよう。

その後少しだけ話をした見回りの男は見張りの男を置いて歩き去っ
て行った。

自分の時間間隔を頼りにするならば今は夕食前、だいたい七時から八

時の間くらいだと思う。城にいたときは毎日八時に夕食を食べていたからあたしのお腹は腹ぺこ状態である。

さてそんなことは頭の隅に追いやるとして難関があたしには最初から出題されている。

- 1、この牢屋を出る方法。
- 2、出口までの逃走経路。
- 3、枷を外す方法。

この三つはあたしが逃げるに当たってかなり重要になる。

特に最初の二つが成功しなければあたしはお先真っ暗なのだ。

「うーん…、」

どうしようかしら？

まさか開けてくださいってお願いして素直に開けてくれるような人たちじゃないし。

やるなら実力行使しかないのだろうけど、あの頑丈そうな扉がそれには邪魔極まりない。

あたし側からは開けられないから何とかして見張り側から開けさせなければ。

今まで読んできた本や見てきたテレビなど何か役に立ちそうな知識を記憶の棚から引きずり出して行くも、やっぱりそう簡単に良い案なんて思い浮かばず四苦八苦していた。

が、不意に元の世界にいる親友の言葉が頭を過ぎる。

いざとなったら誘惑しちやいなさいよ。

「！」

そうだ、名案じゃない！

恋愛においては百戦錬磨の美人な親友は何時も必ず自分の意中の相手を落とす。

そのことで以前話していたことを思い出した。

…何て言ってたっけ？

かなり前のことだったので思い出すのにも時間がかかってしまうが、確か親友は「思わせぶりな言葉や態度をとれ」と言っていた気がする。

それと「少し大袈裟なくらいの演技をする」ことだ。

自分ではやりすぎではと思っても、案外相手からするとそうは見えないらしい。

楽しそうに熱弁していた親友の顔が瞼の裏に浮かび、とても懐かしい気持ちになる。

元の世界にも‘あたし’はいるから誰も哀しむことはないけど、本物のあたしはみんなに会うことは出来ない。

行方不明になって親や友達にツライ思いをさせるよりはマシだし。

でもやっぱり時々すごく寂しいなって思う。

ラオに言えばきつと会わせてくれるだろうけど元の世界に‘あたし’がいる限り、あたしは戻れないからこれも実は結構問題なのかもしれない。

ここから出て、ラオと会えた時にきちんと話し合おう。

…だからあたしはここから絶対逃げ出さなきゃいけないんだ。

そう思うと不思議なことに不安や恐怖よりも絶対やってやるんだという気持ちが奮起する。

少し騒がしくなった廊下の音に耳を傾ければ足音が聞こえて来る。それは少しだけ他と違って重い音だ。

毎日三回必ず部屋に訪れるこの音だけは覚えてしまった。

扉に顔を向ければ案の定食事を持った男がいつものようにノックも

せずに入ってくる。

置かれた食事に手をつけている間も毎回変わらず壁に寄りかかってジツと見つめてくる視線にも慣れてしまった。

ゆっくり食べていたあたしに男は珍しくいつもと違う台詞を口にす
る。

「…早く食え。時間が無い。」

「時間？」

「お前には関係の無い事だ。」

はい、それは十中八九集会のことでしょう？

準備をするって話を聞いてから慌ただしくなった廊下の音を聞けば
問わなくたって分かる。

外からは絶えず人の足音や何かを指示したり、聞いたりと色々な人
の声が見在進行形で飛び交って、この牢屋にまで響いてくるのだ。

質問をザツクリ切られて仕方なくご要望通りペースを上げて食べ終
えると男は普段よりもやや素早い動作で部屋から出て行ってしまっ
た。

集会の始まりが近いとあたしの勘が告げる。

君の名を呼ぶ 脱出編(9)

食事の男が去ってから多分二時間近く経ったと思う。

騒がしかった廊下は今は水を打ったようにシンと静まり返っている。

それまでは定期的に聞こえていた見回りの足音もなく、見張りの男は酷くヒマそうな顔でたまに欠伸なんかしてる状態だ。

…これはもしかしなくても集会が始まったんじゃないの？

格子がはめ込まれた扉の小窓に歩み寄ると鎖の音に気付いた見張りが振り返った。

「ねえ、今日はあの女の人はいらないの？」

いつもお風呂に連れて行ってくれる気の強そうな人。

そう言つと見張りは面倒臭そうな、それでいてつまらなさそうな顔

で「来ねえよ。」と言う。

「まったく、俺だって集会出たかったつーのに。」

ブツブツと不満を漏らす男はそれ以上あたしに構うつもりはなかった。たよんで扉の脇の壁に寄りかかったつきり振り向かなくなった。

そうか、あの女の人は集会に行ったのか。

しかももう集会は始まった。やるなら今しかない。

あたしはゆっくりとした足取りでベッドまで行き、小さな棚の上にあったカップの水を飲んだ。

そして手に持っていたカップを落とす。

パキーンとやや甲高い音が牢屋内に響き渡る。

これで見張りは振り返るはずだ。確認することは出来ないけれど人間ごうといった物が壊れる音には敏感なものなのだ。

すぐに両手で首を押さえ、あたしは呻く。

苦しそうに、上手く呼吸が出来ていないかのように、数歩後退って倒れるようにベッドへ体を沈み込ませる。

「ふ、ぐ…あ、」

体を震わせ、苦しげに喘ぐあたしを見た見張りが扉の向こうで慌てたように声をかけながらガチャガチャと乱暴な音を立てて鍵を開く。大股で部屋を横切って倒れ苦しむあたしの顔を覗き込んだ。

「おい、どうした?!」

かなり焦った顔をしている見張りの男を、服の胸元を掴みながら見上げる。

「はっ、胸…が、苦し…、」

以前見た感動ものの映画のラストシーンを頭の中に思い描けばポロリと涙が零れ出た。

そんなあたしの様子にいよいよ男が焦燥に駆られた様子であたしを

抱き上げようとベッドに膝をつく。

………今だ！

伸ばされた手を掴んで、男の急所を渾身の力を込めて蹴り上げる。

予想もしていなかったのか。突然の出来事を理解し切れなかったのか。

驚いた顔がすぐに苦悶に満ちた表情を浮べて見張りの男はベッドへバランスを崩して倒れ込み、あたしはパツと立ち上がった。

平然と佇むあたしに演技だったと気付いた見張りの顔が歪む。

「このっ、ガキが…！」

「ごめんなさい。でも、騙される方が悪いのよ。」

未だ痛みで起き上がれずにいる見張りの男。

あたしは自分の右足首に繋がる鉄球を持ち上げた。

一歩近付くとあたしの次にする行動に気付いた男の顔からサツと血の気が引く。

止める、来るなと叫ぶ男にもっと近寄り、ニッコリと営業スマイル

を浮べてやる。

「大丈夫よ、痛いのはほんの一瞬だから。」

言つて男の顔面にあたしは容赦なく鉄球を叩き込んだ。

鈍い音と共にカエルが潰れるみたいな奇声が聞こえ、男が動かなくなる。

鉄球を持ち上げてみれば男は鼻血を出したまま気絶していた。ご愁傷様。

あまり触りたくはなかったけれど男の服を探つて牢屋の鍵とナイフを一本失敬することにした。

枷の鍵らしきものは見当たらない。

それは若干予想していたことだったので毛布で男の全身を隠すように包み、割れてしまったカップの破片などを適当に棚の影に隠す。

鉄球を持ちながら開きっぱなしの扉まで行き一度部屋を振り返る。

これだけ薄暗いだから濡れた床は見えないだろう。それに毛布をかけた見張りも、あたしが眠っているように見えるはずだ。

一度廊下を見渡して人がいないことを確認してからサツと部屋を出

て音がしないように気を付けながら扉を閉め、鍵をかけた。これなら見張りの男が気が付いたとしてもすぐには出られない。

これでどれだけ時間を稼げるかは分からないが出来る限り早く逃げなければ。

あたしは鉄球を持ちながら足音が響かないよう細心の注意を払いながら暗い通路を駆け出した。

男たちの話通り見回りが減らされているのか足音も人の話し声も何も聞こえない。

だけど、それはそれで困る。

だって出口までの道のりをあたしは知らないのだ。

誰かを捕まえて逃走経路を聞かなければきっと出られない。ウロついている間に集会が終わりましたなんてことになったらまた牢屋へ連れ戻される。

あの男のことだ。殴るとかそんな柔なお仕置きで済むはずがない。

ゾツとじつじつ長い通路を走っているとコツコツと軽い音が前方から聞こえて来た。

慌てて立ち止まって近くの細めの通路に身を滑り込ませ、耳を済ませる。音は今まで聞いてきたような重いものではなく、女の人やあたしが歩くような軽い音だった。

そっと壁から覗き見れば思った通り薄暗い通路の向こう側から小柄

な人影が歩いてくる。

女の子だ。あたしと同じか少し下くらいの子は薄暗い廊下を一本のロウソクで照らしながら、一歩二歩とゆっくり歩いていった。

一本では心許ないのか肩を竦め、たまに足元の出っ張った石に躓いて転びそうになる。

飛んで火に入る夏の虫。

あの子には可哀想だけど今のあたしには絶好の獲物である。

通路で息を潜めて女の子が歩いてくるのを待つ。

ロウソクの明かりが揺ら揺らと通路に影を生みながら近付き、あたしがいる通路の前を女の子が通り過ぎようとした。

「動かないで。」

「！」

見張りの男から奪ったナイフを女の子の首筋に当て、小さく囁く。

女の子はビクリと盛大に肩を震わせて小さな悲鳴を上げた。

震える体に同情したもののあたしだって今は死に物狂いなのだから許して欲しい。

少女の首にナイフを添えたまま細い通路へと移動する。ロウソクの火を消させると細い通路はかなり暗くなった。

「あなたここに住んでるの?」

あたしの問いにコクリと頷く。

「は、はい…。」

「なら出口も知ってるわね? 言いなさい。」

少しナイフを強めに首筋へ当てれば少女が泣きそうな声で出口までの道を言う。

通路を真っ直ぐ行き、ライオンの小さな絵がかけられた場所を右に、それから更に通路に沿って進むと二本の松明がかけられた少し広い場所に出る。その一番左端の通路へ入り、一番目の角を左に、その後すぐ脇にある階段を上って右に進むと幾つか扉があるけれど、右から二番目以外は全て袋小路になっている。

右から二番目の扉を開けると更に小さな階段がある。それを昇った先には広い場所があり、そこを通り抜けさえすれば外に出られるとのこと。

…ヤバい、覚えきたかしら?

「本当ね？」

「は、はいっ、本当…ですっ。」

「そっ。」

女の子を傍の部屋に入れ、箱に座らせる。あたしが持っていた鉄球を落とした音だけで今にも気絶してしまいそうなくらい顔を真っ青にさせていた。

倉庫か何かだったようで太い縄で女の子の手足を椅子に縛り付けると適当な布を噛ませる。

叫んで助けを呼ばれては計画が水の泡になってしまっ。

ナイフを見てまだ怯えている少女に苦笑してしまった。

「ごめんね。でも傷付けるつもりはないわ。…あたしはここから逃げ出したいだけだもの。」

助けが来るまでは我慢してねと言えば驚いた様子で女の子は目を丸くする。

この子は今まで会ってきた人とは違い、気が弱くて、本当に普通の女の子のようだった。

そんな子にナイフを向け、あまつさえ椅子に縛り付けるなんてあたしもしたくないけれど、この子が誰にもあたしのことを言わない保障もない。

少し不自由ではあるだろうが我慢してもらおう。

鉄球を持ちながら、そっと女の子のいる部屋から出てあたしは通路に戻った。

耳を澄ますが物音が一つもしない。

鎖のジャラジャラという小さな音が嫌に響いてしまいが気にしてはいられない。

あたしは記憶を頼りに通路を真っ直ぐ進んだ。通路は分かれ道になる度に小さな絵や像が壁につけられていて、どうやらこれで彼らは道を覚えているようだった。

どれだけ歩いても視界の変わらない通路はまるで迷路である。

もしかして通り過ぎたんじゃあ…と不安に駆られてきた頃、漸く小さなライオンの絵がかけられた分かれ道に辿り着いた。

ここを右だ。曲がって通路の通りに進む。

途中で通路は変なカーブを描いたり直角に曲がったりするものだから

ら、あたしの方向感覚は完全に麻痺してしまっていた。

だいぶ歩くと重ねられた二つの松明が中央にかけられた少し広い場所に出る。

そこは円形になっていて別々の通路へ続く入り口が六つもあった。

何も知らずに当てずっぽうで歩いていたら絶対に外へ出ることはできないだろう。

恐ろしい場所だと心が底冷えする。一番左側のやや大きな通路に入ると数メートルもしないうちに一番目の角に辿り着く。ここを左。

真っ直ぐ歩きそうになって慌てて立ち止まった。

曲がって本当にすぐ左脇に階段があった。

それこそ気付かず通り過ぎてしまいそんな位置にある。なんて性質の悪い。

階段を上ろうとしたが進む先から降りてくる足音が聞こえて来る。咄嗟に階段の斜め前にある細い通路へ逃げ込んだ。

あたしが隠れて一拍後に階段からロウソク片手に男が降りてきた。

…危ない危ない。あのまま行ったら鉢合わせになってたわね。

この脱走作戦では敵に見つけられた時点でゲームオーバーだ。リセツトもリプレイも出来ない一回きりのチャンスなのだ。

男の姿が角に消え、足音がだいぶ遠ざかったのを確認してからあたしは階段に足をかける。

ちよつとデコボコしてて上りづらい。

転ばないよう壁に時折寄りかかったりしながら何とか上がりきると息が切れてしまった。

鉄球が重過ぎる。こんな荷物を持つてるせいか、それとも捕まってから運動していなかったからかかなり苦しい。

ふうふう言いながらちよつと顔を出して左右を確認する。

集会というのはかなり大規模なのか、あれだけ騒いでいた人々は影も形も見当たらない。

あたしとしては都合が良いけれどもどうもトントン拍子でことが進むと逆に疑いたくなってしまふ。

…まさか畏トラップなんてないわよね…？

息が整うと右の通路に素早く入り込んで壁際を歩く。さすがにこれ以上走ると体力の方が先に限界になってしまいそうだった。

鉄球が予想していたよりも重たい。

大きさはバスケットボールくらいなクセに何でこんな重いのよ？

少し苛立ちながら歩いて行つた先には扉があつた。それも変に横長な猫の額みたいに狭い空間に幾つも。

もう面倒臭かったので数えるのは止めにしよう。

右側へ行き、突き当たるまで歩く。右から二番目の気持ち古びた扉を開けた。

目の前から伸びる階段はアパートとかの階段によく似ている。…かなりデコボコで足場は悪いが。

これで最後だとあたしは勢い奮って階段を上る。

先ほどの階段より長く、途中で息が切れて足が震えた。

けれど立ち止まってるヒマはもうない。

ここが出口に繋がる一本道ならば何時誰が降りてくるか分からない。

ぐずぐずしては危険だ。

うるさい心臓を無視して無理矢理足を上げると枷の付いている右足首にピリリと痛みが走る。

それに気付かないフリをしてあたしは長過ぎるくらい長い階段を何とか上り切った。

…後もう少しで外に出られる！

目の前にあるやや大きな扉のドアノブを掴み、思い切り押し開けた。

君の名を呼ぶ 救出編（11）

夜の帳も落ち、深夜と呼ぶに相応しい時間帯になった頃、宿屋のとある一部屋ではラオ、セオフィラス、エミリアの三人が顔をつき合わせていた。

それまでの旅に丁度良い軽装に身を包んでいたラオもセオフィラスも、今は一目で高価だと分かるような生地で作られた衣服を纏っている。

普段着ているものとは違いやや煌びやかなそれは貴族の服だ。

エミリアは美しいドレスを着て、細工の素晴らしい髪飾りを付け、ピンと背筋を伸ばした姿はそこら辺の貴族の娘よりも遥かに美しい。

しかし三人の顔にはそれぞれに上半分を隠すように仮面がつけられており顔を確認することが出来なくなっている。

「陛下、大元王、こちらを。」

エミリアが差し出したのは金で創られた硬貨だった。

だが普通のものとは違い、その金貨の表面には燃え盛る焰の鬘を持ったライオンが鋭い牙を剥き出しにして威嚇している姿が描かれている。

「何だ此れは。」

見たこともない硬貨をラオは手にとってしげしげと眺めた。

よく出来ているが、金を使っているだけに一枚造るにしても相当の金がかかるはずだ。

エミリアはセオフィラスにも一枚手渡すと自分も胸元に硬貨を挟み込む。

「これは集会に立ち入る際に、入り口で見せる手形のようなものです。これがないければ例え貴族であろうとも入る事は許されません。」

「成る程。これを手に入れるだけの金がないければ入る権利は無いという事か。…全く金の亡者みたいで美しくないな。」

肩を竦めたセオフィラスにエミリアは苦笑する。

ラオも眉間に皺を寄せて硬貨を睨みつけていた。

裏で取引されるものは大抵値の張る物ばかり、ロクに金もない者が来たって一銭も利益にはならない。

だからこそ金のある者しか立ち入ることが出来ぬように制限をかけたのである。

「…お前は影の住処に詳しいな。」

ラオがポケットに硬貨を仕舞いながらそう問うた。

エミリアは一度目を伏せると、小さく震える息を吐き出した後にポツリと述べた。

「昔は、私も影の住処の一員でした。」

まさかの言葉にセオフィラスとラオは僅かに瞠目する。

ならば何故娼婦などに身を墮としてしまったのだろうか。

少なくとも男に春を売る必要がないくらいには生活出来ただろうに。

エミリアは困ったような笑みを浮べて二人を見る。

「愛していた人がおりました。想いを告げ、彼も愛してると言ってくれました。…でも、数日後、目が覚めたら娼館のベッドの上にいたのです。」

「…売られたのか。」

「はい…。彼は私の事など微塵も愛してなどおりませんでした。数度抱き、飽きたから売った…と。」

それから愛というものを心から信じる事が出来なくなってしまうた。

どれだけ甘い言葉を囁かれようとも、どれだけ情熱的に追われようとも、愛されたいと思う一方で心は冷たく冴え渡るばかり。

「何時か…思い知らせてやりたかったのです。貴方が捨てた女はただの女じゃなかったと、悔しがらせたかったのかもしれない。」

セオフィラスがそつと細い肩に触れたが、エミリアはニコリと微笑む。

ツライ過去だったのだろう。それでも彼女は今、前を向いている。

それがどんな理由であれ前に進もうとする限り彼女の輝きは消えない。

強く真つ直ぐで、けれどどこか脆いその姿が美緒と重なって見えたラオは顔を歪めた。

…逢いたい。早く此の腕で抱き締めたい。

慕情は冷めるどころか日に日に募り、ラオの心を掻き乱す。

「…行こう、お前の花嫁を助けに。」

顔を上げたラオにセオフィラスが苦笑した。

扉を開けてエミリアが静かに待っている。

…美緒、お前に伝えたい言葉が沢山在る。伝えたい想いが山のように在る。

だから無事でいてくれ。

お前のいない世界なんて俺には生きる価値もないのだから。

「…ああ。」

歩き出した息子に父は笑った。

大丈夫だと、何の心配もないと言うような柔らかな笑みだった。

しかしそれを見ていたのはエミリアだけである。

宿を後にした三人は人通りのない裏路地を足早に通り抜け、街の外れにある教会へ向かった。

魔族は神を崇めたり敬ったりしない。元は人間が住んでいたためその名残で古い教会は残されていたのだ。

昼間でさえ誰も寄りつかない教会は夜になると不気味な雰囲気がある。

普段は静寂に満ちているはずの場所だが今夜だけは訳が違った。

ラオたちと同じように煌びやかな衣装に身を包んだ男女が楽しげに教会に入っていく。

「此れら全てが買取人か？」

呆れを含んだセオフィラスの声にエミリアが頷く。

「ええ、今日を出す品物を決めるための集会ですが。大抵はこの時点で既に買取が決定してしまいます。」

「売れ残りを防ぐため、か。」

「はい。」

気分が悪くなる話だとラオは周囲を歩く男女へ視線を滑らせる。

ほとんどが貴族や大商工だろう。無駄に派手な服を引きずって歩く姿に吐き気すら感じられた。

鋭くなる息子の気配に気付いたセオフィラスに窘められてラオは我に返り、何でもないと行って歩き出す。

教会の入り口で金貨を見せれば想ったよりもアッサリ中に入れてしまっ

随分と警戒が緩いな。

そう思ったのも束の間、出入り口脇の壁に寄りかかっていた男の脇を通った時に嗅ぎ慣れた香りが鼻を掠めた気がした。

振り返ろうとしたラオに声をかけられる。

「おい、アンタ見ない顔だなあ？」

振り返ると朱色の髪に金の瞳を持った男はラオやセオフィラス、エミリアを順に眺めた。

ふつとエミリアで一瞬視線が留まったものの、すぐに興味がなさそうに流される。

「集会は今日が初めてでな。どんな品が出るのかかなり気になるのだが。」

セオフィラスが微笑を口元に貼り付けて言う。

此処の物はとても良いと聞いたから楽しみだ、そう心にも無い言葉

を繋げた。

朱色の男は一度目を細めたが軽く笑ってどこかへ歩き去る。

その男が見えなくなるまでラオはジッと、半ば睨み付けるように見送っていた。

朱色の男が微かだが纏っていたあの香りは美緒のものとよく似ていたのだ。

「…危ない所でしたわ。」

エミリアの言葉にラオとセオフィラスは振り返る。

「彼が影の住処の最高責任者…この裏市場を束ねる者です。」

「今のが？…随分と若いな。」

セオフィラスがやや驚いた表情で男が消えた方向へ視線をやった。

裏市場を牛耳るためにはそれ相応の力量を問われるが、大抵はかなり歳のいった者が纏め上げる。

彼のように歳若い者が治めるのは非常に珍しいことなのだ。

君の名を呼ぶ 救出編（12）

集会の会場となる場所はお世辞にも綺麗とは言い難い。

使われなくなつてからだいぶ時間が経つてしまつているせいか、教会内の椅子は腐りかけ、壁も所々剥げかけている。

薄暗い中では既に大勢の買取人がヒソヒソと話を交わしていた。

小さな声ではあるけれど、大勢がそのように話しているからか声は小波のように教会全体に木霊している。

隅のあまり目立ち難い場所へ移動した三人は教会の祭壇があるべきはずの場所を見やった。

そこには頑丈そうな檻に入った輝くような品々が置かれており、未だ数人の男が数多くの品を運び出している様子からしてこの裏市場の大きさがよく分かる。

あれほどの品々を集めることなど小規模では不可能だ。

多方面の者とも通じているのかもしれない。

腐りかけの椅子はそれでも倒れることなく三人の体重を支える。

ラオは仮面越しに檻や品々を眺めたものの目当ての恋人の姿が見えないことに落胆した。

今すぐにも助け出したいが、何処にいるのか分からぬ状況で安易に手を出すのは躊躇われた。

傷一つなく助け出したい。

ラオたちが訪れてからも教会内に立ち入ってくる人々の波は留まる事を知らないように流れ込んでくる。

仕舞いには入りきれずに窓から覗き込んでくる輩まで出てくる始末だ。

人数が増え、息苦しく狭くなった空間にラオが苛立ちを吐き出すように小さく舌打ちを零せば、耳聴くそれを聞きつけたセオフィラスが苦笑する。

「そう苛立つな。此れだけ人が来ているんだ、もう直ぐ始まるのだろつ。」

「それくらい分かっている。」

「…こんな時に言うべきではないだろうが、お前はもう少し其の短

「気さを治した方が良い。」

余計な世話だと睨み付けてきたラオの視線を軽く肩を竦めてサラリと受け流すセオフィラス。

二人のそんな様子にエミリアが小さく微笑した。

セオフィラスからあまり親子関係は良くないと聞いていたが、そう感じているのは当人たちだけで、周囲から見れば彼ら二人は立派な親子である。

ちよつとからかい癖のある寛容な父親と、ちよつと短気で父に反発する息子。

どの家庭でも一度は見られそうな極普通の光景は、どう見ても不仲には見えない。

そんな事をしているうちに教会の出入り口が錆びた音を響かせながら閉まった。

祭壇へ視線を向ければ、数々の品の脇にあの朱色の髪の毛の男が座っている。その周りには男を護るように数人の男たちが剣や槍を手に佇んでいた。

「紳士淑女の皆様、今宵はよっこそお越し下さいました。」

やや際どい格好をした美しい女が深く頭を垂れる。

「皆様お待ちかねの集会をどうぞお楽しみ下さいませ。」

声高らかにそう言うと女は祭壇脇へと下がる。

数人の男が檻の中から品々を出し、買取人に見えるよう持ち上げた。

瞬間、人々の間から悲鳴にも似た声が漏れ出し、そこかしこから何百何千万という値段が品に付けられていく。

その勢いの凄まじさにセオフィラスの口元が一瞬引きつった。

慣れた様子のエミリアと興味の無いラオは値段のつけられていく品々をただ黙って眺めている。

「人は後か、」

金で造られたカップや皿、高級毛皮の上着などばかりで一向に人身の出でくる様子がない状態にラオがポツリと呟く。

騒がしい中、しっかりとそれを聞き取ったエミリアが頷いた。

「はい、人身は市場の中でも最も高値で取り引きされるので最後へ回されますの。もしも出されるのであれば、リールア様は恐らく今夜の目玉として最後の最後になりますわ。」

それでは時間がかかり過ぎる。

どうすべきか思案していたラオとセオフィラスの横をフードを目深にかぶった男が通り過ぎた。

その男の手元に光った鈍い銀色に楽しげな笑みを浮べてセオフィラスやエミリアとラオへ顔を向ける。

どうやらそこまで待たずとも良いようだ。その言葉に二人が胡乱げにセオフィラスを見ると、前の方から悲鳴が上がるのは同時だった。

甲高い女の悲鳴に視線が集中する。

そこには最初に登場した女の首元にナイフを当てるフードの男がいた。

鋭利に光る刃物を目にした買取人たちはそれはもう聞き取れない程の悲鳴を上げながら我先にと教会の出入り口へ押し寄せる。

固く閉ざされていた扉を無理矢理こじ開けて逃げて行く人々。

「これで邪魔な者は居なくなつた。」

したり顔でそう言ったセオフィラスにラオは小さく溜め息を零す。

確かに買取人は邪魔であつたが、あの男も間が悪い。

顔を上げれば未だフードの男は女にナイフを向けていた。

座っていた朱色の男が立ち上がる。

「やってくれたなあ？つたく、市場は信用第一って知ってるか？」

言葉のわりにあまり気にした様子のない朱色の男にフードの男は激昂した。

早口過ぎて途中聞き取れない部分はあつたが、お前のせいだ、殺してやるといった類の言葉を発していることだけは理解できる。

朱色の男は笑う。口元を弧に引き上げて冷たい金の瞳を細めた。

「その女は殺しちゃ殺せ。俺の部下でもねえ。この市場に来た時点で身の保障なんてもんはされてねえからな。死んでも俺らの責任にはならない。」

そもそもその女はただの気紛れで飼っただけで、殺されてもコツチとしては痛くも痒くもならねえよ。

低く笑う朱色の男にナイフで脅されている女も動揺した様子で助けを求めていた。

滑稽だと事の様子を眺めていたラオたちにも朱色の男は視線を向ける。

「アンタらも俺に用があるんだろ？」

「…気付いていたか。」

「ああ、他の客に比べて落ち着いていたし、何より売りもんには興味無さそうだったからな。」

ニヤリと笑った金の瞳をラオは僅かな苛立ちを含めながら見据える。

買取人のいなくなった教会内の空気がピンと張り詰めた。

君の名を呼ぶ 救出編（13）

冷たい風がヒヤリと全身の体を撫で上げる。

女を突き飛ばしたフードの男がナイフ片手に朱色の男へ突進した。

刺さる。そう誰もが思った次の瞬間、ブワリと熱気が教会内を駆け抜け、フードの男が悲鳴を上げる。

薄暗い教会内を照らし出す程にフードの男は燃え盛っていた。

奇声とも雄たけびともつかない悲鳴を上げながらフードの男は教会の出入り口に向かって駆け出すも、途中で力尽きたのか音を立てて崩れ落ちた。

「サラマンダー火蜥蜴と契約しているのか。」

やや驚いた様子でセオフィラスが呟く。

魔族の中には精霊と共に生きる種族もいるが、普通の魔族が精霊と契約を交わす事は本当に極稀である。

朱色の男は己の手から小さな炎を揺らめかせながら笑う。

「よく分かったな。」

「……。」

ラオが仮面を外し、投げ捨てた。カランと遠くで音が響く。

音もなく元の色に変化する髪。

朱色の男は己の火で照らし出された顔を見て大きく瞠目した。

魔族であれば一度くらいは見たことがある、現魔王がそこに佇んでいたからだ。

それから朱色の男は額に手を当てると声を上げて笑い出す。

可笑しくて堪らないと言いたげなその笑い声はラオの神経を逆撫でしてしまつたようで、ラオの紅い瞳が不愉快そうに眇められた。

「あつはははは！あの餓鬼の言つてた事は本当だつたつてかあ？」

「餓鬼？」

「ああ、アンタの婚約者だつて言い張つてた女だ。ククツ、まさかなあ…？」

楽しそうに挑発してくる朱色の男にラオの魔力が勢いよく弾け飛んだ。

つい先ほど短気過ぎると言われたばかりであつたが、そんなことなどどうでも良い。

…此処に美緒がいる。

出入り口で声をかけられて時に嗅いだ匂いは美緒のもので間違ひなかつたのだ。

「おつと！そう怒るなよ。他の奴隷に比べりゃ丁重にもてなしてやつてるぜ？」

「ふざけるな…！」

「第一あんな餓鬼のどこが良いんだ？チビだし餓鬼だし、無駄に気も強い…ああ、でも触り心地は悪くなかつたかもなあ？」

ニヤニヤと笑う朱色の男の言葉にラオの怒りが更に強まる。

触ったのか。美緒に。…己の唯一の至宝に。

ザワリとラオの黒髪が揺れる。

朱色の男は魔を束ねる王を目の前にしても臆する事無く佇んでいた。

それは勝利する確証を持ち合わせた者の目をしている。…気に食わない。

ラオが片手を朱色の男へ向けた途端、その手の平から勢いよく雷電が渦を巻いて駆け抜ける。

だが朱色の男も同様に手をラオへと向けると先ほどよりも何十倍もある炎を生み出した。

二つは中間でぶつかり合い、混ざり、互いに相殺されて凄まじい音と熱風を吹き起こして掻き消える。

これには流石のラオも目を見開いた。

…違う。火蜥蜴と契約したとしても此れ程までに強い炎を生み出す事など不可能だ。

朱色の男の輝く金の瞳を見たラオはハツとする。瞳の細長い瞳孔は火蜥蜴のものと全く同じである。

「貴様：火蜥蜴を喰らったな。」

相手の力をより自身の物にする方法：他者を食い、その身に取り込むことだ。

だがそのような事はかり繰り返してはやがて世界の精霊全てがいなくなってしまう。

精霊を喰らう事は何世代も前の魔王が禁止させたはず。だがこの目の前にいる男はそれを無視して火の精を己の力にすべく喰らったのだ。

禁忌を犯したというのに朱色の男は事も無げに笑う。

「何が悪い？強者は生き、弱者は死ぬ。この世界じゃ当たり前的事だろうが。俺は生きるために弱者を殺しただけ：お前だってそうだろう？魔王。」

己にそぐわぬ者を殺し、弱者を切り捨て、時には力で捻じ伏せて。

そうして今魔王として君臨しているではないか。

朱色の男の言葉にラオの顔が歪む。

「そつだ。だが精霊を喰らう事がどれ程の大罪か、貴様は分かっている。」「

「ハツ、知る必要もねえ。」「

エミリアとセオフィラスが朱色の男を護衛していた別の男達を叩きのめし、教会の脇の扉から奴隷たちを解放する。

だがセオフィラスは焦っていた。

息子の婚約者の姿がどこにもないのだ。

「ハインツ、リールア様をどこへやった?!」「

エミリアの怒りが滲む声にハインツと呼ばれた朱色の男が振り返る。

彼は己が昔娼館へ売り飛ばした女をゆっくりと見やった。

「リールア様、ねえ？お前、何時から俺にそんな口を利けるようになった…？」

ゾクリと背筋を寒気が駆け抜ける冷たい声にエミリアはビクリと肩を震わせたものの、気丈に拳を握り締めてハインツを見据えた。

「最初からよ。私はもう貴方の玩具じゃないわ。」

「そりゃ残念だ。」

抱き心地だけなら最高だったのになあと嘲笑うハインツにエミリアの顔がサツと朱に染まる。

しかしエミリアが何かを言う前に二人の間に素早く身を滑らせたセオフィラスによって、突如襲った炎の渦は四散した。

羞恥と怒りに震えるエミリアを背に庇いながらセオフィラスはハインツを見る。

自身の邪魔をされたハインツの顔から笑みが消えた。

「まったく餓鬼一人のために市場がめちゃくちゃだ。俺が何年かけて

「ココまでデカくしたと思ってやがる…？」

溢れ出す殺気と共に熱風がラオの体を包み込む。

ラオ自身も幾多もの精霊を使役しているが火蜥蜴の力を全て掌握しているハインツの力には、彼の持っている精霊の力はやや足りない。

ジリジリと頬を撫でる熱に眉を顰めた。

君の名を呼ぶ 救出編（14）

瞳孔の開いた金の瞳が苛烈な色を宿してラオを映す。

ハインツの体から赤い炎が爆発した。

咄嗟にセオフィラスは己とエミリアに障壁を張り、防いだ。ラオは障壁すら出すこともなくその場に佇んでいる。

燃え盛る炎が全身を撫で上げたもののラオが片手を軽く降るだけで彼の周りの炎だけが後退し、火の燃え移っていた服が普段の漆黒の服へと戻った。

「良いな、そうでなけりゃ面白くねえ。」

「…止める。」

「何だあ？王ともあろう御方が逃げるのか？」

逃げ、という言葉にラオの眉が更に寄る。

自分が手を下さずとも大罪を犯したハインツには極刑が待っているのだ。

無駄に力を使いたくはなかったのだが、そこまで馬鹿にされて黙っていられるほどラオは穏やかなではない。

バチバチと放電させながら手に雷電を灯せばハインツが笑う。

互いの視線が絡み合った瞬間二人は目にも留まらぬ速さでぶつかり合った。

傍にあつた腐りかけた椅子が砕け散り、古い教会の壁の塗装が一気に剥がれ落ちる。

炎と雷は絡み合ったかと思つたら互いに互いを飲み込み膨れ上がった。だがラオもハインツも力を緩めない。

押された炎に穴が開くとその一瞬の隙をついてラオの雷電がハインツを貫く。

しかしフツと貫かれたはずの体が炎に変わる。

火蜥蜴は炎から生まれる精霊だ。つまりその身は炎のみで構成されている。

予想済みだったのかラオはパツと脇へ飛び退った。

一拍後に背後から勢いよく炎に身を包んだハインツが飛び出し、ラ

オが元いた場所を燃え盛る炎で舐め上げる。

あまりに激し過ぎる戦いにセオフィラスはエミリアを庇ったまま動くことが出来ずにいた。

下手に動いてラオの集中を切らす訳にもいかない。それに少しでも障壁を緩めれば教会内全体を舐める炎の餌食になるだろう。

「厄介な事になったな…。」

魔王とは言え精霊相手では少々分が悪い。

精霊を喰らった者は弱点が一つしか存在しないのだ。

それは心臓でも脳でもなく、精霊の刻印である。精霊にはそれぞれ異なる刻印があり契約するか喰らうと体に刻印が現れる。

人によって場所は異なるものの刻印さえ体から消してしまえば力は消える。

しかしのある部位を攻撃して傷付けない限り他の攻撃は通用しない。

ラオがギリギリまで近付いて心臓部を貫くも効果はない。

一体どこが弱点なのか。

エミリアに視線を投げかけてみるも力なく首を振られてしまう。

苦戦するラオにハインツは晒う。

「どつした魔王。まさかその程度で全力だとか抜かすなよ?!」

燃える炎に気を取られていたラオの顔の傍をハインツが拾い投げた剣が掠り、黒髪が僅かに切れる。

相変らずの無表情ではあったが内心ではラオもかなり焦っていた。

普通の魔族相手ならば普段で充分だが精霊相手となればそうも言うてられない。

契約者である美緒が傍にいるならば勝てるが、今のラオは力半分と言っている状態である。

契約者の美緒に残り半分程力が移されてしまっている状況で精霊に勝つのは難しい。

父も動くことが出来ないのを探しに行くのも無理だろう。

このままでは押されるのも時間の問題だ。

…腕一本でもくれてやるか…?

などと口クでもない事を考えた時、不意にボタンと祭壇の陰にあった扉が開かれる。

パツと振り返った誰もが驚きに目を見開いた。

魔王の婚約者であり、助け出そうとしていた人物が肩で息をしながら立っていたのだ。

薄い服に身を包んだ体は少し痩せたように思う。

両手の枷と右足に繋がれた枷から伸びる重そうな鉄球を抱え、苦しそうに息をしている。

「チツ！」

ハインツは舌打ちすると美緒へ炎を放った。

訳も分からず向かってくる炎に驚いた表情を見せる美緒。

…傷付けさせるものか！

テレポーション
瞬間移動で美緒の背後に移動したラオは己のロープで小さな体を包むと、迫り来る炎を片手で制し、握り潰した。

炎を消されたハインツが顔を歪める。

「
…美緒、
」

そつと囁いた名に顔を上げた愛しい恋人をラオは抱き締めた。

扉を開けると、火の海でした。

…って笑えない冗談だわ！

扉を開けた先は赤い炎が燃え盛る教会の中だった。

広い場所とは聞いていたけれど教会って何?! どうして燃えてるの?!?!

しかもあのムカツク男と対峙しているのは会いたかったヲオ。

ちょっと離れた場所にセスさんと、見覚えのある女性がいる。

訳が分からない。

朱色の髪の方は大きく舌打ちしたかと思えば、その手からいきなり

炎があたしに向かってくる。

…え、え?!

ビックリして体が硬直してしまう。避けなきゃと頭では分かっているのに体は動かない。

…ぶつかる!

ギュツと目を閉じると同時に温かな何かが全身を包み込んだ。

それだけで不思議と体の力が抜ける。

何度も何度も触れ合ったこの温かさをあたしは知っている。

「
…美緒、
」

低く柔らかな声に目を開ければ視界いっぱい黒が広がった。

ギュツと力強く抱き締めて来る大きな腕に安堵の息が零れ落ちる。

…会いたかった。ずっとずっと会いたかった。

寄りかかれれば抱き締める腕に力がこもって、より一層体が触れ合う。

独特の南国系の少し甘い香りに包まれると涙が零れそうになった。

「迎えに来てくれたのね…ラオ。」

ずっと呼んでた。心の中で。

会いたくて、迎えに来て欲しくて。

堪えたかったけれど、少し熱の高い指が目元を撫でる感触に耐え切れず涙が零れ落ちてしまった。

君の名を呼ぶ 救出編（15）

ラオが指の腹で優しく涙を拭ってくれる。

けれどそれもずっとは続かない。

パツとローブで包まれると厚い布越しにゴウゴウとすごい音が聞こえて来た。

「忘れてんじゃねえぞ！」

アイツの激怒した声に顔を上げるとラオは真っ直ぐに向こうを睨み付けている。

が、すぐにあたしを見下ろしてふっと目元を和ませた。

あたしの手首に触れると鉄の重い枷がボロボロと崩れ落ち、抱えていた鉄球から足の枷も同様に砂みたいに空気に消えていく。

「此れを着てろ。」

言葉と共に厚いローブがふわりと肩にかけられる。見た目とは裏腹に羽のように軽い。

「え？でも、ラオは……」

「心配無い。」

くしゃりと一度頭を撫でられて大きな手が離れて行く。

アイツの冷たい金の瞳と視線が絡み合うと、ここ数日の間でも見たことがないくらい冷たい色をしている。

ゾツとしたがすぐにあたしを隠すようにラオが目の前に立つ。

あの男が両手をこっちに向けた途端に物すごい勢いで炎が唸りを上げながら突進してくる。

けれどラオはそれをアッサリと片手で払い散った。

「な…っ?!」

男が驚いた顔をする。

「安心しろ。すぐに終わらせてやる。」

一歩二歩と歩き出すラオとは反対にアイツは後退って行く。

やっぱり魔王相手じゃ勝つなんて難しいものね。

アイツの手から放たれる炎はラオが生み出す雷に飲み込まれて消える。

ラオは何故か片目を閉じてアイツを見つめていた。

攻撃も前ではなく背を狙うような動きをしており、アイツが必死にそれを食い止めているようだ。

時折ラオのすぐ傍を炎が通り過ぎるからあたしはもうハラハラしっぱなしなのに、ラオは何時もの無表情で平然としている。

黒い足が歩を進めると足元に燃え広がっていた炎が音もなく消えた。

「先程までの威勢は如何した。」

ラオの雷によって傷だらけになったアイツが苦しげに睨み付けて来る。

背中に受けた傷が一番深い。破けた服の隙間から変な模様みたいな刺青が僅かに覗く。

「クソッ！」

「己を過信し過ぎたな。」

「殺せ、情けを受ける気はねえ！」

アイツは傷だらけの体で叫ぶように言う。

炎を出さなくなると教会内を包み込んでいた炎が徐々に掻き消えていく。

だけどラオは目を細めるだけで全く攻撃する気配はない。

いよいよ歯を噛み締めて怒り出す男にラオは静かに言い放った。

「俺が手を下さずとも、迎えが来る。」

「何…?」

訳が分からないと言いたげな男が眉を顰めると同時に、膝を付いていたアイツの足元に何かが現れた。

それは大きな扉だった。

観音開きの真つ黒な扉には光る紅い字で何かが文字が刻み込まれている。

ラオは男から離れるとあたしの傍に来て、ギュッと抱きしめて来た。胸に頭を押し付けるような形になったから見えるのはラオの黒い服だけで、音もほとんど聞こえなくなる。

それでも微かにアイツの悲鳴みたいなのが聞こえた気がしたけれど、ラオが腕の力を緩めた時にはもう何もなかった。

「どっとなったの…?」

アイツがいただろつ場所を見つめていたラオが振り返る。

「あれは精霊を喰らっていた。それは二十五代目の魔王が禁忌とした事柄：破った者は闇に引き摺り込まれる。」

「闇？」

「ああ。世界に在る全ての恐怖と苦痛が混じり合う場所だ。」

どちらにせよ、あの男は罪に見合うだけの罰を受ける。もう戻っては来れまい。

静かにそう呟いたラオはそつとあたしの頬に触れた。

「…会いたかった、リア。」

コツンと額が合わさって、そこから温かい体温が広がっていく。

久しぶりだけど慣れた体温が心地良い。

「…あたしも…あたしも、会いたかったよ。ラオ。」

嬉しくて笑みが零れた。

何ヶ月も離れた訳じゃないのに、すごく長い間離れていた気がする。

ラオに抱きついているとコホンと咳が一つ響いた。

……………あ。

「此方の事を忘れているだろうか？」

呆れ顔のセスさんとクスクス笑っている女性がいた。

女性はあたしが捕まる前にセスさんと一夜を共にした人だ。

何である人もいるのだろうかと思っていると抱き締められる腕に力が加わる。

隠すようにキュツと両腕で包まれながらラオを見上げればちょっとだけ不機嫌そうな顔でセスさんを見ていた。

「邪魔をするな。」

「忘れる方が悪い。全く、お前ももう少し大人にならなければラナに嫌われるぞ?」

「っ!それは無い!!」

なんだかセスさんにかかわれてるラオが可笑しくて笑ってしまっただたしに、眉をハの字に下げたラオがしょんぼりと見下ろしてくる。

大丈夫だよと言う代わりにポンポンと腕を叩いてあげては嬉しそうに擦り寄ってくる。

404

「さて、無事ラナも戻った事だ。お前達は城に戻るのだろうか?」

「ああ。だがその前に、」

あたしから離れたラオが、いきなりセスさんの横っ面をぶん殴った。

ちよ、え、ええええーっ?!?!

何で殴ってるのラオ?!

あんどぐり口を開けたあたしを余所に訳知り顔でセスさんは殴られた
頬を擦っている。

痛いな、なんて笑ってるから本当に痛いのか分からない。

ラオはあたしを城の外に出して危険に曝したからだと言っけど、そ
れはあたしも同意の上でだったんだけどなあ。

セスさんは気にした様子もなく何時も通りのちよつと悪戯っ子みた
いな笑みを浮べて低く笑う。

「ほら、早く戻れ。キアランが首を長くして待ち兼ねているはずだ。」

「言われなくとも分かっている。…お前らは後から来い。」

若干苛立ちの含んだ声音でラオはそう言うと、あたしの元へ戻って
きて抱き締めて来る。

瞬間移動テレポーションを使うのだろう。

そつと服を掴んだあたしの手にはラオの大きな手が重ねられ、少しの
浮遊感がふわりと襲った。

君の名を呼ぶ 救出編（16）

「王、リール様！」

聞き覚えのある声に閉じていた目を開ければ、側近の安堵した表情が飛び込んで来た。

泣きそうな、だけど嬉しそうな、そんな顔だ。

「すまない、長く城を空けた。」

「いいえ、そのような事構いません。王とリール様が御無事であればよろしいのです。」

胸に手を当てて微笑む側近にあたしもじんわりと涙が出そうになる。

ああ、色んな人に迷惑かけちゃったんだ。

みんなこんなにもあたしの事を心配してくれていたのに。

側近の穏やかな目を見たら自然と謝っていた。

「ごめんなさい…心配かけて、」

「全くです。もう勝手に城を抜け出さないと御約束していただけますか？貴女が城からいなくなると全員仕事に手が付かなくなってしまうって城中大騒ぎになってしまうのですから。」

「あははっ…うん、もう勝手に城を出ないわ。約束する。」

「なら今回は大目に見ましよう。」

ニツコリ笑う側近にあたしも笑った。

それから侍女に促されるまま浴室に向かう。

そんなに離れてないのに浴室の前まで着いてくるラオに、あたしはまた笑ってしまった。

侍女もちょっとだけ困ったような顔をしていたけれども流石に浴室の前に来ると、殿方は此方までですなんてハッキリラオを追い出していた。

少ししょんぼりしてたラオの姿を思い出すと笑いそうになる。

何だか今回の事で余計に過保護になっちゃったかもしれないわね。

侍女にも散々心配したとお小言をもらった。でも嫌な気は全然しない。

それだけ心配してくれていたんだって分かったから。

綺麗に体を洗ってもらった時に両手首と右足首の枷で擦れた傷を見た侍女が悲鳴を上げた。

「この傷は一体どちらで…?!」

「あ、どっちも枷で擦っちゃって。」

「リールア様のか弱い肌になんて事を…!後で必ず王に治療して頂いて下さいませ!」

「う、うん。」

ズイと迫られて、頷いたあたしに侍女は納得して、傷に沁みないよう優しく洗ってくれた。

そんなに言うほど痛くはなかったけど傷口を改めて見ると赤くなっ

ているし、擦れて結構皮が剥けてたりして痛々しい。

これじゃあ驚くのも無理ないかも。

髪もキチンと洗ってもらって、サッパリした気持ちで浴室から出る。

そこにはやっぱりラオがいた。ただ服は何時もの黒いものではなく、かなりラフな格好だった。

普段から黒い服ばかりなのでラフな格好は珍しい。

マジマジと見ていたあたしに小さく笑って、ラオはあたしを抱き上げた。

「わっ?!」

しかもいきなり瞬間移動。

廊下からいきなり寝室に移動していた。

せめて一言くらい断りなさいよ、と文句を言っても口の端を引き上げて笑うばかり。

優しくそっとベッドの縁に下ろされて座れば、ラオが跪いてあたしの足首を見た。

自分で言うのもなんだけど結構痛そう。

ラオが傷に触れるとピリリと痛んだけれど我慢していればほんわり温かくなって痛みが引いた。

両手首もそうやって傷を治してくれて、傷跡どころか赤みもなくなっている。

「ありがとう。」

あたしの言葉にラオは首を振り、跪いたままあたしの手と自分の手を絡めた。

いわゆる恋人繋ぎになった手にラオがキスしてくる。

「…恐ろしかった。」

ぼつり。そう呟く。

「美緒がいなくなつて、父といる事を知つて…勾引かされて。怪我

をしていたらと思うと恐ろしくて堪らなかった。」

「…ごめん。」

「否、悪いのは俺だ。美緒が謝る必要は無い。不安にさせてすまなかつた…。」

筋張った手が控えめに頬を撫でる。

けれどその手をすぐにグツと握り締めたラオは、それを胸元に当ててあたしを見上げた。

「俺と、婚姻してくれ。」

「！」

慌ててラオの顔を見たら、泣きそうな顔をしてる。

不安げで、だけどとても強い光を湛えた紅い瞳が見つめてくる。

「美緒を俺の物にするように、俺も美緒の物になりたい。」

「いいの？ラオはそれで…後悔しない？」

「そんなものするものか。美緒と一緒に居られるだけで良い。」

真っ直ぐな瞳に涙が零れてくる。

…嬉しい。

温かくて、優しい何かが心に溢れてきた。

「……いいよ。あたしも、ラオと結婚したい。」

「っ、美緒…！」

ギュッと抱き付いてくる大きな体をあたしも抱き締め返す。

ラオも、今のあたしと同じ気持ちだといひ。

嬉しくて、温かくて、優しくて、ほんの少し切ない。

普通の人みたいな出会いじゃないし、結婚も、きっとその後の生活もあたしの思い描く、普通とは違うだろうけど。

でもそれでもいいと思う。

ラオがいて、側近がいて、城のみんながいて、たまにセスさんが来てラオと喧嘩したり、勇者が来て大騒ぎになったり…きっと色々なことがまた起きる。

苦しいこともあるし、悲しいこともある。

だけど、そんな時も二人一緒に居られたら越えられる気がするから。

「ラオ。」

「…何だ…？」

「二人で、幸せになろうね。」

あたしの婚約者で契約魔は、強くて、優しくて、でも子どもっぽい魔王様。

こんな素敵な人と結婚するんだよって家族に言えないのが悲しいけど、それも今度話そう。

力強く頷いてくれたラオが嬉しくってまた涙がぼろぼろ頬を伝い落ちる。

美緒は泣き虫だな、なんて笑うけど仕方ないじゃない。

嬉しくて死んじゃいそうなくらい本当はもう幸せなんだもの。

見上げたラオの頬にも、一筋の雫が伝ったのがあたしにも見えた。

永久の契約（1）

重いカーテンの隙間から漏れ差し込む朝日に目が覚める。

体を包み込む温かさに身動きみじろをするとギュツと抱き締められ、逞しい胸板に顔が寄った。

…ん？胸板？

やや寝惚けていた頭で目の前のラオを見れば視界に飛び込んでくるのは何も見に着けていない、少し浅黒くいくつかの傷跡が残った綺麗な体。

顔を上げればまだ眠っているラオの普段よりもちょっとだけ幼い顔がある。

あたしはラオが寝間着代わりによく着ていたワイシャツを着ているだけで、中は思いつきり素肌。

何で、なんてボケたことは言わないし、考えない。

昨夜の事を思い出してしまえば顔が真っ赤になるのが自分でもよく

分かった。

「……っ……！」

ああああっ、穴があれば入りたいわ！

恥かし過ぎる……！！

一つになれた喜びもあるけれど同じくらいに羞恥心が頭を悩ませる。

どんな顔して顔合わせればいいの……？！

うあー……と言葉にならない呻きを上げてしまっていたからか、あたしを抱き込んでいたラオが小さく唸りながら身動いだ。

ピシリと固まったあたしとは裏腹に少し眠たげな紅い瞳が瞼を押し上げて開かれる。

「……ああ、美緒……起きた、か？」

あたしを視界に捕らえるとそれはもう蕩けるような微笑を浮べて低く甘やかな声で囁いてくるものだから、パクパク金魚みたいに口を

開けたり閉じたりしてしまつたあたしの心臓は壊れそうなくらい高鳴つた。

真つ赤なあたしを見て、一瞬きよとんとしたラオも、すぐにクツクツと笑つて強く抱き締めてくる。

「鼓動が早いな…。」

「っ、うるさい！」

昨夜と同じ台詞で茶化してくるラオの胸を叩けば余計楽しそうに笑われる。

もう！ラオつてこんなに意地悪だつたかしら？

それでもそんなラオも好きだなあなんて思つちゃうんだからあたしもかなりダメね。

ラオの腕の力が緩くなつた隙に起き上がつてベッドから立ち上がる。時間は分からないけれど何時もよりだいぶ遅いことだけは窓の外にある太陽の位置で予想出来るが、ラオだつて魔王なのだから仕事を滞らせてはいけない。

服を着替えなきゃ…。そう思つて一歩踏み出すとガクンと膝の力が抜けた。

「え？」

しっかり歩こうとしたつもりなのに床に座り込んでしまった自分の足に目を見開く。

そ、それに、その…あらぬ所に鈍い痛みが…っ。

ベッドに寝転んだままのラオが小さく笑う。

昨夜は激しくしてしまっただからな、無理も無い。

悪びれた様子もなく悪人面でニヤリと口元を引き上げた。

「優しくって言ったじゃない！」

「善処はすると言ったが絶対とは言っていない。そもそも美緒が愛らし過ぎるのがいけない。」

「ア、アンタねえっ…！」

平然とそんなことを言うラオには敵わない。

ベッドから起き上がったラオはズボンを履いていて、シーツごと座り込んでいたあたしを抱き上げる。

ふとそういえばベッドも汚れてないし体もさっぱりしていることに気が付く。

もしかしくともあたしを風呂に入れたのは十中八九ラオだろう。

あー、もう、ダメ、恥かし過ぎて死にそうっ！

赤い顔を見られたくなくてラオの胸元に顔を押し付けていると頭上から柔らかな笑い声が少しだけ降ってきたが、気付かないフリをした。

テレポーション
瞬間移動でラオがあたしの部屋に移動すると待機していた侍女が隣室から入室して来る。

ラオとあたしの格好を見たら何があつたかなんて一目瞭然なのに、顔色一つ変えない。さすが侍女。

でもそつと椅子に下ろされ、ラオが部屋から出て行くと数人の侍女がズイッと顔を寄せてきた。

ビックリして背を引くあたしにキラキラした目が見つめてくる。

「リールア様、漸く王と結ばれたのですね！」

「ああ、何と喜ばしい事でしょう!」

「今日は料理長に言って夕食は豪華にして頂かなければ!」

当のあたしよりも嬉しそうにキャッキヤと話す侍女たちに茫然としてしまった。

そこまで言われるとは…。

楽しげに話しながらそれでもしつかりあたしの着替えなんかを済ませる侍女の手際の良さに感心しつつも、蚊帳の外にいるような気がしてならないのはあたしただけだろうか？

ぼんやりと侍女の姿を眺めていれば隣室に続く扉がノックされる。

ラオが出て行った方とは違い侍女がいつもいる部屋だ。

促せば静かに開かれた扉の向こうから入って来たのはあの美女だった。

「あ、」

なんて言っているのか分からず困ってしまった。

あたしは彼女の名前も知らないのだ。

彼女は穏やかに笑うとあたしの前で跪き、あたしの左手に触れる。

「王との事お喜び申し上げますわ、リールア様。私の名はエミリア、恥かしい事ながら娼婦として生きておりました。こんな私が願うには過ぎたる願いと重々承知しておりますが、どうか…私をリールア様の侍女として御仕えさせてくださいませ。」

「え？ええ？！」

突然の事に驚いてしまっているとラオが部屋の中に戻って来た。

あたしとエミリアを見るとああと納得した様子で真横に歩いてくる。

「え、ちょ、ラオ。これどういこと？」

「そのままの意味だろう。」

「いや、だから…。うーん、えっとエミリアはあたしの侍女になりたいのよね？」

「はい。」

前にすっかり会った時には睨まれてなかったっけ？

何でいきなりこんな事を言い出したんだか…。

「どうしてあたしに？」

「恐れながら私は初めて御会いした時、リールア様に嫉妬していたのでございます。大元王のように素晴らしいお方に大切にされ、護られていたリールア様と自分を比べておりましたの。」

「大元王？」

「父の事だ。」

エミリアの話はあたしにはよく分からなかった。

あたしにとっては、あの時のエミリアは恋する女の子に見えだし、必死な姿は可愛いなあって思ってた。

だけどエミリアは娼婦だったから蔑まれたり他の娼婦から妬まれたりもしたらしい。

そんな中であたしだけはエミリアに笑いかけた人だった、とか。

…別にあたしは娼婦だからとか、そんな理由で誰かを馬鹿にしたり見下したりなんてしないわ。

生きるためにしなければいけなかったのなら仕方のないことだし。

あたしもそれについて色々言えるほど出来た人間でもないし。

「分かったような、分からないような……とりあえずエミリアが侍女になる事に反対はしないよ。ラオがいろいろ言ってくれるならあたしは構わないけど。」

「俺も構わん。」

「では、侍女として働かせていただけるのですね……！」

本当に嬉しそうに笑うエミリアになんだか照れ臭くなる。

「よろしくね、エミリア。」

「はい、リールア様。全身全霊を以って御仕えさせていただきます。」

朝日にキラキラと輝くエミリアは、あたしが出会ってきた女の人の

中で一番綺麗だった。

永久の契約（2）

「え、夜会？」

あの後遅めの朝食を済ませたあたしたちは、滞っている執務を済ませるために執務室に訪れていた。

とは言え仕事をするのはラオで、あたし自身はこれと言ってすることはない。

まあロクに歩けないあたしを気遣ってくれるのは嬉しいのだけれど瞬間移動テレポーションではなく、何故か歩いて移動するのは止めて欲しい。

お姫様抱っこされてるあたしは使用人たちの視線を感じるたび恥かしくって仕方がない。

なのにラオは上機嫌。何度言っても瞬間移動を使ってくれないのだ。

側近に言っても「王はリアルア様を見せびらかしたいのですよ。」と笑っただけで注意してすらくれないんだもの。

「ええ、王とリールア様の婚姻を一足先に貴族達へ発表するための夜会です。」

「そんな大事にするの？」

「勿論。魔王の結婚は生涯に一度きりですから全て絢爛豪華に執り行われるものですよ。」

一度きり。一生を共にする花嫁はたった一人。

一夫多妻制かなと思っていただけけど、どうやらそれは魔王の好きに出来るらしい。

ほとんどの王は妻を一人しか持たなかったみたいだが、たまに何人か妻を娶った王もいたとか。

∴女の敵だわ。

一生懸命執務をこなしていたラオがふつと顔を上げる。

「夜会自体開かれるのは一週間程後だな。」

「リールア様はダンスを踊れますか？」

「あー、オクラホマミキサーとかジングスカンとかなら中学で踊ったけど…。」

「「？」」

二人同時に首を傾げる側近とラオにやっぱりそれじゃないよね、と溜め息が零れる。

彼らのダンスと言えば社交ダンスに決まってる。

オクラホマミキサーとかジングスカンなんて踊るわけないわ。

何でもないと首を振れば側近はまだ不思議そうな顔をしながらも頷いた。

「では明日から練習致しましょう。」

「明日から？」

「ええ。今日は動けないでしょうから。」

「……っ！」

ニツコリ笑顔で平然と言う側近にあたしは何も言えなかった。

御顔が真っ赤ですよールア様、なんて茶化してくるから、その腹を思いつきり叩いてやる。

どうせ彼らにとってあたしの一撃は痛くも痒くもないんだろっけど、これは気持ちの問題。

あたしと側近のやり取りを見ていたラオは小さく笑ってから執務に戻る。

することもなくお茶を楽しんでいると執務室の扉がノックされた。

「…入れ。」

洋紙から顔を上げずに入室を促すラオ。それから一拍間を開けて扉が開かれると初めて見る人が立っていた。

「失礼致します陛下。」

「七日後の夜会の警備について御話があると聞きましたが…。」

片方はたぶんラオよりも長身で、体格も良く、外見的には二十代後半から三十代前半くらいの屈強な男の人。

もう片方は細身でやっぱり長身の綺麗な女の人。どちらもあまり派手ではないシルバーの鎧っぽいのに身を包んでいる。

二人はあたしを見るとおやつという顔をし、その場に跪いた。

何度やられてもこの跪かれるという行為には慣れない。

「初めましてリールア様、俺は魔兵団の団長を務めますダリクと申します。」

「私は副団長のエレノアです。」

「あ、初めまして…というか立つてもらえるかな？その、あたしあんまり跪かれるのは好きじゃないの。偉いのはラオであって、あたし自身はただの人間なんだし。」

あたしの言葉に二人は顔を見合わせた後に立ち上がった。

そうして聞いた通りのお方だと笑う。

どうやらあたしは、気取らず、誰に対しても公平に接する心優しい王の花嫁、という噂が広がってるらしい。

確かに気取ってはいないけれど、誰に対しても公平ってほどでもないし心優しいかどうかはちょっと分からない。

誰に聞いたのか聞けば城の使用人たちだと言う。

「侍女達はリールア様とお茶会出来る事が嬉しいと申しております。庭師もリールア様が褒めてくださり、とても喜んでくださるからと毎日草木の手入れに精魂込め、料理人達も時折遊びに訪れてくださると楽しそうに教えてくれました。」

「あの頑固者で気難しい料理長ですらリールア様のお願いは聞き入れるとか。あ、そういえば料理人が新しいお菓子の試作品が出来たのでまた食べに来て欲しいと申しておりますよ。」

二人の言葉にラオが呆れたような表情であたしを見る。

う、わ、分かってるわよ。

城の中とは言えあまりうるつくなと言われてたのに、あたしは好奇心に勝てずよくラオの執務中に城内を探検していた。

その時に侍女とお茶をしたり、料理人たちにお菓子をこっそり貰ったり、庭園で庭師と花の話をしたり…うわあ、考えてみたら全然ラオの忠告を聞いてなかったわ。

側近がラオの横でプツと噴出した。同時にラオが溜め息を零す。

「…リア。」

「い、ごめん。あんまりにもヒマで…でも侍女も一緒だったわ！」

「そういう問題では無いだろう…。」

あたしとラオのやり取りに側近だけでなく兵団の二人までもが笑い出す。

「リールア様は面白い人ですね。」

「王が気に入るのも頷けるな。」

「…で、警備の件だが。」

何時までも笑っている周りに溜め息を零しながらラオが本来の用件を口にする。

そうすれば穏やかな空気は一転して執務室に凜とした空気が広がった。

あたしは混ぜつても仕方がない気がするけれど、守ってもらうのだからしっかり聞いておくくらいはした方がいいかもしれない。

持っていた洋紙を積み重ねたラオが机に肘を付く。

「恐らく貴族は全て来るだろう。ざっと計算するだけで四・五百人か。」

「出入り口の守備だけではなくリールア様の周囲にも何人が配置した方が宜しいかと。」

「ああ、そうだな。」

「では私が侍女の一人として同行致しましょうか？」

「頼む。後、使用人の中に何人が入れておけ。」

サクサクと進んで行く話にあたしはぶつちやけ着いて行けない。

ぽかんとその様子を見ていれば側近が冷めてしまった紅茶を新しく淹れ直してくれた。

永久の契約（3）

見上げればニコリと笑う側近がいて、無理せずともよろしいのですよと言つ。

だけど守ってもらつ以上はある程度警備内容を知つておいた方がいいじゃない。そう言ったあたしに、側近は緩く首を振る。

「リールア様が気になさる必要はありません。貴女の自由を制限してしまわぬように護衛するのが彼らの務め、逆にリールア様が気を遣われては彼らも萎縮してしまいますよ。」

「そうかしら…?」

「そうですよ。貴女はもう少し肩の力を抜いて下さい。」

ぼんぼんと両肩を軽く叩かれて、何とも言えない気持ちになる。

あたしは色んなことをしてもらったりしているが、それらに何か返したいと思うのに、返せるものがない。

そう言えばきつと側近は首を振るだろうけど。

側近は穏やかに笑ってなら、と内緒話をするように口元に指を当てて小さな声で囁く。

「家族と思っていただければ結構です。」

「家族？」

「此の城に仕える者達は皆、互いに家族同然に思っております。ですから、リアルア様も城に仕える者たちを家族だと御思い下さい。家族同士に気遣いなど無用でしょう？」

「…すごい大家族ね。」

「ええ、何せ大黒柱は王ですから。」

想像したら笑ってしまった。

ラオが父、あたしは多分花嫁、セスさんはおじいちゃん、側近や兵団、使用人たちはみんな兄弟。

そう思うとすごい大家族だね。でも不思議と家族という言葉はピッタリ当てはまる。

花嫁だけど、きつとあたしは未っ子なんだろうな。

側近と二人して笑っていたらラオに名を呼ばれる。

振り返るとちょっと不機嫌そうなラオとこっちを見てる兵団長たちがいて、側近はおやおやと笑っていた。

「何を話している？」

どうやらあたしと側近が内緒話していたのが気に食わないらしい。

それでも側近相手だからか怒ったりはしない辺り、ラオがどれだけ側近を信頼しているか見て取れる。

「何でもないわ。ただ、城の人全員を家族だと思えって話。」

「家族？」

「ええ、リアル様は我々に気を遣い過ぎますのでどうせなら全員家族だと思われたら、と。」

「ちなみに大黒柱はラオねって言ったのよ。」

「……それは、少し酷く無いか？」

何とも言えない表情でそう言ったラオにまた笑ってしまった。

でも城の人たちはとても優しく、こんな大家族も悪くないと思う。警備の話を終えただろう二人は仕事があるからと執務室を出て行く。

「あ、もし城内を歩かれる場合は何時でも俺達にお声をかけて下さい。」

「御一人で歩かれては王も執務が手に付かなくなってしまうから。」

なんて茶化すのも忘れない。

本当に何と言うか、兄弟という例えは間違っていないかもしれない。また執務をやり出すラオと側近をぼんやり眺めつつ、あたしは小さく笑った。

結婚する前から大家族になってしまったみたいで少しだけ可笑しく

て、でもホツとするような嬉しさと言つか温かさみたいなものに包まれている気がしてくすぐったい。

ラオとの結婚に不安がないと言ったら嘘になるけれど、結婚して、王女としてラオの傍に立つことができるようになったら本当の意味でみんなと家族になれると思う。

まだまだ名前を知らない人や会ったことのない人もいる。

その人たちもあたしとラオの結婚を祝福してくれたら嬉しい。

そうして、その人たちと家族のように暮らしていけたら……、

「…嬉しそうだな、リア。」

想像を膨らませていたあたしにラオが微笑しながらそう言う。

そんなに嬉しそうな顔をしてたかしら？

側近もニッコリ穏やかに笑ってそうですねなんて同意してる。

「ふふっ、秘密。」

「俺に隠し事をする気か？」

「そんな大層なものじゃないもの。」

責める言葉とは裏腹にラオの声は静かで優しい音色を響かせる。

そう、いつか：結婚して子どもが出来て、年を取って老いたときに懐かしい思い出として話せるようになるまで、これは秘密。

クスクス笑うあたしにラオは軽く肩を竦めて執務に戻る。

ふわりと風に舞って飛んできた洋紙が足元にヒラリと落ちた。

拾い上げると何も書いていないもので、どうやら羽ペンの試し書きやペン先につく紙の繊維を取るときに使うものようだ。

その紙が落ちたことに気付かないくらいラオは執務に集中している。

あたしは手持ち無沙汰だったので丁度よく飛んできたその紙で折り紙を折ることにした。

作るのはあたしが小さい頃から一番好きだったバラ。ちょっと面倒だけれど慣れてしまえばツルと同じで指が勝手に動いていつて見慣れた姿を形作っていく。

最後に周りを少しだけ巻いて完成したバラは久しぶりだったせいか気持ち歪になってしまった。

ただ少し硬い羊皮紙を使ったにしては思ったよりも綺麗な出来栄

えだろつ。

ちよこんと手に乗ったバラの折り紙をのんびり眺めていれば、執務を終えたラオが机から離れてこちらへ来る。

あたしの手の上の折り紙を見て不思議そうに首を傾げた姿が少し可愛い。

「何だ其れは。」

「折り紙よ。一枚の紙を何度も折って作るの。」

ラオの手にそつと移す。大きい手の中にあるバラは少しだけ小さく見えた。

色々な角度からバラを見た後にラオは関心した様子で「…器用だな。ポツリとそう呟く。」

日本人は全体的に小さいし、馬鹿みたいにキツチリしているところがあるから、折り紙のように手先の細かさを求められるものは得意なのだと思う。

折り紙に興味を示したラオは白い洋紙を数枚持ってきて、そのうち一枚をあたしに、もう一枚を自分の前に置いた。

「もしかして折り紙やってみたいの？」

「ああ。…こんなに精密で美しく作る過程も見てみたい。」

「そっか。じゃあ少しずつゆっくり教えるわね。」

きつと手の大きなラオは折り紙に苦戦するだろうから。

本当はもっと簡単なものから始めるべきなんだろうけど、きつとラオはこのバラが気になってるはずで、簡単なものでは満足してくれないだろうし。

ラオが理解して綺麗に折れるまで何度も繰り返し一つずつ折る場所を教えていく。

案の定大きな手はもたついてしまっていて上手に折ることが出来ない。一生懸命折ろうとしているのに洋紙は少しぐちゃっとなってしまうている。

それでも結構な時間をかけてラオはバラを完成させた。

あたしのもものよりもずっとヘチャリとしていて、何度も何度も折り直した後が残ってしまったっていたけれど、よく出来ている。

多少不恰好なのは仕方が無い。

折り紙なんて初めてやったのだし。

ラオ自身はあまり納得していないらしく自分の折ったバラとあたしの折ったバラを見比べては眉を少し下げていた。

「…難しい…」

「そうね、そう簡単に覚えられるものでもないし。けど初めてにしては上手よ？」

「そうか…？」

「ええ。あたしが初めて折ったときなんて、もっとグシャグシャで敗れちゃったりしたもの。」

あたしの言葉にラオは紅い瞳を丸くさせて、リアもそうだったのかと聞いてくる。

誰だって初めては上手くないもの。何度も繰り返し練習するからこそ上達するのだ。

永久の契約（4）

何度も練習すればラオだって上手くなれるわ。

そう言うと少しだけ笑ってそうかと頷く。

「…ねえ、このバラもらっていい？」

「？ 構わないが…其れで良いのか？」

少し不恰好なのを気にしているらしい。

「うん。これがいい。」

「なら俺はそつちを買っても良いか？」

「もちろん。」

お互いに折ったバラを交換する。

他人から見たらきつとあたしたちのこういう行動は稚拙に見えるかもしれない。

折り紙なんてそもそも子どもの遊びだしね。

それでもこんな風に何も気にせず穏やかに話して過ごせる時間はあたしにとっては何よりも大事。

ラオはあたしの手に乗っていたバラと自分の持っていたバラを両手で包み込むとパツと消した。

持っていたら潰れてしまいそうだから寝室に移動させたと言い、あたしをまた抱えて執務室を出て行く。

開け放たれたままの扉の向こうでは可笑しそうに笑う側近の姿が一瞬だけ見えたものの、文句を言う前に歩き出したラオによって視界が移り変わる。

一瞬の浮遊感を残して訪れた場所は今まで入ったことのない部屋だった。

丁寧に下ろされ、上手く歩けないあたしをラオが支えてくれる。

やや薄暗い部屋は広く、壁にかけられた絵は全て肖像画ばかりだ。

右側には男性の肖像画が、左側には女性の肖像画が。どこまでも続いているのではないかと思うほど通路のように長い部屋の壁から静かに見つめてくる。

一番手前には見覚えのある顔があった。

「セスさん…？」

ラオと似た漆黒の服に身を包んだセスさんの肖像画は何時も彼が浮べているニヒルな笑みを湛えている。

「此処は歴代の魔王と、その配偶者の肖像画が保管してある。」

「え、じゃあこの綺麗な人がラオのお母さんなの？」

「ああ。」

配偶者、と言って指差された左側にかけていたすごく綺麗な女性の人の肖像画に驚く。

モデルなんかと比較にならないくらい綺麗で、穏やかな笑みで見つめてくる女の人は、確かに全体的な顔の造りがラオによく似ている。

目元なんかはセスさんに似ているから結局は悪人面なんだけど、ね。歩き出したラオに促されてあたしも肖像画を一つ一つ見ながら進む。歴代の魔王はみんな美形。どうして魔族は美形率が高いのかしら？時折女性の魔王なんかもいたりして、けど不思議なくらい誰もが幸せそうに微笑んでいる。

長い長い通路のような場所を進んで行くと袋小路になった終点は少し広いスペースが設けられていた。

そこには他の肖像画よりも大きな絵が一つ、飾られていた。

描かれている全身真っ黒な男性と全身真っ白な女性は互いに寄り添い合い、まるで子どもの成長を見つめる親のように温かな瞳をしている。

「初代魔王とその配偶者だ。」

「…綺麗な人たちね。」

魔王は世襲制だと言う。

つまりここに飾られている人たちはみんなラオのご先祖様たち。

彼らがいたから、今あたしの隣りにラオがいて、こんな風に一緒に生きることが出来ている。

それは数え切れなくらいの偶然から生まれた奇跡なんだと思う。

「美緒。」

「？」

「魔族の人生は長い。人間からすれば気が遠くなる程の時間だ。」

「…そうね。あたしの方が先におばあちゃんになっちゃっわ。」

だからあたしとラオでは、あたしの方が先に逝ってしまうのだろうか。

見上げた先にある紅い瞳が静かに見つめ返してくる。

…この人を遺して一人で逝くなんて…。

そんな悲しいことはしたくないのに。

「…一つだけ、方法がある。」

「え？」

「契約を深めれば良い。俺の血を美緒に分け与える…そうすれば美緒は俺と同じだけ生き永らえられる。」

だが選択するのは美緒だからとラオは初代魔王の肖像画を見て言った。

ラオの言う方法を使えばきっとあたしは長生き出来るのだらう。

けれど、それは同時に人間ではなくなると言うこと。

人間の生を捨て、ラオと共に永い時を生きるということ。

怖くないなんて虚勢は張れない。

せいぜい百年くらいしか生きられない人間と違って魔族、特に魔王はかなりの長生きだ。

そんなに永い時をあたしは生きていられるだらうか？

大切な人たちが逝くのを何度も看取ることが出来るだらうか？

もしも独りになってしまったら…そう考えるだけで永い時間を生きることがとても恐ろしいことのように思えてならない。

そっと逞しい腕に引き寄せられてラオに抱き締められる。

温かな体温に包まれるだけで胸が痛む。

この温かさから離れるなんて考えたくない。

考えて、考えて、それでもやっぱりあたしが帰る場所は今もここしかない。

「…あたしも、ラオと一緒に生きていたい。」

ぎゅっと抱き締めて来る腕に力がこもる。

「本当は怖いわ。永い時間を生きていけるのか、不安で仕方ない。でもやっぱりあたしはラオが好きだから、一番大切な人を置き去りにして逝くなんて嫌なもの。」

「美緒、」

「ただし、条件を一つ付けて。もしもラオが死んだら、あたしも死ぬようにして。」

「…分かった。」

ラオがいなくなつて、たった独りで生きるなんてきつと無理だから。ゆっくりと体を離れたラオは自分の右手首を切った。

溢れてくる血にビックリしたけれど、手を差し出すよう促され、あたしはラオに左手を差し出す。

ラオの傷よりもずっと浅い傷が付けられる。不思議だが痛みはない。あたしの血が出ている左手首とラオの血が出ている右手首の傷が重ねられる。

よく分からない言葉をラオが呟くとピリリとした痛みと共にパツと光が弾け飛んだ。瞬間、全身を何かが駆け抜けていく感覚がした。

手首同士が離れるとそこには傷どころか血の一滴すら見当たらない。

「…これで、終わり…?」

「ああ。だが此れは本来、婚姻を済ませてから行つ。俺も美緒もまだ婚姻していない分少し不完全だが、婚姻の儀さえ済んでしまえば完全なものになる。」

「そっか。」

結婚したら本当にラオとずっと一緒に生きることになるのね。

傷のなくなった手首を見ていたら、ラオが腕を掴んできてキスをした。

嬉しそうに細められた紅い瞳にあたしも嬉しくなる。

何時まで続くか分からない永遠だけど、どちらかが死ぬその瞬間まであの肖像画のように寄り添っていられたらいい。

初代魔王の配偶者が浮べる幸せそうな笑みにあたしは笑い返した。

甘い毒牙(1)

あたしとラオが執務室に戻ると側近が酷く驚いた顔であたしを見た。無理もないわね。本来は結婚してからするはずの事を先にしちゃったんだもの。

「王！如何いう事ですか！！」

側近に詰め寄られるラオがさすがに可哀想で二人の間に分け入る。

「いいの、あたしが決めたことだから。」

「ですが……」

「あたしはラオやみんなと一緒に生きたいの。」

はつきり伝えれば側近は困ったような、少し嬉しそうな、複雑な表情を浮べた。

何度か口を開けたり閉じたりした後、側近はややキツイ眼差しであたしを見つめる。

「リールア様、其の契約を成されたという事はもう後戻りは出来ないのですよ？」

「しないわ。あたしはこの先ラオ以外とは結婚しないもの。」

ソファーに腰掛けたまま抱き付いてくるラオの腕を撫でながら言えば、嬉しそうな声で頭上から名前を呼ばれた。

そんなあたしたちの様子に側近は寄せていた眉間の皺を解すように指を当てて、はあと溜め息を零す。

御願いですから事後報告だけは御止め下さい。

ちよつと疲れた声音と呆れの含んだ視線にラオとあたしが一緒に頷く。

胡乱げな目は最後に一度目を閉じると深い溜め息の後に開かれる。

その時にはもう先ほどの疲労の色も呆れの色も消え失せていた。

翌日の予定を話し出す側近とラオの会話をぼんやり聞き流しつつ、あたしの頭の中は全く別のことでいっぱいだったりする。

…ドレス着て社交ダンスなんて踊れるかしら？

こちらに住み始めてからはドレスを着る機会も増えたけれど、だからと言ってあの裾の長いドレスを着たままヒールを履いてダンスなんて出来る自信がない。

今でもたまに裾を踏んで転びそうになったところをラオに支えてもらうときもある。

……不安だわ。

明日から始まるダンスレッスンに溜め息が漏れた。

すると大きな手が綺麗な指の腹で頬を優しく撫でて行く。

「如何した、リア？」

顔を上げるとラオと側近が不思議そうにあたしを見ている。

ダンスレッスンが不安なの、なんて言えなくて何でもないと笑って

おく。

別にラオに心配かけたくないと言っつんじゃなくて、ただ単にあたしの意地というか、恥かしいから黙っておくだけ。

ラオは少しのジツと見つめてきたけれど、あたしが何も言わないことを悟ると手を頬から頭へ滑らせて髪を梳くようにそつと撫でてきた。

とりあえず心の隅っこでモヤモヤしている不安を無視してラオに寄りかかる。

腕が腰に回ってより近づけるように抱き締めて来る。

夕食は珍しく食堂ではなくラオの私室で摂り、これは多分動けないあたしへの配慮なのだろうけど、ラオはあたしを浴室まで抱き上げて来て、侍女にバトンタッチ。

ビックリすることに侍女はみんな力持ちだ。

あたしがそのことについて聞くと彼女たちはカラリと笑った。

「リールア様は人間ヒトであらせられますが、私共は魔族でございます。体の造りも強固さも似て非なるものなのですよ。」

つまり、あたしは人間で彼女たちは魔族ということ。それは例えあ

たしの寿命が延びても変わらないってこと。

結局あたしの体は人間のままだからいきなり腕力や脚力が上がる！
なんてことはないらしい。

数人がかりで体を洗われると今日は小さめのバスタブ　それでも
普通の風呂よりは大きいと思う　でのんびりと湯船に浸かる。

その間に侍女があたしの髪を洗い、水分とタオルで拭き取ると綺麗
に包んで湯に付かないようにしてくれた。

一人になれるよう侍女が浴室から出て行くとバスタブの縁に頭を乗
せてホツと息を吐く。

「…社交ダンスかぁ。」

本当に踊れるかしら…？

高校生で社交ダンスなんてする訳もないから、全くのド素人なんだ
けど。

ふう…と思ったよりも重い溜め息が零れ落ちた。

お湯に浮かぶ赤い花を指先で弄んでいると浴室の扉が開く軽い音が
響く。

侍女はあたしが呼ぶまで入って来ないはず。

誰？と振り返ってギョツとする。

「ラ、ラオ?!」

腰にタオルを巻いただけのラオがスタスタと歩いてくるではないか。

どう見ても入浴する格好にしか見えないのだけれど、今のあたしはタオルなんて巻いてないし、傍に一応タオルはあるが巻くためにはどちらにしても一度バスタブから出なければならぬ。

湯船に花が浮いていて良かった。

沢山散りばめられた花や花びらのお陰でお湯の中はほとんど見えな
い。

それでもやっぱり恥かしくて胸元を隠し、バスタブの中で丸くなる。

「こらっ、何で入ってくるのよ?!」

「入りたかった。」

「そういうことを言ってるんじゃないの?!」

傍で体を洗い出すラオに文句を言ってもどこ吹く風。悪びれた様子もなくモコモコと泡立ったスポンジみたいなもので若干遊びつつ洗っている。

もう恥かしかるような関係でも無いだろう。

なんて平然とした顔でのたまった。

確かに昨夜は、まあ、口に出して言うにはちょっと憚ることになったわ。

ラオに愛されたのは別にいいのよ。

問題はそういう雰囲気でもないのに一緒にお風呂に入るってこと！

言い返す言葉がなくてバスタブの中で小さくなってる間にもラオは体を洗い終えて、髪へ移る。手早くそれも終わるとあたしの方に振り向く。

これは十中八九入ってくるつもりね…。

パツと後ろ向きになればちゃぷんと水音がして水面が揺れ、ラオが入って来たことを告げる。

一生懸命離れようとするあたしの努力も空しく、逞しい腕にグイと引き寄せられて、ラオの膝の間に収まった。

首筋に顔を寄せてスンと鼻を鳴らしたラオは低く笑う。

「首まで真っ赤だな。」

「っ、ラオ！いい加減に…っ」

顔を上げた瞬間、唇が重なり、ちゅっと可愛いリップ音を立てて離れて行く。

…もっ、本当にやめて…。

上機嫌なラオとは裏腹にあたしの心臓は鼓動が早くなり過ぎて死んでしまいそうだ。

諦めて寄りかかれば肩をぎゅっと抱き締められる。

子どもっぽいクセにふとした時に男なんだと思わされるから、心臓に悪い。

肩からするりと下りて行く手を思わず叩いてしまった。

「リア、」

「ダメ、絶対ダメ。明日からはダンスの練習があるのよ？また休ま

せる気??？」

「……………」

「そ、そんな顔してもダメなものはダメよ！」

しょんぼりと悲しげに見つめられてウツと心が揺れる。

あの紅い瞳にあたしは滅法弱い。これは自覚してるけど直せるものじゃないのよね。

あたしが迷っている間にラオは何か思い付いたのか楽しそうな笑みを浮べる。悪人面に浮かぶニヤリとした笑みに嫌な予感がした。

「明日動ければ問題無い。」

「え?」

「安心しろ、負担にならないようにする。」

「ちょ、え、ええっ?!」

艶めいた動きで頬を撫でてくる手と、近付いてきたラオの唇によってあたしの抗議は掻き消されてしまった。

甘い毒牙(2)

ふわりと頭を撫でられる感覚に目が覚める。

数度瞬きを繰り返していたあたしの視界にスツとラオの顔が映り込んだ。

「大事無いか？」

囁くように声を落として聞いてくるラオに頷く。

入浴後のラオはシンプルな白いシャツを着てベッドの縁に腰掛けていた。

まだ少し体が火照っている気はするものの、それ以外は特にこれと言って不調はない。

優しく髪を梳いていくラオの指を感じながらほっと息を吐くあたしに、ほんの少しだけ眉を下げて謝ってくる。

「すまない、その…抑え切れなくて…。」

「はあ…。もういきなり入って来ないなら良いわ。」

「……………」

「こら、返事なさい。」

素直過ぎるラオに笑ってしまった。

何だかんだ言いつつ許しちゃうのがあたしのダメなところね。

ベッドから起き上がろうとすれば自然な動作で背に手を添えて支えてくれる。

喉が渴いたと言ったあたしに水差しからグラスに水を入れ、渡してくれた。

魔王だと言うのにこんな甲斐甲斐しいんだから、見た目と中身のギャップが激し過ぎる。

そんなところも可愛いなあなんて思えてくるからあたしも相当末期かしら。

「美緒、食事は摂れそうか？」

「…そうね、ちょっとお腹空いたかも。」

「そうか。」

立ち上がったラオがあたしを抱き上げて寝室の中にあるテーブルセツトの椅子に、まるで壊れ物を扱うように静かに下ろす。

そんなに丁寧にしなくてもと思う反面、大切にされていると実感できて嬉しくもある。

ラオが手をかざせば何時見ても手品にしか見えない様子でパツと料理がテーブルに広がった。

夜ということもあり、のぼせたせいもあって沢山は食べられなく、サツパリとしたサラダやスープなんかを食べただけでお腹いっぱいになる。

あたしの食べる量が少なかったことが気になるのかチラリとラオの視線が向く。

言葉の代わりに大丈夫だと笑いかければ安心したように食事を再開する。

溜め息を零したくなるくらい綺麗な所作で食事を平らげたラオは最初と同じように手をかざして食器を消した。

そうしてあたしをベッドへ戻すと一緒になってシーツに潜り込んで来る。

ぎゅっと抱き締められればラオの体温がゆっくりあたしに広がってきた。

ほっと心が休まる。

やっぱりラオの傍が一番落ち着く。

さっきまで寝ていたのに、もうウトウトと睡魔があたしの意識を引っ張った。

「……………美緒、寝たのか…？」

黙り込んだあたしに勘違いしたのかラオがそう問いかけてくる。

まだ完全に眠ってはいなかったけれど、温かな体温と柔らかなシーツに包まれて微睡みかけていたあたしの瞼はピッタリくっついて開かない。

大きな手が優しく、酷くゆっくりとした動きで背を擦り、ラオがつむじにキスをした感覚がした。

「…もう、何処にも行かないでくれ…。」

消え入りそうな声が震えながら懇願する。

…ああ、起きて大丈夫よって言わなきゃ…。

そう思うのに微睡みの中にある体はピクリとも動いてくれない。

まるで離さないとしても言うかのように、ラオはあたしを抱き締める
と小さく息を零してシーツを手繰り寄せる。

「…お休み、美緒。」

額に柔らかな感触がして、あたしの意識は途切れていった。

翌朝、目が覚めても寝る前と全く変わらずあたしはラオに抱き締められていた。

少し早く起きてしまったのか重いカーテンの隙間から漏れる光はまだ薄暗く、ラオもぐっすりと眠りこけている。

少し上にある顔は起きている時と違って少し幼い。それに悪人面もちよつと形を潜^{なり}めている。

こんな無防備な姿を見せてくれるのも、あたしだから…なのよね？

ちよつとの優越感と喜びを感じながら眠るラオの頬を撫でる。

「…大丈夫、ずっとここに居るわ。」

だってあたしの契約魔で、婚約者で、恋人なのはラオだけだもの。

額にかかって邪魔そうな黒髪を退けてあげていると、ふつと紅い瞳が開いた。

寝起きだからぼんやりとした紅はあまり焦点の定まっていないうながらも、あたしを見つめてくる。

ややあつて何度が瞬きをしたラオが微笑した。

「おはよう、ラオ。」

「…お早う、美緒。」

甘えるようにコツンと額同士を合わせてラオが呟く。

とても良い夢を見た。

どんな夢なのか聞いても笑って答えてはくれなかったけれど、本当に嬉しそうな笑みを浮べたから余程良い夢だったみたい。

起き上がってベッドから出たら後ろから抱き締められる。

着替えなきゃいけないのになかなか離してくれない。

「ラオ、着替えなきゃ。」

「ん…もう少し此のままです。」

「仕方ないわね。」

城を抜けて離れていた期間が長かったからか、昨日からずっとこんな調子だ。

あたしが離れようとする抱き締めてきたり頭を撫でてきたりととにかく構いたがる。

まあ、あたしも寂しかったからラオがこうやって甘えてくるのが嬉しいのだけだ。

あまり時間が過ぎると側近にお説教されるのはラオなので、促すように腕を軽く叩けば名残惜しそうに離してくれた。

寝室から隣りへ続く扉を開けばあたしの部屋があつて 本当はこの部屋は離れているのだがラオが魔力で部屋の扉を繋げてしまったのだ 控えていた数人の侍女が立ち上がる。

その中にはエミリアの姿もあつた。

「お早う御座います、リールア様。」

「さあ、お召し物を替えましょう。」

「今日からダンスの御稽古がございますので動きやすい物にしませんと。」

ニコニコ笑いながら慌ただしく動く侍女たちを目で追いかけていた
ら髪を梳いていたエミリアと鏡越しに目が合う。

丁寧に何度も毛先まで梳いたあたしの髪はサラサラだ。

「リールア様の今日のご予定はご朝食を摂られた後、陛下と執務室
へ。ご昼食まではそちらにいらして下さいませ。ダンスの御稽古の
時間になりましたらお迎えに上がります。」

「エミリアが来てくれるの?」

「はい。私ではご不満でしょうか…?」

悲しげに曇った瞳に首を振る。

「ううん、そうじゃないの。嬉しいわ。ついでに調理場にも付き合
ってもらえる?」

「調理場ですか?」

「そう!午後のお茶に食べるお菓子を頼んでおかないとね。」

「あら、リールア様ったらもうお茶のお話ですの?」

クスクスと可笑しそうに笑うエミリアにあたしも笑う。

なんだか以前話していた高飛車なイメージが全然なくなって、良いお姉さんだ。

あたしの髪の毛先を少しだけ巻いてクルクルさせ、いわゆるお嬢様ヘアーにしたエミリアは前髪の一部をヘアピンのようなものを数本使って留める。

すっきりとしながらもクルンと巻かれた髪が柔らかく上品に見えた。ドレスに着替えて薄く化粧も施され、エミリアたちに見送られて扉を開ければ既に着替えを済ませたラオが何やら大きな姿見を見ながら立ち尽くしている。

あたしが戻って来たことに気付いて振り返ったラオは眉がちよっと下がっていた。

甘い毒牙(3)

「どじしたの？」

「否…寝癖が…、」

黒髪の右こめかみ部分の髪がひよこんとハネている。

何度も直そうとしたらしいが昨夜すっかり乾かさなかつたから寝癖がついてしまったらしい。

しょんぼりしている姿に笑ってしまう。

魔王が寝癖と格闘してるなんて一体誰が想像するかしら？

ひよこひよここと揺れる寝癖を鏡越しに恨めしそうに見つめるラオを椅子に座らせ、前髪を留めていたピンを一本取ってラオのこめかみ部分の髪を耳にかけて留める。

右側だけ後ろへやったため左側とアシンメトリーになって結構いい

感じだわ。

「はい、これなら平気でしょう？」

されるがままになっていたラオが鏡を見て、直った寝癖と留められたピンを嬉しそうに撫でた。

「揃いだな。」

ヘアピン一本でそんなことを言う可愛い魔王に噴出しつつ、朝食を食べようと促せばすぐに席に戻ってきて何時ものように食事を出してくれる。

食事中もピンが気になるのか何度も触れたり鏡を振り返ったりするラオに苦笑してしまった。

まるで新しい晴れ着を買ってもらった子どもみたい。

少しゆったりと朝食を摂った後、執務室へ行けば既に準備を整えた側近がラオを待っていた。

「お早う御座います、王。リールア様。」

「ああ。」

「おはよう。」

穏やかな笑みを浮べる側近へ返事を返してラオが机に座り、執務が始まる。

後から来たエミリアに紅茶を淹れてもらって執務が終わるのを待つ。

城を抜け出していたのが嘘のように以前と変わらない生活だ。

元の世界のように分刻みで動くことも、将来何の役にも立たない勉強に粉骨する必要もない。

柔らかなソファに腰かけているうちにあたしは何時しか眠り込んでしまった。

リールア様が眠ってしまつと侍女は別室から毛布を持ってきてそつ

とかけて差し上げた。

王も一度顔を上げ、紅い瞳を優しく細めて執務に専念する。

そんな光景を私は何とも言えない気持ちで眺めていた。

それは喜びであり、寂しさであり、幸福感であり、切なさでもある。

ソファで眠る花嫁は綺麗や可愛いという言葉よりも、どちらかと言えば凜とした雰囲気のある少女で、顔立ちも貴族の娘たちに比べればやや劣るだろう。

しかし誰に対しても分け隔てのないその性格は貴族たちに決して無いもの。

そんな彼女と初めて邂逅を交わしたのは私がまだ十二にも満たない頃で、王も十に満たぬ御歳であられた。

突然書庫から彼女と連れ立って出て来た王にはどれほど驚かされた事か。

少々気が強く、物怖じのしない彼女は王の未来の婚約者だと述べ、一日足らずで姿を消してしまわれたが：王はそれから何十年もの間彼女を探し続けられた。

そうして漸く見つけた彼女は記憶の中と寸分違わぬ姿で今王の傍に
いる。

時には諦めかけ、自暴自棄にもなった王ではあったが彼女を探した事は間違いではなかったのだろう。

この世界に彼女が訪れてからは気候も安定し、王も真面目に執務を行うようになり、途中色々問題が生じたものの王と彼女の関係は恋人からもうすぐ夫婦となる。

幼い頃から王も何かと厄介事を起こす方ではあられるが、彼女の場合は巻き込まれる性質らしい。

本人に自覚がない分、下手に目を離すことが出来ない。

王が常に彼女を傍に置きたがる理由も分かる気がした。

人間という弱い種でありながら何か他者を惹き付ける彼女は危なっかしい。

大人びているかと思えば城を探検したり、こっそり調理場に紛れ込んで菓子を貰う子どもっぽさも併せ持つ彼女に王も時折気を揉まれている。

それでも決して、動き回るな、と御命じにならない辺りに王の愛が感じられる。

彼女の行動を縛りたくないのでしょうか。

他者へ関心を持たなかった王が唯一愛し、愛された女性。

これを喜ばずして何としようか？

王が物心付く頃より御仕えしている身としてはこれ程素晴らしい事は無い。

以前の触れれば切り裂かれてしまいそんな程の冷たさや鋭さは消え、角の取れて丸くなった王は各魔族の長たちからの支持も厚くなった。やはり愛する人が出来ると変わるものだ。

手の焼けなくなった事は嬉しいけれどほんの少し寂しさも残る。

だが、きっとこんな気持ちもすぐに消えてしまうだろう。

王と彼女の間に子がお生まれになったら私にも教育係として声がかかるだろうから。

こんな御二人の子どもであれば男女関係無く活発で御転婆な子になるに違いない。

早くお目にかかりたいものだ。

「…キアラン。」

名を呼ばれてふっと我に返れば王が私を見上げていらっしやる。

どうやらぼんやりしている間にかなり時間が経ってしまっていたらしい。

「申し訳ありません、少し呆けてしまっておりました。…次は此方にお目を通し下さい。」

持っていた書類の束からサインの必要なものだけを抜き取って差し出す。

王は私を暫しジツと見つめた後に紅い瞳を細めて書類へ視線を落とされた。

どうやら私が呆けていた事についてのお咎めはないらしい。

視線を上げれば相変わらず幼子のように無防備に眠る彼女の姿がある。

この平和な生活を維持するため、彼女との日々を守るために王はこれからも精を出されるのだろう。

微力ながらも私もその意に沿えるよう努力しなければいけない。

そのためにはまず、気を取り直して書類整理を励むことにするとしよう。

甘い毒牙(4)

「ア、リア…。」

「…ん、」

静かに名を呼ばれ、頬を優しく撫でられる感覚に意識がゆっくりと浮上する。

重い瞼を開ければ横に座って腕を伸ばしてくるラオの姿があった。

ソファアの肘置き部分に寄りかかって眠ってしまったらしい。

ぼんやりとラオを見つめていると微かな苦笑と共に額にキスが一つ、落ちてくる。

「もう昼食の時間だが…起きれそうか？」

さらりと髪を梳いていく手が眠気を誘うくせに、起きろだなんて酷いじゃない。

目を擦りながら頷くあたしの手を取って「赤くなっってしまったぞ。」と目元にまたキスをする。

昼食は食堂で食べるからソファーから起き上がらなければいけないけれど、寝過ぎたのか少し体がダルい。

それすら見越していたかのようにラオはあたしを抱き上げた。

昨日のような横抱きではなく、右腕に座らせられる格好はよく父親が小さな子どもを抱き上げるときあの抱き上げ方だ。

横抱きも恥かしいけれど、これも微妙に恥かしい。

と言うか、片腕に人一人をよく乗せられるなあと感心してしまう。

それなりに筋肉もあるラオだけれど細身でスラリとしているから、どこにこんな力があるんだと聞きたくなる。

ドアを開けるときの以外は背中に添えられた左手のおかげで安定しているし、一応ラオの首に腕を回しているため怖さはない。

ただ通りすぎる使用人たちの穏やかな笑顔を目にするたびに羞恥心のボルテージが上がっていくが。

結局食堂まで下ろしてくれず、あたしは食堂のいつもの席に下ろさ

れ、あたしの左斜め前にラオが座る。

そうすると給仕の侍女たちがせつせと料理を持ってくるのだ。

「いただきます。」

しっかり食事の挨拶をして料理に手を伸ばす。

ラオはいつもあたしが食べ始めるまで料理に手を出さない。

本人曰く一緒に食べたいからとか…本当にどこまで甘えたんだか。寝起きで沢山は食べられないが一口飲んだスープは熱過ぎず冷た過ぎず丁度いい温度で、寝起きの体には優しい。

ちょっと強面の料理長はなかなか気難しいが、彼の手が生み出す料理は繊細で美しく、それでいて食事をする人への気遣いが行き届いている。

まさに一流の料理人だ。

文句なしに美味しい昼食を食べ終え、ご馳走様でしたと挨拶をするとそれを合図に皿が片付けられて行く。

「料理長に美味しかったって伝えてもらえるかしら？特にメインのチキンはバジルの香りと合っていて、とても良かったって。」

「はい、必ずお伝え致します。」

「ありがとう。」

給仕の侍女はニコリと笑って頷き、皿を持って退室していった。

代わりに出されたグラスには食後の飲み物として、ラオには赤ワインが、あたしには果実から作られたジュースが出される。

食事時は基本的にお酒を嗜み、あまり水は飲まないらしい。

未成年でお酒なんてほとんど飲んだことのないあたしにはちょっと無理なので、ジュースを用意してもらってる。

…子どもっぱいとは思っけど飲めないんだから仕方がない。

ラオは特に気にした様子もなく、あたしがお酒を飲めないと分かるかと勧めてくることもなくなり、逆にあたしの周囲にお酒を置くこともなくなった。

グラスの中身を飲み干して昼食はおしまい。

ラオは別の執務に行くために立ち上がった。

あたしはこれからダンスのレッスンがあるから今日はこれから別行

動になる。

「練習、無理はするな。」

ちゅっと軽いリップ音を立てて頬にキスをしてくるラオに、あたしもお返しとばかりにキスをし返した。

「分かってるわ。ラオも執務がんばってね？」

「ああ。」

嬉しそうに笑って上機嫌に食堂を出て行く。

そんなラオの後ろに側近が静かに付き従った。

魔王も大変ね。仕事に赴く二人を見送ってあたしも迎えに来たエミリアと共に食堂を後にした。

向かう先は城の中でもまだあたしの行ったことのない場所なのか、通る廊下は見覚えがない。

十数分程歩いてようやく辿り着いたのは広いダンスホールだった。

外へ出られるように大きな窓があり、そこからテラスへ続いている。
大きなシャンデリアも細やかな装飾が美しい。

まさにシンデレラなんかで出てきそうな舞踏会などにピッタリのホールにあたしはビックリしてしまった。

「ここで夜会をやるの？」

「ええ。とても素晴らしいですわ。私も見た時には驚きのあまり声も出ませんでした。」

コロコロと可笑しそうに笑うエミリアに思わず頷いて同意してしまう。

「一体どれだけお金がかかってるんだか。」

「一般家庭に生まれたあたしには豪華過ぎて少し居心地が悪いくらいだわ。」

ダンスホールを眺めていれば一人の男性が入って来た。

「お久しぶり〜、リール様。元気そうだねえ。」

ニコニコ笑いながら手を振って歩き寄って来る姿は見覚えがある。

「あっ！」

インキュバスの長、リヴィアだった。

会うのはかなり久しぶりだが、相変わらず女ウケしそうな甘いマスクで人懐っこい笑みを浮かべている。

以前会ったのはラオとの会食のときだったし、あの時は何だかんだあってすぐにお開きになってしまったし。

リヴィアはあたしの前で立ち止まると胸に手を当てて礼を取った。

「王と婚姻するんだってー？遅いよ全く！」

「どうしてあなたが怒るのよ。…そういうえば、あの人はどうなったの？」

「ん〜？あー、アイツねえ。大丈夫、生きてはいるよー。」

「生きて、は、ね。」

殺すなどは言ったけれど、その後どうなったかは聞いていなかった。

が、この様子ではあまり口に出して言えない状況なのではと不安になる。

そんな気持ちが顔に出てたのかりヴィアは笑った。

甘い毒牙(5)

「心配しなくても耳を塞ぎなくなっちゃうようなことはしてないから、安心してよ。同族だし、リールア様の優しさを無駄にしたりしないからさあ。」

「そつ…ならいいけど。」

それでも内容は教えてはくれないらしい。

笑ってはぐらかしてしまいうりヴィアに溜め息を一つ零してから、気持ちを入れ替える。

「あなたがいるってことは、ダンスを教えてくれるのはあなたなのね？」

「うん。オレってば結構ダンス上手いんだよー？」

「なら早く始めましょう。綺麗に踊れるよう練習しなきゃいけないもの。」

あたしの言葉にリヴィアは一度目を丸くして、それからふっと何時もの軽い笑みとは違う柔らかな微笑を浮べた。

本気なんだね、リールア様。

そう呟くと一度手を叩いて空気を払拭させたリヴィアとのダンスレツスンが始まった。

独特な三拍子を元にして踊る曲はワルツで、他にも曲はあるがラオがワルツを好んでいるため夜会ではワルツが最も多いらしい。

いくつかあるステップの中でもターンはヒールで回らなければいけないのがキツイ。

「ナチュラルターンとアウトサイドチェンジが出来ればワルツは出来るよ。女の子はヒールだから大変かな？」

「…ゆっくりやって。」

「もちろん!」

一、二、三と拍を数えながらゆっくりとした動きで足を動かす。

男性にリードされる形なのに足元が見えないからちよつと怖い。

見ている分には華やかな社交ダンスも実は大変なのね。

ついつい視線を足元へ落としていけば、リヴィアから「踊ってる時に相手の顔を見ないのはマナー違反だよ。」と怒られてしまった。

たった二つのステップだけれど予想よりもずっと難しい。

特に拍の取り方が独特でたまにリヴィアの足を踏んでしまう。

あたしが謝ると最初はみんなそうだから気にしないでと笑顔で返されたが、やっぱり何度もあると申し訳なく思った。

元々運動神経も普通なあたしにとって、初めて踊るワルツのステップは足が追いつかない。

どれくらいやったか分からないけどリヴィアが休憩しようと言い出して、ようやく一息吐けた。

「うーん、リールア様って運動苦手なんだねえ。」

「…分かってるわよ。下手くそだって。」

「えー？下手じゃないけどなあ。なんか気張り過ぎちゃって失敗し

てるって感じじゃない？」

踊り続けて暑いのか服の襟元をパタパタさせるリヴィアの言葉に、
うんと頷く。

失敗したらって思うと体が緊張して余計に固くなってしまっ。

「…こんなじゃラオと踊るなんて無理だわ…。」

転んだり、足を踏んだりしてしまってワルツどころじゃなくなりそ
う。

「リールア様は考えすぎ！。ダンスは楽しむために踊るんだし、結
構みんな踊ってるときは見てないものだよ？」

「そっかしら？」

「そうそう！それに王もダンスは上手だからしっかりリードしてく
れるって！…！」

いざとなつたら王に任せちゃえば良いんだよ。

そう笑うリヴィアにちょっとだけあたしの心も軽くなった。

ダンスは楽しむために踊るもの。

確かにそうかもしれない。色々考えてるからよくないんだ。

休憩を終えて差し出されたリヴィアの手を取る。

身を任せながら、三拍子のリズムを頭の中で思い浮かべ、踊る。

腕を引かれるままに踏み出せば自然と足が動いてさっきまで踏めなかったステップが綺麗に流れていった。

「ほら、言ったとおりでしょ？ダンスは楽しまなきゃダメだって。」

「ホントね。ビックリだわ。」

「よし、今日はこの調子で…っわ?!」

リヴィアが何か言いかけたとき、目の間を何かが物凄い速さで通り抜けていった。

驚きのあまり手が離れて後ろへ倒れそうになる。

しかし予想していた痛みも衝撃もなく、目を開ければ見慣れた黒が全身を包んでいた。

「ラオ？」

名前を呼ぶときゅっつと抱き締められる。

少し離れた場所にいるリヴィアが「驚きましたよ陛下。」と文句を言う。

「いきなり剣を投げる事ないでしょう？危ないなあ。もしリールア様に当たったらどうするんですか？」

「俺がそんなへマをすと思うか？」

「思いませんが、オレだってダンスのためにいるんですから怒らないで下さいよ。」

リヴィアがラオに手渡したのは細身の長剣だった。

もしかしなくても、さっき目の前を駆け抜けたのはあの剣らしい。

ぎゅっぎゅっを抱き付いてくるラオを見上げれば紅い瞳が不機嫌そうに眇められている。

どうやらリヴィアとあたしの距離が近過ぎたみたいだ。

…ワルツだから仕方ないんじゃない？

そんなことを考えていれば紅い瞳と視線が絡み合う。

「…楽しそうだった。」

不満げにそう言うものだから笑ってしまった。

「ごめんね、初めて上手く踊れたら嬉しくて。…でも全部ラオと一緒に夜会で踊るためだから、ちょっとだけ我慢して。ね？」

「……夜会では他の男と踊るな。」

「もちろんよ。ダンスを覚えたら、もうラオ以外とは踊らないわ。」

「なら良い。」

あたしの言葉に満足そうに頷いて、頬にキスをするとやっと離してくれた。

そうしてダンスホールの壁に寄りかかるとあたしとリヴィアのダンスレッスンを眺め出す。

恐らくあたしが気になるんだろう。

執務は良いのかと思ったが、側近が迎えに来ないところを見ると終えたのかもしれない。

壁に寄りかかったまま動きそうもないラオ。

あたしとリヴィアは一度顔を見合わせてから、どちらともなく苦笑して練習へと戻った。

甘い毒牙(6)

今日一日はワルツの練習だけだった。

だけ、とは言ってもやはり踊り慣れていないものだから動きがぎこちなかったり、遅くなってしまうたりと突っかえてしまった。

明日もあるから夜寝る前にもう一度練習しておこうかしら？

ラオにさっさと帰れと追い返されたりヴィアを見送って、ヒールで疲れた足を揉んで解していればやってきたエミリアに見つかり浴室へと連行されてしまう。

「慣れないダンスでお疲れでしょう？」

しっかり筋肉を解しませんと明日に響いてしまいますわ。

ニコニコ笑顔であたしは服を脱がされ、全身を洗い、髪を洗い、バ

スタブに突っ込まれる。

その間に他の侍女はマツサージの準備をしたり、あたしの髪を乾かして油を塗ったりと動き回る。

そろそろいいかなとバスタブから上がったあたしはそのままマツサージへ直行。

ちょっとお腹が減ってしまっているけれど、しっかりバッチリマツサージを受けることに。

侍女たちはとつてもマツサージが上手で受けているうちにあたしは眠り込んでしまった。

「……さま、リールア様？」

優しく肩を揺すられて目を開けるとふんわり笑ったエミリアが視界に映りこむ。

いつの間にか着替えも済まされ、淡い色合いのワンピース姿になっていた。

寝る前ならまだしもこれから夕食があるので流石にネグリジェには着替えられない。

「…ごめん、寝ちゃってた…？」

「ええ。ダンスの練習でお疲れなのでしょう、仕方ありませんわ。」

「でも明日もあるんだよね。」

「練習が終了するまでマッサージは欠かせませんね。」

クスクス笑ったエミリアの手に背を支えられながら起き上がる。

これ以上ラオを待たせていては悪いから、侍女に手早く髪を梳いてもらうと浴室を出た。

何時からいたのかそこにはラオが佇んでいて、出て来たあたしを見てフツと口角を上げる。

スッキリした顔をしているな。

…入浴もマッサージも済ませたからね。

疲れていた足なんて忘れてしまいそうになるくらいマッサージは心地良かったし。

かく言うラオとて入浴を済ませたのかラフなシャツ姿だった。

優しく大きな手が背に添えられたかと思えば一瞬で食堂に移動した。

椅子へ座り、ラオも座ると給仕の侍女たちがせつせと皿を手に来て

夕食を並べては深々と頭を下げて食堂の壁際まで下がる。

何度見てもちよっと慣れない光景だわ。

食事の挨拶をして料理へ手をつける。

ラオも料理を食べ始めたけれど、すぐに食べ終えて、まだ食事途中のあたしの様子をジッと見つめてきた。

「ラオ、どうかしたの？そんな見られると食べ難いわ。」

あたしの言葉にラオは謝罪の言葉を口にした。

「ああ、すまない。喜びの余りつい…、」

「？何か嬉しいことでもあったの？」

普段無表情な魔王の喜色が浮かぶ顔に首を傾げてしまう。

ラオは目元を和ませて、あたしの髪に触れた。

「リアと婚姻の儀を行う日が待ち遠しい。一刻でも早く夜会を開いて、リアが俺の花嫁なのだと知らしめたくてな。」

そうして恭しい所作で髪にキスするラオに自分の顔が赤くなるのが分かる。

壁際にいた侍女たちの溜め息にも似た吐息が聞こえた。

お願いだから人前で何でもかんでも平然と言わないで欲しい。

嫌ではないけれど、恥かし過ぎて顔が上げられなくなってしまっ。

そんなあたしの様子を知ってか知らずが、心底上機嫌に指先で髪を梳いたラオはどうぞと言う風に食事の続きを促した。

悪人面に浮かぶ艶やかな笑みを直視できないまま、あたしは食事を食べ終える。

侍女が皿を下げ、のんびり飲み物を飲み終わるとラオは手を握ってきた。

どうかしたのかと思う前にふわりと浮遊感が体にかかり、パッと視界が変わって寝室のベッドの上に二人揃って座り込んでいる。

「こら、いきなり瞬間移動テレポーテーションしない！」

注意してもどこ吹く風。大きな犬のようにあたしを抱き締めて首筋に顔をすり寄せて来る。

ラオはいつでも全身で好意を伝えてくるから、無理矢理引き離せない。

だってあたしだってラオのことが好きだもの。

好きな相手と触れ合つと、とても心がほっとする。

穏やかで温かな気持ちになれる。

本当に怒ってる訳じゃないって分かってるからか、耳の傍でラオの低い笑い声があった。

「美緒、そういきり立つな。」

「心臓に悪いわ。ビックリするじゃないっ。」

「ククツ…怒った顔も可愛らしい。」

紅い瞳で覗き込んできて、そんなことを言うラオ。

ああ、もう、本当に勘弁して。あたしの負け。

恥かしくてラオの口を手で押し留めてみても、喉の奥で笑いながら優しく外されてしまう。

そうして労わるように指の一本一本にキスをして、自分の指と絡めた。

あたしと違い少し筋張っていて長い指は実は少し皮膚が硬い。

ほとんど見ることはないがラオは剣も扱えるらしい。

よく剣道などをしていると手にマメが出来るっていうから、きつとラオの手もマメなんかが出来て、治って、そうやって皮膚が硬くなつたんじゃないかしら。

綺麗な外見だけけれど男らしい手は、あたしの好きな部分の一つ。

この手に頭を撫でられたり、目元や頬を優しく指の腹で擦られると心が落ち着く。

もちろん全くドキドキしてないとは言えないが。

それでもこの手が絶対にあたしを傷付けないって分かってるから、しっかり重ねることも出来る。

関節一つ分くらい違うラオの手を眺めていれば額に柔らかな感触が触れた。

それがラオの唇だと気付いたときにはワンピースではなくネグリジ

エ姿になっていた。

手は繋いだままに、ラオがベッドへ寝転がる。

あたしも引かれてその上に転がった。

抱き締めて来る腕を拒否する理由なんてなくて、むしろ触れ合った部分から伝わる温かな体温に眠気が襲ってくる。

マッサージの途中で寝てしまっていたクセにあたしの体はまだ眠たいらしい。

何度も髪を梳きながら頭を撫でていく感触が余計に眠気を誘う。

「…今日は疲れただろう。もう休め。」

遅しい胸板に顔を寄せればトクリ、トクリ…とラオの心音が聞こえて来る。

規則正しいその音を子守唄代わりにあたしは静かに目を閉じた。

甘い毒牙（7）

柔らかな朝日が重厚なカーテンの隙間を抜けて部屋を薄く照らす。

真っ白なシーツの海に埋もれながら目を開ければ、恋人の安らかな寝息と共に美しい艶のある黒髪が視界に入る。

幼子のように自分の腕の中で眠る美緒のつむじに優しくキスを贈った。

きっと、美緒は知らないだろう。

毎朝目覚めて、その度に腕の中にいる恋人の存在に泣きたくなくなる程嬉しいと思っっているだなんて。

愛しい人が傍にいる。ただそれだけで心満たされるのだ。

ずっと、一生、傍にいられる。

幼い頃は婚姻など如何でも良いものであったが、美緒と出会ってからラオにとってそれは特別なものになっていた。

愛する人と望む限り共にいられる儀式。

愛する人を自身のものし、自身を相手のものとする儀式。

それは甘い誘惑によく似ている。

漸く婚姻することが出来る。早く早くと急ぐ気持ちを押し留めるも、何とも表現し難い喜びに胸が震えた。

後一週間もしない内に夜会は開かれ、そこで美緒は己の花嫁として貴族たちの前に立つ。

不安がないと言えば嘘なのだろう。ダンスの練習途中に時折オリヴィアから作法や礼儀を聞いている横顔が揺らぐのを知っている。

彼女は元の世界で極普通の人間として暮らし、生きてきたのだから不安を感じるのは当たり前だ。

唯傍^{ただ}に居て欲しい。血生臭い政治に身を置く必要もない。

笑ってくれれば、幸せだと微笑んでくれるだけで良いのだ。

無理をしないで欲しい。

だがそう言っても美緒には笑って、ラオの隣りに立っても恥かしくないようにしなきゃダメなもの、とはぐらかされてしまう。

そんな風に言われては強く言えないではないか。

シートに散っている黒髪を整えるように指で梳けば、絹の如くさら

りと纏まる。

瞼の裏側に隠れてしまっている黒曜石の瞳を想像しながら目元を優しく撫でた。

すると小さな唸り声を発して身動き、己の手を掴んで頬を寄せてくる。

魔王である自分を恐れることも、忌み嫌うこともない。

何時だって見つめてくる瞳は温かく自分を受け入れてくれていた。

だからこそ、この恋人を守りたい。

強く、優しく…けれど弱い少女が自分を愛し続けてくれる限り、全力で彼女の願いに応えたい。

抱き締めれば身を寄せてくる愛しい人がずっと己を愛してくれるようお願いながら、ラオはもう一度眠りについた。

「どうして私わたくしではないの?!」

高いソプラノの音がヒステリックに叫び、派手な音を響かせながら美しい陶器のティーセットたちが床に砕け散る。

傍にいた侍女たちが小さく悲鳴を上げた。

しかし彼女にとってはそれすら苛立つ要素にしかならない。

絨毯に紅茶の染みが広がっていくのを睨み付ける彼女を侍女たちはオロオロとした様子で見つめている。

「下がっていなさい。」

幼い頃から彼女の侍女を勤めてきた女性が他の侍女に退室を促した。

それにどこかホツとした顔で侍女たちは部屋から出て行く。

「…お嬢様、どうぞ落ち着いて下さいまし。」

「うるさいわね！落ち着いていられる訳がないじゃない！！」

侍女の顔に叩き付けるように投げられた手紙。

それは魔王陛下の婚約者の披露パーティーの招待状だった。

しかし、それは彼女宛てに送られて着たものではなく、彼女の両親に送られたものである。

貴族の中でも高い地位にいる両親を無視するわけにもいかないが、彼女を招くつもりもないということだ。

地位も高く、品もあり、貴族としても淑女としても名高い自分を差し置いてあの平凡な少女が魔王の婚約者として発表されるだなどと耐え難い屈辱だ。

侍女は手紙を一読した後、恭しく彼女へ手紙を返す。

「こんな恥を受けたのは生まれて初めてだわ！！」

招待状をグシャグシャにして投げ捨てる。

苛立つ彼女を侍女は静かに見つめた。

御家の繁栄や魔王の地位もそれなりに魅力だったのかもしれないが、彼女は確かに魔王を愛していた。

彼女自身は一言だってそんなことを口にしたことはないけれど、長年付き従ってきたのだから主人の心の内くらい分かる。

愛してきた人から捨てられ、突然現れた己より優れた所のない者に横から奪われて我慢できるはずがなかった。

侍女はそつと彼女に肩に触れる。

「お嬢様、私めに出来る事が御座いますなら幾らでもお手伝い致します。」

主人であり、幼馴染であり、友人である彼女を侍女はとても大切に思っていた。

彼女は顔を上げると侍女を驚いた顔で見つめ、それから艶のある笑みを浮かべ、どこか苦しげに呟く。

「もし陛下に知られては貴女も私も無事では済まなくってよ？」

「心得ております。…何より私はお嬢様に御仕えする身、この命すらお嬢様のものでございます。」

「そう…。」

彼女は小さく笑って、貴女も物好きねと言い、部屋を出て行った。

その背を見送ってから侍女は床に散らばったティーセットの残骸を片付け出す。

主人のこれからすることは間違っているのかもしれない。

だがそれでも侍女は彼女に従うのだろう。

大切な人のためならば、何でもしたいと思うものだ。

以前見た魔王の婚約者である黒髪の少女を瞼の裏に思い出して、小さく息を零した。

気が強く、真っ直ぐで、外見では主人に劣るが幼さの残る顔立ちに凜とした雰囲気を持つ不思議な少女。

何故魔王があの子をそこまで寵愛するのか侍女には解りかねた。

が、どちらにせよ自分がすべきことは主人である彼女の望むことだけ。

白い破片を手に侍女は立ち上がった。

甘い毒牙(8)

夜会まで後三日と近付いた日、あたしは大切なその日に着るドレスの合わせをすることになった。

何十種類もの色とデザインのドレスがあって、それらを着て大きさをなんかを合わせるらしい。

客間に所狭しと置かれたドレスの量に一瞬気が遠くなったのは仕方ないと思う。

白に始まりピンクや黄色、オレンジから青、緑、紫など多種多様な色とデザインで作られたドレスにはちょっと気が滅入ってしまった。

「…これ全部試着するの…?」

そんなことをしていたら日が暮れてしまいそうだわ。

思わず口元が引きつってしまったあたしを見て、仕立て屋の女性がクスクスと笑った。

「いえ、色を決めてからデザインと寸法のために何着かは着ていただきますが、全部ではございませんよ。」

「よかった。」

「ふふっ。リールア様はドレスがあまり好きではおられないようですね。」

心底ホツとしたという風に胸を撫で下ろしたせいかわ性はそう言った。

服は好きだけどドレスはあんまり好きじゃない。

裾が長過ぎて邪魔だし、転びそうだし、ゴテゴテとしたフリルやレースなんかも動きにくくてしょうがない。

もっとシンプルでサッパリとしたものならば別だが。

その旨を伝えれば女性は「ではそのような物に致しましょう。」と頷いてくれた。

それから小さな声で、

「私も床を引きずる程の裾や付け過ぎのフリルなどは好みではありませんよ。」

と仕立て屋らしくないことを言うものだから噴出してしまった。

横で侍女が咳払いをしたのであたしは慌てて背筋をピンと伸ばす。

でも侍女も若干笑っているからやっぱりまた笑いが込み上げてきた。

「さて、お喋りはこの辺りにしておきましょう。いい加減ドレスを決めませんと王が痺れを切らして此方へいらっしゃるかもしれません。」

侍女の言葉にそうねと頷いて色を決めることになった。

あたしとしてはピンクや黄色、オレンジ系の色合いは得意じゃなかったし侍女や仕立て屋もあまり勧めて来なかったのでそれらは外す。

白は？と聞いたあたしに「白は婚姻の儀まで取っておきましょう。」とニッコリ笑顔で断られてしまう。

そもそも女性が白を身に纏うのは婚姻の儀や出産祝いなどの時だけ

らしい。

「紅はどうでしょうか？」

「え、紅はちょっと…その持ってるドレスでしょ？」

「ええ。」

深紅の毒々しいドレスは勘弁願いたい。

断ったあたしに侍女が酷く残念そうに肩を落とした。

ちょっと申し訳ないけれどさすがに紅いドレスは…それによくよく見てみれば背中と胸元がガバツと開いているじゃないか。

そんなもの着た日には恥かしくて人前に出られない。

「ねえ、黒はない？」

「黒…ですか？」

「うん。あたし黒好きだし。」

「暫しお待ち下さい。ええっと、確か…」

ドレスの山を掻き分けるように女性がごそごととドレスを探す。

色取り取り過ぎて目が痛くなりそうなその山の中から数枚の黒いドレスが出て来た。

が、どれもレースやフリルがたっぷり使われていて、げんなりしてしまう。

いっそのことマーメイドドレスっぽいのはないのかと溜め息を飲み込みながらドレスを指差した。

「黒はそれで全部ね？」

「はい。少なくとも申し訳ありません…黒を着られる方は王族の方のみでして、今代の王家に女性はいらっしやないものですから。」

並べられたドレスを眺めていく。

一番フリルやレースの少ないドレスをそこから選び出す。

肩は出ているけれど肩口にレースで作られた大きなバラが並んでいてあまり胸元は見えない。

背中も他のに比べれば幾分かマシだろう。背骨にそって少し見える程度だ。

何十にも重ねられたレースのスカート部分はふんわりと広がっている。

試着してみると思ったよりもスカートが邪魔なのがいただけない。

「まあ、とってもお似合いですわ！」

「リールア様は肌が白くていらっしやるから黒がよく映えますのね。」

キヤツキヤとあたしを見て喜ぶ侍女と仕立て屋には悪いけれど、このドレスはちよつと微妙だ。

「ねえ、これあたしの好きなようにしてもいいかしら？」

「勿論でございます。此処にあるものは全てリールア様のためのものですから。」

許可を取ると躊躇うことなくあたしはレースのスカートに手をかけ

る。

ビリビリと音を立てながらレースを引き剥がし始めれば、侍女も仕立て屋もギョツとした顔をした。

けれど止められなかったので、そのまま何枚も破り捨てると膝上十センチくらいになる。薄いレースが後ろから広がって尾羽のようにふんわりと広がっている。

取ったレースはシュシュのようにして手首や足首につければ可愛いと思う。

「ふんっ。」

クルンと一周回ると後ろへ伸びた羽のようなレースがふわりと後を引く。

あ、レースを着物の袖みたいにしたらもっとな可愛いかも！

「とても斬新なドレスですわ、でもとっても可愛らしい！」

「ですがこんなに足を出してしまってよろしいかしら？」

「え、やっぱり足出しちゃいけないの？」

「ええ、結婚を済ませた方なら構いませんが…。」

でももうあたしはラオと結婚するって決まってるし、いいんじゃない？

そう言えば困ったような、けれど少しだけ納得しているような顔をして仕立て屋と侍女が顔を見合わせた。

どうしようかと話し合っていれば客間の扉がコンコンとノックされる。

サツと素早い動作で仕立て屋が大きな上着をかけてきて、あたしの体は首元から足元まで綺麗に隠れてしまう。

それを確認した侍女が扉を開けるとニツコリ笑って丁度良い所にいらっやいましたわと来訪者を招き入れた。

真っ黒な髪に相変わらず真っ黒な服と無表情な顔で入ってきて、小首を傾げる。

「丁度？」

「うん。ラオ、こんなドレスどう？」

かけられていた大きな布を脱いでドレスを見せれば紅い瞳が見開かれた。

ピキリと効果音がしそうなくらいに勢いで硬直したラオと、それに苦笑する仕立て屋と侍女。

そんなに足を出すのってマズいのかしら？

ラオ、と声をかけて目の前で手をひらひら振るとようやく我に返ったラオがバツと後退おとひった。

甘い毒牙(9)

「なっ、り、リア！なんて格好をしているんだ?!」

耳まで真っ赤になった顔が困ったような、怒ったような何とも表現し難い表情を浮べている。

紅い瞳が思いつ切り泳いでいて大きな手も顔の半分を隠す。

「やっぱり、可愛くない?」

「違う、その、可愛いが…っ、あ、足をさらし過ぎだ!」

「そう?あたしのいた世界じゃこれくらい普通よ?それに、あたしからすればあーんな胸元とか背中がバツクリ開いたドレスの方が恥かしいもの。」

持っていた布を奪ったラオは、それをあたしにかけ直した。

そうしてやっとまともに視線を合わせてくる。

…まだ顔に赤さが残ってはいるが。

「足を見せるのは婚姻を済ませた者だけだ。」

「ならいいじゃない。もうあたしはラオと結婚するって決まってるんだから。」

「…それは、そうだが…。」

あたしの言葉に仕立て屋や侍女と同じような表情を浮べて悩むラオ。多分もう一押しで折れるだろう。

「ね？長い裾でダンス中に転びたくないし、結婚するんだっていい宣伝になるし。」

お願い。と見上げればラオが溜め息を吐いた。

そうして紅い目を細めて仕方が無いなと言う風に小さく苦笑して頭を撫でてくる。

何も言葉はなかったけれど折れてくれたことは雰囲気で分かった。

感謝の気持ちを込めて抱きつくくと布の隙間から足が見えたのか、また若干目を赤らめながらもすっかり抱き締め返してくれる。

「ではそのデザインでドレスを御作り致しますわ。」

「お願い。あ、あとシュシュも作ってもらえる？」

「シュシュ…ですか？」

「そう、こんなやつで手首と足につけたいから。」

そこら辺にあったシュシュによく似たやつを見せれば心得た様子ではいと頷いてくれた。

ラオの紅い瞳を見て、ふっと思いついたことも忘れずに耳打ちしておく。

仕立て屋が笑って了承して、それを見たラオが不思議そうに首を傾げたけれど夜会までの秘密だと言えばやや不満げな顔をしつつも分かったと頷いた。

着替えるから一度ラオには外へ出てもらい、ワンピースに着替えて客間の片付けを侍女と仕立て屋に任せつつ、あたしは廊下で待っていたラオと一緒に庭園へと向かう。

今日は天気がいいから外で昼食を摂ることになっていたのだ。

時間になるまで二人でのんびり花を楽しみながら歩く。

以前は色の濃い花々が多かったけれど、今は色素の薄い淡い色合いの花が多い。

鮮やかな大輪の花も綺麗だが控えめながらも柔らかい小花も可愛くてあたしは好き。

エルディア・リーも前よりずっと綺麗に咲き誇っていて、桜みたいな薄いピンク色の花びらがそよ風に揺られている。

ジツとあたしが見ていたせいかラオは微笑すると驚いたことにエルディア・リーを一輪摘んで、結び上げられていた髪のところにと差し込んできた。

傍にあった小さな水瓶みずがめ 植物へそこから細い水路を引いて水が流れている で見れば淡いピンクの花が綺麗な花飾りみたいになっている。

見上げた先にいたラオに抱き締められる。

「ラオ、いいの？これ結婚式で使う花でしょ？」

「知ってたのか。」

「うん、前に聞いたわ。」

「そうか。」

優しく髪を梳かれ、毛先にキスが降る。

「俺は始めから美緒の物だ、今更構わない。」

恥かしげもなくそう言い切って低く笑い、手を引かれ、食事の支度が整った小さなドームに二人で小走りして行った。

走ってくると思ってなかったのだろう。

侍女はあたしたちを見て驚いた後、子どもの悪戯を見つけた母親のような顔をして、それから微笑を浮べてあたしたちを席へ促す。

並べられた色鮮やかな食事と楽しい会話に時間が早く流れて行く。

「リール様。」

ダンスの御時間ですわ。エミリアにそう声をかけられて、ようやく何時間も話し込んでいたことに気が付いた。

一日一曲覚えられたらいいけれど残念なことにあたしが覚えられた曲はまだ三曲しかない。

しかも三曲目はちょっとあやふやなのだ。

そのため今日も三曲目の練習がある。

名残惜しそくに目を細めるラオの頭を軽く撫でて、行ってくるわと言えば最近恒例となった頬にキスをされ、無理はするなと念を押されて送り出される。

最初は顔から火が噴きそうなくらい恥かしかつたのにもう慣れてしまった。

「陛下は心配性でいらっしやるのね。」

ラオに見送られて城の中に戻ると先を歩いていたエミリアがクスクス笑いながら振り返った。

慣れているとは言ってもやっぱりちょっとだけ照れ臭くなる。

あたしがちょっと何かするだけでラオはすぐに無理はするな、大事
ないかところちが呆れるくらい言葉をかけてくる。

けどそれが心の底から心配してくれているものと分かるから悪い
気はしない。

真剣な紅い瞳が不安そうに揺れるからついついあたし自身も無理し
ないよう気を付けてしまう。

でもそれはあたしも同じだわ。

最近はなくなっただけで、少し前までは夜遅くまで執務をしていた
ラオ。

時には二日三日と連続で徹夜している様子だったから結構心配して
いた。

側近は「以前から王はほとんど御眠りになられませんでした。むし
ろルールア様がいらしてからはよく休まれるようになってホッとし
ております。」なんて言っていたが、やっぱり睡眠不足は良くない
と思う。

あたしに無理をするなって言うならラオにも無理はしないで欲しい。
本当はそう言いたいけど一国の主である以上執務もこなさなくては
いけないし、色々他にも仕事がある。

だから何にもしてないあたしが軽々しく口を出せるようなことじゃ

ない。

結婚がまだだから王妃でもないためラオの手伝いをする事も出来ないし。

時々、そういうのがとても歯痒く感じた。

結婚に多少の不安はあるけれども、傍にいるのに手助けが出来ないことの方が苦しい。

「過保護過ぎるだけよ。」

本当はもうちょっと頼って欲しいんだけどね。

そんな言葉を飲み込んで代わりに言ったあたしの言葉に、彼女は殊更可笑しそうにコロコロと笑った。

甘い毒牙(10)

それから二日が過ぎて、とうとう夜会の前日になってしまった。

城は普段と違って朝から少しざわついているようだった。

何でも明日の夜会のために今日の朝からダンスホールの装飾や大量のデザート、料理を作らないと間に合わないらしい。

それもそうか。あのだだっ広いダンスホールを更に磨き上げ、テーブルを並べて装飾を施す。

明日の夕方には庭園から生花を持って来て飾るとか。

ともかくかなり大変なようだ。

主役のあたしとラオは別にいつも通りの生活をしているけれど。

階下から響く微かな足音に耳を済ませて聞いているとラオに名前を呼ばれた。

「…リア。」

「ん？」

閉じていた目を開ければラオは何でもないと首を振って、また書類に視線を落とす。

多分、あたしが寝てしまったのかと思ったみたい。

側近が小さく笑ってラオに睨まれていた。

あたしは侍女だからと渋っていたエミリアを何とか説得して仲良くお茶を楽しんでいる。

ラオも側近も何も言わないところを見ると別に気にしていないみたいだ。

料理長お手製のジンジャークッキーを食べながら穏やかに過ごす。

きつと王妃になったらこんなものんびりとは出来ないだろう。

ラオの執務を手伝ったり、王妃の執務も行わなければならない。

十八のあたしにそれが務まるのだろうか？

執務に励むラオの眺めながら紅茶を飲み干した。

「さてと、ダンスの練習に行こっか？」

ソファーから立ち上がれば頷いてエミリアも立ち上がる。

ラオの視線に先手を打って無理はしないわよと言えば、照れた様子でああと返事が返ってきた。

それから偶然廊下を通りかかった侍女に申し訳ないがお茶の後片付けを頼んで小さなホールへ向かう。

ダンスホールはどうせ侍女や侍従たちでこった返っていてダンスどころではないだろうし。

今日はリヴィアも忙しくて来れない。

エミリアにダンスを見てもらいながら練習することにしよう。

テンポを確認しながらステップを踏んで行く。

間違っていたりテンポからズレるとエミリアがすぐさま声をかけて修正してくれるお陰で、教えてもらった当初に比べて随分上達したと思う。

「リールア様、そこはもつとしなやかに。そうですね、女性らしさ

を強調して！」

…たまに変な指導も入るけどね。

三、四時間ほどダンスの練習をしてラオが迎えに来たところで終える。

運動してスッキリしたあたしを見て小さく笑った。

いつも通り先に入浴して汗を流してから夕食を食べ、ラオの私室に戻る。

あたしの部屋なんて着替えるときと、勉強するときくらいしか使っていない。

ちょっと勿体無い気もするが別々に寝ようなんて言えないから結局このままなんだと思う。

お腹いっぱいになって幸せ気分を着替えたあたしはベッドにダイブする。

ラオはふつと目元を和ませて、入浴してくると部屋を出て行った。

それを確認してからあたしはベッドから起き上がってネグリジエのまま覚えたダンスのステップを踏んで最後の練習をすることにした。

明日になれば夜会のために朝から色々しなければならず、練習なんてする暇もないから。

「1、2、3……1、2、3……。」

特にラオの大好きなワルツは完璧に踊れるようになりたい。

好きな人の好きなダンスで失敗するなんて恥かしいし、嫌だ。

何度も何度も踊っているうちに時間を忘れていたのか突然後ろから温かなものが覆い被さってきて驚いてしまった。

「きゃっ?!」

慌てて振り返ればラフな格好になったラオが抱き付いている。

「ラオ、ビックリさせないで!」

「すまない。」

低く笑いながら謝られても反省の色が見えない。

ラオはあたしの肩口に顔を寄せて囁く。

「ダンス、上手くなったな。正直驚いた。あの短期間で此処まで出来るようになるとは。」

「でもたった三曲しか踊れないわ。」

「三曲、も、踊れば充分だ。」

どこまでもあたしを甘やかすつもりでラオに呆れてしまった。

それでも今だけはその甘さに乗ってしまおう。

本当は明日の夜会のことを考えるだけでドキドキと胸が鳴って緊張してしまう。

だけどきつとラオが傍にいてくれるなら、頑張れる。頑張りたい。

「だがもう今日は休め。踊り詰めて明日の夜会の前に疲れてしまっ
ては元も子も無い。」

優しい口調で手を取られてベッドへ誘われる。

履いていた低いパンプスが丁重にラオの手で脱がされ、シーツに寝転がれば、ラオも隣りに寝転んだ。

ふわりと香る南国系の少し甘い香りにふと疑問が湧く。

この匂いって香水かしら？それとも、あたしみたいに湯船に何か浮べてるとか？

フンフン香りを嗅いでいるとチョンと鼻先を突付かれる。

犬みたいだぞと茶化されて、それはラオでしょと言い返せば違いな
いと笑った。

「ねえ、ラオってお風呂に何か浮べてるの？」

「否…何故だ？」

「んー、なんかすごくいい香りがするのよね。南国系のちょっと甘い匂い。」

「…そうか？」

自分の襟元の匂いを嗅いで、ラオは不思議そうに小首を傾げた。

それらしい香りは特にしないがと言われてあたしも首を傾げる。

というか、魔族はみんなお洒落なのか香水とか色々いい匂いがする。

あたしも香水とかつけた方がいいかしら？

なんて考えているとラオが優しく頭を撫でてきて、顔を上げれば紅い瞳と視線が合わさった。

「明日の夜会は楽しめ。」

「楽しむ？」

「ああ。程好い緊張も大切だが、夜会は本来ダンスや他者との交流を楽しむ場だ。気を張り過ぎて楽しめなくては意味が無い。」

確かに、そうかもしれない。

リヴィアにもダンスは楽しんで踊れって言われたし。

「…そうね。せっかくだもの、楽しまないと損よね。」

「そう言う事だ。」

だから今日はもう寝てしまおう。

柔らかなシーツに埋まりながらやや眠たげにそう言ったラオに笑い
つつ、頷いた。

ふっと明かりが消えて静かな闇が寝室に広がる。

逞しい腕に抱き締められながら目を閉じれば心地の良い眠気に包み
込まれた。

甘い毒牙（11）

当日、目が覚めてからの慌ただしさは物凄いものだった。

起きて朝食を摂るとすぐにあたしとラオは引き離され、怒涛の如き勢いの侍女に若干気圧されながら朝からシャワーを浴びた。

元々丁寧なのだが今日はいつもとよりもっと時間をかけて丁寧に体と髪を洗われた。

それから体にいい香りのするオイルを擦り込まれ、髪にも甘い花の香りの油をつけられ、浴槽から出れば今度はマッサージ。

手の指先から足の爪先まで解し張りを持たせるように気持ちのいいマッサージを二時間くらい受け、ワンピースを着せられたかと思えば今度はあたしの部屋へ。

そこで既に待ち構えていたエミリアを含む五人近い侍女の手によって爪を磨かれたり全身に保湿クリームを塗り込まれたりとまたマッサージ紛いのようなものを受ける。

髪もさらさらになるまで丁寧に櫛で梳かれたからか普段よりもスト

レートで纏まっていた。

「では今からお化粧を致しますね。」

「腕によりをかけてリールア様をもっとお美しくしましょう、皆さん！」

「勿論ですわ！」

更に王の寵愛をいただけるよう我々が全力でリールア様を磨いてみせましょう。

五人全員で深く頷いてあたしに振り返る。

「よろしいでしょうか？」

「あ、うん…お願いします…。」

ニッコリ笑顔なのに目が笑っていない気がする侍女にちょっと頬が引きつった気がした。

が、そんなあたいの様子に構うことなく侍女がそれぞれに動き出す。

まずは化粧のために下地のファンデーションを塗る。

化粧は元いた世界のものとそう変わらないので見ているだけでも結構いい勉強になる。

今は自分で出来ないけれど元の世界じゃあたしだって女の子だからメイクくらいしてたしね。

手の平で広げ温めたファンデーションがマッサージの要領で顔に塗られていく。

厚化粧じゃなくて、本当に薄く薄く施されるが鏡を見るとそれだけで不思議なくらい肌が綺麗に見えた。

次に別のファンデーションを塗る。これはさっきのものより更に薄く、滑らかに肌に馴染む。

次はアイメイクだ。

目を閉じるよう言われてしっかり閉じれば侍女の細い指が触れてきて睫毛のラインに沿って線が引かれていくのが分かる。

思ったよりも控えめに引かれ、目を開ければ描く前よりも少しだけ目が大きく見えた。

…あれ？

「ねえ、ラインは下にも引かないの？」

「下、でございませうか？」

首を傾げる侍女。やっぱりこっちはアイラインは上だけなのかもしれない。

でもこれだと上瞼ばかり強調され過ぎている気がする…。

「ね、それ貸して。」

「リールア様ご自身で描かれるのですか？」

「うん、上だけだと気になるのよね。」

手渡された筆のような細いペンタイプのもを持つ。

鏡を見ながら描いていると忙しそうにしていた侍女たちは皆動きを止めてあたしをジッと見つめている。

そんなに見られると緊張するんだけどなあ。

目の縁を少し長めに書いてクルンと上に跳ねさせ、いわゆる猫目にする、今度は下睫毛の間を描いていく。

幸いこのアイライナーは防水仕様のようで涙とかで流れたりはいらない。

これも魔力の効果だとか。魔力ってかなり便利だわ。

描き終われば見慣れた猫目メイクが完成した。

「はい、ありがとう。」

「まあ…とても素敵ですわ！目もぱっちり見えますし、本当に猫のように愛らしいです！！」

「このようなお化粧があったなんてっ。」

「リールア様、今度私達にもお化粧をお教え下さいまし！」

よっぽど気に入ったのかあたしの目を見てはキヤイキヤイと騒ぐ侍女に、今度教えるからと約束する。

少しして我に返った侍女たちが慌ててまた支度に取り掛かった。

眉が整えられ、派手過ぎない柔らかなベージュ系のリップグロスを塗られ、爪は薄いピンクのマニキュアで統一される。

頬にチークがさされて睫毛にマスカラが重ね塗りされた。

その間にもあたしの髪は後ろでアップにされて流れる髪の毛は緩く巻かれてウェーブを描く。

気分的にはキャバ嬢みたいだけど派手さはあまりなくて、でも少しだけ小悪魔的な印象を受けた。

髪には頼んで紅い薔薇のような髪飾りを付けてもらおう。

…なんで紅なのかはご想像にお任せするわ。

これだけで一時間以上かかっているのに、今度はドレスを着なくちゃいけない。

ワンピースを脱いでまずはコルセットを付ける。

どうしてこんな苦しいものと思うけど綺麗に見せるためなら女性には多少の我慢も必要ですわ、なんて侍女に嗜められつつ思いつ切り締め上げられた。

朝食の量を少なめにしておいてよかったと少しだけ思う。

侍女が持ってきたドレスはあたしが頼んだ通りに仕上がっていた。

一人では絶対に着れないので二人に手伝ってもらいながら何とか着る。

背中部分にある紐を縛ってもらいながら手首足首にお揃いのシユシユを付け、後ろのふんわりとしたレースを別の侍女が綺麗に伸ばす。

履いていた靴を黒くてあまりヒールのないパンプスに履き替えた。

それにも紅い薔薇が飾りとしてついている。

「完成ですわ。お疲れ様にごさいます、リールア様。」

鏡の中に映るのはパツチリ猫目の小悪魔的な雰囲気顔を顔し出す可愛い女の子。

紅い髪飾りの薔薇が程好いアクセントになっている。

お化粧も然ることながら、ヘアメイクもドレスばっちりだ。

平凡なあたしは一体どこに行ったんだか。

気付けば昼食の時間になってしまっていた。

ああ、ラオのところに行かないと。なんて考えていれば扉がノックされる。

十中八九魔王様に違いない。

侍女の一人が扉を開ければ案の定予想通りの人物が立っていた。

予想と違ったことと言えば、その後ろに側近がついていることくらいだ。

相変わらず黒い服を着ているけれど今日はいつもの装いとは違い、ところどころに紅が使われ、あたしのドレスと対になっているように見える。

「ラオ、そこに居たらキアランが入れないでしょ？」

あたしを見て立ち止まってしまったラオに苦笑しながら注意すれば、ああと生返事を返して部屋に入ってきた。

側近もあたしを見てほうと感嘆の溜め息を漏らす。

「リア、今日は一段と美しいな。他の男の目にさらすのが惜しいくらいだ。」

「ありがと。ラオもカッコイイよ。その服、あたしのドレスと対みたいで素敵。」

「ああ。仕立て屋に対にするよう頼んでおいた。」

なんと抜け目がない魔王だ。

少し誇らしげに胸を張ったラオに笑ってしまふ。

夜会までまだまだ時間はあるけれど、今日は一日外へは出てはいけ
ないらしい。

せつかくお化粧してくれたのに崩れたら大変だし仕方がない。

昼食を摂り、執務があるというラオに付き合うためにあたしも執務
室へ向かった。

甘い毒牙（12）

それはまるで童話の中のような光景だった。

薄い黒のカーテン越しに見えるダンスホールには美しい音楽が流れ、それに合わせて色取り取りのドレスに身を包んだ女性と燕尾服を着た男性が踊っている。

別の場所では人々が楽しげに談笑し、侍女たちが忙しそうに動き回り、侍従たちがダンスホールの内外を警備していた。

あたしはそれら全てを見渡せる王の席に隠れている。

ここは薄いカーテンで中が見えないようになっていて、けれど中からは外の様子がよく見えるようになっていたため時間になるまでの空気に慣れようとあたしは少し前からここにいた。

心の中で何度も大丈夫だと言っても心臓はドキドキうるさいし、緊張し過ぎて体が震えている。

いつもの気の強さはどうしたあたし！

なんて小さく呟いていれば小さな笑い声と共に温かな体温に後ろから抱き締められた。

「不安か？」

「不安っていうか…こんな大勢の前に出るなんて初めてだし…。」

独り言を聞かれた恥かしさと本音を混ぜて言えば、そうかと苦笑される。

魔王の花嫁って実はあんまり喋らなくてもいいらしい。

まあ、ラオ自身結構嫉妬心が強いから他の男の人と話したりできないし、花嫁は基本的に魔王のもので、王妃でもある訳だから元々話しかけてくる貴族もほとんどいないとか。

それはラクだけど少し寂しい気もする。

今回に限ってはそれは好都合だけど何度も夜会があるなら何時までもだんまりじゃ困るだろう。

いつかは絶対に話さなきゃいけない。

だけど今だけは勘弁して欲しい。まだまだあたしはこの世界も、この国も、魔族のことも勉強途中だから自信もない。

「心配無い。リアは笑っていれば良い。下手に口を利けば煩い奴ら
が来るだけだ。」

「うん…転びそうになったら支えてね？」

「ククツ、心得た。」

可笑しそうに笑って、ラオが頬を撫でてくる。

壊れ物を扱うようなその仕草を感じる度に、大切にされているんだ
と分かって恥かしくなる。

けれどそれ以上に嬉しくも思う。

この貴族の人々の中にはあたしをよく思わない人も沢山いて、勿論
中には祝福してくれる人もいて、考えが合わないのも仕方がないの
かもしれない。

でもいつかは分かってもらえるよう、受け入れてもらえるよう努力
していきたい。

認めてもらえるまであたしは足掻くわ。

好きな人と一緒になるためだもの。

抱き締めて来る腕にそっと自分の手を添えれば殊更強く抱き締めら

れる。

「緊張しなくなる呪まじないだ。」と子ども騙ましみたいなことを言いながら、ラオにキスされた。

あたしだって子どもじゃないんだから。でも、そういう嘘なら騙まされてもいいかもね。

胸はまだドキドキと高鳴っていたけれど、体の震えは何時の間にか治まっていた。

キュツとまた強く抱き締められていると控えめに側近が御時間ですと告げる。

ラオの大きな手にあたしの手が包まれた。

少し強めに握り返せばしっかり指が絡み合う。

王の座から少し張り出したテラスに出れば、それまで流れていた音楽が止み、ダンスや談笑を楽しんでいた人々が顔を上げてこちらを見た。

「今宵はよく集まってくれた。一人も欠ける事無く訪れてくれた皆に感謝する。此の度の夜会は我が妻となる花嫁を皆へ紹介するため
に開いたものだ。…リア。」

「…はい。」

呼ばれて一步前に出て、淑女の礼を取る。

あたしを見た貴族たちはやっぱり驚く人や、眉を寄せる人、喜ぶ人と多種多様な表情を浮べていた。

人間であるあたしが魔王の花嫁だなんて嫌がられるかもしれない。

だけどラオのことが好きだって気持ちに嘘はないから。

俯いてしまいそうになるのをグツと堪えて顔を上げる。

どんなに否定されてもあたしは絶対に逃げたくない。

震えそうになる足を叱咤して真っ直ぐに貴族たちを見返していれば、ラオに優しく肩を引き寄せられる。

「彼女は人間だが、既に我と契約も済ませ、互いに生涯添い遂げる事も誓い合った。一月後には婚姻の儀も執り行なう予定だ。」

それからラオは今日は祝いの日だから心行くまで楽しんで欲しいみたいなことを言っただけであたしの紹介は終わった。

なんて言うかあっさりし過ぎてる気がする。

でもこれくらいが普通らしい。そもそも花嫁は魔王のものだから、事細かに色々言う必要もないとか。

テラスからダンスホールに降りる頃には音楽が流れ、人々は各々ダンスや会話に戻っていた。

それでも多少の視線は感じたが気付かないフリを決め込む。

「一曲踊らないか？」

差し出された手に迷いなく自分の手を重ねればグイッと腕を引かれる。

そのままダンスの輪の中に混ざり、曲に合わせてラオがリードしてくれた。

リヴィアが「王はダンスも上手いよ」と言っていたが本当だったらしい。

まるで羽が生えたように体が軽くなってクルクルと足が自然にステップを踏んで行く。

踊っているとラオが「随分上達したな。」って褒めてくれて、それが嬉しくて笑みが零れた。

結局、二曲三曲と疲れるまで踊り続けたあたしたちはその後ダンス

の輪から外れて休憩することにした。

ソファーに座って、通りかかった侍女に飲み物を頼む。

ラオは側近に呼ばれてしまった。

「あたしも行った方がいいかしら？」

「否、リアは此処で休んでいてくれ。」

「ん、分かったわ。」

額にキスを一つして貴族の方へ行ってしまったラオの背中を何となく見つめる。

と、横からスイと静かな動作でグラスが差し出された。

顔を上げれば侍女が佇んでいる。

「ありがとうございます。忙しいのにごめんね。」

「いえ、御気になさらないで下さい。」

シャンパングラスによく似たそれには淡いピンク色の可愛い飲み物が入っている。

香りを楽しむと桃のような甘い匂いが鼻を掠めていった。

一口飲めば炭酸だったのか口の中でシュワリとした感覚が広がり、仄かな甘みと少しの酸味が程好い。

「美味しい。…これ何ていうの？」

「エルーニヤと申します。エルニという果実から作られたアルコールの入っていないものです。」

「そう。飲みやすくいいわね。」

またグラスに口を付けていれば侍女は他の貴族に呼ばれてしまった。

料理や飲み物の配膳をしていたのに、どうやら邪魔してしまったらしい。

仕事に戻ってと促せば深く礼をして足早に人込みの中に消えていった。

視線をラオへ戻せば丁度紅い瞳もタイミングよく振り返って、視線が重なる。

傍に行こうと立ち上がった瞬間、グラリと世界が歪んだ。

「あ…、？」

体の中は熱いのに、肌が凍えるように寒い。

まるで全身の血がなくなったように体が震える。

手から滑り落ちたグラスが床に落ちて砕け散ったが、その音すら酷く遠くのことのように聞こえた。

真っ青な顔をしたラオがこちらへ駆け寄ってくるのが見えた。

喉が痛い。息をする度に焼け付くような激痛が走る。

ラオの名前を呼びたいのに声は出て来ない。

ただ空気の抜ける音が微かにして、体が傾いでいく。

……倒れる。

フェードアウトしていく意識の中でラオの叫び声だけがやけに鮮明に耳に届いた。

「リアッシュ……！」

血の気を失った顔、小さく震える体、驚きに見開かれた黒曜石の瞳。
伸ばされかけた細い腕が力無く体と共に傾いて行く。

音の消えた世界でスローモーションでも見ているかのようにゆっくりと倒れる美緒の姿に、ラオは無意識の内に瞬間移動テレポーションを発動していた。

「リアッッ！！！！！！！！」

床と接触する直前で如何にか抱き止めた体は酷く冷えている。

しかし美緒は苦しげに幾度も咳き込み、口元からはヒューヒューと空気が通る音がした。

ラオは躊躇う事無く口付け、そこから直に魔力を注ぎ込み、美緒の中にある己の血と同調させて回復を図る。

唇を離せば先程よりはだいぶ楽に息を吸えるようになった美緒が、それでも喘ぐように浅く呼吸を繰り返していた。

ペロリと己の唇を舐めれば舌先に残る甘みと覚えの在る酸味に眉が顰んだ。

怒りがラオの中で込み上げる。

魔王の激流と化した魔力がダンスホール全体に広がり、力のあまり無い下級貴族の何人かが一瞬にして気絶し、誰もがハッと息を詰めた。

「……………キアラン。」

名を呼ばれた側近が音も無くラオの下へ赴く。

「既に医師は手配致しております。どうぞリールア様の私室へ。」

「ああ。」

そつと、それこそ振動すら起こさない程丁寧にラオは美緒を抱き上げた。

痛みになのか、それとも苦しみになのか、眉を寄せて辛そうに息を繰り返す美緒に側近は微かに奥歯を噛み締める。

紅い瞳がサツとダンスホールにいた貴族達の上を流れて行く。

「我が花嫁に手を出すとはふざけた事をしてくれたものだ。」

吐き捨てられた言葉に誰もが体を震わせた。

そんな貴族達から視線を外し、ラオはすぐさま美緒の私室へと瞬間^{テレポー}移動する。

出来うる限り小さな体に負担が掛からないよう細心の注意を払ってベッドへ寝かせれば、脇に控えていた侍女と城の医師が数人がかりで美緒を容態を確認していく。

ラオはその様子を確認すると部屋を出た。

傍に居たかったが、それでは医師達の邪魔となってしまう。

誰よりも力は強いくせに愛する恋人の一人も助けられないとは魔王が聞いて呆れるではないか。

感情のままに拳が壁に叩きつけられれば石の壁にヒビが入り、表面が崩れていく。

生まれてから二百と五十余り生きて来たが今程怒りを感じた事はなかった。

全身の血が沸騰しているのではないかと思えるくらい魔力がザワツている。

―ダンスホール（あの場）に少しでも長く居ては貴族全員を手にかけてしまい兼ねなかった。

怒りと同時に後悔の念も溢れる。

何故一人にしてしまったのだ。

何故あの時連れて行かなかった。

他の貴族に美緒を紹介したくないという己の嫉妬を優先させたばかりに、此のような事が起きてしまったのではないか。

扉越しに慌ただしい声と足音が聞こえて来る部屋を見つめる紅い瞳は激情の色が消え、ただただ不安の色が滲んでいた。

「…………リア、死ぬな……。死なないでくれ…………。」

呻くように呟かれた言葉はあまりにも悲痛な懇願で。

黒い髪に隠れたラオの頬からポタリと雫が一滴伝い落ちる。

戻って来た側近はそれを見て、一瞬歩み寄るか否か戸惑い、しかしラオの横へ立った。

「…王、」

控えめに頬へ当てられたハンカチに漸くラオは側近の存在に気付く。だがハンカチを手に取る事は無く、地面に視線を落としたままピクリとも動かない魔王に側近は心が痛んだ。

愛する人が死にかけているのだ。不安と恐怖で微かにその手が震えている。

「不安かもしれませんが、御心を強く御持ち下さい。リールア様を信じて差し上げましょう。きっと、必ずや王の下へ帰ってらっしゃいますよ、彼女は貴方の妻となるべき方なのですから。」

のろろと見つめてくる紅い瞳に側近は小さくわらいかけた。

同時に部屋の扉が開き、医師達が出て来る。

視線を滑らせた魔王に初老の医師長がしつかりと頷いた。

「陛下が魔力で治癒力を高めて下さったお陰で、御命を犯されるような事態は回避出来た様です。ですがリールア様は人間であらせられます…体へ多大なる負担がかけられ、恐らくお眠りになるでしょう。」

「…そうか。ご苦労だった。」

「いいえ、苦労などと…。話はお聞き致しました。突然の出来事でしたが、陛下の迅速な行動でリールア様は御命を守られたのです。リールア様をお助けになられたのは貴方様ですよ。私はそのお手伝いをさせて頂いたに過ぎません。」

医師長は労わるように言葉を紡ぐと深く一礼をしてラオと側近の前から去って行った。

側近に背を押され、部屋の中へ入る。

背後で静かに扉が閉められた。

部屋の中はシンと静まり帰っていた。

ベッドへ歩み寄れば美緒が静かに寝息を立てている。先程よりも顔色は良くなっ**て**はいるものの、やはりまだ青白い。

触れた頬は温かく、倒れた時のような冷たさは微塵も無い。

生きている。

静かに上下する胸元が、温かな体温が、呼吸する音が。

愛する人の生を証明していた。

「…美緒っ…！」

駄目かと思った。

共に生きて行こうと誓い、生の契約も交わした。

だが美緒は元々人間であり魔族よりもずっと身体が弱く、例え生の契約を交わしたとしても身体や脳へ酷い損傷を受ければ助からない事もある。

魔力を与えた時に舌に感じたあの独特な酸味は甘い毒牙プレシエントと呼ばれる毒薬だった。

プレシーと呼ばれるエルニに良く似た果実を実らせる木の花から作

事が出来る毒で、手間がかかるものの、毒性のかなり強い種類だ。魔王であるラオとしてその毒をグラス半分も飲めば死に至るであろう。それ程に強い毒を人間の体を持つ美緒が一口でも飲めば如何なるか……。死ななかつた事の方が不思議なくらいである。

そつと口付け、呼吸を邪魔せぬよう気を付けながら美緒へ魔力を移した。

目を覚ますまで食事も出来なければ体は弱る一方だ。それを防ぐために入れられるギリギリまで己の魔力を注ぎ込んでから顔を離す。

こうして目覚めるまで何度か魔力を与えていれば、美緒の体が弱らず、起きてから体が全く動かないという事態も避けられる。

ベッドの縁に腰掛け、小さな手を握った。

力無く投げ出されていたその手を己の手で包み込み、指先にキスを贈る。

頬を伝い落ちる温かな雫に気付かないフリをしたままラオは何時までも美緒の傍に居た。

あの夜会から三日が過ぎた。

美緒は相変わらず眠っていて、起きる気配は未だ無い。

侍女が日に三度マッサージを行い目が覚めてからも動けるようになると
甲斐甲斐しく世話をしている。

ラオも何度も部屋を訪れては様子を見たり減った分の魔力を与えたりした。

執務の間にも何度か抜け出したが側近はそれを咎めることはしない。

まるで城中が眠りに付いてしまったかのように静まり返っている。

いや、元々がこうであり、美緒が来る前はこれが当たり前であった。

なかなか目覚めない美緒を心配して魔兵団の団長と副団長が花を持ってきたり、料理長は何時目覚めても良いようにと毎日三食分の食事を用意したりしている。

しかし美緒はぐっすり眠ったまま。

顔色はもう良くなり、見た目にも問題は無さそうだが起きない。

気を紛らわすように美緒の見舞い以外の時間を執務に費やす魔王に、側近や医師長が休むよう進言してみても聞く耳は持たれなかった。

穏やかな午後の日差しが差し込む部屋にラオが足を踏み入れる。

ベッドの上で相変わらず寝息を立てている恋人に触れた。

「…一体、何時まで寝ているんだ…リア。」

普段から朝は自分の方が早く起きていて、彼女はよく昼寝もしていた。

だが今回は随分と寝過ぎじゃないか。

早くその黒い瞳に自分を映して欲しい。

何時ものようにキスで魔力を注ぎ込んでいると不意に美緒の唇が動いた。

ハッとして顔を離し、様子を伺っていれば睫毛が震える。

目覚めの予兆を感じ取ったラオは侍女に医師長を呼ぶように言いつ

け、数分して慌てた様子の医師長が部屋に訪れた。

皆が見守る中、震えていた睫毛がゆっくりと動き、瞼が持ち上がる。

「…リア。」

ぼんやりと焦点が定まっていない瞳に声をかければ、ゆっくりと己の顔を見つめてくる。

それだけで胸の奥が熱くなった。

なのに、何故か焦点が合った瞳は酷く驚いた様子で見開かれ、周囲を見回し、困惑と不安を滲ませて視線を彷徨わす。

震える声で紡がれた言葉にラオは愕然とした。

「…「コト、どじっ。」」

それは初めて美緒を城へ連れて来た時に聞いた言葉と一字一句違わないものだった。

先に衝撃から立ち直った側近がすぐさまラオを部屋の外へ促し、医

師長に美緒の診察を頼む。

気が付けばラオは廊下に佇んでいた。

扉の向こうからは微かに話し声が聞こえる。

…如何いう事だ。一体何が起きている？

混乱する頭を落ち着かせるように詰めていた息を吐き出した。

少しして部屋から医師長が姿を表す。

「如何いう事だ。」

ラオの問いかけに医師長は目を伏せて報告した。

「恐らく毒が強かったのでしょう。そのせいでリールア様の記憶が飛んでしまわれたのかもしれない。」

「記憶喪失、という事か？」

「ええ。幾つか質問をさせて頂きましたが、どうやら城へ来る以前の記憶しか今は無い様子です。」

つまり彼女の中で己との関係が消えてしまったということか。

足元が崩れていくような感覚にラオの体が一瞬揺らぐ。

側近が咄嗟に支えたものの、真っ青になった顔色は隠しようもなかった。

もう後一月もすれば婚姻出来ると思っていた。

漸く愛する人と添う事が出来ると思っていたのに……こんな事など
在るだろうか？

震える息を吐き出したラオに医師長が言う。

573

「王、リールア様の中から貴方様の記憶が失われた訳ではありません。
ん。忘れておられるだけなのです。こうだった場合、何かふとした
きっかけで記憶が戻るといいう事がよく御座います。…どうぞ諦めな
いで下され。」

「…ああ。」

「では王はリールア様の下へ。誰もよりも不安を感じているのはリ
ールア様ご自身でしょう。王より御説明を…傍に付いて差し上げて
下さい。」

「分かった。」

頷き、医師長と側近の視線に背を押されるように部屋へ戻った。

そこにはベッドの上で上半身を起こして座っている美緒がいて、ラオが入って来ると振り返り、ジッと見つめてくる。

何時もと変わらず真っ直ぐに見つめてくる透き通った黒い瞳に心が
凪いだ。

…そうだ、何を怯えている。

例え美緒の記憶が無くなったからと言って、彼女が彼女で無くなる
訳ではない。

記憶がないならまた一から積み上げれば良いだけの事ではないか。

彼女にも己にもそれだけの時間は充分に在る。

侍女がベッドの脇に椅子を置くと、一礼して退室した。

部屋の中にはラオと美緒だけが取り残される。

「名乗りから始めなければならぬ。…ラディオスだ。ラオと、
そう呼んでくれ。」

椅子に座り、口を開けば自然と穏やかな声が出た。

美緒は少し戸惑ったようではあったが、すぐに名を告げてくれる。

「あ、あたしは美緒…あの、ここは？」

「俺が住む城だ。美緒がいた世界とは異なる次元にある世界の、だ。」

「異なるって…、」

「一から全て説明しよう。」

己が幼い頃に美緒と出会った事も。

十八の生誕日に迎えに行った事も。

楽しそうにお茶会をして、インキュバスに襲われそうになって、魔族の学校見学をして、恋人同士になって。

面倒な勇者が城を壊して、自分の許婚を見た美緒が父と共に城を出て行って、勾引かどわかされて、助けて、生の誓いを交わして、夜会を行って。

そうして毒を盛られて倒れたのだと。

彼女の質問に一つ一つ答えながら、時間をかけてゆっくり全てを伝えた。

今の己に出来る事などそれくらいしかない。

今までの己の記憶を在りのままに伝える事しか出来ない。

全てを聞き終えた美緒の反応に恐れながら、それでも手放す事なんて不可能なのだ。

考え込むようにシートツへ視線を落とす美緒のつむじを見つめながらラオは静かに彼女を待った。

忘れても、忘れない。

目が覚めたら知らない部屋にいた。

美形だけど悪人面の男があたしを見下ろしていて、周りにも大勢いた。

誰もが嬉しそうに目に涙を溜めていて、でも、あたしには何がなんだが分からなかった。

思わず口から零れた言葉に男が固まる。

綺麗な紅い瞳に絶望の色が垣間見えた瞬間、胸がズキリと痛んだ。

その後医者のような人にくっつか質問を受けたけれどほとんどがよく分からないものばかりだった。

少しの間を置いて、一番最初に見た男：ラオが戻ってきて、説明をしてくれた。

だけど到底信じられる内容ではなくて。

だって、あたしが魔王の花嫁だとか、もうすぐ結婚するはずだったとか、毒を盛られたとか。

どこのファンタジー小説だよってものばかりだったんだもの。

笑えない冗談だと言いたかったのに紅い瞳があんまりにも真剣で、何となく嘘じゃないんだと勘が告げる。

目の前にいるこの美形が魔王で、しかもあたしとは契約者兼婚約者兼恋人だなんてちょっと出来過ぎてるようにも思えた。

あたしの記憶の中には全く存在していない人。

「もしその話が全部本当だったとして、どうするの？あたしは記憶がないのに。」

紅い瞳が真っ直ぐに向けられる。

ワインよりも鮮やかで、夕焼けよりも濃く、まるでルビーのよう。

「如何もしない。また美緒に好いてもらえるようにするだけだ。」

「…好きにならなかつたら？」

「…っ、」

くしゃりとラオの顔が歪んだ。

さっきまでの無表情が嘘みたいに、紅い瞳から涙が零れ落ちた。

それを見た瞬間にキュツと胸が締め付けられる。

…泣かないで。そんな顔して欲しくない。

自然とそんな思いが頭を過ぎり、気付けばその黒い髪を撫でていた。

驚いた様子で見つめてくる紅い瞳に笑いかける。

「あたし記憶はなくなちゃったみたいだけど、不思議ね。あなたが泣くと、その、すごく苦しいわ。」

記憶はないのに心は痛む。

それってあたしの中のどこかに、ラオと一緒にいた記憶があつて、それで痛むんじゃないかしら。

そう言えばギュツと大きな体に抱き付かれて、魔王は声を上げて泣

いた。

一番好きな人が結婚直前に記憶を失くすなんてきつととてもツライだろう。

低い声が何度もあたしの名前を呼ぶ。

それだけで心のどこかで喜ぶあたしがいる。

…まだ何もかもを信じた訳じゃないけど、この人があたしを好きで、あたしがこの人を好きだったって事だけは信じようかと思えた。

こんなに胸が苦しくなるくらい、前のあたしはこの魔王が好きだったんだから。

翌日、昨日見た見た医者が来て色々と検査をしてもらったけれど特に異常は見られなかったらしい。

記憶がないのは毒が強過ぎて、そのショックで一時的に忘れてるだけとか。

こういうのは大抵ふとした時に思い出すからあまり気に病まないように、なんて言われた。

ラオも生きていてくれただけで嬉しいと微笑した。

色々な人がお見舞いに来てくれて、気にするな、死なないで良かったと言葉をかけてくれる。

その人たちの事も思い出せなくて申し訳なくも思った。

だけど誰もその事を責めないでくれて、自己紹介してくれた。

あたし付きの侍女もいるらしく、その人たちが眠っている間も毎日全身をマッサージしてくれたお陰で多少のダルさはあるものの問題なく体も動かせる。

厨房を仕切る料理長は三日間も眠ってたあたしのために消化が良く栄養のある食事を作ってくれた。

早く、思い出せたらいいのに。

そんな思いとは裏腹にあたしの記憶は二日経っても三日経っても戻らなかった。

前と同じ生活をしていけば戻るんじゃないかと、ラオと一緒にベッドで寝て、執務について行って、お茶をしたり散歩をしたり、勉強もし始めた。

ただどやっぱり記憶は戻ってこない。

それでも良いと優しい魔王は言ってくれるけれど、あたしは嫌だった。

こんなに優しい人達のことを忘れたままなんて。

結婚するくらい好きだったクセにどうして忘れちゃったのよ。

寝室のベッド脇にある小さな棚の上、大切そうに置かれた折り紙のバラ。

片方が綺麗で、片方は少し不恰好なそれを眺めながら溜め息が零れる。

どうやってたら思い出せるのかしら？

ラオの事を好きになっただとしても、記憶を取り戻さなければ結婚できない。

何故かそんな気がした。

抱き締められて、後ろから聞こえて来る規則正しい寝息に耳を傾けながらあたしはそっと目を閉じた。

花嫁の失くしもの(1) (side:L)

美緒の体が完全に回復したのは彼女が目覚めて一週間程経ってからだった。

以前に比べて抱き締めた体はほんの僅かだが細くなっており、その事実気が付いた時は何とも言えない苦しみが胸に広がった。

本人である美緒は全く覚えがないからと毒を盛られた事については特に何かを言うこともない。

しかし己の花嫁に手を出されて黙っていられる程ラオはお人好しでもない。

毎日執務と美緒の見舞いが済むと側近であるキアランと共に美緒に毒を盛った人物の特定に力を注いでいた。

元々それなりに検討は付いていたのだ。

王妃となる美緒の傍に寄れる貴族なぞ片手に余る程度しかないが、あの夜会で彼女の傍に居られたのは侍女か侍従だけ。

となればこの城に仕えている者がそれに扮した者が飲み物を渡したのだろう。

あの時、美緒の傍から離れる直前、彼女は傍を通りかかった侍女に飲み物を頼んだ。

その顔をしっかりと確認していればよかった。

そうすれば今すぐでも捕まえられたものを…。

「…王、そのままでは羊皮紙が破けてしまいます。」

横からかけられた声にふつと我に返る。

手元へ視線を落とせばグシャグシャに皺の寄った羊皮紙が今すぐにも破けてしまいそうな状態になっていた。

「ああ、すまない。」

「いえ…。」

その洋紙に署名し、別の書類を受け取る。

どれだけ手を止めてしまっていたのかは分からないが、それ程長くはなかつただろう。

サラサラと羽ペンを動かしていれば執務室の扉が控えめにノックされる。

小さなその音は此処数日で聞きなれたものだった。

入室を促せば予想通り開けられた扉から姿を現したのは美緒で、机に座る己を見て少しだけ躊躇うような素振りをした後に部屋に入ってくる。

初めて美緒がこの部屋に入る時にもあんな風だった。

誰も邪魔だとも迷惑だとも言っていないのに、邪魔するのは迷惑だからと執務中はほとんど訪れなかった。

だがそのうちに慣れて、よく来るようになって。

ソファアの隅の方に座る癖は相変わらずらしい。

着ているワンピースが気になるのか何度も座り直したり裾を手で押さえたりする姿に自然と笑みも浮かぶ。

目が覚めてから美緒は何かと己の傍にいる。

別に何かを言った訳でもないのに執務室に訪れるのだ。

まるでそうしなければいけないと分かっているように、ソファアに

腰かけて執務が終わるのを待つ。

記憶を失くす以前と全く変わらない行動をしていると侍女が言っていたが、あながち嘘ではないようで、護衛を連れて調理場に行ったりもしているらしい。

次の書類を受け取ろうとしてキアランが首を振る。

「御昼食の御時間ですので、どうぞ休まれて下さい。」

「もうそんな時間か…。」

壁際に立っていた侍女へ声をかければ静かに昼食の支度を始める。

美緒はそれを何時も目で追っていた。

本人が口にしたことはなかったが、彼女は料理長の作る料理を甚く気に入っているらしく食事時は常に嬉しそうにしていた。

ペンを置いてソファアへ移ると美緒の視線が此方へ向く。

黒曜石の如く美しく、真っ直ぐな黒い瞳に己の姿が映るだけでホッとす。

「何をして過ごしていた？」

夜会の件もあり以前よりは行動範囲を狭めさせてしまったため、恐らく時間を持て余してしまっていただろう。

美緒は一度瞬きをしてから思い出すためか視線が斜め上に向けられる。

「今日は中庭を見てたわ。」

「そうか…庭師に会ったか？」

「ええ。夫婦でやってるのね。」

とても仲が良くて素敵な夫婦だったわ。

そう穏やかな笑みを浮かべて少し照れる姿に自然と口角が上がった。

ぎこちなかった一週間前に比べれば随分と心を許してもらえたように思う。

だが、未だ記憶が戻らないのが口惜しい。

例えば記憶が失くならうとも美緒である事に変わりはないが、やはり今までの記憶を持つ彼女といることが一番幸福を感じるのだ。

やはり早く彼女の記憶を引き戻す方法を探さなければならぬだろう。

どうすれば戻るのが。

…あの時の様子を再現すればもしかすれば思い出すかもしれないが、下手をして無理をさせたくもないと思う。

否、そうするとしても彼女自身に問わなければいけないな。

己の独断だけでそのような事をする訳にはいかない。

のんびり食事に舌鼓を打つ彼女の様子を眺めながら己も皿に視線を落とす事にした。

花嫁の失くしもの(2)

「夜会をもう一回開く?」

アフタヌーンティーを楽しんでいた時に己の考えを美緒に提案した。

毒を飲んでしまった際の苦しみと痛みの記憶を思い出したくないと言うのなら、行うつもりは無い。

しかし、予想していた通り彼女は頷いた。

「いいわ。やりましょう。」

「…良いのか?」

「もちろん。いつまでも記憶がないなんて嫌だしね。」

ニコリと笑う顔に不安の色は見られなく、無理している様子も感じられないが若干の不安を覚えてしまう。

美緒は元々気が強いせいかあまり負の感情を見せる事が少ない。

本当は不安に感じているだろう。

周囲は自分を知っているのに、自分は周囲の事が何も分からないのだから平然としていられる訳がない。

記憶を失ってから真夜中になると美緒は時々魘されるようになった。

何度も何度もうわ言で謝ってばかりいた。

起しても本人は夢の内容はさっぱり覚えていないようだったが、感情だけは残されていたのか寂しげに笑う。

きっと美緒自身も記憶を取り戻したいのだろう。しかしそればかりを優先して彼女の心を傷付けては元も子もないのだ。

「そうか。ならあの時に招待していた者全員にもう一度手紙を書こう。」

「うん。ところで、招待してた人たちって何人くらいいたの？」

「さあな、少なくとも二〜三百は居たと思うが。」

「え、」

ギョツとする美緒に笑ってしまふ。

記憶を失ってから気付いたのだが、美緒は気が強いながらも少し人見知りな部分がある。

正確に言つと大勢と対峙するのを嫌う傾向、という意味だが。

宥めるように頭を撫でれば硬直気味だった細い肩から力が抜ける。

あの時、このか弱い存在を失いかけたのだと思うと恐ろしくて堪らなくなる。

婚姻の儀を済ませれば美緒の体は今よりももつと頑丈になるであろうし、死なない訳ではないが毒で命の危機に陥る可能性も減る。

何より婚姻してしまえば大々的に彼女を自分のものだと主張できる。

もう暫く様子を窺おうかとも思っていたが本人も記憶を取り戻す事に乗り気な様子だ。

やるなら今しかないだろう。

美しい黒髪を指先で弄びながら、彼女にバレないようにそつと口付けを落としてみた。

あたしが記憶を失くしてから一週間と四日経った。

ラオに「夜会を再現しよう」と言われて思わず頷いてしまったけれど、本当を言うと怖くて堪らない。

招待した人たちを全員もう一度呼ぶということは、もしかするとあたしを殺そうとしたらしい人も混じっているかもしれないのだ。

もちろんラオのことを信じていない訳じゃない。

魔王で、一応恋人同士らしいし、婚約者でもあって契約者でもあるというんだから信用するしかないわ。

あの綺麗な紅い瞳に見つめられると不思議なくらい穏やかな気持ち

になれる。

記憶を失う前のあたしは本当にラオが好きだったのね。

自分のことなのに何だか嫉妬してしまいそう。

口から自然と零れ落ちた苦笑に侍女から「動かないで下さいませ。」と注意されてしまった。

パタパタと髪を整えた侍女があたしの体を上から下まで見つめて微笑む。

「会心の出来ですわ！」

綺麗なドレスに化粧もして、髪もセットして、あたしはどごそのお姫様なんじゃないかと思える姿になっていた。

夜会でもこの格好だったらしいけれど自分の顔じゃないみたいで少し落ち着かない。

鏡の前でドレスを眺めていると扉がノックされる。

侍女に頷いて入室してもらえばラオが扉から入って来て、あたしをジッと見つめてきた。

「…何度見ても美しいな。」

なんて気障な言葉を真顔で言うもんだから恥かしくて仕方がない。

現代の男がこんなこと言おうものなら鳥肌ものなのに、ラオが口にするのとビツクリするぐらい様になっている。

だからこそ心臓に悪いのだけれどきつと本人は気付いていないと思う。

手を差し出されて、その上にそつと自分のそれを重ねればフツと微笑を浮べてエスコートするように部屋から連れ出された。

後ろで侍女が小さく黄色い声を上げていたのは気付かないフリをしておこつ。

広い廊下を歩き、一歩ずつダンスホールに近付くたびに足が震えてきた。

……怖い。

その感情に気付いてしまうと足がピタリと動かなくなってしまう。

「リア？」

突然立ち止まったあたしを不審に思ったのかラオが顔を覗き込んでくる。

紅い瞳に映ったあたし自身の顔は馬鹿みたいに情けなくて、今にも泣きそうな表情だった。

ラオは一瞬目を見開き、それからギュツと抱き締めて来る。

大きな腕に包まれると酷く安心する。

「恐ろしいのは仕方の無い事だ。其れを隠す必要は無い。…俺が傍に居る。」

小さな声で絶対に離れないからと囁かれ、低い声に体から力が抜けていく。

顔を上げてラオを見てみると苦しそうに眉を寄せており、あたしよりも不安げに見えた。

「ありがとう、ラオ。…もう、大丈夫。」

「本当か？無理をしていないか？」

「平気。だって一緒に居てくれるんでしょ？」

力強く頷いてくれるラオに自然と笑みが浮かぶ。

思い出してあげたい。思い出したい。

こんなにも一途に愛してくれる人を忘れたままなんてイヤだ。

再度繋がれた手にほんの少しだけ力を込めながら真っ直ぐに前を見る。

…絶対に記憶を取り戻してみせるわ。

そうしなければ本当の幸せなんて掴み取れないじゃない。

花嫁の失くしもの(3)

大きな扉の前で深呼吸をする。

そんなあたしの様子をラオだけでなく扉の左右で警備している人まで心配そうに見つめてくるから、逆に笑ってしまった。

本人よりも周りがそんなに気を遣うなんてちょっと可笑しいじゃない？

笑って大丈夫だと告げればラオはすっかり手を握ってくれて、扉が大きく開かれる。

眩しいくらいの明るい光を灯すシャンデリアに一瞬見とれてしまった。

けれどラオが歩き出したのですぐにあたしも揃って歩き出す。

他よりも高いテラスのような場所に立てば下には驚くほど大勢の人たちがこちらを見上げていた。

そこには安堵の表情を浮べる人や、何だか不機嫌そうな人などそれぞれ異なる顔をしている。

「突然呼び出してすまない。先日の夜会でリアが倒れた事は周知の事実であるだろうが、今宵は我が花嫁の欠けた記憶を取り戻す為に行った。」

ラオの言葉に階下がざわつき出す。

聞こえて来る言葉はあたしが記憶喪失になったことへの驚きの声がほとんどだった。

「あの時を再現する。皆もあの日の行動を出来うる限り再現してくれ。」

そう言いながらラオがあたしの手を引いてテラスから階下へ下りて行く。

最初は誰もが戸惑うように互いの顔を見合わせていたけれど、ラオの様子を見て、それぞれが談笑に興じたりダンスを踊り出す。

もちろんダンスには美しい音楽も奏でられている。

ラオが踊ろうと言い出すがあたしは踊れない。

ダンスなんて踊ったことがないもの、無理よ。そう言ってもリードするからとダンスの輪の中に半ば無理矢理連れ出されてしまった。足を踏むか転ぶかすると思っていた予想とは裏腹にラオにリードされるたびに自然と足がステップを踏む。

驚いてラオを見上げれば微笑を浮べてあたしを見下ろしていた。

「忘れても、体は覚えているものだ。」

そのままクルクルと踊り続け、心地良い疲れが訪れた頃、ラオと一緒にダンスの輪から外れる。

そうして傍にあったソファア―に座らされた。

喉が渴いたと飲み物を頼もうとしてふっと一瞬だけれど視界が変わった気がした。

残像のようなそこにはあまり目立たぬ薄茶色の髪に同色の瞳の侍女が通りかかり、あたしの声が「ごめんなさい、何か飲み物を持って来てもらえるかしら？」と声をかけた。

そうして侍女が一度去っていくと、視界が元に戻る。

「リア、如何した？」

目の前にあったラオの顔に焦点が定まった。

「あ、うん…今、一瞬だけど何か見えたの。」

「何か？」

「たぶん、記憶だと思っただけど…。」

少し頭が痛い。ガンガンという痛みではなく、じんわりとこめかみが鈍く痛むのよね。

無理はするなとラオの大きな手がサラリと髪を梳いていく。

目を閉じて奥底に沈んでいるかもしれない記憶を探ってみる。

侍女に飲み物を頼んだ後、何かあっただろうか？

「確かリアが飲み物を頼み、俺は貴族の下へ行くために離れたな。」

代弁するようにラオが呟く。

…そうだ、ラオが離れて行ったんだ。

それと入れ替わるように侍女が来て、グラスを手渡された。

中身は…淡いピンク色だった気がする。

自然と体がその時の動きをなぞるように腕が上がってグラスを掴む
仕草をしつつ、目を閉じれば目の前に薄茶色の髪の侍女が立っ
た。

やはり顔の部分だけはぼんやりしていて分からない。

「ありがとう。忙しいのじゃめんね。」

そう言ったあたしに侍女の口元が微笑を浮べる。

いえ、御気になさらないで下さい。

甘い香りが鼻孔を通り抜けたような気がした。

初めて感じた香りのはずなのに、心のどこかでそれは美味しかったと思う自分がある。

そう、あたしはこの甘い香りのする飲み物を飲んだ。

爽やかに炭酸がシュワリと泡立つのを楽しんでいたはず。

グラスを傾ける仕草をすれば一層強く甘い香りが濃くなる。

「美味しい。…これ何ていうの？」

エルニーヤと申します。エルニという果実から作られたアルコールの入っていないものです。

アルコールを飲めないあたしのために、わざわざ用意されたノンアルコールの飲み物。

それに「そう。飲みやすくっていいわね。」とあたしは上機嫌に笑う。だがそこで侍女は別の貴族に呼ばれてしまい、申し訳なさそうにあたしを見た。

ここであたしは言った。

「邪魔してごめんなさい。あたしのことは気にせず仕事に戻って。」

見上げた先には驚いた顔をした侍女がいた。

閉じた瞼の裏に映る侍女の顔に、クラリとしてしまいそうな程頭痛が酷くなる。

まるで頭を締め付けられるような痛み在眉を顰めると温かな何か額に触れた。

見なくてもこんなことをするのは一人しかいないことをあたしは知っている。ラオだ。

記憶に再び意識を向ければ侍女の顔が少しだけ鮮明になる。

茶髪も茶色の瞳も見覚えはない。

けれど、どこかで会ったことがある気がするのだ。

……一体あなたは誰なのよ？

侍女の顔が鮮明になっていくのに比例して頭痛が増す。

止めてしまいたいという気持ちを何とか無視しながら侍女の顔を見つめた。

霞がかかっていた顔の部分が段々ハッキリし、やがてその全貌が露わになり、瞼の裏にその侍女の顔が映った途端に様々な映像が流れて行く。

ラオ、側近、あたし付きの侍女、料理長、リヴィア、司書のおじいさん、城に働く人々、魔族の学校の理事長、元気な子供たち、勇者、オリヴィア、セスさん、エミリア、朱色の髪の男……。

全部あたしが出会って来た人たちの顔と、彼らともやり取りが物凄い速さで頭の中に雪崩れ込む。

そこまで行くと今度は一気に流れが巻き戻り、ある場所まで戻るとピタリと流れが止んだ。

場面はオリヴィアと初めて出会ったとき。

いけしゃあしゃあと笑うオリヴィアが傍に控えていた侍女に声をかける。

その侍女が頷きながら顔を上げて

…

花嫁の失くしもの(4)

「……っ?！」

パツと目を開ければラオが静かに見下ろしていた。

「…リア。」

見上げた先にある紅い瞳は真っ直ぐに見つめ返してくる。

強い光を湛えた瞳にどうしようもなく気持ち溢れてきた。

「ラオっ!！」

思いのままにその漆黒を纏った体へ抱き付けば、驚きの声を上げながらもしっかりと抱き留めてくれる。

「リアっ、記憶が戻ったのか…っ？」

「ええ！…あたしを誰だと思ってるの？魔族を統べる王の花嫁よ？」

「っ…！」

ガバリとそれこそ押し掛かられるように今度はラオが抱き締めて来る。

包み込むように腕の中に押し込まれ、あたしはもう一度その背中を少し強いくらいに引き寄せる。

大きな体が微かに震えているのを感じて、ああラオにもツライ思いをさせてしまっていたんだと胸が苦しくなる。

ただいまと呟けば、お帰りと囁かれ、額にキスが落ちた。

記憶を失くしていた間のこともしっかり覚えている。

この世界のことを全部忘れてしまったあたしを、それでもラオは見

捨てないでくれた。

ありがとう、ラオ。それから…

「思い出したわ。あたしに毒を盛った相手のことも。」

「っ、それは誰だ?!」

バツと体を離し、かなりの剣幕で聞いてくるラオに苦笑が漏れる。

「…オリヴィアの侍女。」

でも考えてみれば彼女が一番可能性が高かったと思う。

許婚を奪われ、挙げ句城から追い出され、門を通る事すら許されなくなつたオリヴィア。

本当にラオのことを愛していたのかは知らないが、彼女はさぞや傷付いたに違いない。

邪魔なあたしを消そうとするなら人の多い夜会はまさに打って付けだったのだろう。

…どこの愛憎ドラマよ、ロク。

あたし自身は彼女のことをそんなに嫌ってなかっただけに、結構へこむわ。

無言で踵を返そうとしたラオを、服の裾を掴んで引き止める。

「ちょっと待って、どこに行くつもり？」

「決まっているだろう、あの女の所だ。」

全身から不機嫌オーラを出しているというか、殺気立ち過ぎているラオが行ったらどうなるか目に見えている。

絶対オリヴィアは生きてはいられないだろう。

だけどそれだけはさせたくなかった。

別にラオに殺させたくないとか、そういうのじゃなくて。

あたしのせいで誰かが死ぬなんて後味の悪いことは嫌いだから。

「分かった、オリヴィアたちを城に呼んで。あたしも話がしたいの

「よ。」

「だが…、」

「ラオに任せたら首でも刎ねちゃいそうな勢いじゃない。…キアラン、お願いね。」

「では直ぐにでも御呼び致します。」

スツと傍に来た側近が恭しく頭を下げた。

それから心配かけてごめんと言えば、ふっと柔らかな笑みが返される。

素早く踵を返してダンスホールを出て行った側近を見送り、ラオは貴族たちに「帰っても夜会を楽しんでも構わない。好きなようにしろ。」なんて言っただけであたしにまた抱き付いてきた。

とりあえず視線が痛いから部屋に行こう。

ラオに瞬間移動テレポーションを使ってもらい一瞬で移動する。

こうやって移動するのはすごく久しぶりな気がした。

記憶を失っている間、ラオはあまりのこの力を使わず、体が万全でなかったあたしを気遣って歩いてくれていた。

ふわっと浮遊感が消えれば寝室ではなく謁見の間이었다。

ラオが玉座に座り、なんでかあたしは膝の上に抱えられている。

「こら、ラオ！下ろしなさい！！」

「ヤだ。」

「そんな可愛く言ってもダメったらダメ！」

ブイとそっぽを向いて嫌々するラオの腕を叩くと、渋々ながらに放してくれた。

けれど手は離してくれずにキュッと握り締められる。

ちょっと強めに握り返せば嬉しそうに紅い瞳が細められ、指にキスをしてくる。

こういうことを平然とするからラオと一緒にいると時々心臓が壊れてしまうんじゃないかと思う。

ワザではなく無自覚でやられてる分すごく性質タチが悪い。

やがて玉座の背後の垂れ幕から音もなく側近が滑り出てきた。

「王、マクファアーレン嬢が御越しになられました。」

随分早いなと思ったが、三大貴族の各屋敷にはそれぞれ城へ通ずる魔術の魔法があるとか言っていたのをぼんやりと思い出す。

それって歩かなくてもいいのよね。便利だわ。

「…通せ。」

マクファアーレンと聞いた瞬間、ラオの声が一気に低くなる。

マクファアーレンは確かオリヴィアの家名だったはずだ。

などとあたしが思い出している間に謁見の間の扉が開き、ドレスを身に纏ったオリヴィアと侍女が静々と歩みを進めてくる。

だが、突然ラオが止まれと制した。

普通よりもやや離れた距離でピタリと立ち止まった二人を冷たく見つめ、ラオはそれ以上近付く事は許さんと硬い声音で言い放つ。

殺されかけた本人のあたしよりもラオの方が頭にキてるみたいね。

「魔王陛下には」機嫌麗しく ……」

「ほう？これが麗しく見えるか？」

ドレスの裾を摘み、頭を下げたまま挨拶を述べようとしたオリヴィアの言葉を遮ってラオが目を眇める。

玉座の肘置きに肘を付けて頬杖をし、足を組んでいる姿はまさに魔王。

特に口元は若干上がっているのに目が全く笑っていない辺りはヤバいと思うわ。

オリヴィアの傍に控えている侍女の顔を見て確認する。

やっぱりあたしに毒を盛ったのは彼女で間違いないわね。

ラオは相変わらずあたしの手を掴んだまま二人に言う。

「何故呼び出されたか分かるだろう。」

「…一体何の事でしょうか？」

「空々しい真似はよせ、オリヴィア＝シェリル＝マクファーレン。」

「っ…。」

ラオがオリヴィアのフルネームを呼んだ途端、細い肩がビクリと跳ねた。

傾きかけた体を支えようと侍女が手を伸ばすもラオは更に言葉を重ねる。

「動く事は許さん、ポラ＝エルランディーロ。」

「っ、畏まりました…。」

ギリりと侍女の体が固まる。

オリヴィアの体が床に倒れたが侍女はそれでも動かず、唇を噛み締めるばかり。

訳が分からずラオを見れば、紅い瞳があたしの方へ向く。

それだけで氷のように冷え切っていた瞳は柔らかな光が灯り、大きな手が優しくあたしの手を擦る。

「何したの？今。」

「何て事は無い。人間であろうと魔族であろうと、名とは呪…魔力を込めて呼んで束縛したまでだ。」

名前は最も短い呪という言葉を元の世界で聞いたことがあった。

ここではそれを使って相手を拘束することもできるのね。

倒れたまま苦しげに眉を顰めるオリヴィアと侍女を一瞥してから、ラオへ向き直った。

花嫁の失くしもの(5)

「ラオ、その束縛するのを止めて。」

「だが彼奴等あやつらは…、」

「いいから。」

少し語調を強めて言うとラオはパチンと指を鳴らす。

それだけで倒れていたオリヴィアは何とか腕を付いて上半身を起し、侍女は慌てて自分の主に駆け寄った。

ラオはちよつと…いや、かなり不機嫌そうに二人を見下している。

さすがにちよつと強く言い過ぎたかしら？

そつとラオの黒髪に手を伸ばして優しく撫でながら「ありがとう。」
「
と言え、目を細めて微かに口角を上げた。」

それから二人に向き直る。

「久しぶりね、オリヴィア。」

声をかければオリヴィアは、未だ苦しげな息を吐きながらもキツと睨むように強い眼差しを向けてきた。

「っ、馴れ馴れしく…しないで下さらない？」

「相変わらずね。」

気が強い所も、綺麗な所も、己に強い自信を持っている所も。

刺々しい言葉だったはずなのに怒る気にもなれず、苦笑してしまった。

それが気に入らなかったのかオリヴィアの視線が更に鋭くなったけれど、抑えるつもりはない。

ラオもそんなオリヴィアの態度が勘に障るのかより一層冷たい瞳を眇めつつ今にも何かしでかしてしまいそうだ。

「リア、」

「ダメよ、ラオ。ずっと前にあたしが言ったことを覚えてるなら手は出さないで。」

「……分かった。」

以前インキュバスに襲われかけた時にあたしはこう言った。

彼に狙われたのはあたしなんだから、彼の罰をあたしが決めたって可笑しくないでしょ？

つまり、今回の出来事はあたしとオリヴィアの問題であって、それをラオが片付けてはいけないのよ。

やや気落ちしてしまった魔王の頭を二、三度軽く撫でてオリヴィアを見る。

「どうして毒なんて盛ったの？…なんて、聞くのは馬鹿かしら？」

「ええ、愚問だわ。私はわたくし生まれた時からラディオス様の許婚として育てられて来たのよ。その為に作法も、帝王学も、王のお傍に並んでも見劣りしない美貌も…何もかもを磨いて来たわ。」

真っ直ぐな言葉は、きっと本当なんだと思う。

オリヴィアの所作はいつだって綺麗で、外見だってラオの傍にいて遜色ないくらいの美貌だし。

「なのに、突然何処からともなく現れた貴女はラディオス様の契約者で婚約者だなんて……なら今までの私は一体何だったと言っのかしら？他の貴族達は私の事を王妃の席を狙う小娘だなどと陰で笑っているようだけれど、私はそんなものどうでも良かったわ。」

「…どうして？」

「ラディオス様を愛しているからよ。」

キツパリと告げられた言葉に納得してしまった。

小さい頃から許婚として傍にいて、きっとオリヴィアはラオに好意を持っていたんだ。

だからこそ貴族の娘として、次期王妃候補として、魔王ラディオスの花嫁として恥じないよう精一杯努力してきたのかもしれない。

それをいきなり現れた見知らぬ普通の女に横取りされたら悔しいしツラいだろう。

「そうだったのね……ごめんなさい、オリヴィア。」

あなたの愛する人も、存在意義も奪ってしまったのはあたし。

「だけどラオを諦めることなんてあたしには出来ないわ。」

ラオが傍にいないなんて考えられないくらい、愛してるし、言葉では伝え切れないくらい好き。

こんなに好きになってしまったのに今更別の人なんて探せない。探したくない。

「なら私を殺しなさい。」

凜とした声と強く真っ直ぐな瞳に見つめられて、一瞬息が止まった。

「王の花嫁を殺そうとした者として、処刑なさい。そうしなければ私は何度でも貴女に危害を加えてしまっわ。」

「あなたはそれでいいの？」

「元より覚悟していましたが。…でも、もし一つだけ許されるならポーラは断罪しないで下さるかしら。この子は侍女で、主である私の命令には逆らえなかつただけ。」

「っ、オリヴィア様?!」

侍女が酷く驚いた様子でオリヴィアを見る。

…少しだけ羨ましいわ。

主従関係なのに、この二人は友情で結ばれている。

オリヴィアはポーラを、ポーラはオリヴィアを思いあっている。

「ねえ、勘違いしてない？」

あたしの言葉にオリヴィアとポーラが振り返る。

確かにあたしは二人がしたことは許せない。

そのせいで死に掛けたし、記憶も失ったし、ラオや城中の人々に心配と迷惑をかけてしまった。

だけど、不思議なくらいあたしの心は穏やかで…二人を殺そうなんて思っていないんだよ。

「…キアラン、短剣持ってる？」

「え、ええ…此方にございますが、」

「貸して。」

玉座の後ろに控えていた側近から短剣を受け取る。

果物ナイフくらいの本当に小さく、短い剣を持って玉座のある段からゆっくりと下りていく。

オリヴィアも侍女もやや青い顔をしながらもあたしを見つめていた。

目の前まで来ると意を決した様子で静かに目を閉じる。

お互いに抱き締め合う二人にまた苦笑してしまいそうになった。

そんなに怖がらなくてもいいじゃない。

「命は取らないわ。あたしってすごく自分本位だから、自分のせいで他の人が死ぬなんて重荷：耐えられないし、そんなの欲しくないもの。……でも全部許せるほど心が広い訳でもないのよね。」

目を開けた二人を、あたしは見つめた。

そうしてそっとオリヴィアの綺麗な髪に手をスルリと撫でる。

「だから今回はこれでチャラよ。」

オリヴィアが全てを理解する前に、その綺麗な髪を一纏めに掴み、短剣でザックリと切り落とした。

数本髪が舞い落ちながら長い髪は頭から離れてあたしの手の中に残る。

「な…っ?!」

目を見開いたオリヴィアの髪は肩よりも少し短いくらいになっていた。

驚きに固まっていた侍女の髪も同じくらいに切る。

そうすれば髪の短くなった二人はまるで姉妹のように見えた。

「血なんか見たくないし、二人を殺したいとも思わない。けど許せないから大切な髪をもらうわ。」

髪はまた伸びるけれど一度死んでしまえば生き返ることなんて出来ないから。

あたしはこうして生きてるしね。

茫然と見上げてきていたオリヴィアがどうして、と呟く。

「どうして、殺さないのよ…。」

「さっきから言ってるじゃない。自分のせいで誰かが死ぬのは嫌だつて。寝覚めが悪いもの。…でも、それだけじゃないわ。」

ずっと思ってたことがあった。

「あたし、オリヴィアのこと少なくとも尊敬してたし羨ましかった。綺麗だし、ナイスバディだし、礼儀作法も完璧だし…あなたみたいだったらって思ったこともあったよ。」

だから死んで欲しくなんてなかった。

尊敬してるのに、殺すなんて出来る訳ないでしょ？

「今は無理かもしれないけど、いつか…ずっと先になってもいいから。友達になりたい。」

こんなこともあったねって笑い合えるような仲になりたいんだ。

手に持っていた短剣を鞘に戻して、残った髪と一緒に地面に置く。

「…ラオも、狙われた本人のあたしが許すって言うんだからもうこの事件を蒸し返すのはナシね。」

「リアがそう言うのなら。」

「よろしい。……友達庇って一人で死ぬなんて止めなよ。そんなの遺された方もツライだけでしょ？」

手を差し出して顔を覗き込んだ途端、オリヴィアは泣き始めてしまった。

隠すように両手で覆っているけれども手の隙間からポロポロと零れる雫は留まらない。

「オリヴィア様……っ。」

ぎゅっと主を抱き締める侍女と、抱き締め返す主は、どちらも泣いていた。

生きていたらやり直せないことなんてきつとない。

だからあたしはもう許すよ。この二人を。

自然と浮かんだ笑顔にラオも笑みを返してくれたのが何よりも嬉しかった。

魔王陛下と夜色の妃

オリヴィアの一件から早いもので、あっと言う間に一ヶ月が経ってしまっただ。

あの事件以来ラオはあたしとの婚姻を出来る限り早く執り行いたいと言い出し、あたしも…ちょっと恥かしかったけれど嬉しかったので了承した。

それからは、もうあれよあれよと言う感じでドレスの採寸やら式の日取りやらを決められ、今日に至る。

「さあ、リールア様…目を御開け下さいませ。」

促されるままにそつと瞼を持ち上げると、目の前の鏡に映るのは黒髪に黒い瞳の綺麗な女の人。

何度見てもあたしじゃないみたいで落ち着かないのよね。

立ち上がれば真っ白な純白のドレスの裾を侍女が直し、引きずり過ぎないよう後ろで一人が裾を持つ。

エミリアが静かに前に立ってレースの付いた髪飾りが頭に乘せられる。

視界が薄い白のレースで覆われ、やや見づらくなるも、まさに結婚式のウェディングドレス姿に頬に熱が集まった。

本当に今日、ラオと結婚するんだわ…。

いつもならラオが迎えに来るのだけれど今日は違う。

コンコンとノックされた扉を侍女が開ければ、黒の正装をして佇むのはセスさんだ。

「嗚呼、随分美しくなったな。」

「あ、ありがとうございます…。」

真っ直ぐな言葉が恥かしくて顔があまり見えないと分かっているも俯いてしまう。

そうすればセスさんは可笑しそうにクククツと喉の奥で笑った。

ラオによく似た顔で褒められるとどうにも弱いわ、あたし。

差し出された腕に自分の腕を絡めれ、部屋を出る。

後ろからは裾を持った侍女が足音もなくついて来る。

婚姻の日、夫婦となる者たちは婚姻の儀まで顔を合わせてはいけな
いという仕来りに従って、前日の夜から別々の部屋であたしたちは
眠った。

そして朝起きるとすぐに入浴し、マッサージを受け、メイクなど様
々なことを経て花嫁の姿になったあたし。

ラオもきつと花婿の格好をしているんだと思うと見たいような見た
くないような…。

632

「……………礼を言う。」

「え？」

廊下を歩いていると不意にセスさんが口を開いた。

唐突で思わず顔を上げた先には普段のニヒルな笑みとは違う、とて
も穏やかな笑みが浮かんでいる。

立ち止まってしまったあたしに合わせるようにセスさんも立ち止まった。

「お前からすれば余とあれは随分仲が悪く見えるかもしれん。だが、あれは余が愛した女との間に生まれた唯一無二の息子。…あれに他者を愛する喜びを与えてくれたお前には感謝している。」

「そんな…あたしは何もしてませんよ。」

「フフツ、まあそれでも良い。兎も角、此れから先もあれの事を頼んだぞ。何だかんだ大人になってもあれの寂しがりな所は治っておらんようだしな。」

「あ、あれって昔からだっただんですね。」

甘えたなラオを思い出して笑ってしまった。

セスさんも穏やかに笑い、目を細める。

「ならあたしもセスさんに感謝しないと。…セスさんが奥さんと結婚したから、あたしはラオと出会うことが出来たんですから。」

「そうか。そういう考え方もあったか。」

またセスさんが笑うのと廊下の先から侍女が走ってくるのは同時だった。

やや慌てた様子の侍女はあたしたちの前まで来ると、息を少し整えてから顔を上げる。

「リールア様、大元王様…王がお待ち兼ねでございます。」

「すまん、時間が押しているのだったな。」

さあ行こうと促されながら歩く。

一歩一歩進む度に自然とラオとの思い出が込み上げてきた。

この世界に連れて来られてから、まだ半年も経っていないのにまるでもう何年もここにいたかのような感覚がする。

開けられた扉の向こうでは既に待ち草臥れていたラオがやや不機嫌そうに佇んでいた。

「遅い。貴様、リアに何もしてないだろうな。」

ギロリと父親を睨む魔王に苦笑してしまう。

「ごめんね、ラオ。ちょっと準備に手間取っちゃって。」

「否、リアのせいでは無い。」

歩み寄ってきたラオが腕を伸ばしてくる。

そつとセスさんの腕から自分の腕を外して、ラオの腕に絡めた。

嬉しそうにそのまま絡んだ手と手が繋がれる。

城の外にある広い中庭に面した部屋のテラスからは大勢の人々の声や、ざわめきが聞こえて来て、ドキドキと心臓が脈打つ。

そんなあたしの心境を読んだようにラオが繋いだ手にキスをした。

「リア、案ずるな。誰も反対などしないし、させはしない。」

薄いレースの向こうで紅い瞳が柔らかく細められる。

繋いだ手がそのままラオの胸元に導かれ、服の上から胸に触れた。手を伝ってドキドキと早いラオの鼓動が広がっていく。

「俺も緊張している。…緊張など初めてだ。」

少し眉を下げて笑うラオを心の底から愛しいと思う。

結婚式ですごく緊張してる……とても可愛いあたしの夫となる魔王様。

「さっさと婚姻して、幸せになれ。」

セスさんのそのたった一言に胸が熱くなる。

「はいっ、お義父さん。」

ラオとあたしはセスさんに背を押されながらテラスへ足を踏み出した。

どこまでも晴れ渡った青空の下に様々な姿をした魔族が集まっている。

あたしたちが姿を現した瞬間、地鳴りかと思うほどの歓声が鳴り響いた。

だと言つのにラオが手を上げた途端水を打ったように辺りはシンと静まり返る。

「我が下に集いし同胞よ、今日という日を我は決して忘れはせぬ。祝言を述べよ！汝らが王と其の花嫁に！！」

一拍の間を置いて、先程とは比べ物にならないくらいの大歓声が下から湧き上がる。

ぶわりと風が吹いたかと思うと空から綺麗な淡いピンク色の花びらが舞い落ちて来た。

祝福されている。まるで、世界中から、おめでとう、と言われているような気がして。

優しく腰を引き寄せられる。

「此の娘を生涯我が花嫁とし、愛する事を我が血と名において誓おう！新しき王妃の誕生だ！！」

ラオの言葉に一際多くの花びらが舞い散る。

嬉しくて、嬉しくて…言葉にならないくらいの感情が心から溢れる。

「リア…。」

呼ばれて顔を上げればラオの手にふつとエルディア・リーが現れた。それを髪に差し込まれる。手渡された花をラオの胸元にあたしも差す。

「…愛してる、美緒。もう手放さない。」

視界を覆っていたレースが持ち上げられて、ラオの顔がゆっくりと近付いて来る。

そつと唇が重なったあたしたちを大歓声が祝福した。

あたしの夫はずつとずつと年上で、魔族を束ねる魔王様。

冷酷で恐ろしいと言われる人だけど本当は甘えたで嫉妬深い寂しがりな人。

これから先も一緒にいよう。どっちかが死ぬまで、ずっと。

お父さん、お母さん…あたしは幸せです。

大好きな人と結婚できたこの幸せをいつまでも大切にしていきたいよ。

薄く開いた視界の先にあった大好きな紅と黒にポロリと涙が零れ落ちた。

「…あたしも、愛してるよ。ラディオス。」

F
i
n
.

魔王陛下と夜色の妃（後書き）

最後までお読み下さり、ありがとうございます。

完結できたのは皆様の応援のお陰だと思います。

書き終えることができ本当に嬉しいです！

ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1147t/>

魔王陛下は 45° (ななめよんじゅうごど)

2011年8月12日17時16分発行